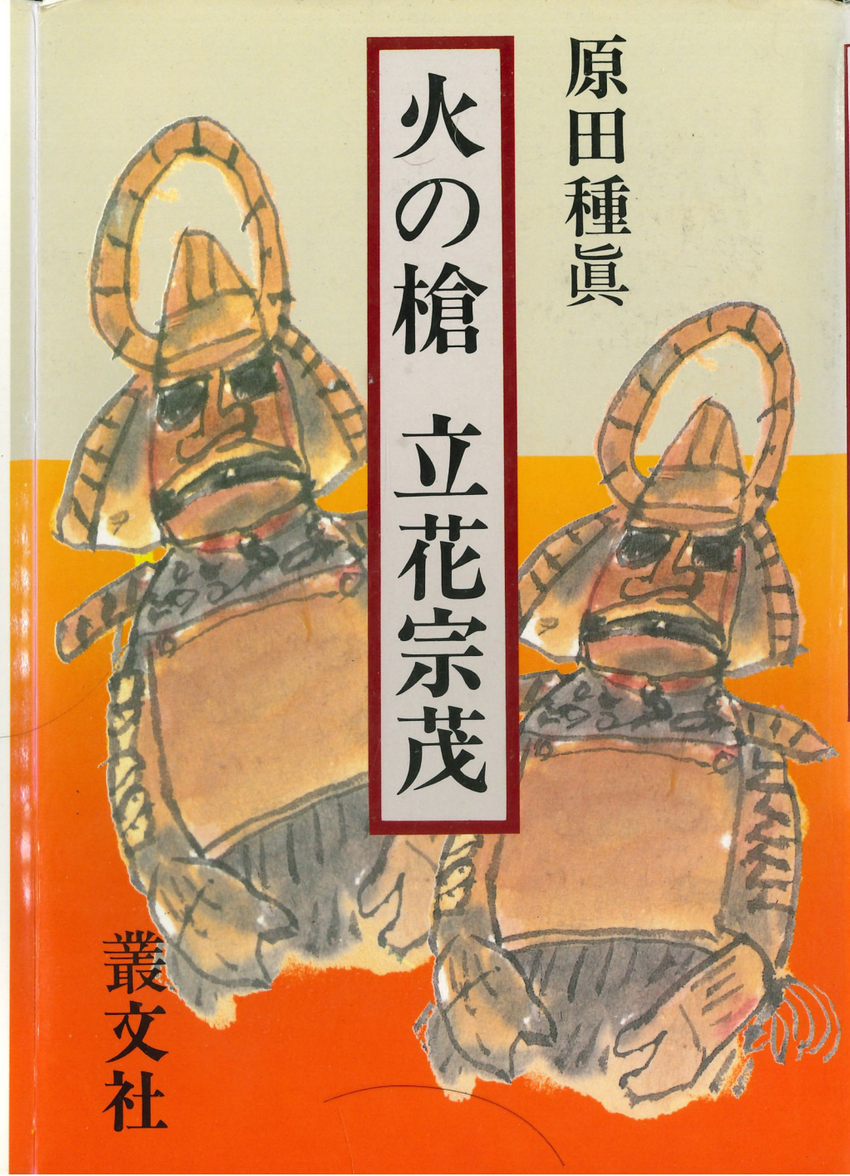
原田種眞

火の槍 立花宗茂

叢文社



火の槍　立花宗茂

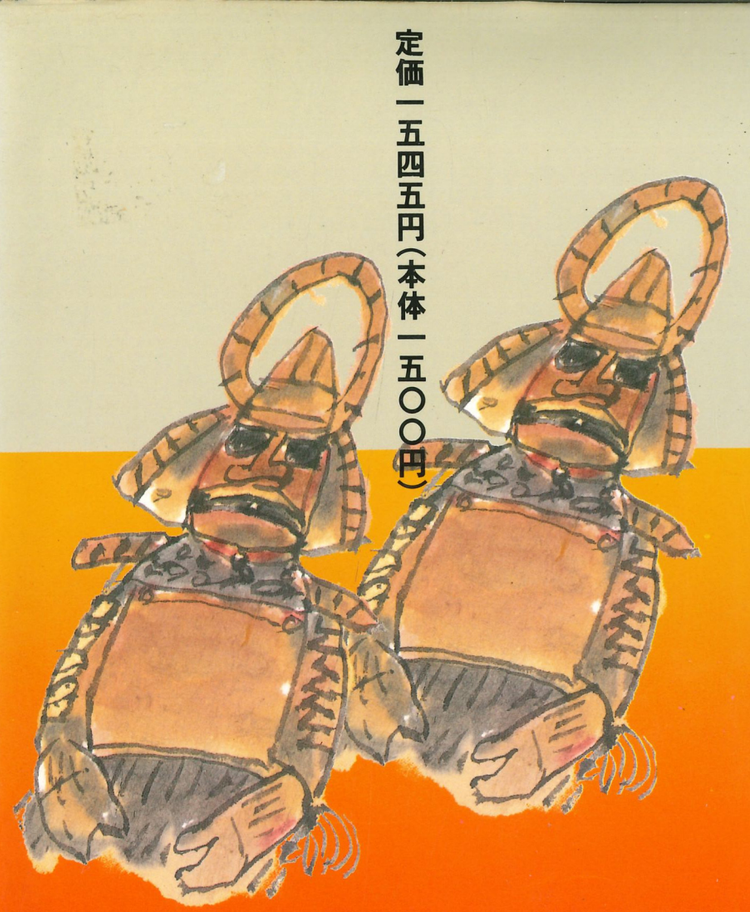
原田種眞

叢文社

火の槍　立花宗茂

原田種眞

叢文社



定価一五四五円（本体一五〇〇円）

ISBN4-7947-0168-3 C0093 P1545E

●大を破る——奇蹟の奇襲軍団

秋月八千の来襲を五百の小勢で奇襲撃破した少年宗茂は「小が大に勝つ道は意表と集中にあり」と知る。敵中に突入して百戦百勝の義父立花道雪と島津六万の大軍を岩屋城七百で翻弄した実父高橋紹運によって開眼した宗茂は、後退する島津の大軍を猛襲、秀吉から九州一の勇将と激賞されて柳河城主に……。最大の難関を買って、最小の犠牲で突破する朝鮮の戦場の立花軍。十重二十重に包囲された清正軍の鬼謀の救出。関ヶ原合戦…敗軍の将となって流浪する宗茂を柳河城主に復活させた家康の謎は？大型新鋭歴史作家の登場！

●文芸評論家志村有弘氏推奨——定価1,545円（本体1,500円）叢文社

大を破る——奇蹟の奇襲軍団

叢文社

ISBN4-7947-0168-3
C0093 P1545E

現代を拓く歴史名作シリーズ

瀬戸の鷹小早川隆景　泉　淳　￥1545（税込）
●大転換期　不敗の鬼謀—西国の雄毛利元就の三男—天下にフタをする唯一の男と秀吉が尊敬した名将の波乱。

天の子天草四郎　加来耕三　￥1600（税別）
●愛の四郎か、智の伊豆か。究極のリーダー！とは？

悪名太平記—夜狩り宰相高師直　小野孝二　￥1600（税別）
●勇将の破天荒一代。

火の槍 立花宗茂

原田種眞

議文社

原田種眞

火の槍　立花宗茂

叢文社

火の槍　立花宗茂■目次

清なる武魂　7
名傅役（ふやく）　13
名将道雪の神髄　17
弓道の深淵　21
金毛の獅子　31
宿敵――島津と大友　40
戦国のおんな　48
初陣の功名　51

武士の道 59
勇武の器量 70
信長本能寺に死す 77
秀吉の旗風 93
遠来の強敵 98
肥前の熊 103
龍造寺隆信の首 112
斜陽の名族 125
奇襲 130
名将道雪の死 139
人たらし秀吉 155

薩軍来襲 165
神の采配 173
紹運無双 194
入道生還 207
花の武者 221
九州征伐 229
柳河の城 241
朝鮮の陣 252
変幻立花勢 263
金兜の勢来る 275
義の道 288

烏合の愚将　297
堂々たる敗軍の将　304
奇蹟の復帰　312

解説――志村有弘（文芸評論家・相模女子大学教授）

表紙画　平井光典

清なる武魂

九州の柳川は水郷として知られ、その錯綜した水路を利し、古来要害の地であった。

いまは、詩人、北原白秋の作品や、春、両岸の柳を愛でながらの川下りなどで人々に愛されている。

不抜の堅城を誇った柳河城は失なわれたが、立花宗茂の名はいまも、柳川人の胸を熱くする。

豊臣秀吉が日本を平定し、その死後、徳川家康は豊家を抹殺し、天下を掌握した。巨大な歴史のうねりの中で、水泡のように、多くの家名が消えていった。

立花家は、関ヶ原戦で家康に敵対し、いったんは十三万二千石余の柳河領を召し上げられながら、二十年後、旧領に再封を受けた、希有の大名である。

外様大名取りつぶし策の中、仇には必らず報いずにおかない性格の家康に、過去を忘れさせたものは、何であったろうか。

立花宗茂は、若年のころよりその恬淡たる気質とともに、戦略、戦術の自在、用兵の巧みさをもって、国内外に幾多の戦功があり、秀吉をして、西国一の勇士と、称揚せしめた人物である。

中央から僻遠の地の、十三万石余の大名にすぎぬ立花宗茂が、歴史の上に小さくとも、鮮やかに輝きえたのは何故か。

複雑な生を生きた、豊後のキリシタン大名大友宗麟とも深いつながりのある立花宗茂の生涯は、権

謀術数の渦に、人間の至誠が、ついに呑み込まれることのなかったことを示している。

永禄十年（一五六七年）八月十三日、払暁、赫然として日輪が頭をもたげ、乾坤を朱に染めなしたとき、豊後の国、国埼郡都甲の庄、長岩屋、筧城々主、吉弘左近大夫鑑理の次男、弥七郎鎮理に、初の男子が、誕生した。後の立花宗茂であり、幼名を千熊丸と名づけられた。のち、父は入道し、高橋紹運と名乗り、太宰府四王寺山の岩屋城において、薩摩の大軍を引き受け、大いに武名を上げることとなる。

母は、大友宗麟の家臣、斉藤兵部少輔鎮実の妹、剃髪後、宋雲院と名乗った。

この父母の結びつきに一挿話がある。

鎮理は、十四才の頃より父に従い、戦場を馳駆してきた。沈着にして勇猛、大友家中の人々から、将来の大器と、噂されていた。

大友家の武将に、斉藤兵部少輔鎮実という武辺の家柄の士があり、花のような妹があることでも知られていた。

戦場往来の間、鎮理の兄鎮信と、斉藤鎮実のあいだで、お互の弟と妹を妻合せる約束が交わされた。

ところが、こののち二年余り、ほとんどを豊前や中国との戦いに日を送り、式をあげるいとまがなかった。

ようやく平安のもどったある日、鎮理は斉藤鎮実に会った。

「陣中の暮らしの長いまま、貴殿の妹御をお迎えすることがのびのびとなり、誠に心苦しき次第。我が兄とのお約束、早々に人を立てたいと思います。」

この言葉を聞いた鎮実は、一瞬、目を落とし、口ごもる風であったが、

「ありがたきお言葉、とくと肝に染みております。じつは、その後妹は痘瘡をわずらい、容貌がみにくくなってしまいました。昔の面影もなく、とても差し上げることは」と肩を落とした。

鎮理はこの言葉を聞くと姿を正し、

「これは斉藤殿のお言葉とも思えぬ。私も兄も、斉藤家の代々の武勇のお血筋を尊み、我が家と合わせ、大友家のおんために尽さんと思うもの、私は、容貌など気にするものではありません」

かくて永禄八年（一五六五年）弥七郎鎮理十七才の年、宋雲院を妻にむかえた。

鎮理は、永禄十二年（一五六九年）十二月、主、大友宗麟の命により、筑前高橋家を継ぎ、高橋主膳兵衛尉鎮種と名を改めた。

鎮種二十一才、千熊丸三才のこの年、豊後筧城から、筑前岩屋城へと居を移した。

大友宗麟は、禅宗に帰依し、瑞峯宗麟と号したこともあり、その精神生活、政治ともに、複雑な面を持つ武将である。

彼は無類の好色漢と変じるときがあり、人の道を踏み外すことを、意にかけぬようになる。

これより前、政治に倦んだ宗麟は、筑前国（福岡県）十五郡の領主、高橋三河守鑑種の兄、一万田弾正の妻女が、たとえようのない美女であったことから、これを手に入れるため、故なく弾正を殺害

した。

「人天ともに許しがたき所業」激怒した鑑種は、毛利氏と通じ、筑紫広門、竜造寺隆信らと大友に叛いた。

しかし、大友の戸次道雪、吉弘鑑理らの軍に攻められ、降伏し、永禄十二年（一五六九年）の末、命を助けられた上、豊前国、規矩一郡に移された。

この後、采地の配分などに不都合があり、屋山、福田などという重臣が皆、鑑種の元を去り、高橋家の再興を、大友宗麟に願い出たのであった。

宗麟これを了として、一族である吉弘左近太夫鑑理の次男、弥七郎鎮理を立て、宝満、岩屋の二城と、采地二千町を与えたのであった。

大化年間の六六三年、日本は、朝鮮半島の支配権を維持するため、百済の要請を受け、百七十隻の水軍を発し、唐、新羅の軍と戦い、白村江において壊滅的大敗を喫する。

この翌年、本土防衛の最前線として、福岡県の太宰府、つまり、福岡平野の奥まるところ、両側から迫る山すそを塞ぐ形で、大堤防を築いた。これが水城であり、今にその姿をとどめる。

「遠の朝廷」と称されたごとく、昔から、戦略上、重要な地点と考えられていた。

宝満（八六八米）、四王寺（四一四米）の両山は、太宰府を抱くようにそびえ、宝満城を本城、四王寺山の中腹にある岩屋城を支城としたといわれる。

岩屋城は、東方、宝満山を望み、北方、遠く博多湾のきらめきを見る。太宰府一円、牛馬の動きす

ら、手に取るように見える。まこと要害の地である。

城は、四王寺山の支脈が西南の方角に突出した山上に築かれた山城で、宣化天皇の時代、大伴狭手彦の兄、磐連が、初めてここに城を築き、岩屋城と称したという。

この高地は、北は四王寺山に連り、東西南の三方は、切り立った崖のようなけわしさで、峻険人を寄せつけない。

本丸は縦二十六間（四十七米）、横十八間（三十二米）、天主三階、以下、二の丸、中の丸、三の丸とつづく。さらにこれらを取り巻くように、尾根の各所に邑城（砦）を築き、櫓を作りなし、最前線の守りとしている。

本丸よりやや下手に、南面して日当りの良い館があり、北の丸と称した。宋雲院と千熊丸は、北の丸で生活することとなった。

千熊丸六才のおり、父鎮種は、城代屋山中務少輔と相談の上、千熊丸の傅役を命ずべく、足立弥平次を召し出した。足立は齢五十をこえ、半白の頭をしている。かしこまっている背中や肩のあたりの筋骨の逞ましさから、幾多の矢玉の中をかいくぐってきた男に特有の侵すことの出来ぬ風格がにじんでいる。

本丸内の小書院、屯水へ導かれる水の音がしきりにひびく。冬の日射しが、障子にほのかな陰翳をなげかけている。

「足立殿、殿様たってのお言葉、受けてはもらえぬか、五十をすぎたとはいえ、貴殿はまだまだ若

い。」

「されど、拙者ごとき老人には荷が重すぎてござりますれば」

弥平次は畳に額をすりつけるように平伏し、辞退の意思を表わしている。

過ぐる年、戦場の槍疵がもとで、すこし左足が引きずるようになり、正座もしずらい体になっていた。

「足の悪い侍が合戦の場にいては、お家に人が居ぬかのごとく見られる」隠退はしたものの鎮種のあとに従い、城下でひっそりと暮していた。

屋山中務は困りはてたように、眉間にしわを寄せ、腕組みをした。部屋の空気が凝固したような、永い沈黙のあと、

「父の代から、矢玉の中で日を送った弥平次のこと、平隠な余生を送ってもらいたいと思う心は儂とて同じ。されど、二代にわたって子の傅役に望まれるのも、縁とは思わぬか」

鎮種の言葉に顔をあげ「縁……でござりまするか」弥平次はしばらく目を見合わせていたが、

「老骨を砕いて……」唸るように言うと、ひしと平伏した。

名傅役

足立弥平次は、戦場において、味方の勢い強いときは先陣を進み、崩れ立ったときは殿軍をつとめるという戦いぶりで、家中に名を上げた。手勢を動かすこと自在、その兵に死者の少ないことでも知られ、皆人、足立と組むことを願った。

色浅黒く、中肉中背、やさしい顔つきで、一向人目に立つような風はないが、立っても座っても、根が生えているような存在感がみなぎる。

父鎮種としては、己れの傅役でもあった弥平次の、献身的な仕え振りとともに、彼の戦場での「運」をも千熊丸に与えようとの心であった。

弥平次は、北の丸の一隅に特に一棟を与えられ、妻子と共に移り住んだ。五十を過ぎて子に恵まれた彼には、三才になる「ゆき」という娘があり、掌中の玉のように大切に育てていた。

弥平次は、自分も子供の心になれる男であった。千熊丸とともに櫓に登り、はるか太宰府の町なみを呼んだり、城中で行なわれる、馬や槍の調練を、終日、ながめていることもあった。手を引いて、四王寺の山中に分け入り、杣道をよじながら、

「あれは撫子、こっちは木犀」草木の名を大声で言いあった。そのような日々の中、千熊丸は弥平次が、自分を子供としてではなく、一人前の武士として接していることを、感じとっていた。

千熊丸が七才になった頃、弥平次は手づから弓を削り、矢羽を作り、与えた。四王寺の山中を跋渉しながら、小鳥を射、兎をねらった。

色白く体格雄偉、父鎮種の幼時に余りに似ているので、後姿や笑うときの口元に、弥平次は、年月がさかしまに動いたかの感にとらわれることがあった。

折あるごとに千熊丸は、

「弥平次、話を聞かせよ」合戦の話をせがんだ。刀槍の間を生きてきた男の話は、馬のいななきや、士達の喊声がひびき、革の匂いがした。勇気ある武士の戦いぶりや、死に方が、幼い千熊丸の胸の底におちていった。

千熊丸はまた、父と共に帰城する兵達の中には、必ず、血のにおいに満ちた、物言わぬ者達のいることも、見知っていた。

桜が散り、全山が若々しい緑に輝いていた。いつものように、山歩きから戻った二人は、衣服を改め、甲の丸（本丸）大書院へ来るようにとの、鎮種の言葉を受けた。

小姓に案内され、書院への廊下を曲ろうとすると、障子をふるわすような、太い声がひびいてきた。ごく親しげな話し振りである。

「若様、立花道雪公にござりまする。」

身をかがめ、弥平次が耳もとでささやいた。いともなつかしそうに、その目が笑っている。

大友家の支柱、ともうたわれる立花道雪の名は、その数十に及ぶ軍功と共に、九州にひびいていた。

永禄十二年（一五六九年）大友宗麟は、毛利の侵攻を退け、豊前、筑前、肥前、ことごとく平定し、筑後高良山（福岡県久留米市）の本陣を引き払っていた。

平安時の宗麟は、放縦無頼の男となり、政を放擲、奥に引きこもり、酒色に日を送った。道雪の大友家を思うが故の、度々の直諫も、当座の効き目しかなく、やがて、うとましく思うようになってきた。

当時、筑前立花城主、立花鑑載は、毛利と組み大友に叛いたが、この年、大友の戸次道雪に切られ、立花の名跡絶えんとしていた。

思案した宗麟は、道雪に対面し、

「立花家は、左近将監貞載の後胤として、大友家の嫡流である。儂の代においてその名跡の断絶することは、先祖に対して申し訳が立たぬ」と道雪に立花家を継がせ、己れから遠ざけることとした。

道雪また、主の心中が解らぬ訳ではなく、断る理由も見当らぬので、立花城（福岡県粕屋郡新宮）に入り、名を戸次道雪より、立花道雪に改めた。年五十八、一子誾千代姫二才の年であった。

さわやかな音を立て、袴を折り、敷居ぎわに手をつき、

「千熊丸参りました」

あいさつをする部屋の中央、縁先きからのほの明るい光の中に、小山のような人が座っている。

「これへ、弥平次も久方ぶりであろう」

艶の良い、碁盤のように大きな顔の中に、炯々たる眼が燃えている。

「これは若君か、初にお目にかかる、立花鑑連入道道雪でござる」
あぐらを組み直し、千熊丸のあいさつに、丁寧に頭を下げる。下唇を突き出し、のぞき込むように千熊丸の顔を見つめていた道雪は、鎮種と弥平次を交互に見ながら、
「素晴らしい」
目尻に深いしわをよせ、幾度も、うなずいた。
「殿にはお変りもなく、祝着に存じます」
あいさつをする弥平次に、
「足立殿、おみ足を楽にされよ」
共に戦場に働いた者達の心は、顔を合わせた瞬間、打ちとけたものとなっていた。
漆塗の膳部に、ささやかな酒肴が、ととのえられた。道雪と鎮種の話題は、自ずから、大友家の将来、なかんずく、主宗麟のことに移っていった。毛利、島津をはじめとして、近くは、龍造寺、秋月、常に大友の領地を蚕食せんとしている。いまや大友の家名を支えるのはこの、お互い三十才の余も年が違いながら、兄弟のように気脈の通じ合う二人の武将であった。
「君は一代、家は末代」臣下にとっては家名の永続こそ、最大の命題である。
「我等両人が力を合わせれば」寸土も敵に大友の領地を踏ませはしない、大いなる自負があった。

名将道雪の神髄

小姓の注ぐ酒を一息に空けながら、平常と変ることなく語り合う両将の脇に控え、千熊丸と弥平次は、一心に話に聴き入っている。
切れ長の目元を染めた鎮種が、
「立花より当岩屋までは、四里（十六粁）に余る道のり、難義でござったろう、してきょうのお供は」
「次の間に一人のみ控えてござる」
「遠路ご苦労でござった。一献差し上げたいと存じますが」
「いや、彼の者は無骨者故、お志だけで有難い」
遠慮していた道雪も、重ねての案内に、小姓をやり、供の侍を呼ぶように命じた。
敷居の向うに平伏した侍は、顔はおろか手先まで真っ赤になり、つかえながら、
「拙者、まことにもって無調法者故、有難いお言葉ながら、お心のみ頂戴いたしたく」
額を畳にすりつけている。
「又とない機会、高橋殿にお見知りおき願うが良い」道雪に言われると膝行して部屋に入り、小姓が襖を閉める手先を、じっと見ている。寸時して向きを変え、意を決したように、右膝を進めたとき、

何としたことか、袴のすそが一方の足の下にあり、つ、とつかえ、前にのめりかけた。

「やっ、これは」

胸の内でさけんで、息を止め、背中に全身の力を込め、こらえようとする。紙人形のように、二・三度上体がゆれたかと思うと、たまらず、音を立てて座敷内に倒れた。

倒れながらも道雪の方に顔を向け、刀の柄をしっかりと押えている姿が、本人の表情と不釣合に、ひょうきんな形になった。小姓が笑いをこらえ、下を向き、フッと息を吹く。

はね起き姿を正し、

「御無礼つかまつった」

鎮種の前に進んだ、額や揉み上げのあたりに汗がにじみ、にぶく光った。

千熊丸は、はじめの道雪の言葉の意味をのみ込むとともに、この無骨な武士の、日頃の忠勤ぶりが、わかるような気がした。そっと弥平次の方を見ると、何事もなかったように端然としている。父もまた、型どおり小姓に酒をつがせ、労をねぎらっている。

懐紙で汗をふき、座を下ろうとする侍を止め、道雪が、

「これ」

小姓の方を向いた。

「いまこの者がちと粗相をいたしたが、その方、笑うたな」

道雪は諄諄と説いて聞かせる。

小姓は、座敷の上での勤めである故、何事もするすると形良く運ばねばならぬ。武士の勤めは戦場にある故、畳の上での失敗は、何程のこともない。そこのところが良く解っていれば、先刻のことが、おかしかろうはずがない。

道雪の言葉に、小姓は顔を染めかしこまる。供の侍もまた、自分のことから話がとんだ方向へ広がり、身の置きどころがない、という様子で、しきりに目をしばたたく。

「ところで高橋殿、かの立花の城攻めの折のことでござる。立花方の福井玄錡と申す九州にかくれもない勇将に、我が二陣まで突き崩されんとしたとき。この者が厲声一番、ひるむ味方を叱咤しつつ、かように槍をひねって……」身ぶり手ぶりで道雪が戦のありさまを再現する。

鎮種は大いに喜んで話に聞き入り、侍の手柄を称揚した上、盃を与えること三献に及んだ。

まだ日の高いうちに、道雪主従は帰路についた。立花までは四里（一六粁）の道のりである。生い茂る若葉の陰に道雪の濃い茶色の羽織姿が消えようとするとき、最前の侍が、見送る千熊丸達の方を振り向き、深々と頭を下げるのが見えた。

「若様、道雪公をどう感じられましたか」

二人になると弥平次がたずねた。

「心やさしきお方、あの武士も面目をほどこしたであろう」

父に盃をいただく侍の目に、こぼれんばかりの涙が光っていたのを、思い出していた。

「まこと名将、また、それにふさわしき良き侍でございます」

立花道雪ほどの武将がそば近く召し連れる者、家中選り抜きの者であるに違いない。かの侍には私がなく、主君のことのみが、念頭にあったこと。この日の主君の言葉は、道雪に、一旦事あるとき、あの侍に喜んで、命を投げ出させるであろうこと。

ひとつひとつ、かんで含めるように話す弥平次の言葉が、千熊丸の若い心に、心地良くしみ透ってゆくのであった。

弥平次は村里へ下りてゆき、百姓の家へ寄ったり、町家へ上り込んで茶を所望したり、千熊丸を領内のあらゆる場所へ案内した。

「あのような場所へ若君を」

家中の者の中には眉をひそめる者もあったが、父も母もすべてを弥平次にゆだね、喜んでいる風にさえ見受けられた。

千熊丸が八才になったころには、馬上の千熊丸の姿を見かけると、子供達が駆け出して来て、出迎える程、各地に友人ができていた。行く先々の人々が父を語る時、尊敬と信頼に満ちた話し振りから、父鎮種も又、領内のいたるところに顔を出していることを覚った。

観世音寺にほど近い、御笠川の流れに魚を追ったり、子供達と相撲に興じたり、時を忘れながらも、さまざまな生活の手段があり、家があることを知った。それと共に、これらの人達の平隠を守ることが、父や自分の使命であることが、心に深く刻まれていった。

弓道の深淵

とある日、弥平次は、城内に設けられた弓の稽古場へ、千熊丸を案内した。幾人もの壮丁が、片肌を抜き、十五間（二十七米）ほど先の的を射ている。二人を認めると、いっせいに肩を入れ、弓を背にかしこまる。

「稽古をつづけよ」

弥平次が掌をひるがえし、立つようにと皆にすすめる。再び、あたりに武道場に特有の、緊張した空気がみなぎり、男達の矢を放つ瞬間の息吹きや、空気を切り裂く矢羽の音、前方、径一尺二寸の星的に突き立つ、矢の乾いた音がひびいた。

弦を放れた矢が、生き物のように走る。

「きょうより、大人の弓を使われませ」

新しい弓矢と小唐と呼ぶ、柔かい鹿皮で作った弽を差し出した。

「御母君の斉藤家は、大友家中に名高い、弓の血筋でございますれば」

千熊丸が必ずや、弓の上手になれるであろうことを語った。さらに、今までの遊戯的な弓のことは全て忘れるよう、これからは、自分の指導に、全てをゆだねてもらいたいことを、強く言いわたした。

千熊丸は、稽古場へ入ったときの、弥平次の目の光りや、物腰から、彼が、容易ならぬ覚悟で、自分

に弓を教えてくれようとしていることを感じた。

一間（一、八米）ほど先の巻藁に向かい、弓を引き絞る、まず最初に教えられたことは、力を入れずに弓を引くことであった。

いかに大柄とはいえ、ようやく十才になろうという千熊丸に、大人用の弓をひき絞るには、相当の力が必要であった。

「力を入れずにお引きなされませ」

弥平次がくりかえす。

幾日かたったある日、とうとう千熊丸は言った。

「弥平次、力を入れずに弓を引くことなど、私には出来ない」

幾度もうなずきながら弥平次は、

「もっともでございます。ですが、あきらめてはなりませぬ」

背後から、左右の手を己れの手で握り、腰をかがめながら、いっしょに引く。はたして弥平次の掌は、軽く千熊丸の手を握っているのに、楽々と弓がひける。

「何故であろう」

「まずは、腹で息をなさいますよう。ゆっくりと、そして息を止め、あとはどうしても必要なだけ、ごく静かに呼吸をなさいませ。かくすれば、全身の力が丹田に集中されます」

自分の強い弓を引きながら説明し、弥平次は自分の腕に触ってみるように言った。背後から触れて

みた両腕は、だらりと下げたときのように弛んでいる。

千熊丸は疑うことを止め、一心に弓をひいた。呼吸が楽々と出来るようになるにつれて、弓の引き方も、上達していった。

弥平次は、背後から、千熊丸の腕の筋肉を検べ、常に、完全にゆるむようになって初めて、矢を射放つことを許した。

すでに数ケ月を経ていた。

いまは、稽古場のだれも、千熊丸の存在を気にする者はなかった。同門の者と同じく通常の会釈、あの、親しみに満ちたあいさつが、心を込めてなされるのみであった。

少年の心には時として退屈の心が芽生えてくる。

「早く的を射たい」

いかに子供用の弓であれ、五間（九米）程度の距離であれば、雀を射落すことも出来た。今は巻藁に向かい弓をひくことも、楽々とできるようになった。弥平次が、

「良い放れでござります」

と言うことも多くなってきた。そんな千熊丸の心を知ってか知らずか、稽古が続く。

とうとう的を射る日が来た。

十五間（二十七米）先に、円型の板の中心に、黒くぬりつぶした円を描いた星的が、ひどく小さく見える。

「的に中てるには、弓をどう持てば良いのか」たずねる千熊丸に、
「的はどうでも良うございます。いままでなさってきたと同じように、お引きなされませ」
「今までは、一間程先の巻藁、いやでも中る。このたびは、十五間の距離で、あのように小さい的、狙わずに当るはずがないではないか」
弥平次の言うことが呑み込めず、一瞬、自分がからかわれているような心地になり、頬を染めて、千熊丸は口をゆがめた。
「中てる前に、その狙おうとする心を忘れるのが、これからの稽古でございます。的のことも、中てることも、その他如何なることも、考えてはなりませぬ。弓を引いて、自ずから矢が離れるまで、待っておることです」
弥平次は弓を採り、いつものように端然とした姿で立ち、やわらかく引き絞り、射放した。矢は、吸い込まれるように、的の中心に入っていった。何の力みも気合もなく、ごく自然に、水の流れるような一連の動作が、瞬時に行なわれたような気がして、千熊丸は、的を見、弥平次を見、また的を見た。
「殿様が和尚と共に座禅をしておられる時のように、拙者の目が、半ば閉じていたのをごらんになりましたか。拙者は、的がぼやけてくる位に目を閉じます。さすれば的は、自然に私の方に近づいてくるように感ぜられ、やがて、私と一体となりまする。矢は私を離れ、私に入ってゆくのです」
千熊丸は、弥平次の言葉を信じようと思った。

「狙いを定めてはいけない。的を忘れなくてはいけない」自分に言い聞かせながら、矢を放つ。
ふと、我に返って、矢が、的に遠く離れたところにあるのに気づくと、やはり、知らず知らずの内にため息をつくのであった。
「射あてるにはやはり何らかの技があるに違いない」
千熊丸の心が見えるかのように弥平次が言う。
「弓を射るのは技ではありませぬ、若様の心です。的に中てるのをお教えするのなら、たやすいこと。弓矢をもって敵を倒しうる距離はわずか三十間（五十米）、敵の顔もようわかり、足のひびきさえ聞こえる近さでございます。技など物の役には立ちませぬ」
明けても暮れても、弓のことが頭を離れぬ日がつづいた。夜、床に入っても心の内で、弓を引く。
「的を忘れよ。的を忘れよ」
信じなくてはと思いながら、心の底深く、やはり、狙わずにはいられないと思う。
その日も、一本の矢も的に中らなかった。
目を赤くし、肩を落として、傍に控えている弥平次に言った。
「私には、狙わずに中てることなど出来ない。現にきょうも、一本も中らぬ。」
いっしょに道場に立つ家中の者達の矢は、発止、発止と、小気味良い音を立てて的に中たる。自分の矢は、空しく垜に立つばかりである。もう、弓は止めたい、我知らず千熊丸の心にそんな考えが走った。

「若様、一年余の稽古で、良く拙者の言葉を守ってこられたこと、敬服いたしております。ただ、的を狙わずに中てることが出来る、という私の言葉を信じておられぬ。いま半歩踏み出せば、迷いの霧は、晴れるのでございますが」

二人は無言のまま向かい合った。対座する二人の膝に、木の葉を通してくる日の光が、蝶のようにおどった。

「余りつかいとうはない手でございますが」

千熊丸に、日が落ちて、五ツ（八時）の鐘を聴くころ、再び、稽古場で会うことを約した。

早目に食後の書見を止め、供を一人つれて稽古場へ向かう。山中の秋は早い。深沈たる夜の気配が静まり、警護の者達の焚く篝火がひときわ明るい。

燭台の光に照らされて、端然、的場に向かって瞑目する弥平次の姿が見える。磨き上げられた板張りが、命ある物のように、なめらかに光っている。

千熊丸の姿を認めた弥平次は、軽く会釈すると、細長い一本の線香に火を点じ、埒のまん中にある、的の前の砂に立てた。

二人は射場に並んで座った。蠟燭の炎が、静まったり、おどったりするたびに、二人の影がゆれる。無辺際の闇に押しつぶされそうな建物の中に、煌々ときらめく一画がある。その、はるか十五間（二十七米）の彼方、闇に小さく穴を穿ったように、線香の光が見える。その一点のありかさえ、目を凝らしていなくては見失なう程で、的のありかは、到底わからない。

弥平次は、自分の弓と、二本の矢を執って、立ち上った。元結に束ねられ、白さを増した毛髪や、たくましい肭のあたりに、ことさら強く光が当っているように見える。

最初の矢が放たれた。

闇の中から、発止、という音が響き、的が射抜かれたことが知れた。泰山のような弥平次の体から、二本目の矢が放れる。

射場に乾いた音が走った。

「若様、どうぞ拙者の矢を、改められませ」弥平次が頭を下げる。

千熊丸は、最初の矢が、見事、的の中心に立ち、第二の矢が最初の矢の筈に中り、真っ二つに割いているのを認めた。胴中を突き抜かれるような感動と恐れが渦巻いた。両手に捧げるように、二本の矢を持って戻った千熊丸に、いつもと変わらぬ口調で弥平次が語る。

「拙者は、永の年月弓に親しんでまいりました。ここでも毎日のように弓を引いており、目をつむっていても、的のありかが、わかる位でございます。されば、最初の矢が的中いたしたのは、当然であるとも申せます。」

弥平次は言葉を切り、千熊丸を見つめた。

いまは父母に対するときのように、全く素直な心で、弥平次の言葉を待っている。

「二本目をいかがお考えなさいますか。この暗さの中で、狙って中てることなど、到底出来ませぬ。矢は、私から出たのでもなければ、私が中てたのでもありません。私の心が、心の中の仏が中てたと

でも申しましょうか」

「若様、的の前に立たれるときは、朝晩仏の前に頭を垂れるときのように、無心になろうではありませんか」

千熊丸は、言葉もなく、うなずいた、そして自分を恥じた。導いてもらう相手を信じることが出来なかった自分を、恥ずかしいと思い、この夜の行為に弥平次を駆り立てたことを、済まなく思う心でいっぱいになった。

次の日、千熊丸は、自分の心にも体にも、一点の疑念もなくなっていることを知った。そして、的に中てることも、自分のことも、弥平次の存在も、忘れるようになった。そのような日々、矢は、だんだん的に中たることが多くなり、弥平次が賞讃する射方も増えた。

千熊丸は、弓を射るごとに、自分の体が、透明になってゆくように感じた。

年が明け、春も終わるころ、弥平次は千熊丸を、自分の屋敷へ案内した。

座敷の、明け放たれた縁側から、初夏の風が、大波のように、次から次へと若葉の香りを、全身に打ちつけてくる。掃き清められた畳に、木々の緑を充分に吸った光が、跳ねている。

千熊丸を上座に据え、弥平次は頭を下げた。

「この二年余り、良くご辛棒なされました。こと弓に関して、もはやこの弥平次にお教え出来ることはありませぬ」

「いまや、若様の弓は完璧であります。」

「ただ、明日も来年もそうではないことだけ、確かであります。心を鍛え、胆を練り、人として武士としての習練によって、今の状態を維持して頂きたいと存じます」

千熊丸は、ある一つの地点に到達し得たことを認めてもらうことに、喜びを感じながら、遼遠たる道のりを示されたことに、身の引き締る思いがするのであった。

畳を摺る軽やかな足さばきの音が近づき、

「ごめんくださりませ」

張りのある中に落ち着いたやさしみの感じられる声がして、襖が開いた。千熊丸とさほど年の変わらぬと見える少女が、一服の茶を、捧げ持ってきた。

「ゆきにござりまする」

少女は、聡明な額をし、目に強い輝きがある凛とした姿で、千熊丸に頭を下げた。

しなやかな手つきで茶碗がまわされ、膝前に置かれる。質朴な感じのする、淡い色の肌をした茶碗の底に、うぐいす色の液体が静かにたゆたい、ほのかな湯気とともに、香ばしい茶の匂いが立ち昇った。

軽く会釈をして、茶を喫しようとする千熊丸を、ゆきが小さな形の良い指をきちんと、膝の上にそろえ正面から見ている。ふと、かつて経験したことのない感情が、異性に対する恥じらいとでも言うのか、千熊丸をひどく落着かない気持にさせた。母や侍女を除き、同じ年頃の少女と向かい合うのは

初めてであった。ゆきの視線を感じながら茶を喫し終り、

「良い服加減であった」

何となく話の接ぎ穂に困り、弥平次の顔を見る。

「年寄っての子ゆえ、可愛ゆうて。つい甘やかし、利かぬ気で困っております」

弥平次が首筋に手をやりながら相好をくずした。何と応答したら良いのか判らず、二人の顔を交互に見、庭に目を向けた千熊丸は、思わず目を細めた。庭に満ち満ちた光も、無心に自分を見ているゆきの眼指しも、同じようにまぶしかった。

この前の年、天正三年（一五七五年）五月二十一日、愛知県豊川の東北約十二粁の高原、三河設楽原において、武田勝頼の率いる騎馬隊は、織田・徳川の連合軍の鉄炮の前に、壊滅的大敗を喫した。世に言う長篠の戦いであり、この一戦は、個から集団、槍から鉄炮戦への転機となった。

同じ年十月二十八日、織田信長は、京都妙覚寺で茶会を催し、千利休宗易が、お茶頭となった。

立花道雪は、千熊丸の父高橋鎮種と三十才以上の年令差がありながら、鎮種の器量を認め、折にふれては、酒を汲んだ。道雪は必らず千熊丸を呼び、その成長ぶりを喜んだ。

岩屋城下の宗福禅寺において、宗晋という和尚に教えを受けていることを聞くと、膝を打って、

「うむ。あの和尚は信用出来る」

禅宗の和尚は、自分のように生臭が多いと言い、体をゆすって大笑した。

金毛の獅子

やがて道雪は鎮種にすすめ、一日、千熊丸を立花城へ迎えることとした。

立花城（福岡県粕屋郡新宮町）は海抜千二百尺（三六七米）で領内の中央にそびえ立つ。山容きびしく、山頂は、松尾獄、白ケ獄、梅ケ獄の三山からなり、全山、樟や杉の古木が密生している。

千熊丸たちは山の中腹で馬を下りて徒歩でゆく。年古りた大木の間に、時折、日が射してくるのがひとしお、まぶしく感じられる。

胸の奥にしみとおるような心地よい大気が満ち、鳥の啼き声がこだまする。急坂をまるで平地を行くかのように早足で進む城兵の案内に従う。曲折に富んだ道程は、わずかに踏み固められた跡でそれと知れる。登り下りに同じ道をたどらぬよう網の目のような道が付けられている。時折、木陰に物見の武士の姿が見え、わずかに会釈を送る。頂上に到る直前二町（二百米）程は、見上げる先は空が見えるだけの急坂が連続し、さすがに一行も、息を切らす。

忽然、視界が開け、立花城が目に入る。自然石や丸太を自在に組み上げた城は、道雪の風貌そのままに、豪放にして堅固なつくりである。

汗を収めるため、本城のはずれの広場に出た一行を、冷涼の山気が吹きぬけてゆく。目を上げれば、

博多湾と玄界灘を切り裂くように海の中道が伸び、はるか万葉にうたわれた志賀島へとつながる。はてしない水の向うは壱岐、対島、韓の国があるという。冬の風は、湾内外いたるところに、刷毛ではいたような、白い模様を描いている。眼下には、糟屋郡数十ケ村の田畑が、この年のつとめを終え赤茶けた荒涼たる姿をさらす。左手海の究まるところ、大小の甍を連ね、博多の街並みが広がる。

「いつながめても、良いものでございますなあ、まるで、天下を手中にしたような心地になります る」

弥平次が胸を張り、背のびをして、感にたえぬような声を出す。おりからの風に、白さを増した鬢髪があおられ耳のあたりを生き物のようにうごめく。

「うん、だが私は、立花へ来ると、過ぐる年鮎の食べようで、道雪様に厳しく叱られたことの方が、先に想い出される」

「やっ、あれは当方の完敗でございました」二人は思わず笑みをもらした。

以前立花を訪ずれたときのこと。

多々羅川でとれたばかりの鮎の焼き物が、膳に供された。香ばしい身をむしりながら食事をしていた千熊丸は、異様な気配を感じ、ふと顔を上げた。道雪が、口を一文字に結び、目をカッと見開いており、眉のあたりが激しく痙攣している。思わず箸を下ろし、膝に手を置くやいなや。

「武士にあるまじき仕様、何たる魚の喰い方か、戦陣に出たときそのようなことでどうするか」

体がゆすられるような大声で、叱り飛ばされ、引っ掴むように箸を採り上げられ、鮎を頭からかみ

くだいた千熊丸であった。

戦陣では常に飢餓状態にあると覚悟し、あらゆる物を大切にする。木の根、松の皮を食する場合もある。食べ物を粗略にせぬことは、その備えであると同時に、筋骨をたくましくすることに役立つことを教えられたのであった。

「よう参られた。茶一つ進ぜよう」

好みなのか、道雪は茶がかった色あいの、生地の厚い紋付を着用し、袴を長目に付けている。

老来、巨大な体軀を支えるに不自由となり一足ごと、廊下を踏みしめるようにゆっくりと歩を進めてゆく。

いくつかの廊下を曲り、案内された部屋は、炉が切られていた。湯のたぎる松風の音が、ひときわ静けさをきわ立たせ、ほの暖かい空気が心を和ませる。

「まずは、これへ」

千熊丸に床近くの座をすすめ、遠慮する弥平次を制し、自らは末座を占めた。

床の間に雄渾な筆づかいの一軸がある。

「金毛獅子軋繍毬」左下に細字で、医王彭亭、とし落款がある。

明り採りの障子から射し込む冬の日に、室内はかすかに、靄がただようかのような、微妙な陰翳に満ちている。

静かに襖が開けられ、女性が茶碗を前に頭を下げた。千熊丸より一つ二つ年下であろうか。白磁の

ような肌をし、頬のあたりを少し紅潮させ、かたく口を結んだ姿に、凛乎とした品格があり、一輪の花が咲いたかのように感じられる。弥平次が知らず居ずまいを正す。

「閶千代でござる。いまはこの立花の城の主、儂は隠居の身じゃ」

千熊丸と弥平次に引き合わせる道雪の目に、はじめて見るやさしさが宿っている。

たおやかに帛紗をさばき、掌をひるがえし水を汲む、手前の進むにつれて、衣服に焚き染めた香がほのかに匂ってくる。

閶千代姫は、千熊丸より二ツ年下の九才、この三年程前、道雪に家督を譲られ、当時、日本国内でも希有の、女性の城主となっていた。また、六十を過ぎた道雪が、閶千代姫と立花城にふさわしい養子を得んとする心には切なるものがあった。

のどが渇いているであろうということで、薄茶が点てられる。千熊丸は、閶千代の帛紗さばきや、茶筌の動きを見ている内に、心の中に非常に強いもの、激しい気性を秘めている人だと感じていた。婉然たる仕草の中に、侵すべからざる気概がただよっている。

最前から床の軸を見て、しきりに口の中で何事かつぶやいていた弥平次が、尋ねた。

「殿様、床の書の読み様でございますが」

「うむ」

道雪が、待っていたように首を大きく振り、軸に目をやる。

「金毛の獅子繍毬を軾す。金色の毛をした獅子が、美しいまりをもて遊んでいる様を言うておるそ

うじゃ。儂にはこのような坊さん仲間の言葉は解らぬが、字面が気に入ってのう。和尚に無理を言うて、もろうて来たわ。千熊丸殿、ながめておると天地を踏まえたような気持にならぬか」

もう半年の余も床に掛け、毎日ながめていると言う。

「獅子児よく獅子吼す」という言葉を千熊丸は想い出していた。近く戦陣に出るべき自分が、一日も早く、父鎮種のように、兵の信望を集め、将兵を自在に動かせる男にならねばならぬ。父の日常の全ては、民の撫育と、侵略に備えることに向けられている。知らず知らず、拳を握りしめ、体が燃えてくるのであった。

閶千代は客人の所望により、二服ずつの茶を点てた。侍女が運んできた二碗は、湯かげんといい、量といい、申し分のないもので、渇いた体をうるおした。道雪また上機嫌で茶を喫し終り、別室での膳を囲んだ。

道雪は、豊前、豊後、筑前、筑後、自分が戦陣の間に見聞したことを、面白おかしく話してきかせた。このごろでは千熊丸は、道雪の話の中に、容易ならぬ教えが含まれていることを知っていた。如何に戦わずして勝つか。敵の情報を得ることの困難と重要性。如何に兵の損耗を防ぐか。体験によって裏付けされた話の一つ一つが、若い千熊丸の脳裏に、深く刻まれてゆく。一言も聞きもらすまいと、身を乗り出すように耳を傾ける千熊丸に、道雪は、一人前の武士に対するように熱心に語りかける。

弥平次が、いくどもうなずきながら、膝に掌を軽く打ち当てるようにし、二人の顔を交互に見ている。

移ろいやすい冬の日射しが、障子に樹影を写し出し、はや、八ツ時（午後二時）をまわろうとしている。弥平次が胸中に帰りの時間を算用しているとき、案内を乞うて、立花家の家老、由布雪下が顔を出した。永禄八年（一五六五年）五月、道雪が立花の城攻めの時、敵将弥須図書と組討の上首を上げ、勝利の糸口を作った勇将であり、道雪の信任、最も厚い者であった。

「これは千熊丸様、足立殿、ようこそおいでなされました。」にこやかにあいさつをする袖口や胸元に幾条もの疵痕がのぞいている。

「かの者の仕置にござりまするが」

雪下の問いに、

「おお、そうであった」

思い出したようにうなずき、千熊丸を一瞥（いちべつ）したうえで、

「書院の庭先にて、放し討に致せ」

と命じた。

雪下は、

「では、ただちに」

予定されていたことのように静かに退いていった。道雪は何も言わず二人を伴ない、書院に向う。すでに主だった家臣が席を占めていたが、道雪を見るや座をすべり、いっせいに平伏する。袴の衣ずれの音が、冬の午さがりの冷涼たる空気の中、小波のようにひろがる。

「放し討」とは耳新しい言葉であったが、千熊丸には、今から行なわれようとしていることが想像出来た。罪人にも一分の生存の可能性を目指せるよう、刀を与え、一対一の勝負をさせるのであろう。怪我人や死人は、岩屋城でも数多く目にし、血の臭いにも慣れている千熊丸であったが、目前で切り結ぶのを見たことはなかった。

道雪の横に座り、罪人が引き出されてきたのを見たとき、千熊丸は、胸の鼓動が高くなるような気がし、思わず耳を澄ませた。そうしながら、常々、父や弥平次に聞かされている言葉を思い出していた。

もうあと数年のうちに自分も加冠し、一人前の武士として、多くの兵と共に戦場に出なければならぬ。

将兵は、大将たる自分の、目の輝きや態度を見て、勇敢にも、臆病にもなると、教えられてきた。今こそ、良い機会である。人間の気魂の最も昇華した形で現れるこの一瞬を、細大もらさず見ておこう。そう覚悟を決めたとき、庭前の様子が、すみずみまで、目に入ってきた。警護の侍が固めるこの書院前の庭は、方七間ほどであろうか、まわりは壁高く内側は樫の木がすきまなく植えられ、外部とのつながりは、小さなくぐり一つである。

罪人は、年のころ四十前後か、色黒くがっしりと頤（おとがい）の張った、目の鋭い大男で、髪も結い直し、小ざっぱりとした身なりをしている。

冬の日射しの中、砂をまいた庭には、整然とした箒目が走っている。風は落ち、時折かん高い鳥の

啼き声が、空気をきりさく。

役人が男の前に進み、罪状を申しわたした上で、特別のはからいをもって、一対一の勝負をし、勝を得ることが出来れば、一命を助ける旨告げた。一瞬、言葉の意味が呑み込めぬかのように、手をついたまま、役人の顔を見上げていた男は、こぼれる笑みをおさえ、口元をゆがめると、深々と平伏した。

肩のあたりの肉付きや、たくましい首筋が、数々の修羅場をくぐり抜けてきた、自信にあふれている。

討手は、年の頃は同じ位、長身だがやせぎすで、青白い表情をしている。

縁の正面、五間ほどの間をおいて、二人は向かい合った。無言で立ちつくす二人の間に、すさまじい気力の戦いがはじまった。

凛々たる気迫があたりを圧する。

居ならぶ重臣たちも、知らず知らず姿勢を正し、事のなりゆきを注視する。

声なき気合数合、かすかな鍔音をひびかせ、罪人は、悠然と刀を抜き、青眼に構えた。

山のように動かない。

数呼吸ののち、討手の武士は刃をやや斜めにし、ゆらりと、下段に刀身を下げた。青白い顔色がおりからの日射しを受けて、いっそう白く見える。

はらわたを絞るような掛け声をかけ、ジリジリと罪人が間を詰めてゆく。烈々たる殺気が全身から

放射する。

討手は低く「応」と軽く受け流すように答え、潮が満ちてくるように、ヒタヒタと進む。四半刻ほどもたち、日が移ろい、お互の間が一間近くなった。罪人の額に汗が浮かび、銀色に光った。まなじりが裂けんばかりに見開いた目は赤く充血し、肩の動きから、呼吸が荒くなってゆくのが知れる。

足が止まった。

一方、討手の武士は、青白い顔をし、石のように無表情に、休みなく間合をつめてゆく。砂の上に、庭の両端から一直線に二人の命が刻まれている。

千熊丸はこの武士の静かな闘志に感動していた。

「もはや間じゃ」

千熊丸が心の中で叫んだとき、

剣の峯を光らせて、討手の刀が下段から、青眼に移った。

渾身の気力を剣先きに込めて、罪人は半歩踏み込みざま、討手の右籠手を切り下げた。

鋭い笛のような太刀風が走り、誰の目にも討手の武士の手首が吹き飛ぶ光景が映じると思われた。

瞬間、いかにもゆっくりと、合掌するかのように振り上げられた刀が、目を見開き、体を立て直そうとする罪人の、頭頂から胸元まで切り下げていた。

ろうそくの火を吹き消すように、急速に、目から光が失せ、命が消えた。

刀を背後に、頭を下げる討手の武士に、

「見事」

声をかけると同時、道雪は片膝を立て、千熊丸の方に向き直り、胸元をはだけ左胸に手をやり、千熊丸の目をのぞき込んだ。

弥平次はもとより、家老の由布雪下はじめ、何事ならんと、眼前の出来事も忘れたかのように、首を伸ばし、二人を見ている。

冬の外気に冷えた大きな手が、千熊丸の左胸をがっしりと掴んでいる。

心臓の響きをたしかめ、平静な目の色を認めた道雪は、

「弥平次殿、足立殿」

と呼びかけ、いとも満足そうにうなずいた。

天正五年、千熊丸十一才であった。

宿敵—島津と大友

この年、大友宗麟の妹婿である日向（宮崎県日向市）の伊東義祐は島津勢との戦いに敗れ、都於郡、飫肥城をすて豊後へ逃れた。

さらに大友方であった県（宮崎県延岡市）の城主、土持親成も島津についた。島津の勢力は、薩摩、大隅、日向の南九州一円に広がり、大友方にとってうるさい存在になっていた。

ようやく島津の力伸びつつあるとはいえ、依然、大友は九州で最大、最強の大名である。

豊後府内の神宮寺浦に入港するポルトガル船との交易による利もさることながら、筑前守護代として、立花道雪に経営せしめる博多津からもたらされる、中国、朝鮮、南方の文物をも、思うがままに手に入れることが出来た。

千熊丸の父、鎮種の兄、吉弘宗伽（鎮信）に命じ、博多の豪商、島井宗室、神屋宗湛らと交渉せしめ、銀子の用立て、茶器の購入などの労をとらせていた。

宗麟は九州随一の数寄大名でもあり、堺の商人、天王寺屋道叱に茶を学び、新田肩衝をはじめ天下の名物を所有していた。

天王寺屋は、堺の中枢的門閥商人で、会合衆の一人でもある。貿易を家業とし、九州方面が商いの中心であるため、博多、豊後の商人との往き来が多かった。

当然堺とも緊密な関係を保ち、文物の交流が盛んになされた。

宗麟の茶器への執心を語るものとして次のような話が残されている。

過ぐる天文二十年（一五五一年）陶晴賢は、周防山口において大内義隆を弑殺し、大友義鎮（宗麟）の弟、大友晴英を大内家の当主に迎え、名を大内義長と改めさせた。

そののち陶晴賢は、毛利元就と戦い、安芸宮島で惨敗、義長は長門の長福院へと逃れた。このとき元就は義鎮（宗麟）へ使いを出し、弟の義長の命を助けても良いが、と申し送った。義鎮は、

「弟の命はどうでも良いが、大内家に伝わる瓢箪の茶入れが欲しい」

と答え、義長は腹を切り、茶入れは義鎮（宗麟）にもたらされた。

この茶入れは、足利義政、珠光、等を経て大内氏の手に入り、宗麟、その子義統さらに秀吉にわたり、命脈を今日に保つ。

翌、天正六年（一五七八年）三月、日向の押えを失なうことを恐れた宗麟は三万の軍を発し、土持氏を攻めほろぼした。このとき島津は何の動きも見せず、これがため宗麟は、島津の力を見くびることとなる。

天正六年七月宗麟は臼杵の教会で受洗し、教名をドン＝フランシスコとした。

若き日に豊後に招き、深い感銘を受けた、イエスの戦士部隊、つまりイエズス会の結成者、フランシスコ＝デ＝ザビエルにあやかったのである。

宗麟は、新しい属領日向に、キリスト教的理想国……「愛の理想郷」を建設することを夢みていた。

九月、臼杵を出発、

……光栄あるサン＝フランシスコの祝日、王は、夫人ジュリヤとともに土持領に向け出発せしが、その乗りたる大船には白緞子に赤き十字架を附け、金繍（きんしゅう）を施したる旗を翻し、また多数の十字架の軍旗をならべ、同船の武士は青年も老いたる者も皆ロザリヨおよび影像を胸に懸けゐたり。相当なる艦隊同行し、このほか多数の大身等は陸路同地に向け出発せり、当地方の上長なるパードレ＝フランシスコ＝カブラルもまた二人のイルマンとともに随行せり。

（一五七八年フロイス書翰）

八月十五日務志賀（延岡市無鹿）に本拠を置いた。進軍の途上兵に命じ、神社や仏閣に弓鉄炮を射かけ、堂宇を破壊した。また自らは陣所にこもり、パードレ達と共に礼拝に熱中し、会堂や寺院の建築に着手せしめた。

もとより大友の武将はじめ兵に到るまで、大部分は神仏を信仰する者達で、敵兵を殺傷することは止むを得ぬとしても、社殿や仏像にまで手をかけたことに対する恐れが将兵の心に黴（かび）のように広がっていった。

「国崩し」と宗麟が名づけたポルトガル伝来の石火矢（大砲）を用いた高城（たかじょう）（児湯郡木城町）の戦いでは、わずか五百の城兵を一月余も抜くことが出来ず、千熊丸の伯父に当る吉弘鎮信が討死した。

十一月十日、未明からの耳川（児湯郡美々津の北で日向灘に注ぐ）の戦いで大友軍は決定的打撃を受けた。

千熊丸の母、宋雲院の兄、斉藤鎮実は大将として最前線で采配をふるっていたが、島津の将兵先を争って攻めかかり、ために耳川の水を赤く染めて散った。

明くる十一日、総崩れとなって引く大友軍の中で、兵をまとめ、なお敵将島津義久を求めて戦っていた大友の至宝、吉弘鑑理も蟻のように群がる島津勢の中に討死した。

千熊丸はここに祖父を失なった。

敗兵は陸続として務志賀に逃れ、自軍の壊滅と、島津軍の追撃の急なことを告げる。

次々ともたらされる敗報に魂を失なった宗麟は神父カブラルの

「この陣は堅固でござりますれば、引上げを急がず、残りの軍隊を収拾すべきであります。敵が急に来るとは思えませぬし、味方の死者も話よりは少ないはず」

冷静な進言も耳に入らず、蒼惶として豊後へ逃れた。恐怖にとりつかれた従臣が糧食を携帯することを忘却したため、豊後までの三、四日間飢えと疲労に悩まされ続けねばならなかった。

ここに島津と大友の勢力は逆転し、二万を超える戦死者と、「豊後ごけ」と呼ばれる哀しい夫人達が生み出された。

筑前にある、立花道雪と高橋紹運（天正六年春入道し鎮種改め）がこの戦いに参加していれば、かくも無残な結果とはならなかったであろう。

いかんせん両名は中国の毛利に備え、動くに動けなかったのである。

敗報は、夜を日に継いで、岩屋城へもたらされた。紹運と道雪がかねて心を痛めていたことが現実となった。島津の戦い方は剽悍であるだけでなく、理にかなう戦い方であり、決して力をあなどってはならなかった。大友の家臣の間では、宗麟の受洗後、キリスト教に入信する者が相次いだが、戦場におもむくに心のまとまりに欠けていた。

紹運は道雪に使者を出すとともに、老臣達と部屋に籠った。城兵の顔が雲がかかるように暗くなっていった。

「なんと言う……」

あとは言葉を呑みこんだ弥平次は、膝の上に拳を握り、肩をふるわせた。

千熊丸は万を超えるという戦死者の数に実感がわかず、考え込んでいる。

千熊丸は自分が近い将来、島津の軍と戦場に相まみえる運命にあることを強く予感していた。

十一月の冷たい川の流れの中に、紅の水の中に沈んでいった将兵の無念の顔々が頭の中をぐるぐると巡っていた。

耳川の戦いで、大友の老臣はじめ名のある武将ほとんど討死を遂げ、ために領内の統制は乱れ、各地の諸豪また離反するものが相次いだ。

一方島津は、大友を包み込むように、着々と版図を拡大してゆき、筑前においては、秋月、龍造寺はじめ、大友方の立花、岩屋を攻め落さんとして、攻城野戦に明け暮れた。

大兵の道雪は、宿痾である足の病漸く進み歩行に困難を来たしつつも、汪溢する気力は、いささかも衰えを見せない。

頑丈な輿を作らせ、甲冑の上から道服を着け、二尺七寸余の太刀と小銃に身を固め、悠然大あぐらを組む。

屈強の若者に輿をかつがせ、長刀を帯びた武者百人余りを従え、戦場に臨むや、常に最激戦の場にかき入れさせる。

道雪の、兜の鉢にたたきつけるような叱咤のもと粲然として槍は輝き、刃は風を生じる。

一団は大石の転がるごとく、地を震わせ、敵兵を蹂躙してゆく。

戦局に利なく輿の動きが停滞するや、三尺余りの棍棒で輿の前後、左右を敲きながら、「エイ、ト

ウ」「エイ、トウ」耳を聾する声で「今ひと押しぞ、進め、進め」巨体をゆすりながら将士を励ます。

期せずして、輿をかつぐ者達、脇を固める武者の間から、

「エイ、トウ」「エイ、トウ」

の掛け声が湧き上がる。

叫喚と土煙の中でこの掛け声を耳にすると

「おう、殿の音頭じゃ」

道雪が自らのそば近く迫っているのを知り、苦戦に陥っていた兵達は、無量の気力をふり絞り、勢いを取り戻すのが常であった。

道雪は常に人に説いた。

「武士には弱い者はおらぬものぞ、もし弱き者あれば、その者が悪いのではない、その大将が励まさぬ故じゃ。儂の武士は下部に至るまで、度々、武功のなき者はおらぬ。他家にて臆病と言わるる侍あれば、我が元に来たり仕えしめよ。必ずや一廉の武辺者にしてみせるわ」

また、たまたま武功のない武士には、

「武功には運、不運がある。その方が弱き者でなきことは儂が見定めておる。明日にでも戦いに出会おうとも、人に唆され、抜け駆けして討死などするでない。それは不忠というものじゃ。身の安きを計り道雪を見守っていてくれ、お前達がいればこそ、この老人が敵の只中にあっても恐れずにおれるのじゃ」

懇ろにまた、親身に語りかけ、盃を交わし、はやりの武具を与えるなどした。

ために次の戦いでは人に遅れじと、心中深く期するところがあり、かの武士は先陣を進み、はなはだ面目をほどこした。

このように知勇、愛憐、兼ね備わる名将道雪に如何ともしがたいことが二つあった。

一つは、一子誾千代姫の婿取りであり、今一つは自分の老いであった。

道雪は立花の城督を誾千代に譲る前、親族である戸次家より養子を迎えんとして、手を尽したが成らなかった。

次に粕屋郡薦野一帯の領主であった。丹治式部少輔峯延の後裔であり、立花家の重臣で智謀勇武の人、薦野増時（当時年二十八才）を養子とし立花家を継がせようとその意を伝えた。

再三の道雪の申し入れを薦野は固辞し、

「立花家は、大友の名流であります。何卒御一族の中からお迎え下さいませ」

道雪の老いの一徹を拒みとおした。

ただ、この時から薦野の心中には、ぜひとも立花家にふさわしい人物を、自らの眼で探し出さねば、という決意が芽生えていた。

増時は、立花城に来るたびにたくましく、凛然たる風格の備わってくる千熊丸の一挙一動を見つめ続けた。

天正九年（一五八一年）の正月、城内も城下も新しい年を迎え、心改まる中にも駘蕩として、屠蘇

の酔いに身をゆだねていた。
臣下の年賀を受け、広間のにぎわいを避けて道雪は書院に戻った。
東向きの、弱々しくも暖い日射しが障子に映える一室に、陶製の手焙りをなでながら、黙然宙を見据えている。
「また一つ齢を重ねたわ」
吐く息が生き物のように渦巻き、明るさの中にとけてゆく。

戦国のおんな

誾千代は今年十三才になる。色白く、ふくよかな相貌は、年ごとに女らしさを加え、父親の道雪でさえ、そのきらめく瞳のまえに、ふと、たじろぎを覚えることがあった。
父の血を受けてか、気性に強いものがあり、武事を好み、十余人の侍女を組織し、日毎調練を行なう娘を、道雪は心底いとおしくながめていた。
「今年こそは誾千代に、この立花の城にふさわしい婿を」
そう思いながら、幾度の正月を迎えたか。
胸の内に、くりかえし、くりかえし、名を空んじるあの者も、この者も、真に道雪を納得させるだけの、器量に欠ける。

太い吐息をつき、ビシリ、と手焙りを打ち、天井を向き瞑目した。
数十年にわたる戦陣で、烈日にさらし、寒風に磨き上げた顔色は、部屋の薄明りの中で、鋼のような光沢を放っている。喉元に寄る深々とした皺が、老いを残酷にも表している。
廊下を踏みしめる音に、ふと我に還ると、小姓が薦野の面談の意向を告げた。
増時ちょうどこの頃、四十そこそこの働き盛り、目の光り、挙措、自信にあふれている。
「珍しや、対面して語りたき事とは、何じゃ」
道雪は、増時に話しかけるときは、何故か我が子に対するような和やかな顔つきになる。
「推参ながら」
形を改めると、
「姫様の儀にござりまするが、お相手として高橋千熊丸様をおいて、他に人はないと存じまするが」
真っすぐ本題を提示した。
つい今しがたまで、とつおいつ胸の中に思案していたことを突かれ、一瞬、言葉をのみこんだが、
「いや、あの者は、高橋の家を継ぐ男ゆえ……」
道雪は、思い切った薦野の意見に、内心少からずたじろいでいた。今日まで、幾度往き来をしたであろう。盟友、高橋紹運の子と思えばこそ、立派な武士とするべく、厳しくも言い、我が子のごとく交ってきた。
あれ程指を折り、思案にくれてきた道雪であったが、千熊丸を誾千代に、とはついぞ思いつかなか

った。

「高橋家には、いまひと方、弟君がおいでございます。」

増時は、千熊丸が立花の城に初めて遊びに来た時から、ただならぬ器量に注目していたこと、その後の成長ぶりから、末は必ずや天晴れ名将となるであろうことを確信するに至ったこと、熱誠を面に表して説いた。

「うむ、千熊丸のう」

腕組みをして道雪は考え込んだ。増時が言うように、道雪とて千熊丸の器量を見抜いてはいたが、その成長を喜ぶ心は、高橋の家の良い跡継ぎの成長を喜んだのであった。

「千熊丸様は今年でおん年十五才になられまする。されば加冠して名を改められましょう。他家よりお話の出ぬ内に、お申し出にならねばなりますまい」

増時は、千熊丸がすでに、立花の城に来ることが決まっているように言う。

「弟があると言うても、長子ではのう」

道雪は、紹運夫妻や弥平次たちの、決して馴れ合うことのない、一人立ちの武としての千熊丸への接し方に、並々ならぬ高橋家の願を感じていた。

「千熊丸か、かの者であれば、いやいや、とてものことに、手放してはくれまい」

熱心に語る増時の話も半ば耳に入らぬげに道雪は一心に思案をめぐらせていた。

天正九年（一五八一年）四王寺の山にも桜が薄雲のように広がる頃、千熊丸は加冠し、高橋弥七郎統虎と名を改めた。

父に似て色あくまで白く、体軀長大、切れ長で良く光る目、挙措に品格あり、浩然たる気概がみなぎっている。

両親はじめ、立花より祝いの席に連なった道雪達もそれぞれに、この若武者の将来に思いを託した。

なかに足立弥平次は白いものの多くなった髪をきれいに結い上げ、こらえてもこらえても、こみ上げてくる、この十年余の想いの数々に、人知れず涙を、こすり、こすりしている。

岩屋城中、爛漫として春のさ中にある。

初陣の功名

同年六月、統虎初陣。

大友方であった、問註所氏一族から大友に叛く者が出た。筑後国生葉郡井上城（福岡県浮羽郡浮羽町）城主、町野治部少輔鑑景は、自ら問註所を名乗り、秋月と組み、立ち上った。

長巌城主（浮羽郡新川村）問註所統景は、ただちに豊後の大友宗麟に使者を立てる。

「筑後に大友に叛く者の旗立てさせてはならぬ。ただちに井上城を攻め、町野治部めを斬れ」

巧網入道宗暦に、兵三千を与え、進発せしめた。

城は包囲され、まさに落ちようとするとき、筑前の、秋月長門守種実が、三千の兵を率いて後詰、

腹背に敵を受けた宗暦、囲みを解き、原鶴（朝倉郡把木町志波）に河をはさんで対陣する。
戦況進まず、宗麟の命により、道雪、紹運二将が、三千五百の兵をもって筑後へ到着したとき、すでに、宗暦は、大友家中に謀反出来のため軍を反し、秋月勢また、井上城に籠っていた。
萌黄の唐綾威の鎧に身を固め、射し込むような夏の光をはじき、銀色に輝く鍬形の前立をつけた冑の中の統虎の表情が、肩透しを食ったように、河の流れを見つめている。
統虎は、父紹運が、後見役にと、つけてくれた有馬伊賀に問うた。
「伊賀、宗暦殿は、いかに急がれたとは言え、何故、当方へ使者を立てられなかったのであろうか、この手勢では、城攻めは兵を損ずるばかり、我等はむだ足を踏んだことになってしまう。」
「さて、そこでございます」
幾度も大きくうなずいて、老臣達と策を練っている、道雪と紹運に、目をやった。
将兒に腰を掛け、鞭の先で地面に、図を書いてしきりに、物見の武士に問いかけている。
馬取が、馬に水を与え汗を拭いてやり腹帯やあぶみをつる力革を締め直している。
たてがみを風がなぶってゆき、空をあおいで嘶き、憂然、蹄を踏み鳴らす馬がいる。
様々な意匠を凝らした旌旗が、はたはたと風に靡く。
やがて作戦が、各隊長に伝えられた。日が中天に来るまでに、飯を済ませ、出発の合図は鉦。
道雪、紹運の軍は、秋月の領内、筑前国嘉麻、穂波両郡の民家に放火した。
烈日のもと、炎は炎を呼び、黒煙は天に冲した。

軍の主力は、一団となって進み、穂波郡石坂（福岡県飯塚市）へ向かう。
物見が馬を飛ばし、城の様子を伝える。
立ち昇る煙に、異変を知った秋月種実は、ただちに城門を開き、道雪、紹運の軍を追う。兵数五千余騎。
石坂は、名のとおり、石が多く耕作に適しない荒地が山につながる所、急坂がつづき、両側は、深い樹林となっている。
道雪は、二千の手勢を、坂の左右の樹林に配す。たちまち兵は緑の海に吸い込まれてゆく。
紹運は、坂の途中に、前段を鉄炮、二段を弓、三段を槍で固め秋月の勢を待つ。
火縄の匂いが鼻をつくほか、空を渡る風に鳴る葉ずれの音が時折ひびくのみ、粛然として兵は静まっている。
物見が刻々と、秋月勢の近づくのを知らせてくる。
統虎は塗籠の弓を小脇にはさみ、有馬伊賀を呼んだ。
「儂が手勢百五十騎は、父の勢より二丁程後方に備えさせよ」
有馬は統虎の言葉に驚き、
「お言葉ながら、良策にあらずと存じます。敵は大勢でありますれば、父君と共にお備えになり、勢力を一つにまとめた方が、まして小勢にて備えれば、敵の目指す所とも……」
鼻下の髭を汗で光らせながら、統虎に思い止まらせようと説く。

白い歯を見せ伊賀の言葉にうなずき、

「敵が大勢であろうとも、何程のことがあろう。父と同じ所に備うれば、儂が手勢も、父の勢と共に進退することは明白。儂が下知には従わぬであろう」

肩をゆすり、箙に筈高に入れた弓矢をかすかに鳴らして、統虎はつづけた。

「有馬の申すこと、まこと理にかのうたことである。しかし、ここは理を曲げて、儂の計略に任せて呉れぬか」

この言葉に、流石に歴戦の有馬も胸を熱くし、目をうるませ、頭を下げた。

「幾度も合戦の場に臨んでおりましても、仲々そこまでは考え及ばぬもの。若殿は、若年でおわします上に、初陣。にもかかわらずただいまのご下知。まこと生まれついての将器と申すものでござろう」

ただちに百五十騎を統虎の指揮に従い陣せしめた。

遠く濛々たる土煙が立ち昇っている。近づくにつれて騎馬武者の冑の立物が光り、槍、旗差物が見えてくる。

遠い雷のように地鳴りがひびき、大地が動くように、秋月五千の軍が近づいてくる。

鯨波を作り、坂下から一気に攻め登る。

統虎は、一、二歩前に踏み出し、刀の柄に手をかけ、攻撃の下知をしようとする。

歯を喰いしばり、紙のように白い顔をし、目が火のように燃えている。

有馬伊賀がするすると近寄り、籠手を押え込み、押し殺した声で

「余りにもはしたなきご挙動、大将とは、軽々に攻めるものではありませぬ。良将は進退の時を知り、暴虎は死すとも悔いなし、と申しますぞ」

しきりに目で

「押えなされませ、押えなされませ」

統虎のたぎる心を制する。一度は伊賀の手を振り払い、攻撃の下知を与えようとした統虎も、有馬の必死の目に、己れを取りもどし、坂下の様子を見守る。

真っ黒く、津波のように盛り上って攻め寄せる秋月の兵に対し、高橋勢は坂の上に冑を傾け、槍の切っ先をそろえ、前方を凝視し、静まり返っている。

充分に秋月勢を引きつけるや、紹運の采配が振られ、森の木々をふるわせて数十丁の鉄炮が咆哮する。再び火を吐く。

人形が倒れるように隊列が崩れてゆくが、味方の死骸を乗り越えて、秋月勢は、無二無三に攻め上る。敵は小勢と見て、ひと息に踏みつぶそうとする気概が見てとれる。

至近にいたり、弓と鉄炮の前に被害が増え先陣の勢いが鈍った。

紹運の采配のもと、槍と長刀で武装した兵団が秋月勢の先陣に、きりきりと揉み込み、縦横に切り立てる。

四散した先陣には目もくれず、一千余騎の二陣が、血を吐くような喊声を上げながら突進する。

「者共、儂に続け」

三尺余の長刀を抜き放ち、大将紹運が切って出る。雄叫びと切り結ぶ鋼の音の中、敵兵が、土煙の中にもんどり打って切り倒されてゆく。

統虎またこの機を逃さず、下知を与え、秋月勢の右手から槍をそろえて突きかからせる。秋月の後陣三千余騎また攻め掛り、坂の上下たぎるような乱軍となる。

秋月の将士は、堂々たる統虎の風姿や金造りの太刀に目を留め、

「あれこそ敵の大将ぞ」

先を争って統虎に切りかかろうとする。

有馬伊賀は統虎の前方に立ちはだかり、寄せ手を切り払い、なぎ払い、三騎を切り伏せた。

伊賀は身に数ケ所の疵を受けた上、額の刀疵から流れる血汐が目に入り、受け身一方となってきた。

秋月方で堀江備前という音に聞えた剛の者が、有馬を討たんと、雑兵をなぎ倒しながら真っしぐらに突進する。

切っ先から血をほとばしらせながら打ち振う長刀が緋色の光芒を放つ。

これを見た統虎は箙から矢を抜くと、弓に番え、充分引き絞り、緩め、再び引き絞って、放つ。

矢は、堀江の剣の柄を削り、左の掌に深々と突き立った。

射抜くような眼で統虎を見た備前は、長刀を捨て、矢を抜くと猛然、統虎目がけて駆け寄り、ガッと組み付く。

渾身の力で統虎をねじふせようとする備前に、統虎は胄の錣を傾け顔をかばいながら、具足の胴をじりじりと引きつける。

倒しがたし、と覚った備前が、傷ついた左腕に更に力を込め、右腰の鎧どおしに右手を伸ばそうとした瞬間、地上から二尺程も持ち上げられたかと思うと、したたかに地面に投げつけられた。

胄の重みで頭を打った備前が、顔をしかめ首を振り立ち上がろうとするより早く、胸板を押えつけた統虎は、そばにいた萩尾大学を呼び、首を上げさせた。

秋月五千余の兵の中に、高橋勢千五百余騎少しもひるまずもみ合う中、

「今じゃ、者共、掛かれ」

雷霆のような道雪の下知に、坂の両側から二千余の兵が湧き出してくる。

戦局は立花、高橋勢に傾き、さしも秋月の大軍も、じりじりと坂下へ切り立てられ、退き鉦を打ち兵をまとめ、退却にかかる。

秋月の殿軍、良く戦ったとはいえ、さらに数十の首級を上げられる。

ようやく山の端に近づいた夏の陽に照らされ、我人ともに水をあびたような汗と土ぼこりにまみれ、死者を集め、傷者の手当をする。

道雪、紹運の二将は、死者に念仏をとなえ、負傷した者にいたわりの声をかけている。

統虎は、自分の手の者の間をまわりながら、彼等が若い自分の下知に従い、力戦してくれたことをうれしく思った。

「兵は多きを益ありとするに非ざるなり」地形、戦術、人心、さまざまな要素のからみあいが彼我の間にゆれ動き、この言葉を虚にし、実にする。

たくましい葦毛の馬にまたがり、手綱を軽く当てながら、統虎は懐の守り袋が熱く燃えているように感じた。

出陣の朝、弥平次が、

「八幡様にご武運をお願いして参りました。何卒お肌にお着け下さいませ。夜明け前にゆきと二人授かって参った物でございます」小さな札を差し出した。

成人してからも、弥平次は統虎にとって、無二の臣であり、友であった。時折、たずねる弥平次の屋敷で、ゆきが点ててくれる一碗の茶は、統虎に真にくつろいだひとときを与えてくれる。

「ご武運を、ご武運を」

追いかけるように叫んでいた弥平次の老いて小さくなったような姿が目に浮かぶ。

「弥平次」

小声に呼びかけると、ゆき、という言葉が胸の奥深くひびいたような気がした。

激戦のあとの疲労を色濃くただよわせながらも、隊列を整え、旌旗をなびかせ、落日を背に、意気盛んな立花、高橋の軍が進む。

道雪は紹運と馬を並べ、きょうの陣立てや戦術について語り合う。

「統虎殿の武者振り、見事でござった」

快活に語りながら、道雪は胸の内で、

「増時、お主の言うとおりじゃ。統虎じゃ、統虎をおいて外におらぬ」

何としても、立花の城に統虎を迎えたいと思う心が、思わず言葉に出してしまいそうなほど激しく、胸の内を駆けめぐっていた。

武士の道

石坂の戦いの跡始末が一段落した八月、道雪は、宝満山のふもと竈門神社への途上にしつらえられた、高橋紹運の館を訪れた。

開け放たれた座敷を通り抜ける風に、はや秋の気配があり、木の葉のさやぎが、ひとしお静けさを際立たせる。

戦場にあるときは、武の守り本尊である、摩利支天もかくやと思われる、颯爽たる武威を示す両将であったが、坊主頭で、穏やかな目をして、茶をすすり合っている姿は、禅家の師弟の対座のように見える。

珍しく酒も遠慮し、自分の幼児の思い出話などを咄々と語りつづける道雪に、老いの寂しさを感じずにはいられない。紹運が道雪の冷えた茶を替えさせようと控えの小姓を呼ぼうとすると、

「あいや、茶は充分でござる」

姿勢を正し、紹運の目を直視し、深く息を吸って、おもむろに、
「本日は、お願いの儀があって、参りもうした」
軽く頭を下げ、
「無理を承知でお願い申す。統虎殿を立花の家に、誾千代の婿に頂きたい」
「統虎……でござるか」
一瞬、我とわが耳を疑って紹運は絶句した。
かの石坂の戦いでの初陣ぶりに満足し、弟の統増と二人、宝満、岩屋の二城に居れば、高橋の家は磐石、主家のためにも喜ばしいと、宋雲院ともども語りあったのである。
「統虎は長子でござるし、高橋の家を継ぐべき……」
みなまで言わせず、大きくうなずきながら紹運を制し、
「相わかってござる。相わかってござる。高橋殿、聞いて下され。この道雪、やがて古希を迎えもうす。若年の頃より大友家のために大小の戦場におもむくこと幾十を知らず、いまだかつて一度も遅れを取り申さなんだ。ことに近年に至っては、貴殿のごとく良き武将と手を取り合うて働けること、名誉なことと存じておる。じゃが年を取り申した。
島津、毛利、また龍造寺、秋月、戦えど戦えど大友の武威日毎に落ちるこのごろ。立花と、宝満、岩屋の三城は大友の支柱でござる。儂なきあとは、立花の城はどうなることか」
目をしばたたき道雪は語る。

「我が子可愛さ故に申すのではござらぬ。お家には統増殿という男子もござる。統虎殿を立花に、貴殿と統増殿で宝満、岩屋の二城を守らるれば、高橋の家にとっても、大友の家にとっても至極のことと存ずる。我が家臣どもにも一日も早く、よるべき主を立ててやりたいのでござる」
一語一語に熱誠を込めて語りかける道雪の全身に主家を思う心が満ちている。
家あっての武士であれば、自分が統虎を手放すことで、立花の家が続き、ひいては主家のためにもなる。将来は、統虎、統増の兄弟が、力を合わせ、大友家のために尽くしてくれるであろう。誾千代姫は年十三、この年若い城主を残してはいかに剛気の道雪とて、死んでも死に切れぬ思いにちがいない。
「承知つかまつった」
紹運は深々と頭を下げ、
「お心の程、身に染みて候。統虎、差し上げまする。ただ若年のこと故欠けたる部分が多々あり申す。何とぞ我が子と思し召され、厳しく躾られ、天晴れ一人前の武将にお育て下され」
きっぱりと言い終ると、さわやかな笑顔を見せた。
道雪は、しばし言葉を探るように無言でいたが、ふりしぼるように、
「有難や」
一声言うや、大きな目からあふれた涙が、握りしめた拳を濡らしつづけた。
太宰府一円の稲穂にみっしりと実が入り、観世音寺の鐘の音が、ひとしお冴え渡る八月の末十八日、

高橋家の重臣宝満城の広間に蝟集し、惜別の宴が開かれた。

城を去る者は、高橋統虎、世戸口十兵衛の二人のみ。

「城主の頼みとするは侍でござれば、統虎殿を貰うに侍を差添えられることのなきよう。もし、強いてお附けになるならば、只一人をお選び下され」

道雪のたっての希望に、紹運は、弓術と水練の達人で、自から深く信を置き、紹の一字を与え、紹兵衛と名乗ることを許した、世戸口十兵衛を統虎に附けることとした。

宴に先立ち、統虎は父紹運の前に進む、肩幅広く、凛然たる気概あたりに漂い、居並ぶ家臣の胸中に別れがたい心情がつきあげてくる。

暇乞いの盃を飲み干す統虎をじっと見詰めていた紹運は、

「きょうより後は、この紹運を親とは思わぬように努めよ。武の道の廃れようとするこのごろ、世の変転極まりなきこと、思いもよらぬものがある。明日にも道雪公と敵味方となるやもしれぬ。その時は道雪公の先陣に立ち、この紹運を討ち取るが良い。道雪公は未練がましきことを最も嫌われる生まれつき故、お前の日頃にご不満が生じ、義絶を申し渡されるような日が来るやも知れぬ。お前は自分が育った岩屋の城へ帰ろうなどと思ってはならぬ。その時は、己れの足らざるを省み、潔よく腹を切るが良い」

自ら長年にわたり腰に帯びてきた、備前長光を、手づから与えた。

紹運の覚悟に、またその子を思う心に胸打たれ一同寂として人の居ぬかのよう。

「必らずや……」

刀を押し頂きかしこまる統虎の肩先きが、心なしか、かすかに顫えている。

「戦乱に明け暮れるこのごろでは、明日の命も覚つかぬ。不幸、この紹運がお前より先に討死する日があるやも知れぬ。そのときはこの刀を我が形見と思い、肌身はなさずにいるが良い。そして刀を見、刀に触れるたびにいま儂が申した武士たる者のとるべき道をたしかめよ。また、養家に対し、主家に対して尽くすべき、義理、の二字をくれぐれも忘れるでない」

「お教え、心魂に徹してござります。義理の二字、身命を賭して守り抜く所存、父上におかれてもご安心の程」

健気に答える統虎の姿に、居並ぶ家臣たちは、押えても、押えても、こみあげてくる、胸中の熱いかたまりを御しかねている。

同じ思いに目頭を赤くしている十兵衛を呼び、盃を与え、紹運は友に語りかけるように、へだてない口調で、

「いにしえより、勇将の下に弱卒なしと、言われておる。彼の道雪公は、天下無双の剛将で、義理堅固のお方である。麾下に義烈の士はなはだ多い。その方、この幼少の統虎と共に立花へ行くからには、よく輔け導き、忠言を呈してくれ。勇将の嗣子たるに恥じない立派な武人にしてもらいたい。これは儂の心願であり、特にその方を統虎に附ける理由である。また、統虎の言動が、立花家の内外に信を缺くようなことがあれば、この刀で自害し、道雪公におわびをすると共に、統虎に忠諫し、悔悟

の念をおこさせてくれ」

親しく語りかけ、九寸五分の短刀を与えた。十兵衛感泣してこれを受け、居並ぶ重臣たち「武士の面目これに勝るものはない」とうらやまぬ者はなかった。

統虎は母の宋雲院と弟統増に別れを告げた。気丈な母はいつに変らぬ柔和な目をして、

「当家のことはかまわぬ。養父道雪公によく孝養を尽くされるように」

暖かく送ってくれたものの、やっと十才になった統増は、唇をかみ、目をいっぱいに見開き、涙をこぼすまいと耐えている。

翌早朝、立花より迎えの使者として差しつかわされた原尻宮内と三騎、なつかしい宝満を下り、岩屋城下を抜けてゆく。幼ないころからの顔なじみである、町家や農家の人々が道筋に出て、別れを惜む。透き徹った、白い秋の日射しの中、あの顔も、この顔も、幼時の思いにつながってゆく。

手を上げ、笑顔で答えながら、斉整たる蹄の音の中、一抹の寂しさを感じるとともに、ついに顔を見せることのなかった、弥平次のことを考えていた。

領内に突兀とそびえる立花三嶽が目に入る。集落の入口ごとに沢山の村人がうち揃い、頭を下げる。

途中、下原村まで出迎えに来ていた、薦野増時と轡を並べる。

家中の者皆、立花城外へ出、統虎の姿を見掛けるや、口々に万歳を叫ぶ。

ようやくにして、待ち望んでいた、若き城主を迎え得た喜びに、城の内外ともに、手を打ち足を踏み鳴らす。

宝満より立花までは、およそ四里（十六キロ）の道のり。

老臣の差配により、湯浴み、髷の梳り、数人の小姓がいそがしく立ち働く。

丁字染の肌着に袖を通したとき、名も知らぬ香の、焚き染められた匂いが、ほのかにも立ちのぼった。

鬱金色の大絞の直垂をまとい、青鈍の長袴を付け、純白の紐をキリリと音立てて腰に結ぶ。

黒漆の艶新しい烏帽子姿も凛凛しく扇を手に、増時の導きで、道雪の居室へ赴く。

「おう、早う中へ」

身を乗り出し、顔中を皺にして道雪は、

「薦野、そちもこれへ」

増時を招き入れる。

文机の上に、手づから書写したと思われる幾冊もの書物が無造作に積まれている。

六韜、孫子、大学さらに古今、伊勢のたぐいも見える。増時にはこの老将が、いかに若き城主の到来を鶴首していたか、気を落ち着かせるべく、あの本を手にし、これを読み、時の過ぎゆくことの遅さに、歯がみしていた様が偲ばれ、知らず、胸が熱くなるのであった。

型どおりの挨拶のあと、道雪は統虎の姿にみとれるように、しばし無言で対座していた。

緊張のためか、ほんのり赤味を帯びた頬のあたり、障子を透してくる光線に、うすい桃色に輝いている。肩や胸のあたりの着衣の張りが、筋骨のたくましさをうかがわせる。両膝にそろえている皺一

つない手に、静脈がすけている。まさに、立花家の将来が、輝いているように見えた。

「統虎殿、薦野も聞いてくれ」

二人の顔を交互に見ながら、道雪がゆっくりと口を開いた。

「そなたの父君に申し上げた如く、城主にとって侍は宝じゃ。きょうよりは、立花家中の者達も、そなたを主と思い、心を尽くしてくれるであろう。じゃが、いまそなたは、若い。老いた儂は、あと幾年、そなたの成長を見ておられるかわからぬ。

文と武は、車の両輪、人間の左右の眼の如きものじゃ。日毎、成長のなきところ、将士の信を得ることも、又ない。儂なきあとも、城中の者達を導いてゆくことが出来るよう、一層、努めてもらいたい。それは、立花の家名を高めることであり、高橋の家のため、ひいては、主家である大友家への義理でもある」

七十年の人生の大半を、戦場の血腥(なまぐさ)い風の中で送り、生死一如の生を、生きてきた道雪の風貌は、長い眉毛に白いものが混り、かえって穏やかなものとなった。

水底のようにうす明るい部屋の中で、時折炬火(たいまつ)のように光る目や、腹にひびいてくる太い声が、老将の衰えぬ気力を、垣間見せていた。

「薦野のことじゃが」

「この者は、合戦の場において高名を上げること度々であり、立花家のために尽くしてくれた忠義は、はかり知れぬものがある。

真にたよりとなる、智勇兼備の武士じゃ。

儂はかって、数度にわたり、この増時を、立花家の養子にと望んだ。増時は、大友の一統から迎えることをすすめ、ついに受けなんだ。かえってそなたの稟質(ひんしつ)を見抜き、立花家の養子に迎えるよう、真心をもって、この儂に説いてくれた。儂なきあとは、薦野を重く用い、何事も相談するが良い」

道雪は、改めて薦野増時に、統虎の良き後見役となってくれるよう頭を下げ、「三重」と名付けて秘蔵していた、若州冬広作の銘刀を与えた。

この時、増時はようやく四十の声を聞こうとする男盛り。

かつて、増時の戦功に報いるべく、道雪が感状を与え、

「望みのものはないか」

何なりと与えようという言葉に対し、

「畏れ多きことながら、拙者死せるときは、殿の御墓の傍に葬むらるることをお許し下されたく」

死して後も、道雪のそば近く仕えたいとの望みを許していた。

自分に対する誠忠を、息子である統虎に対しても尽くしてくれよとの、道雪の親心が、増時にわからぬはずがない。

老将道雪は、若き主従の眼の中に、言葉にはとうてい尽くし得ぬ覚悟を見、くりかえしうなずいた。

この日、大友宗麟、義統父子からの祝いの使者をはじめ、重臣たちからの祝儀の品々が大広間の正面にうず高く積まれた。

高橋家からも、心のこもった祝いの品が届けられ、紹運夫妻、統虎の弟統増も、席に連なった。

昼にはじまった饗宴は、いつ果てるとも知れず、日が落ちるとともに、皆人、正装を解き、略服に着換え、盃を交し、手を握りあい立花家の新しい主人の誕生を喜びあっている。開け放たれた縁側から、音もなく秋の風が流れ込み、火照った頬をなでてゆく。

やっと十三才になった誾千代姫は、はなやかな紅梅の小袖の上に、幸菱模様の打掛をはおり、固い表情をして、身じろぎもしない。

さんざめく座の中で、誾千代姫のまわりだけは、秋蘭が凛と背を伸ばし、芳香を放つように、静けさにつつまれている。

統虎は、列をなして盃を載きにくる家臣たちの顔を見、姓名を反芻しながら、声や体の特徴を心に刻んでゆく。

時移り、衣裳を替えるため中座しようと、挨拶をする統虎に、

「暫時、夜風に当るが良い」

満面に笑みを浮かべ、紹運に盃を差しつつ道雪がうなずく。

「拙者、お供仕る」

家老の小野和泉が立ち上る。寡黙な性質らしく、自ら語りかけることは余りなく、にこやかに人々の顔を見ながら盃を傾けていたが、挙措にいささかの乱れもない。

城外の広場には、颯々たる秋風が樹々を鳴らし、満天の星明りに、枝々の葉が見分けられるほど、

冷たい光に満ちている。

幸若舞であろうか、鼓の拍子につれ、遠く朗々たる謡い声が、きこえてくる。

広場のはずれは、切り落したような崖となり、なだれ落ちるように樹木が密生し、眼前をさえぎる何物もない。

竹の皮で編んだ、共緒の草履の下で、小石がきしみあう、ひそやかな音がする。

無数の星が、手が届きそうな程近くにきらめき、時折、夢をみるように、糸を引いて流れる。その下、渺々たる水のふくらみの中に、島影がうずくまっている。

黒い大地のいたるところに、ボツリ、ボツリと、花が咲いたように、赤い火が見える。

「ご覧なされませ、ご領内の村という村、町という町が皆、若殿様のご入城を祝うております」

小野和泉が、統虎の前に出て、赤い火をつかむように、あれは何村、これは何町と、説いてゆく。

小柄だが、盛り上った肩や背の肉、臼のように太い腰のあたり、立花四天王とうたわれる武勇の程をしのばせる。

「この領民や田畑を守るため、大殿様は今日まで、身を砕いてまいられました。これからは、若殿様を戴き、我等、身命をなげ打ちまするによって、存分に働かれますよう」

やがて五十になろうという和泉の、咄々とした語り口は、その人柄の誠実さと共に、老主道雪に変らぬ誠忠を、若い統虎にも捧げようとする意思を、よく表していた。

統虎は、城の内外共に、己れに俟つこと如何に大きいかを、今さらのように感ぜずにはいられなか

った。
また、道雪の親心と、ただちにそれに感応する和泉に、主従の深い絆を思っていた。

勇武の器量

天正八年、その酷薄な所業から、肥前の熊といわれた龍造寺隆信は、秋月、原田、筑紫、草野などの軍二万を糾合し、生の松原に進出、筑前を睨んだ。
すでに、立花、岩屋、宝満の三城のみとなった大友の防衛線では、迎えるに利なく、道雪と紹運は、筥崎の浜において和を講じた。
筑前十五郡のうち、東北部の六郡を大友方、西南部九郡を龍造寺が領す。
ここに龍造寺は、肥前、筑後各一国、肥後、筑前半国、豊前三郡の五国を押え、対馬、壱岐二島を併せ、「五国二島の太守」と称される。
九州は、大友、島津、龍造寺、三大勢力の鼎立時代に入っていた。
筑前博多は、毛利、大友の十余年にわたる対峙や、龍造寺の侵入で、戦火の止むときなく、多くの住民は地方へ逃れ、かろうじて商都の面影を残している。
街を貫流する那珂川の上流、不入道村に、大友方唯一の出城、筑紫方への押えとして築かれた猫峠城があった。

不入道村は、戸数五十戸余り、山の斜面を利用した田畑は良く耕され、川には「えのは」が満ちている。
潺湲たる流れを眼下に、山を背にして、巨石大木をめぐらせた砦は、守将山田兵部丞以下、百名余りの兵が固めていた。
統虎が立花城に入ったあくる天正十年（一五八二年）二月、高祖城（福岡県糸島郡）の原田信種は、この砦の手薄なことに目をつけた。信種は、共に大友に叛き、龍造寺と組んでいる、宗像、秋月と共に砦を急襲、山田兵部丞以下、全員を討ち果した。
敗報は九ツ（午前零時）すぎ、不入道村の百姓によってもたらされた。
道雪は、由布、小野、薦野等の重臣を呼び、千五百騎を揃えしめ、翌払暁、砦へ向かった、二月、冬の気配は強く残り、将兵の吐く息が白い。朔風に旌旗がなり、人馬は一団となり、地をとどろかせて進む。
一里（四粁）をこえる筥崎の松原を抜け、右手に住吉大明神を望み、比恵川の刃のように澄みきった流れを渡る。
那珂川の川幅がせまくなると共に、山が迫り、鳥の声がひびく。朝の光に梅花が輝き、蕾のふくらんだ桜の枝が、風にふるえている。「五百とみたか」
道雪は物見の報告を聞いて、小首をかしげ由布雪下の顔を見た。
「最前の百姓の話のもようでは、二千を下らぬ人数で、ひともみにしたと覚えましたが」

「兵を伏せておくには恰好の場所が三ケ所あるのう」

馬を休ませ、兵粮を使わせる間、道雪達は軍議を凝らした。伏兵のあることは確実とし、軍勢を二分し、道雪が千騎、統虎には五百騎を与え、薦野増時を後見役とした。

「何卒、私に先陣をお許し下さいませ」

統虎は膝の拳を白くなるまで握りしめ、道雪の目をのぞき込んだ。老いた義父に、自分がいながら先を進ませるわけにはいかない。何としても自分の手勢でこの砦を奪回するのだ、という気概が面上にみなぎっている。

道雪は大きな目で、じっと統虎を見つめていたが、

「きょうの戦いは、伏兵に備えるそなたの采配によるところ最も大きいであろう。大局を見失うでないぞ」

統虎の肩に手をおき笑顔を見せた。

菊辨を列べたように、一枚の鉄を球状に打出し、眉庇には見上皺、打眉をしつらえた、頑丈な丸頭巾形の兜の内から、あたりの空気を染めるかと思われるような伽羅の香りが漂うてくる。

砦に近づくと、敵もすでに邀撃の体勢を整えたか、はや高くなった日の光に旗差物が、時折、ゆらりと動くほか、粛然として静まり返っている。

統虎と兵五百は、砦からの死角に当る堤の陰に、旗を伏せ、身を寄せた。

弾丸よけの竹束を押し立て、鉄炮を激しく撃ちかけながら、堀を越え、木柵を引き倒し、砦に迫る。

硝煙と土煙が舞い、血を吐くような吶喊の声が、満山の梅花をふるわせる。

砦の強味も弱味も知り尽した道雪の指揮の下、各所で防ぎかねた敵兵が、砦を捨てて走り出す。道雪はじめ小野、由布の両名も、思ったより弱々しい敵の戦いぶりに、いよいよ伏兵のあることを確信し、時折山谷の間に目を向ける。

重々しい攻め太鼓のひびきと共に砦の左右、川上の樹林に様々の色彩の旌旗がゆらめき、地の底から湧き上るような鯨波の声とともに、二千余の兵が、道雪軍を押し包むように迫って来る。

道雪は采配を振り、ただちに軍を三ツに分け、小野、由布の両名に与える。

味方に倍する敵に、一団となって槍先を揃え、敵方の槍ぶすまを気合とともに打ち下ろし、打ち下ろしして、追い詰める。

白兵戦となった戦局では、槍で敵の足を薙ぎ払い、兜の上から、力まかせに殴りつける。鉄炮をさかしまに持ち、芝引をしたたかに敵の顔面に叩き込む。

「この機を逃さず、ひた押しに押しては如何でございましょうか」

堤の陰で床几に掛け戦局の推移を見守っている統虎に、薦野増時がささやいた。

統虎は増時の顔を見、目で、いまだし、と言い両軍の動きに眼を凝らした。

いま、両軍の勢いは拮抗しており、互いの兵の気力も相ゆずらない。ここに手勢の五百を投入し、一時の優位は獲得できても、いまだ損耗の少ない敵は、体勢を立て直し、両軍四つに組み合う形となり、いずれが勝つにしても、甚大な被害を覚悟しなくてはならない。

「退くな、押せ、押せ」

今にも立ち上り、攻撃の采配を振りたい心を押さえながら、いくたびも胸の内に叫んでいる。

長途の行軍のあと、少時の休憩をはさみ、砦を破り、己れに倍する敵との攻防一時（二時間）余り、立花勢にも疲労の色濃くただよう。旺盛な気力に支えられた兵は果敢に戦うが、彼我に死傷者が増えてきた。

原田、秋月等の将は潮時と見極めたか、秘蔵していた鉄炮隊の筒先を揃え、乱射すること数回、ひるんだ立花勢は一団となり、ために周囲に敵を受ける形となった。道雪の大声での叱咤をあびるまでもなく、小野、由布が陣を整える。

原田、秋月の勢も最後の気力を振り絞り、立花の備えに突き進む。

すさまじい白兵戦となり、主を失った馬が狂ったように嘶き、もうもうたる土煙の中、人間のものとも思えぬ叫びがひびく。

統虎は薦野増時に命じ、自らは三百を率い堤の陰に二百を伏せしめる。

「儂は原田の旗本を攻めて分断する。時を違えず、残りの者共は、あるだけの旗を堤の上に立てて鯨波をあげよ」

采配と共に満を持していた精兵三百が統虎を囲むようにして、風を巻いて進む。

馬上の統虎は、槍を振るい原田勢の士を突き倒し、打ち払い無二無三に旗本を目指す。

原田、秋月、宗像など寄せ集めの兵は、どこか一ケ所突き崩されれば、全軍を統べる者なく潰え去るにちがいない。

じりじりと立花勢の不利に傾いていた戦局は一変した。新手の猛々しい兵団に、名のある士数名を討たれた原田勢は、戦意を喪失し、退却をはじめる。

秋月、宗像の将兵も、原田勢の退き鉦の響き、おびえた叫びに、切先が鈍る。

追いかけるように、堤の向うから油然として鯨波の声が起る。

気力沮喪した空ろな眼に、堤の上にはためく幾百と知れぬ旗が稲妻のように閃めく。

「又も新手が」

恐怖に眼球が飛び出さんばかりに目を見開き、総身の毛を逆立てた秋月、宗像の勢は、原田の勢の後を追い雪崩を打った。

旗差物を捨て、得物をなげ打ち、味方に踏み殺される者さえ出る。

逃げまどう敵兵を自在に討ち果たす立花勢を鉦を打ち、素早くまとめた道雪は、

「充分じゃ、これだけの兵を損ずれば、しばらくの間動けぬであろう」

土埃にまみれ、累々と横たわる、彼我の将兵に手を合わせた。

砦を修復し、数ケ寺から和尚を呼び、ねんごろに戦死者を弔い、立花へ凱旋する。

わずか数日のうちに山に残っていた雪は消え、桜の蕾がふくらむ。

往路には、ろくに耳に入らなかった川のせせらぎや、陽光にまぶしく咲きほこる梅花に目を細め、道雪は、

「長生きはするものじゃ」

統虎の器量を再確認し、立花の家の安泰を思った。

帰城ののち、戦捷の祝いにかけつけた、統虎の実父高橋紹運に、

「このたびの合戦は、ひとえに統虎の武勇によって勝を得申した。一時はこの皺首、敵に呉れてやらずばなるまいと思うた程でござる」

「まこと人の心、時を得た戦いぶり、天性という外ありませぬ。老人、いつ死んでも良いと思うておりましたが、統虎の今後が楽しみで、命が惜しくなり申した」

手を取り、額に押しあてて喜びを表した。

統虎は、このたびの働きを、家老の小野や由布、薦野たちにも道雪が

「神変奇特の武勇である」

と評しているのを聞き、うれしさと、気恥かしさを禁じ得なかった。

「伏兵にそなえる、そなたの采配によるところ最も大きいであろう」

「大局を見失うでないぞ」

道雪の言葉を腹にたたき込んでいたればこそ戦機を見出せたと思うし、この老いたる義父が、自分に期待するところ如何に大きいか、骨に染み透る思いであった。

統虎が立花へ来てからも、闇千代は侍女達を集め、白い刺子の稽古着に揃いのうす紫の袴を着けさせ、薙刀、小太刀の稽古を続けていた。

斉整と声を合わせ、無駄のない動きは、充分に実用に耐え得ると思えたが、統虎は滅多に武場へ顔を出すことはなかった。

統虎が奥へ入って泊る時も、肌を温め合うことよりも、戦いの様子を聞いたり、武器の扱いを尋ねることに熱心な闇千代に、物足りなさを感じるとともに

「まだ幼ない故」

胸のうちにつぶやくのであった。

信長本能寺に死す

立花の城が、わき上るような蝉の声に包まれはじめた早朝、一人の供をつれた、年のころ三十半ばと見える男が山道を急ぐ。坊主頭の異様に額の広い、下がり気味の長いまゆ毛の下に細い目を光らせ、水を浴びたように汗をかき、息をはずませる。

統虎の伯父、吉弘宗伃とも面識のあった、島井宗室である。彼は博多有数の豪商であり、朝鮮との貿易、酒造、質屋などの経営も行ない、主家、大友宗麟に対し、茶道具の斡旋や、貿易品の手当を行なっている。

茶の湯との縁もあり、堺の天王寺屋道叱とも昵懇で、当時日本国の動きに最も通暁する者の一人であった。

樹木の間から、遠く油のように光る海が見える広間に、道雪、統虎と宗室が対座している。型どおり久闊を叙すると、

「まこと、一風千両でございますなあ」

目を細め、首を伸ばした。

まだ四十才に手の届かぬはずの宗室の表情がひどく老成したもののように見え、統虎は一瞬この男が、十才も二十才も年取っているように感じた。しかし、両膝にゆったりとおいた手や、物柔らかな中に、自分自身をも、第三者のように見ている、篦で削いだような目が、内なる気力を放射している。

「早朝より大儀であった、このたびの土産話は何であろうか」

白い麻の単衣の胸をはだけ、風を送りながら道雪が笑いかける。

「さればでござります」

膝をすすめ、声を落とし、

「去る六月二日、京都本能寺において、前右大将、織田信長様、腹切られましてございます」

一息に言うと道雪の顔をじっとのぞき込んだ。

つやの良い道雪の赭ら顔から、笑みが静かに消えてゆき、一瞬、思案する風であったが

「何者が」

つぶやくように言った。

「織田様が臣、明智光秀殿にございます」

「主君をのう」

道雪はうなった。

統虎の頭の中に、前の年八月、信長が高野聖千余人を切ったという、信じがたい話が閃いた。

同じ年二月二十八日、信長は、正親町天皇の台覧を仰ぎ、京都で馬揃えをとり行ない、諸将を閲覧した。

さらに今年（天正十年）三月、甲斐の虎、武田信玄の遺児、武田勝頼を駒飼に討ち、日本の中央部を、ほぼ掌握した。

天下を平定する者は、織田信長であろう、との風聞は、くりかえし、もたらされていた。

宗室は、天王寺屋道叱の甥、宗及と共に前日、信長より茶道具の拝見を許されたのであった。

「何故の謀叛」

統虎の問いかけに大きくうなずくと、

「巷間、種々取沙汰いたしておりますが、まづ第一は、ご主君に対する遺恨ではないかと」

幼時より乾坤独歩の人であった信長と、当時一流の教養人と自他共に許す光秀との間には、主従間にあってはならぬ心魂の間隙が生じていた。

主君信長が弑逆されたことに驚愕した諸将も張本人の名を聞いて

「明智殿か」

何となく得心する気持があった。

「その二日の早朝でござります」
ぺろりと上唇をなめると、道雪と統虎の顔を交互にながめ、大きく一つ息をし、低い声で語りはじめた。
この日、茶会の加勢を命じられていた宗室は、道具の置き合わせ、灰や炭を改め、きょうの天気を案じ、縁側に立ち、頭を押さえつけてくるような雨雲を、見上げていた。
と、朝のしじまを裂いて、人馬の足音、具足のふれ合う音が、とどろきわたり、本能寺を包んだ。
堀を押し渡り、門を打ち破り、塀に梯子をかけ、武者が庭前に踊り込む。修行僧が悲鳴を上げて逃げまどう。
幾瞬間、石のように立ちつくしていた宗室は、あやつりのように向きを変え、
「道具は、上様は」うわごとのようにくり返しながら、奥へ走った。
「何事じゃ」
寝衣(しんい)のままの信長が手荒く襖を開けた。青白い顔の中に、まなこが赤く燃えている。
「……」
言葉もなく廊下に平伏し、宗室は、自分がおそろしく、うろたえていることを感じた。
廊下を駆け戻った小姓の森蘭丸が、板張りに片手をつくや、
「明智が者と見え申し候」
声高に告げた。

「是非に及ばず」
一言すると信長は部屋へ入るや、弓と槍をかい抱き、風のように本殿へ向かう。宗室もつられるように後に従う。
すでに全山、体がゆらぐような叫喚につつまれている。
信長が供として本能寺に伴った小姓は、三十人に満たない。加勢の寺僧と共に、わき上るように押し寄せる敵と切り結んでいる。
数人の小姓を従えた信長は、本殿の大額の下に仁王立ちになり、矢を放つ。
たちまち数人を射倒された敵兵は、切っ先を下げ二、三歩退くが、すぐに気をとり直し、鯨波(とき)を上げ押し寄せる。
何事かをわめきながら、欄干に取り付く兵を、森蘭丸等の槍が、容赦なく、薙ぎ落し、刺しつらぬく。
圧倒的な敵勢に、少しもひるむ色なく、活溌溌地に最後の戦いを戦い続ける信長主従を、本殿の陰から見ながら、海賊共との交易はじめ、幾多の修羅場を見てきた宗室も、背骨を灼くような、恐怖と感動を覚えていた。
弓弦の切れた弓を抛ち、槍をもって戦っていた信長は、幾ケ所か傷を受けたらしく、寝衣をじっとりと、血汐が濡らしてゆく。
なぎ倒され、突き落とされても、味方の屍を踏み越え、踏みこえ、眦(まなじり)を決し顔中を口にして兵がつ

づく。
果敢に戦っていた小姓達もここかしこで討たれ、じりじりと、本殿の方へと追いつめられてゆく。
騎馬武者の采配につれ、口に泡を噛み、兵が突貫する。
「……」
何事かを傍で槍をふるう蘭丸に叫ぶと、信長は身をひるがえし、奥へ向かった。
外の光景に目を凝らしていた宗室には、血潮に染った袖を千切りすて、森蘭丸を従えて奥の間へゆく信長の姿が、真っ黒く映じ、部屋の暗さに溶けていった。
大勢の決したことを覚った宗室は同時に身の危険を感じ、奥へ走った。
白煙の中に生き物のように踊る赤い炎を見た宗室は、
「お道具が」
信長がきょうの茶会のために用意した、天下の名物が飾りつけてある部屋へと煙をかき分けた。
昼間といえども薄暗い部屋は、立ち込めてくる煙につつまれ迷路のようになっている。
いく度か敷居につまずき、襖に突き当りながら部屋にたどりつくと、床に掛かっている弘法大師真筆の千字文の軸を、手早く巻くと懐にねじ込んだ。
命あって本能寺を出ることが出来るかどうか解らぬが、たとえ一品でも貴重な文物を救いたかった。
厠の窓を破り、墓石の陰に身をひそめ、樹木に身を隠し、塀へ走る。
折から各所ではげしく火が吹き上り、龍のように天に昇った。

「織田殿を探せ」
空しく叫ばれる声をあとに宗室は堀の上から身をおどらせた。
「危うい命を助かったのう」
道雪が小姓に命じ、宗室の茶碗に冷たい茶を注がせる。
「無我夢中でござりました」
茶碗をいただくと、うまそうに喉を鳴らす。
統虎は、いま、まさに天下を掌握せんとして倒れた、織田信長という武将の、覇気と烈々たる闘魂を思っていた。
「日本が大きく動いている」
一人の野心家がたおれても必ずや次の野心家が頭をもたげてくるであろう。
「して、謀叛の始末は」
統虎の問いに大きくうなずいた宗室は、
「ここからが肝要でござります」
茶碗を脇へやり、膝を進めた。
「まずもって、羽柴筑前守秀吉様が、ご主君の仇を報ずるの大功を立てられたこと申し上げます」
「当時織田様の諸将は、徳川様は堺見物に、柴田様は越前にて上杉方と対陣、皆京を遠く離れておられました。これもまた明智様に本能寺を襲わせた一因かとも言われております」

信長倒れたのち、誰が跡を望んでもおかしくない実力者達は、それぞれ、京をはるか離れた土地で、主君の横死を知り、雷に打たれたように、身を震わせ、魂を飛ばした。

日頃、沈着でなる徳川家康でさえ、腹を切って信長のあとを追おうとして、家臣達に押し止められたのであった。

そのような動揺の中、秀吉の動きは、神速を極めていた。

主君信長の来援を待ちつつ、毛利方の備中高松城を水攻めにし、遠巻きに陣をしいていた秀吉のもとに、信長の死がもたらされたのは、六月三日の夕刻であった。

京の長谷川宗仁からの使者をその場で切らせ、秀吉は自己の進退に脳漿を絞った。

小柄で、渋紙のような色をした顔の中に、生来利発な良く光るまなこが、極限まで見開かれ、一点を見つめている。

時間がない。

信長の死が毛利方に知れれば、ようやく見えてきた高松城の開城は止りやめとなるばかりか、後詰の毛利、小早川が戦端を開くのは必定。

味方の将兵また、信長の死を知れば、戦意を喪失する。

秀吉は高姿勢であった講和の条件を、城将清水宗治の切腹にゆるめ、安国寺恵瓊を城中につかわし、宗治を説得せしめた。

城兵の命に代わるならばと湖上の扁舟に、宗治が従容として腹切ったのは、六月四日巳の刻（午前十時）、本能寺の変報至ってより、半日も経っていなかった。

四日撤兵を開始。

五日午前二時、高松を出発。

六日、中国経略のため信長より下された姫路城に入る。夜になっていた。

次々に物見を放ち、京の光秀の動向を探らせながら、先遣の小部隊を発し、京への途上の兵粮、馬糧を、金銀を惜しまず確保せしめる。

八日早朝、摂津尼崎へ発向。

十一日朝五ツ（午前八時）尼崎着。昼夜を分かたず、兵は歩きながら飯を食い、将は馬上に眠った。

十二日、富田で軍議を開き、持ち場を定める。前日、寺に入って剃髪した秀吉の青々とした頭が異様であったが、精気漲り、人々をして、この度の戦いの勝利を確信せしめるものがあった。

情報は、明智方の孤立を示していた。

十三日、秀吉方堀尾茂助・掘久太郎の勢四千は、明智方・松田太郎左衛門の兵二千を圧到し、天王山を確保。

兵力の差は如何ともしがたく、前線は崩れたち、大勢はここに決する。

光秀はいったん勝竜寺城に逃れ、さらに坂本城を指して間道を行くうち、小栗栖村で土寇の槍に倒れ、「明智の三日天下」は終わる。

「うむ、まさに天馬空を行くごとき仕様、羽柴筑前というお方、非凡の器であるな」

扇子を使うのも忘れて宗室の話に聞き入っていた道雪は、いく度も首を振り、
「蛟竜（こうりゅう）、まさに時を得たり」
感にたえたようにくりかえす。
宗室は続けて、
「その十八日、尾州清洲の植原次郎右衛門様方に織田様の諸将お集まりの上、信長公のお跡目についての評定が開かれました」
この席、一座の長老、柴田勝家は、三七信孝を推したのに対し、秀吉は、信長の嫡孫三法師を推し、秀吉の意見が採択され、信長亡きあとの主導権が確立した。
「それにつけても」
統虎は話の全体を頭の中で整理しながら、
「羽柴殿は、高松の城攻めに、主である織田様の来援をあおがれ、織田様はまた、中国経略の良き機会とて、京へ向かわれた。もし羽柴殿が月日をかまわず城攻めを覚悟され、主君の親征を乞われず、また織田様が拒絶されたならば、考えてみると、いと不思議」
「左様でございます」
宗室は統虎の言葉を受けとり、
「まこと、織田様にとっても、羽柴様にとっても。ですが羽柴様には、自分に向いた運を、しっかりつかみとるだけの器量がございました」

目を部屋の外にやり、わずかに吹きだした風に耳を澄ますように、口を噤（つぐ）んだ。
「織田家の宿老達と一合戦あろうが、時代は羽柴筑前殿に流れ出したようじゃな」
中国を切り従えたのちは、一気に九州まで平げようと言ったという信長の言葉を胸の内に、道雪、統虎父子は、いやでも日本国の動きに目を向けさせられた。
この年十月、秀吉は紫野大徳寺において信長の法要を行ない、山内に一宇を建立（こんりゅう）、総見院と称し、亡き主君をしのぶよすがとした。
秀吉の力量あまねく知れわたるにつれて、柴田勝家を筆頭に、猿面冠者の下風に立つことを喜ばぬ者たちの憂憤次第に増してゆく。
一方秀吉は、彼等の動きはとうに計算し尽した上で、着々と手を打ってゆく。
勝家の養子、江州長浜の城主勝豊を調略。
天正十年（一五八二）十二月には三法師丸を安土城に入れることをきらう信孝に対し、三万の軍を起こし大垣城主氏家内膳正を囲む。
北国越前の柴田勝家は、雪のため兵を出すことが出来ない。
ために岐阜にあった信孝も丹羽長秀を通じ秀吉と和を講じた。三法師丸を安土城に入れ、織田信雄をして後見とした。
清洲会議での秀吉の意見はここにはっきりとした形を現した。
あくる十一年、雪の融けるのも待ちあえず兵を動かした勝家も越前北の庄の城に、信長の妹お市の

方と共に自裁し、ここに秀吉の天下が確立する。

この賤ヶ岳の合戦では、勝家の先鋒、佐久間盛政が、賤ヶ岳を押えたことを知った秀吉が、大垣から長駆盛政を撃破、その勢いをもって一息に勝家を倒した折の兵粮の調達ぶりが耳目をひいた。

「道筋の庄屋、大百姓どもを召しよせられ、蔵を開き、めしを炊かせよ。馬の餌は合糠にせよ。先手先手に持ちたる、貯えの米をだし、炊かせよ、米の算用は、百姓ばら、自分の米ならば十層倍にして、後に取るべきものなり。いそげいそげと、御自身御触れ候。

めしでき候はば、空俵の両端をば、そのままおき、俵をたてに切りあけ、内側を塩水のからきをもって、よくしめし、食を入れよ。めしでき候はば、牛馬に付けさせ、賤ヶ岳を心掛け、急ぎ参るべきなり。合糠には、木の枝か、紙など印につけよ。後より人数つづかば、くたびれたる者多くあるべきなり。これは食にて候。参るべし、参るべしと、言ひきかせよ」（川角太閤記）

俵づめの米は長持ちし、時間がたつにつれて、中身がほど良く蒸れて塩味がしみ込み、味が良くなる。

金銀を散じながらも、理にかなっており、秀吉の実際家としての知識と、この一戦にかける意気込みが如実に現れている。

「宗室が本能寺の事を知らせてくれてよりまだ、一年と経たぬに、世の移ろいの激しいことでござる」

「まことに、日本国にもようやく大きな心棒が入ったようです」

久方ぶりに立花を訪ずれた高橋紹運は、統虎の五体に横溢する将としての気風に満足し、自らの若き日を思い胸を熱くしていた。

豊後の大友宗麟・嫡子義統よりもたらされる上方の情報も、道雪・紹運の手元に集まる事実も、羽柴秀吉の時代を指している。

四畳半の茶室の窓の簾（すだれ）が外され、あたたかい光が畳の目をくっきりと浮び上がらせている。唐金の風炉に据えられた釜からあるかなきかの松風の音がひびき、白い湯気がほのかに立ち昇る。

道雪はあぐらをかき脇息に身をもたせ、

「聞けば秀吉という武将、微賤より身を起し、このたびの賤ヶ岳の一戦で柴田殿を亡ぼし、亡き主君、織田殿の後を襲うこととなった由、まことに時代の子と申さねばならぬ。この道雪、生をこの世に享けるはるか前より、この国は、切り取り次第、皆人が言うように戦国乱世の時代でござる。前足利将軍のときと違い、このたびは力の裏付けがある。儂の存命中はいざしらず、遠からず日本は一つに治まるのではありますまいか」

「さよう、その出自はいざ知らず、種々話に聞くところのなされようは、融通無礙、まことに大力量の人のごとく思われます」

紹運のもとにもたらされる、宗室よりの書簡、博多津に出入する商人達の話、どれをとっても、近い将来、秀吉の力が九州に及ぶことを否定出来ない。

「島津・龍造寺の威勢日毎に顕れ、大友家の所領を蚕食すること、目に余るものがあります。しか

るに豊後の大殿は動こうとなされぬ。筑前の三城に拠る我等が手勢では、両面の敵に当ることは不可能事であります」

一息に話し、統虎は息を継いだ、

「窮鳥懐に入らば猟師もこれを撃たず、と申します。羽柴様の武威定まった上は、殿様ご上洛の上、島津・龍造寺との調停を願い出られるという考えは如何でございましょうか」

「うむ、今や我等腹背に敵を受けた形で、彼等の跳梁を座視しておる状態じゃ。実に腸を断つの思い。じゃが我等の口より大殿に申し上げることはかなわぬ。武門の名にかけて我等が城を守り抜くのみ」

道雪は統虎の考えを是としながらも、最後まで筑前の領地を、自らの力で守り抜きたかった。とはいえ諸国に、あるいは僧形で、あるいは商人の姿で放った間諜からの知らせは、大友のことなど眼中になきがごとき、島津・龍造寺両家の動きであった。

道雪の話にうなずきながら統虎の顔を見ていた紹運は、

「統虎の意見、もっともである。じゃが、立花殿仰せられるごとく、島津・龍造寺との和睦のことは、大殿の一存にある。我等は力の限り、立花・岩屋・宝満の城を守り抜くことが第一。大局を見たとき、一考すべき案ではあるが、島津・龍造寺にしても、多くの家臣の血を流して切り取った領土、なまなかなことでは折合いがつくまい」

紹運は幾度もの合戦において、統虎の武者振りを見、また聞いてきたが、十七才の若さに似ず、胆

力に勝れ、進退の機を良く知ること歴戦の士に劣らぬことを認めていた。

老将道雪の薫陶よろしきを得、小野・由布等の家老達も又、統虎に信を置いている。

統虎は立花の人となったとは言えども、実の父として我が子が武将として着実に成長してゆくのを見聞きすることは無上の喜びである。

「高橋殿、中央はようやく風波治まりつつあるようですが、九州はまだまだ干戈の絶ゆるいとまはありますまい。久方ぶりの親子の対面、ゆるりと物語いたそう」

道雪が振る澄んだギヤマンの鈴の音につれて、酒肴が運ばれる。芳郁として酒が香り、一座はくつろいだ空気に満ちてゆく。

「お父上、弥平次如何いたしておりましょうか」

統虎は立花へ来る直前から、自分の前に姿を現さなくなった足立弥平次のことをたずねた。

「うむ、元気に過ごしておる。統虎が当城へ婿入りすることになってよりしばらく、魂が抜けたごとく部屋にこもっておったそうじゃ。無理もない、親子以上に仲良うしておった故」

弥平次のさびしさを知る紹運は世戸口十兵衛から遂一、書面をもつてもたらされる統虎の働きは、足立弥平次にも披見を許していた。

「お主の働きは弥平次、良く知っておるぞ。ただ年老いて、気持の押えがつかぬのかすぐ涙をこぼすようになった」

「弥平次」

統虎は思わず胸中に幾度も名を叫んだ、岩屋を去って早二年、山野を走り草花の名を教わり、弓を習った日々は、暖かい想いとしていつも、まざまざと眼前する。

「心配せずとも良い、弥平次の弱みは統虎だけじゃ、いまは元気に武場に出て射を若い者達に教えてくれておる」

紹運は盃を置き真顔になり、

「弥平次の射はまこと入神の射じゃ。統虎は良き師についた」

すでにして弓も矢も念頭に無いかのような、瞑想にふけっているようでありながら、百射百中の弥平次の射を語った。

「私も弥平次の教えを守り、常に的に向かうております」

「うむ、年令に似ぬ風格のある弓を射るものと見ていたが、師は足立殿であったか」

道雪は紹運とうなずき合った。

「ただ一つ困っておるのは」

口ぶりとは裏腹に目は笑いながら、

「ゆきという娘を統虎も見知っておろう。今年十五才になるのか、家中の者達からも声がかかっておるが、頑として嫁に出そうとせぬ。まこと溺愛と申そうか」

統虎は一瞬目を上げ宙を見た。幾度、弥平次の屋敷に出向いたであろうか。言葉を交したことはなかったが、色の白いふくよかな手で点ててくれた茶の香りが、むずかゆく鼻腔の奥によみがえってきた。

この日上機嫌の紹運は頬を染めて、宋代の忠臣、文天祥の詩を高らかに吟じた。

一二七九年一月十三日、元の大軍にマカオ零丁洋上に囲まれ、死を覚悟して創られた。

律詩の七、八句にいわく、

人生古より誰か死無からん

丹心を留取して汗青を照らさん

「昔から人として生まれて、死に逢わぬ者はない。やがて死ぬべき命ならば、死を恐れず、愛国の赤心を守り抜き、歴史に燦たる名を残そう」

淀みない紹運の吟詠の声は部屋をもれ、庭前の樹々の青葉を染めていった。

道雪も統虎も、大友の孤塁を守り抜かんとする、紹運の気迫切々として胸に迫り、襟を正し、背筋を張って聞き入っている。

秀吉の旗風

天正十一年（一五八三年）八月二十八日、秀吉は摂津国大坂に築城を開始した。

「大坂は凡日本一の境地也、其子細は奈良・堺・京都程近く、殊更淀・鳥羽より大坂城戸口迄船の通り直にして、日本の地は申すに及ばず、唐土・高麗・南蛮の船、海上に出入り、五畿七道ここに集

まり、売買利潤、富貴の港なり」（信長公記）

この地に本丸中央に五層九階建ての天守閣を備え、外側には二重の堀をめぐらせ、外堀の幅六十間、深さ四間という途方もない規模の鉄壁の城を築こうというのである。

天下統一の完成への拠点にふさわしい、古今未曽有の名城とすべく全霊が注がれた。

十二月、博多津からの凄風にあおられ、家々の甍が無気味なうなりを立てるとき、固く戸を閉して寝しずまった街並みを一団の将卒が、旗を巻き、馬の口を縛り、折からの星明りのもと、雲の影のように進む。

この年、北方経略の途上、龍造寺と肥後を争い、一時的に和解した島津は、大友方の要の博多へ一軍を発した。

いち早く島津と盟を結んだ秋月と、この秋月と同盟関係にある筑後の筑紫氏は、島津方の肥後の本拠御船より、筑後・筑前への道程を大友方に知られることなく誘導した。

当時、博多津は、現在の住吉宮、それより更に奥まった蓑島（現美野島）あたりまで清澄の波が寄せ、松籟が渡っていた。

冷泉津と称するこの一帯に、比恵川が注ぎ、その河口に近く山笠で名高い櫛田宮の壮麗な社殿がそびえ、街筋にして二つほどのところに、大友の筑前経営の出先として大友家探題館が黒々とうずくまっている。

島津の将、川上左京亮の采配につれ、数名の兵が音もなく丈高い土壁を越えて館内に侵入した。

各所にはじけるような音と共に火の手が上がり、庭の隅々まで明るく照らし出されるや、大門が開き喚声を上げて、武者がなだれこむ。

長い冬の夜がようやく明けようとするとき最も深い眠りを破られた大友方の武士は、一支えすることも出来ず、そこここに寝衣のまま討たれてゆく。わずかに馬を得た数名が薩兵の中を割り、馬首を立花へ向ける。

火は、まわりの民家に飛び火し、凍りつくような朝焼けの空をいっそう赤く照した。

子の手を引き、年寄りを背負い、街の人々は、櫛田宮へ、あるいはほど近い東長密寺へと逃れた。

うちつづく戦乱に幾度も街を焼かれた人々は、わずかな身の廻りの品を手に、あきらめ顔で、充満する木材の焦げる臭いの中、無言で立ち昇る煙の行方を見ている。

立花城では、知らせを受けるまでもなく、異変を認めていた。

立花山頂よりわずか二里（八粁）、ようやく明けそめた、冬の透き徹った空気を通して、生き物のように激しく動めく黒煙が望まれた。

櫓から小手をかざしていた兵の目に、キラキラと日の光をはねかえす、甲冑を身につけた者共が動きとしか思えぬ、鋭い反射が飛び込んできた。

明らかに町人達の動きではない。

櫓をすべり下り、道雪・統虎に注進におよぶあとを追いかけるように、ふいごのような息を吐きながら、かろうじて大友館を逃れた武士がたどりつく。

「島津と申すか」

急ぎ寝所から広間へ向かいながら、統虎は小姓に問う。過ぐる天正六年、日向耳川において万余の味方を失った日のことが脳裏をかすめた。

「丸に十字の旗印を押し立てておりましたとのこと、間違いないかと」

夜は明け放ったとは言え、薄暗い廊下に荒々しい足音がひびく。手燭を差し出し先を進む小姓の半顔が青白く光り、吐く息がはずんでいる。

障子を透し明るさを増してくる部屋の中央に、手負いの武士が、おびただしい汗をしたたらせ平伏している。はげしい息吹きを耐えようとする肩のあたりがあえいでいる。

道雪は統虎と着座するや、手短に状況を尋ね、労をねぎらい、傷の手当をするよう下らせ、小野・由布等重臣に、可能なだけの兵を揃え、ただちに進発するよう命じる。

急ぎ寝衣を、純白の練り絹でこしらえた袖裾の短い鎧直垂に替える。

「旗印はともかく、太刀を主とした戦いぶり、島津に相違あるまい。館は駄目じゃな。兵力がつかめぬが千は下るまい」

朔風猟々として山谷の間に出陣を知らせる貝の音をひびかせる。

「見事、虚を突かれてございます」

小姓に手伝わせながら籠手、臑当を付け鎧をまとう。冷えびえとした鉄と皮の感触に思わず胴ぶるいが起る。腰の揺糸の上に繰締めをがっちりと結ぶと、鎧が自分の体の一部のようになじんでくる。

五体に加わる重みを撥ね返すように、熱い闘志が湧いてくる。

統虎を大将に第一陣が進発。

兵を一気に大友家探題館の手前半里（二粁米）ほどの筥崎宮の松林まで進め、物見の報告を受ける。

この間も陸続として立花方の武士が駆けつけ、道雪の二陣が到着した頃には凡そ千の勢力となった。

雲集した馬も人も汗にまみれ、立ち昇る湯気がようやく高くなった太陽に白く光る。

「馬上二百に徒歩千余か、総勢凡そ千五百程であろうか」

道雪の言葉に小野和泉が進み出る。鉄錆地塗桃形二枚鉄矧合せ兜を着し、黒革で縅した具足の草摺が鈍い音を立てる。

「大友領の只中に踏み込み、お館に火を放つとは不敵な奴原、味方不勢といえど勝手知ったる土地柄、包み込んで討ち果たしては如何」

幾度の合戦に多くの傷を受けながらも絶えて退いたことのない、不死身の男の眼が兜の内側で、あやしく燃えている。

「うむ、聖福寺近くの松原に陣を取っておる由、お館に火を掛け直ちに引き揚げぬは、我等を迎うるつもり、ここはちと策を講じねばなるまい」

道雪は統虎はじめ主だった家臣を招き寄せ老松の下に将几を据えさせた。

大友探題館より目と鼻の先に日本最初の禅窟聖福寺の伽藍がそびえ、海に向かって漠漠たる砂地が広がる。

遠来の強敵

蒼穹に鈍色の雲が飛び、魚の鱗のような無数の雪片が日射しに煌めきながら、舞い上がり、舞い下りる。

立花勢は旌旗をはためかせ、整然と陣形をとる島津勢の手前三町（約三百米）程まで進む、勢七百。両軍寂として声なく対峙する中、凍て付いた砂地を踏み締め、統虎が旗本の侍二騎を従えて進む。鉄炮で人を倒しうる距離を外れる一町余（約百米）のところで、馬の手綱を絞る。

島津軍からも騎馬武者三騎が進み出る

中央、ひときわ優れた体軀を漆黒の甲冑に包み、胴と袖に島津の紋を金色に光らせた武将が叫ぶ。

「某は島津の手の者にて川上左京亮と申す。寒中あえて、ごあいさつに参上いたした」

時折全軍を包む粉雪を散らして戦場で鍛えた声は朗々として耳朶を打つ。

「拙者、立花城の主、立花統虎でござる」

統虎の言葉に、先刻承知とばかりに左京亮の兜がうなずく。

「誠にもって迷惑な挨拶、何故かかる振舞いに及ばれたか」

統虎は二、三歩馬を進める。

「島津・大友両家は過去に角逐ありといえども、昨年（天正十年）七月、大友宗鱗公と島津義久公

と使者を交換し、互いに贈遺あり、その後静謐に推移するをこのたびの振舞い。織田右府様亡きあとは、その調停を踏みじらるるおつもりか」

統虎の頬が紅潮してくる。

左京亮は小脇にかい込んだ槍をかかえ直し、静かに左手を挙げる。

「その言葉は我等よりお返し致したい。昨年七月のことは元より我等主君も得心のこと。なれど、約定が守られたのはわずか半年、今年に入ってよりは、大友義統公軍を率いて、日向の国境を侵すこと再三ならず。ご自重あるべくお知らせするため、まずは博多津へ参った」

主義統が日向の国境を攻めようが、自国に籠っていようが、島津の九州統一の意思に変わりはない。大友・島津両家は戦うべく宿命づけられているのだ。

「日向のことは日向にて片付けらるるが筋と思うが、遠路はるばるのおいで、念入りにおもてなし致そう」

統虎は、南国島津の兵が、寒さに身を縮め、生まれて初めて見るであろう雪を物珍しそうに目で追っているのを認めた。

一方左京亮は、統虎の手勢が自軍の半ば程であること、砂の広がりと松林の彼方、後詰めの兵もないことを確信していた。

統虎はかねて打合わせの通り、海を背に手勢を三つに分ける。雪まじりの強風は背後から兜の吹き返しや錣に引き裂かれ、うなりを立てる。

島津も兵を三隊に分けるが本陣の備えに三百程を割く。
折から雲間にかくれていた太陽が現われ、彼我の将兵を燦然と照らす。
川上左京亮の采配が一閃二閃、島津の隊列波のように動き、鶴翼の陣形を取り、立花勢を呑み込まんと左右に開く。
影の形に従うように、立花勢は左右に雁行し、中央が突出した魚鱗の陣形を取る。
牢固として睨み合うこと数瞬間、
満ち満ちた殺気を貫ぬいて太鼓の音が響き、じりじりと間を詰めてくる。
立花方粛然として声なく、吹きつのる風に時折、火縄の匂いが将兵の鼻をつく。
互いに鉄炮を撃ち合うこと数合。
鯨波をあげ、砂を蹴立てて立花勢に殺到する。
立花方は陣形を崩さず津波のような攻撃を受け止める。
「島津方の太刀打ちは、刀重くして強い故受けてはならぬ。打ち払い、打ち払いして、機を探るべし」
「敵を倒しても首を取ることはならぬ、ただちに次の敵に向うべし」
厳格に命令は守られ進退整然として陣形を保つこと小半時（約三十分）。
川上左京亮はしきりに声を励まし采配を打ちふるう。
馬を駆けまわして督戦していた統虎は、旗本の侍を発し、小野・由布・薦野等にかねての指図を与

える。
白い波頭の狂う海を背に、立花勢はじりじりと、筥崎の松原へと動く。
立花勢の緒戦よりの戦いぶりに一筋の疑念を抱いていた左京亮は、
「図られたか」
思わず馬上に立ち上がり、右手に広がる松原に目を凝らす。
雄叫びと鎧のぶつかり合う音、馬の嘶き、
海からの烈風に渦巻く砂塵、すかし見る松原に人影はない。
気を取り直し再び戦列を目指す。
この間道雪は、新たに駆けつけた兵を合わせての手勢五百を擁していた。
両軍が鉄炮を撃ち合う音を耳にしながら、道雪を乗せた輿は、聖福寺の裏に広がる松林に近づいていた。
聖福寺山門前に三百の島津の兵、物見は精確な人数、火器の規模をもたらした。
守将はじめ戦局の推移に気を取られ、一歩・二歩、持ち場を離れてゆく。
地をゆるがして激突する二千の将兵の喊声に包まれ、風下から道雪の兵が静かに近づく。
「それ」
道雪の下知のもと、まず鉄炮隊が射倒され山門の内外より立花勢が襲いかかる。
不意を打たれた島津の本陣総崩れに崩れ立ち算を乱して逃走する。

道雪の輿は風を巻いて走り、川上左京亮の背後を突く。
雪まじりの風と、戦場の響きは、背後に迫る一隊の動きを悟らせず、左京亮は目前に湧出した道雪勢に驚愕した。
立花勢の太鼓が力強く響きわたり、兵の気力は十倍する。
本陣の守兵の加勢を求めようとした左京亮は跡形もなくなぎ倒された、陣幕や差物、累々たる将兵の死骸に、冷水を浴びたようになった。
ただちに鉦を打たせ、兵をまとめる。
撤退にかかった島津の兵を深追いさせることなく立花勢も又戈を収める。
雪は小止みになり、熱く火照った体に、吹きつける風が快い。
「良く支えた」
道雪は輿を下り、小野・由布・薦野等の手を握り、肩をたたいてねぎらった。
「筥崎の松原で討つつもりであったが、本陣の倍近い人数となった故、背後より攻め崩すことに決した」
統虎の顔を見て、
「こたびは、風と雪の恩をこうむることはなはだ大きい。神佛の御加護と申さねばならぬ。味方の損耗の少なかったこと何よりじゃ」
「まこと、思う壺にはまりました。味方の損害も小さく、安堵いたしました」

統虎はここかしこで傷の手当をする兵を見て、おだやかな笑顔を見せた。若々しい頬が桃色に染まっている。
「申し上げます」
若い士が駆けつけ片膝を付いた。
「おびただしい小荷駄と馬が山内に残されております」
「ほう」
小野和泉が小首をかしげ、
「大殿、薩摩までの道のりは遠うございます。道中ひもじい思いをしては気の毒、追っかけて届けてつかわしまするか」
真面目な顔をして言ったのち、天をあおいで大笑した。
「いや、もっともじゃ」
皆して笑いながらも、それぞれの心のうちでは、島津がついに足元まで兵を進めてきたこと、必ずや再び相まみえることになるであろうことを確信していた。

肥前の熊

天正十二年三月、佐嘉の須古城（佐賀県杵島郡白石町）に隠居していた、「肥前の熊」龍造寺隆信

は、日野江城主（長崎県島原市南高来郡北有馬町）有馬晴信を討つべく兵を興した。

これより前、有馬晴信の妹を嫡子政家の室に迎えて和を講じたものの、密かに使を立て島津と手を結んだとの風聞しきりに達した。

隆信は政家に攻略を命じたものの、その妻女の生家故寄せ手の意気はなはだ昂らず、いたずらに時日を費やし、父隆信の激怒を買った。

「婦家のため戦に手加減するなど、武将にあるまじき振舞い」

義弟の柳川城主鍋島信生（直茂）の諫言を振り切って自ら出陣に及んだのであった。

龍造寺隆信は、仁愛の将として名を残した、曾祖父家兼の遺命により、修業中であった宝琳院の円月から還俗、龍家四百年の流れを襲った。年十八。

その隆信が時運に恵まれず落魄の身をかこっている間、柳河城主蒲池鑑盛は領内の一木村（大川市）に三百石を給し、家臣をつけて隆信等の世話をせしめた。ここはかって隆信の曾祖父山城守家兼が、居城佐嘉城より落ちのび、二ヶ月余の月日を、同じ鑑盛に心暖まる日々を送らせてもらった所でもある。

隆信はこの地で英気を養いながら旧臣等と共に時節の到来を待った。

天文二十二年、佐嘉城回復のため兵を進めるさいも

「今はひとの身、明日は我が身ぞ」

鑑盛は精兵三百をつけ佐嘉まで送らせた。

佐嘉城を奪いかえして後、隆信は鵬の羽撃くごとく本来の力を示しはじめる。

隆信は蒲池鑑盛の思を肝に銘じ、また縁につながることを徳とし、己れの娘を鑑盛の嫡子鎮並に嫁せしめた。

天正六年（一五七八年）の大友の耳川の大敗以後龍造寺の武威大いに振い、筑後の諸豪相次いで降った。この間の鎮並の戦功見るべきものが多かった。

ところが天正七年冬の辺春城（福岡県八女郡立花町）攻めころから互いに隔心が生じ、隆信の残酷な性格を疎んじ、柳河城に籠った。

翌八年、三百日に及ぶ籠城の後、鎮並の伯父田尻鑑種をつかわしいったんの和を講じた。

隆信が須古城へ隠居した翌九年、鎮並が島津と通じたと知れるや、騙し討ちに鎮並を討ち、同族田尻氏に蒲池一族を誅戮せしめ、あまつさえ我が娘と孫までも屠った。

また天正十一年蒲池鎮並の正妻の舅に当る肥後の赤星統家の嫡男十四歳の新六郎と八才の妹を磔にかけた。

嫡子新六郎を人質に出していたにもかかわらず、隆信の島津同心糾明の使者に、居留守を使い会おうとしなかったとの故なき怒りからであった。このむごい光景を目にし耳にした人々の憤怒の声はつむじ風のように国中をめぐった。

赤星統家の怒りと悲しみは、

「赤星是を聞よりも、忿怒の気天を衝き、悲歎の涙血を注ぎ、歩跣にてかけ出し、八代に至て嶋津

に見え、しかじかの次第を語り出て、且は悲み且は怒り、隆信討て玉はれと一同にこそ頼みけれ」

（筑後将士軍談）

この一文に良く示されている。

深い恩のある蒲池一族をその同族田尻氏に滅ぼさせ、幼ない兄妹を磔殺す。いかに戦国の世とはいえ、龍造寺の所行を憎み、人心は離れ、近隣諸豪島津に好誼を通じるものようやく多くなった。

隆信は隠居したとはいえ、領国経営の実権は彼の一手にあり、須古城中で日夜酒色にふけり、管絃の音色を楽しみ猿楽を演じさせていた。

うちつづく放恣な生活は、隆信の体を限界まで肥大させ、ために鎧の中にようやく体を押し込むような状態であり、馬上は思いもよらず、六人の若者に担がせた駕籠の中より指揮をとった。

具足にまつわり、春の日差しの暖かさを残して吹き過ぎてゆく風に、桜の花びらが淡々しく光りながら舞っている。

日野江城に籠る有馬晴信以下三千の将兵は矢継ぎ早にもたらされる、龍造寺の大軍接近の知らせに、全身を煎られるような焦躁の中にある。

島津への使者は還らぬ。

佐敷（熊本県芦北郡）の本陣で、当主義久は島津忠長・新納忠元等の重臣と共に長いこと部屋にこもっていた。

五万余の軍勢が十九日に海路神代の海辺に上陸、三会村に陣を張ったことは、すでに、確かな情報

としてもたらされていた。

「島津方より手当可能な兵三千を加えても、彼我の勢力に差がありすぎまする」

「勝手知らぬ島原の地では、思うように兵を動かせますまい」

一座の意見は、日野江城を見殺しにするも止むなし、に傾きかけ、主の決裁をあおぐべく人々は黙然義久の目に見入った。

「有馬殿とは互いに手をとって、龍造寺に当るとの約定がある。戦は兵の多少によるものではない。たとえ我が方小勢といえど、将兵の智と武を傾け尽せば勝機を見出すであろう。島津をたよっての度々の使者、敵大勢といえど一片の義を破るわけにはゆかぬ」

瞬間、一同の顔に緊張が走り、覚悟を定めたそれぞれの眼が、具足を身にまとい槍を手にしたときのように燃え出す。

義久は最も信を置く弟家久を大将に、選り抜きの将兵三千、肥後の赤星、血涙をもって出陣を願う一族と共に、八代より舟を出した。

三月二十一日、日野江城を望む海岸に上陸した家久は、全将兵の見守る中、船の纜をことごとく切り払い、沖へ押し出させた。

潮に乗って岸を離れてゆく船を茫然と見守る将兵に家久の声が響く。

「我等が背後には海あるのみ、進んで敵将の首を取らぬ限り、生還の道はない。島津の軍法、骨肉に徹せよ」

期せずして、全軍鯨波を上げ、将兵は龍造寺の陣する方を望み、目を血走らせ、歯を噛み、足踏みする音は、地をどよもした。

島津軍法に曰く、隊将の首級を取られたら一隊ことごとく討死のこと。敵を一人も殺せなかった者は死罪、その縁者に至るまで重科。

この厳格極まりない軍法の下、兵は剽悍をもって鳴り、他国の者に恐れられた。

「籠城は大軍に囲まれ、いずれ干殺しの目に会う。出でて勝機を見出す外ない」

晴信・家久・重臣達の意見は一致した。

如何に戦うべきか。詳細に現状を分析する。

家久は晴信に案内を乞い、島津忠長・新納忠元・伊集院忠棟等を伴ない、自ら馬を駆り龍造寺が布陣する海際にそびえる前山（眉山―八一九米）に向った。

中腹までも行かぬ内に、北方わずか一里（四粁）とはなれぬ三会の海岸から山手にかけて、数知れぬ旌旗がはためき、兵馬がひしめいているのが手にとるように見える。

目を転じれば、龍造寺の陣から南方有馬へ向けての一帯、海にそうて一面の湿地帯が干潟につながり、山の前面東の方、島原湾がきらめいている。

幅三十町（三粁）に及ぶかと見える葦原の中、細い一筋の道が、海にそうて延々と続いている。

「あれは」

家久の問いに、

「沖田畷と申しまする。田作りに通う百姓が作せしもので、馬と人一人並んで通れる程のものでござります」

晴信が言い終えるのを待たず、

「かく攻めては如何でござろうか」

鞭を上げ、家久は後も見ずに、戦略を語りはじめた。

ただちに軍を前山の麓に進め、湿地を走る道に向い大城戸を構え、左右に柴垣を築き、弓、鉄炮で固めた。

隊を三つに分かち、山際に新納忠元以下千名、中央は、先鋒の赤星一族と家久麾下千名、浜際に伊集院忠棟以下千名を配した。

さらに山よりと海ぎわにそれぞれ伏兵を置く。

有馬晴信は本陣より突出した位置にある森岳城に前衛として兵五百を配置。

海上には二門の大砲を積んだ有馬の軍船が近づく。

龍造寺の軍はこの幅のせまい沖田畷を一筋の勢力としてしか攻撃出来ない。

いたる処深田のある葦原は、騎馬武者や大軍の動きを無にするであろう。

龍造寺の軍を本隊が引きつけ、左右より挟撃、伏兵をもって攪乱、軍船大砲を放ってこれに呼応する間、驀地敵の本陣に突入、隆信の首を挙げる。

乾坤一擲、必死の作戦は完了し、軍令が徹底された。

二十三日、龍造寺の陣中人馬の往来しきりに、おびただしい炊煙が立ち昇ることを物見が知らせる。島津方全軍臨戦体勢をとる。

家久はこの夜陣中に一子又七郎を招じ入れた。まだ前髪姿でやっと十四才になった又七郎は懇望してこの戦いに参陣していた。

警護の武者に先導され陣幕をくぐった又七郎を見て、家久は将几をすすめた。

かがり火のはじける音がして、少年の頬を明るく照らし出す。前髪立ちの鎧姿がいかにも初々しく、けなげに見える。

「又七郎」

家久は慈愛に満ちた目で我が子を見詰め語り出した。

「そなたも見聞しているように、このたびの戦は小勢をもって圧倒的な大軍に当たらねばならぬ。必死の戦いである」

まだ元服前の又七郎を明日の戦いで討死させるに忍びがたい、父の言うことを聞いて国元へ帰ってはくれぬか。勇猛をもって鳴る歴戦の将家久はいま一個の父親として醇々と語りかける。

きらきらと輝く目をし父の前に座っていた又七郎の表情に落胆の影が走った。

唇を噛み、うつむいて話を聞き終った又七郎は、

「私はすでに十四才であります。同じ年で初陣を飾った人も数多いと聞いております。まして郷国において、只今の状況を知って息子として座しておられましょうか。必らずや駆せ来って一翼をにな

おうと思います」

気負い込んで早口に、身を乗り出して話す目に涙がにじみ、かがり火に睫(まつげ)が光った。

「また自ら望んで島原へ着陣しておきながら、敵の大軍を目のあたりにし、夜陰にまぎれて国に帰ったと言われては末代までの恥、私の心が許すものではありません」

又七郎の覚悟ひしひしと家久の胸に迫り、明日の戦闘に参加することを許し、先陣を願う息子に幾度もうなずいた。

またこのころ龍造寺隆信の心に魔物がうごめいていた。

三会の陣よりほど近い中尾川の中流の小山に駕を担がせた隆信は、沖田畷(なわて)のきわまる所に布陣した島津・有馬連合軍の陣を俯瞰(ふかん)し、狐につままれたような顔をした。

山際から海に向け柴垣が築かれてはいるが一見、三千に満たぬ兵力と直観した。

多少の伏兵ありとしても、彼我の兵力に差がありすぎる。隆信の心中には、無用の大軍を動かしたか、の後悔の念さえ生じていた。

この夜、勝ち戦を確信した隆信は機嫌よく重臣達と大盃を傾けていた。

談笑しながら隆信は、きょうの軍議での陣構えを反芻していた。

「大手は我が子政家と鍋島直茂、浜際は二男江上家種と三男後藤家信、儂が山手か。大手だけでも大砲はじめ千挺の鉄炮を擁する兵八千」

戦いは短時間に終り、自らが采配を振るうことはないかも知れない。

快い酒の酔いに身をまかせながら、だんだん痺れてくる隆信の脳髄の中で、

「明日は儂自ら大手へ廻り、島津共をひとひしぎにひしいで、采配の冴えを見せてやらずばなるまい」

すでに布陣を終えて開戦を前に浅い眠りに入っている軍勢のことなど念頭になく、隆信は自分の考えに満足し、盃を投げ出し、臍(ほぞ)の外れるような大あくびをした。

翌払暁、目覚めると同時に隆信は、中央大手政家、直茂の軍を山手に移し、自分の軍が大手にまわるよう、命じた。

命令を伝える騎馬武者が、どんよりと曇り、明けやらぬ朝のしじまをふるわせて駆け抜ける。

兵はとく目覚めているものの、大軍のこととて速やかには命令が行きわたらず、ために将士は落ちつかず、ざわめきが海鳴りのように広がる。

龍造寺隆信の首

龍造寺の軍が陣替えのため、巨象のように山手と大手に向けゆっくりと移動を始めたころ、島津、有馬の兵は兵粮一食分をしっかりと腰につけ、決死のまなざしで、朝もやの中にくっきりと浮かび出てくる沖田畷(なわて)の細い一筋の道をにらんでいた。

家久は又七郎を呼び、自ら兜を着けてやり、紐を結び、

「思いのままに働くが良い、武運に恵まれ生還したなら父がこの紐を解いてつかわす。また、武運拙く討死したとしても、この儂も死ぬのであるから、お互い冥途の門出である」肩に手を置いて語りかけた。

又七郎はいつもと変らぬ父の声と澄んだ目を見て、心中に勇猛心のたぎりを覚え、

「一歩も退かず、見事討死してご覧に入れます」

胸を張って言い終ると大股に陣営を出た。

後見の武者が黙礼しあとに続く、家久また無言にうなづき返し、後を見送る。

千編一律はてしない灰色の空の下、おぼろな輝きに太陽が顔を出したことを知る。

隆信の采配一閃。

山手より鍋島信生・神代弾正中の一軍、中央大手、先陣小川武蔵守・納富能登守の一隊が進み、龍造寺隆信本陣を固める。

さらに浜手より後藤家信・江上家種の一軍。

総勢五万の軍を三手に分け、三方より島津有馬の軍を囲い込む陣形を取った。

隆信の策戦は、まず有馬の前衛森岳城を落とし、沖田畷(なわて)のはずれを固める敵陣を三方より包み込みひともみにし、有馬・島津の本陣と目する日の江城か原城まで、ひた押しに押してゆくというものであった。

隆信は、采配を振るった時点で、畷(なわて)の奥まったところ、大門と柴垣の陰に全勢力を結集した敵が、

万死一生を得ぬ覚悟で、息をひそめていることを察知出来なかった。
全軍の先鋒太田兵衛の一隊は、森岳城を攻略すべく、鉄炮隊を先頭に陣形正しく進む。
殺風景な葦原の続く中、海からの風にあおられるように、白い蝶が舞い槍先をかすめてゆく。
「待て」
森岳城の全容が見える所まで近づいた時、兵衛は前方に島津の旗印を認めた。
「島津方の物見の一隊、わずかな兵力、無視して押し通るべし」
思いと裏腹に兵衛は隆信の指示を求めた。
「一気に踏み殺して前進せよ」
進むような退くような島津の旗に向けて、兵衛は発炮を命じた。
百に満たぬ島津の一隊は身を低くして果敢に鉄炮を撃ち返す。
圧倒的な火器の差に一人、二人島津の兵が倒れながらも反撃を止めず、じりじりと沖田畷を退いてゆく。
鉄炮の音は龍造寺勢全員の耳朶を打ち、全軍の殺気は頂点に達した。
嵩(かさ)にかかって鉄炮を乱射しながら進撃する太田隊に、遅れじ、とばかり小川、納富隊が畷(なわて)道からこぼれんばかりに押し進む。
山際、海際も地をゆるがせて進む、
「してやったり」

家久は延々長蛇のように延びてくる龍造寺の軍勢を見、心中に叫んだ。
誘いの兵が大門に飛び込むや固く閉ざす。
龍造寺軍数千挺の鉄炮が、間断なく火を吹く。
雷のようにこだまする銃声の下、島津軍は地に腹ばい、火縄の火を静かに吹いている。
「敵方より弓鉄炮を射かけるも、大将の命あるまで、決して撃つべからず」
軍令は鉄よりも固い。
絶え間なく鉄炮を撃ちかけながら、山手浜手の方からもようやく茎の伸びだした葦を踏みしだき鉄炮隊が間を詰めてくる。
家久の采配と共に太鼓が物狂おしく乱打される。
柴垣の陰から万を持していた島津・有馬の全鉄炮隊が狙い澄まし、引金を絞る。
立ち昇る白煙の中、眉間を撃ち抜かれた隊将太田兵衛が、馬の上に立ち上るように背を伸ばし、ゆっくりと泥田の中に落ちてゆくのが見えた。
更に龍造寺軍の将兵の顔が判別出来る距離まで近づけて第二撃。
一陣が白刃をふりかざし突貫する。
軍令の一に曰く。
「撃ての命令あるときは一時に撃つべし、ただし二発目を撃たばただちに弓鉄炮を捨て抜刀し斬り込むべし」

沖田畷に群がった龍造寺軍は、先鋒の状況がわからずふくれ上り畷の左右にすべり落ちる者が出てくる。

決死の島津・有馬軍は無二無三に切り立てる。

島津の二陣は鉄炮の筒口を揃え柴垣の陰より標的を撃つように易々と敵を撃ち倒す。

畷中央、赤づくめの装束に太い縄の襷をした一団が火の出るように激しく切り結んでいる。

愛児二人を磔殺された赤星統家はじめ一族五十余名、捨身の血刀を振う。

龍造寺の軍は大勢故の混乱に陥る。

深田に足をとられ胸まで埋まったまま槍に命を落とす者。馬の足をとられ兜ごと泥濘に突っ伏す者、

前線の戦局は龍造寺不利に傾きかけた。

本陣の隆信は伸びきった戦列が一向に前進しないのにいら立ち、物見を走らせる。

この隆信側近の使者は先陣の混乱を目にしながら、諸将の間をめぐり、

「先陣が進まぬ故後陣がつかえ大将はなはだご立腹でござる。とくとく進まれよ」

大音によばわった。

はげしい反撃と味方の混乱に、島津・有馬の兵力を読みかねていた諸将は激昂した。

「先陣の様子も見ず、我等にそれほど死ねと言わるるならば、ただ今討ち死して見せ申す」

絶望に勇気づけられ次々と島津・有馬軍の炮火の前に身を曝した。

葦原も泥田も龍造寺の将兵の死屍累々としてよこたわる。

陸続たる龍造寺の軍は何かに憑かれたように味方の死骸を踏み越え、乗り越えて進む。

あたりは薄明のように暗くなり、雨が糸を引くように落ちだした。

浜手を進んだ隆信二男江上家種、三男後藤家信の軍勢は、海上からの有馬の軍船二門の大砲に翻弄されていた。

一撃、数十人の将兵を微塵に砕く、かつて目にしたこともない物凄い威力に、右往左往し、地に伏し、あるいは念佛を唱えている。

本陣の隆信は、間断ない鉄炮の音、雷鳴のようにひびきわたる砲声と打ち物の音の中、眉間にしわを寄せしきりに膝をゆすっている。

島津・有馬の軍は徹底して前方の本陣を目指す。

軍令に曰く、

「左右に気をとらるることなく、前のみ見て全員一丸となって突き掛るべし」

また曰く、

「敵逃ぐるとも追うべからず、一太刀なり一突き与うれば、ただちに他の敵に向うべし。首を取り、組打ちをなすべからず」

山手の新納忠元以下千名、浜手の伊集院忠棟以下千名横あいより槍を入れる。

龍造寺の前線散々に崩れ立ち、次々に新手の兵力を送り込む。

折からの雨に濃い霧が発生し、時折彼我の勢力を包みこむ。

「龍造寺殿は、本陣は」
島津・有馬の将兵は血汐と泥はねにまみれた顔に目を血走らせて進む。
「大将の馬印の前後左右に固まり、無二無三に突き進むべし、馬印より一歩でも先んじたは功名となす」
「敵の大将の居場所を見定めて押しかかり、何としてでも大将の首を討ち取るべし」
山手にあって島津方の将猿渡越中守と衝突、その子弥次郎を討ち取り、一時優勢であった鍋島信生の軍勢も沖田畷における味方の敗北を目のあたりにし敗走に移る。
隆信の本陣ようやく騒然とし、戦いの結果の赴くところを知るに到った。
龍造寺股肱の臣、成松遠江守が切り死するに及んで、わずかに残った旗本は隆信を逃れしめた。
鼎の沸くような混乱の中、駕をかつぐ若武者もなく、隆信は手を引かれ、腰を押され蒼惶として引き退いてゆく。
「島津に十倍する軍勢をもって当りながら何故に」
将几に腰を掛けている時は兜の内の頭蓋が割れるのではないかと思う程熱かった頭も、霧と雨に頬をなぶられ、どろどろの畦道を急ぐ内にだんだんと冷静になってきた。
「完敗じゃ、完敗じゃ」
隆信はうわごとのようにつぶやいていた。
「もうここで良い、胸苦しいわ」

肥大漢の隆信は徒歩で退くこと数町、肩で息を継ぎ、とある農家の庭先に将几を据えさせ、動こうとしない。
兜を外し、低く垂れ籠めた雲のあわいから細く光りながら降り注ぐ雨に快げに顔を向け、鬢髪をなでた。
だんだん近くなる悲鳴と喚声に耳を傾けるかのように瞑目する。
葦の踏みしだかれる音が近づき、竹垣を蹴破って屈強の若武者と郎党が殺到した。
側近の武者が前に進み槍を合わせるが、敗軍の悲しさ、数合にして槍を捨て散り散りに逃げてゆく。
「龍造寺隆信殿とお見受け致したが」
若武者の声に目を開け、暫時見つめていたが、ゆっくりとうなづいた。
「島津家久が臣川上左京亮でござる。御首頂戴致す」
隆信は両股に掌を置くと背筋を伸ばし、瞑目した。
念佛を唱えているのか、鼻下に蓄えた髭にまつわる雨滴が白く光る。
渾身の力を込めて突き出された槍先を胸に受けた瞬間、隆信はかっと目を見開いたが、郎党の刀は同時に首を打ち落としていた。
享年五十六、日は中天より少し傾いていた。
島津・有馬両軍の戦略、戦術ことごとく図に当り、寡兵よく大敵を凌駕した。
また家久の一子又七郎（のち豊久）は初陣にもかかわらず、敵将一人を倒した上、隆信の本陣にま

で切り込み、力戦ののち無傷の生還を果し、父家久に兜の紐を解いてもらうことが出来た。
戦後幾日かかけて彼我の戦死者を回収し、遺体を浄め、大施餓鬼の法要が営まれたことはいつものとおりであった。
盟主隆信の首級を挙げられるという屈辱の敗戦を喫した龍造寺の威風もついに衰えを見せ、一方島津の北進と九州統一の野望は確信を秘めてふくらんできた。
三月晦日の朝、立花城内四畳半の茶室。
床柱に細竹で編んだ籠がうつむき加減に掛けられ、卯花の蕾が障子を透して来る昼の光に白く浮いて見える。
小板に風炉が据えられ雲龍の紋様を胴にめぐらせた釜がかすかに松風の音を立てている。
小四方棚に柄杓、蓋置が飾られ一会の整うたことが知れる。
「では高橋殿、立花表へ到来いたした書状逐次読み上げまする故、良くお聞き下され、屋山殿もよろしく」
紹運と家老屋山中務少輔に対し道雪が語りかけ薦野増時の顔を見た。
増時はいちいち、書状の発信者の名前、立花との縁、職名などを前置きし、二十四日島原での龍造寺軍と、島津・有馬連合軍との合戦の模様を知らせる文書を読み上げる。
屋山中務また宝満表への書状を披露する。
統虎はじめ、小野・由布等が耳を傾ける。

「内容に多少の食い違いはあれど、龍造寺殿は首取られた上、総敗軍となったことは間違いありますまい」
紹運の言に皆がうなずく。
「されど島津方は十倍に及ぶ敵にしかも野戦で勝を得たとは信じられませぬな」
小野和泉が声高に言って道雪の方を見、首を傾げる。
「されば某、島原表まで人を走らせましてござる。如何に人の和があろうとも野戦にて十倍する敵に当ること無謀という外ない」
二十四日の戦報は早くも二十六日の夕刻には紹運の元へ達し、その夜、戦場の図面と新たな情報を得べく屈強の若者を発せしめた。往復九十里（三百六十粁）、馬を飛ばし、黄金をもって舟を雇い、発信者の案内を得て、詳細な図面と戦況を持ち帰ったのは前夜深更に至っていた。
紹運が懐から取り出した図面ににじり寄り全身を耳にして説明に聞き入る。
統虎は、実父紹運の話を聞きながら岩屋にあるときも、徹底して情報を集め、得心のゆくまで老臣達と議していたことを思っていた。
戦いに僥倖はない。冷厳に事実を分析し、必勝の道を探らねばならぬ。
龍造寺五万の大軍が撃破されていく様が彷彿とするような紹運の説明を聞きながら、統虎の心にひらめくものがあった。
「生を必する者は必らず死し、死を必する者は必らず生く。それにしても島津恐るべし」

道雪がひとりごちた。

「主を討たれては龍造寺もここしばらくは動けますまい」

「戦死は二千を下らぬとのこと、当面は守りを固め佐嘉へ逼塞するしかあるまい」

「されど嫡男政家殿は健在であるし、隆信殿の義弟鍋島信生（直茂）殿の存在は仲々重うござる」

口々に語り合う一座の中でだまって皆の意見を聞いていた道雪は大息し、

「龍造寺は永年にわたる大友方の仇敵ではあるが、それにしてもおしい男を死なせたことよ」

ふと畳に目を落とした、白いものの混る眉毛の下の大きな眼が心なしかうるんで見えた。

「同感でござる」

しばし瞑目していた紹運は、

「最前の由布殿の言のごとく龍造寺方において鍋島殿の重みが増すこと疑いござらぬ。攻城野戦に功ある上、切り取った国に対しても粗陋の行いなく、兵は軍規を守り、将また良く兵を慰撫する由。島津方もうかつには手を出せますまい」

「その島津の動きでございますが」

統虎は父紹運の方へ膝を繰って、

「島津方が博多表へ兵を発しましたのは、昨年十二月、それからこのたびの島原の戦、その動きは只ならぬものがあります。過ぐる耳川の大友方の敗戦以後九州三強の一角は崩れました。島津方はこのたびの戦いに勝を得たことで、九州統一への意思を更に固めたのではありますまいか」

このまま筑前三城を守っていても、主家大友が衰微しつつあるいま、援軍を期待することはむつかしい。近い将来相見えるに違いない島津の勢力に対して、何か策を講じなくてはならない。戦うことを恐れる心は微塵もないが、昨冬博多津に小当たりしてきた島津がこの次はこの九州の要を奪取するため、あたう限りの勢力を差し向けてくることが予想される。またいまは龍造寺に属している筑前・筑後の諸豪が島津の威風に靡くであろうことは火を見るよりもあきらかである。統虎の胸中には大友の家名を守るための策が渦巻いているのだが、現実に照らしたとき、黯然たらざるを得なかった。

「儂が島津義久殿であればやはり九州を握ろうと思うであろう。ただ、如何に大友、龍造寺両家の武威衰えたりといえど、島津方としても急には兵を動かせぬであろう」

一座はしばし沈黙につつまれた。風炉の炭が落ちたのか、かすかに鳴りわたっていた松風の音が止んだ。

「中央においては羽柴秀吉殿が大方を切り従え、やがて四国、九州も平げると豪語しておらるる由、誠でござりましょうか」

薦野増時が話を転じた。

「微賤の身より立身いたしたと聞くが、まことそのような広言を吐いているのであろうか」

不快そうに肩をゆすりながら小野和泉が扇を掌に打ちつける。

「いや宗室はじめ、京・大坂よりの書状、博多津への船主どもの話からして広言とは片づけられぬ」

道雪は古今を絶する大城が半ば出来上がり、今年元旦、当の秀吉が城内の山里と名付けた茶室の披露を華々しく行ったことを語った。

「九州統一に日本国統一か、何か時世が変わりつつあるようでございますな。我等生を受けてより、この世は戦国乱世と存じ、城も国も切り取り次第。この日本国が、いや九州でさえ、一つになる動きがあるなど、思いの外でございました」

齢やがて六十に達しようとするが、数知れぬ戦場で身に数十ヶ所の傷を負いながら、かえってその細い目に慈父のような光を湛えてきた由布雪下の言葉に、同じ思いの一座の者、無言にうなずき交わす。

それぞれに確実に世の移ろいつつあることを実感しながらも、主家に仕える身であれば今置かれている己れの境遇の中で誠を尽す外に道はない。

戦いに明け暮れてきた一座の者達の心に、日本統一、という言葉は快くひびいたのであった。謀略と流血の日々が終り、刀は鞘に納まる。己れの存命中には有り得ぬことであろうと思いつつも心の片すみにそれはどのような日々であろうかと、思う。

現状を認識は出来たものの将来への展望は何一つひらけぬまま、それぞれは張りつめた現実に引き戻される。

龍造寺隆信の死後、筑後地方における勢力は衰え、諸豪は常に島津の動向に注目するようになった。この混沌の時こそ大友の勢力回復の好期であるとして、矢部、高屋城主五条鎮定、生葉（現浮羽）長厳城主門註所刑部少輔統景よりの、筑後への出兵を乞う使者が頻々と豊後へ達した。

いまこそ、筑後二城の大友の勢力を伸ばし、島津の侵攻に備えるべきである。

龍造寺方屈指の勇将、黒木兵庫頭家永が守るところの猫尾城（福岡県八女郡黒木町）を攻略すれば、他の諸城は自ずから靡くであろうと言い送った。

これより前、島津義久に対し、島原での大勝を祝し、藤原定家筆「新撰和歌集」を献じた大友義統であったが、両名の言い分もっともであるとして、軍勢を催した。

弟、田原親家を大将に、一族の朽綱、志賀等を合わせ七千。

斜陽の名族

天正十二年（一五八四）七月はじめ、目に刺しこむ烈日のもと具足の重みにあえぎ、足裏を焼けた石くれに痛めながら進む兵団は斜陽の大友方が揃え得る最大の勢力であった。

矢部川と笠原川のぶつかるところ、猫山（二四〇米）の頂上に累々と石垣をめぐらせた猫尾城は天険の要害である。

城将黒木兵庫頭は、嫡子四郎丸を龍造寺家に人質として送っており、城兵二千共々その闘志は面上にみなぎっている。

豊後勢の攻城数波、老功の兵庫頭にとって寄せ手の戦術はことごとく手に取るごとく見えた。

奇略をもって多くの兵を討たれた上、龍造寺方より加勢として、弓鉄炮で固めた兵八百が城中に入

り志気ますます盛んとなる。

さらに龍造寺の将土肥出雲・馬場清兵衛に率いられた兵二千余騎が猫尾城の東北に位置する、高牟礼山に陣構えをし大友勢を睨む。

炎暑のもと、互いに小競合いの中、ずるずると一月の余も経過した。

ここに至ってたまりかねた義統は、筑前の道雪・紹運両将に筑後出兵を要請する文書を発した。

筑前の状勢また厳しく、秋月、筑紫等の反大友の諸豪との争いに寧日ない。

いま手勢を筑後の陣に割くことは、柔かい腹を敵の前に曝すに等しい。

とは言いながら主家よりの要請黙しがたく、道雪・紹運は日をおかず兵を整え、八月十四日太宰府・高尾山麓に集結。

陣屋に諸将がそろうや道雪が切り出した。

吹き出る汗が頤からしずくとなって胸板の縅糸を染めてゆく。

「本日只今より軍議整い次第、弓鉄炮、兵粮に遺漏なきか確認し、筑後へ向かう」

「皆も知るとおり」

怒りと悲しみを秘めた目で一人一人の顔を見ながら語りかける。

「このたびの筑後攻め、味方の人数に不足はないが将師に恵まれぬ。三十日の余も費しながら黒木の小城一つ落とせぬ。そればかりかこのごろでは各地の小戦にさえ勝てぬ。真の勇猛の士は大方耳川で討死をし、残っているのは経験の浅い若者ばかりである」

胸中の想いあふれてか道雪の顔面は朱に染まり、声が高くなる。

「大殿は暗愚、放縦の癖が現われ、人を知られぬ。諫を拒み、智者を遠ざけられる。志ある一族や旧臣悉く、自ら死地に赴いた」

「じゃが我等両名は大友家を見放さない」

道雪は紹運の目を見てことさら強く言い切る。紹運もうなずいてこれに応える。

「ただちに筑後へ押し入り、豊後勢と共に黒木の城を攻め落し、一人一人首を刎ね、筑後全てを切り従え、豊後の恥を雪ぐ」

「道中は全て敵地、もとよりたやすく通しはすまい。遮る者あればなで切りに致し、峯にも山にも切り登り、黒木までは鉄壁と言えど踏み破って参る」

道雪の決意舌端にほとばしり、一同声なく控えていたが、たちまち拳をふり上げ、太刀の柄を打ちならし喊声をとどろかせた。

出発にあたり、立花城は統虎を、岩屋城に城代屋山中務、宝満城に統増を守将と定め、それぞれに歴戦の士を添え、秋月・筑紫等に備えしめた。

筑後へ向かう軍勢四千余。

八月十八日深更、冴えわたる月光の下、粛々として長蛇のうねるごとく進む。

目指す黒木まで十五里（六十粁）。

全て敵領にして、大河あり、高峰あり、崖を攀じ、沢を下り羊腸の嶮路をたどる。

先陣高橋紹運・後陣立花道雪・秋月・筑紫・門註所等の伏兵が次々起るのを物ともせず十九日夕刻、天地晦冥の豪雨の中、早くも黒木領に達す。

両将、兵を休め、陣中をくまなく廻り、軍馬、鉄炮の様子を見、親しく声を掛け、ために疲労の極にありながら将兵の意気軒昂たるものがあった。

明けて二十日、夜来の雨霽れ、清爽の風の中、刮目して待つ豊後勢の前に、敵中十五里をわずか一日で切り通って現れる。

猫尾城攻撃を前に、高牟礼城の主将・椿原式部を誘導。二十日開城。

龍造寺方の援軍あるも各地に戦いながら次々に城を落す。

九月四日、家老椿原式部の手引きにより、大友軍猫尾城乱入、城主家永自殺。

この八日禅院村の古刹建仁寺に制札を与う。

禁制　禅院山

右、軍勢甲乙、濫妨狼藉、竹林採用の事、堅く停止令め畢んぬ、若し違犯あるに於ては厳科に処す可き者也。仍て執達すること件の如し。

主膳入道紹運　（判）
丹後入道道雪　（判）

道雪、紹運の卒いる筑前勢は各地に戦勝を重ね、ために豊後の大友勢と主客入れ替った観さえあった。

ところが柳川城を攻めるに至って我然、戦局は膠着した。

柳川城は、沖端川・塩塚川の水路迷路のごとく縦横に走り、まわりは一面の湿地帯となっている。

城主龍造寺家晴は、端城を構え、開けた海側には番船をおびただしく配し、城の周囲の稲をことごとく刈り取り、籠城に備えた。

水の手は豊かに、兵粮は潤沢に、城兵の意気また盛ん。道雪・紹運両将の智略に対し、城を一歩も出ず、鉄壁の守りを示していた。

折しも、高良山（三百十二米）座主、大祝良寛が当山への陣替えを奨める使者を送った。

高良山は、古くは「筑紫の君」磐井が本拠を置き、当時、大友・龍造寺の争いでも枢要の地とされていた。

北部九州の総鎮守、筑後一の宮であり、山内三十六ヶ寺、千余の僧兵を擁し、神領九千町、威勢諸侯に劣らぬものがあった。

良寛は大友方に、弟の鱗圭は龍造寺に味方し、座主の職を相争うこと久しかった。

柳川の城がとうてい旬日に攻略しがたいと見極めた、道雪・紹運両将は、軍議の上若干の兵を押さえとして残し、高良山への陣替えを決した。

このとき、大友方田原親家・親盛兄弟は、

「我等今日まで粉骨して戦うてきたが、すべて立花・高橋入道の武功となった。この上豊後勢が如何に働こうとも、人のためになるばかりで詮無いことである」

長征に倦むとともに、道雪・紹運の戦功を妬み、陣払いを兄義統に願い、その許しを得た。

龍造寺家の衰微につけ込み、勢力を拡大せんと兵を出した当事者が、旗を巻いて帰郷したいと願い、それを号令した本人が、易々と帰還を認めたのである。

いかにも晴れやかな表情をして、意気揚揚と引きあげてゆく豊後勢を見送る、立花・高橋両将の胸中は、事の始末もわきまえない主家に対する、暗澹たる思いと、武としての信義のかけらもない、親家兄弟への憐憫の情で濡れてゆくのだった。

凄凄として流れる大河筑後川、堤上の紅葉はすでに落ち、日毎に加わる冷気の中、樹々は凝然と収まり返っている。

天正十二年（一五八四年）九月、宿敵島津は、九州掌握の野望に燃えて、義久の弟義弘の軍勢を肥後隈本（熊本市）に進め、筑前・筑後を目指した。

ここに至り、龍造寺はじめ筑前の秋月、原田、筑紫の諸豪は先を争うように質を送り、その旗下に属した。

岩屋城下、太宰府天満宮の大鳥居信寛も僧を送り義弘の機嫌を伺った。満ちくる潮のような島津の勢力の北上は息まず、必らずや筑前の立花・高橋勢と角逐あることを見越してのことである。

奇襲

同じころ、筑前秋月（福岡県甘木市）城主秋月長門守種実は、道雪の筑後出陣で手薄になった立花城を落すべく大軍を動かした。

飛報至る。総勢八千。

本日立花城南西一里、香椎の浜に集結。

弾丸よけの竹束、城壁を突破するための梯子の用意あり、陣中の伝令は明日の城攻めを触れ回る。

統虎は南面する座敷の濡れ縁に立って腕組みをして考えていた。

自分が秋月種実ならどう攻めるか。

道雪は筑後在陣で動けぬ。立花は十八才になったばかりの統虎以下二千。水・兵粮は数ヶ月を支えて余りある。城は山頂にあり攻め難いが八千の兵をもって力攻めに攻めたなら落とせぬことはない。

若年の統虎が血気にはやり切って出てくれれば勝を得たも同然。

岩屋・宝満は小勢故、援兵を送り難い。高良山の道雪・紹運に急を知らせても、全軍龍造寺方と対峙しており、兵を割き難い。

急に攻めるもよし、じわじわと落すもよし。

軒端に技を伸ばした老松に見事な蜘蛛の巣がかかっている。最前の雨の雫が数珠のように一本一本の糸につながり、陽光にきらめいている。

と、つぶてのように小さな蟬が飛来したかと見る間に巣の中央につかまった。

はらはらと無数の水滴が散る。

激しくあがく羽根の動きに巣は破られ、蟬は逃げられるかに見える。
左上の枝陰から白黄の胴体に青黒色の輪をもつ大きな雌の女郎蜘蛛が長い手足を振り上げ、一歩、一歩、距離を測るように巣の中央に進む。
蟬があがくたびに歩みを止め、巣のゆれに身をまかせる。
蟬のそばに近づき、破られた巣を尻から糸を吐き悠々と修理してゆく。糸いぼの周りに円形の真紅の斑紋が鮮かである。
蟬は弱ってゆく。
統虎は蜘蛛の動きを凝視する。
半刻（十五分）も経ったであろうか、蟬は疲れはて、時折弱々しく羽根を痙攣させる。
漆黒の脚に金色の輪を光らせ、蟬の体に触れ反応をたしかめる。
かすかに羽根を顫わせる蟬の頭から胴体へ勝ち誇るように手足を高く振りかざしつつ、幾重にも、幾重にも糸を巻きつけてゆく。
「攻むるにしくはない」
統虎は薦野・十時等を呼んだ。
「物見によれば間諜の知らせ通り、秋月方の軍勢八千、明日夜明けとともに当城に攻め登るつもりじゃ。城中の者共、弓鉄炮の用意は良いか」
「かねてより予想しておりました故、何時にても邀え撃つことができまする」

具足をまとい大胡坐をかいた薦野増時が一礼し、一座皆うなずく。
「養父道雪は高良の陣にあり、当城は若年のそれがしが守将、組し易しと見て兵を出したのであろう。肝を凍らせてくれるわ。その方今夜子の刻（午前零時）過ぎに香椎の秋月の陣を襲い蹴散らして参れ」
思いがけぬ統虎の言葉に一同息を呑み目を見張る。城を出て戦う考えは誰一人持たず、この堅城に立て籠り、秋月勢を打ち払う作戦は、言うまでもない一座同心の事柄であった。
「恐れながら」
増時が膝を進める。
「城内の兵は二千、留守の手勢も必要であり兵を出しても、まず五百。この小勢をもって八千の敵に当ること、無謀と申せます。ことに当城天然の利を得、水・兵粮も豊か。各自持場を固め、秋月の勢を迎うれば、損害も少なく、日ならずして撃退可能と存じます」
何とか統虎の考えを思い止まらせようと必死に説く。
うなずきながら増時の話を聞き終った統虎は、
「薦野の言い分もっともである。しかし、兵は多きを益ありとするに非ず、という言葉もある。敵は明日の城攻めに備え、早く眠りに就くであろう。実をもって虚を突けばどうして利を得ないことがあるか。お前達が行かぬなら儂が攻め込んでやる」
「かしこまってござります」

座を立とうとする統虎を押しとどめ、鎧の袖を鳴らしていっせいに叩頭する。

手勢五百余騎。

薦野・十時・米多比の三将は額を寄せあい戦略を練る。

日没を待って城の搦手より密かに兵を出す。星明りの中、馬の口を縛り、兵は細引きをもって草摺を巻かせる。

兜の前立ての角本と射向けの袖（左側）に純白の合標を付ける。背の受け筒にも同じ夜目にも白い差物をなびかせる。

秋月方の陣屋には明々と篝火が燃え、武者がびっしりと囲んでいる。大部分の将卒は眠りについているが、本陣は徹宵警固の者が目を光らせている。

極度の緊張からひりつく喉に唾液をのみ下し、顔を脂で光らせ、薦野が低い声で命じる。

「篝を蹴倒し、無二無三に切り掛れ、味方から離れるでないぞ」

手勢二百、枚木を噛み声を殺し、一団となって本陣を目指す。星明りの中、合標と差物が白く浮かび、白刃が怪しく糸を引いて舞う。

雄叫びと打ち物の響きわたる中、勇猛をもって鳴る種実は、すばやく甲冑に身を固め、采配を手に将几に腰を据える。

「騒ぐでない、敵は小勢ぞ、ひとつ所に集まり切り立てよ」

朗々夜気をふるわせて令する。

篝に火が入り四辺が明るくなるにつれ、味方に倍する敵が態勢を立て直し、一気に押し包もうとする。

背後から米多比の手勢百五十が刃も折れよと切り掛る。

本陣の騒擾は陣営に言い様のない恐怖をもたらした。わずかに残る篝火の間を無言の一団が荒れ狂う。

種実の叱咤の声も耳に入らぬ程、うろたえる秋月勢は声なき敵にすでに押し包まれたと錯覚した。

追い打ちを掛けるように十時の勢百五十横合いから襲いかかる。

夜の暗さと自からの発する声に魂を失ない同志打ちが始まる。

算を乱した軍勢のとうていまとめ難いことを悟るや、種実は旗本に命じ、陣を捨て撤退に移る。香椎の松原に松明の火が人魂のように樹々の間にうごめく。

やがて深深たる夜気の中、地から湧くように虫の声がおこる。

殺気の失せやらぬ顔々が集まり、枚木を外し、互いの安否を確かめ合う。

立花方手負いはあれど死者わずか数名。

秋月方はこの夜三百余の首級を挙げられた。

これより以後種実は、再び大軍を催すことなく、小勢をもって立花領内を荒らしたり、耕作を妨害することしばしばであったが、常に統虎の手痛い歓迎にあった。

凱旋し、統虎に戦果の報告をしながら薦野等老功の将は、年若い主の良く人心を読むことと、その

果断に改めて敬意を感じていた。

この年の暮れ、高良山の道雪の陣から三十人余の者が秘かに抜け出し、夜陰にまぎれ、立花城下へ入った。

筑後在陣の長きにわたり、将士の間に郷国を想うの念いよいよ深かった。折から正月も近く、合戦も双方手控えることとなる。家族の顔を一目見て屠蘇の一つも祝いたい。軍法よりも肉親の情をとった。

彼等の帰陣後これを知った道雪は、もう一度、事実を確かめ、家族共々これを切ることを命じた。この中には家中屈指の勇士・竹迫進士兵衛の弟はじめ、重臣の縁につながる者もいた。主家のため全将兵が己れを殺し、精励している中、帰郷したことは逃亡に等しい。受け入れた家族また同罪。

斬罪を命じ、庭前に顔をそむけた道雪の大きな目に、いっぱいに湛えられた涙を知る者はない。筑前においては立花・岩屋・宝満の三城それぞれに秋月・筑紫の勢の侵略を食い止め寸土もゆずるところがなかった。

一方筑後においても、龍造寺方の驍将家晴は柳河城より軍を出し、小森野（久留米市）高良山（同市）祇園原（同市）に戦い、道雪・紹運の勢に若杯を喫した。

梅の蕾のほころびるころより、四界緑にあふれる夏のころまで、しばしば小戦を催したが、双方決定的な勝を得ることができない。

「柳河を落とさねば」

肥前勢の心臓とも言えるこの城を攻略することが全てである。

しかし互いに小競合に終始し、物言わず千年の流れを流れる筑後川をはさみ、睨み合う日が続いた。この年天正十三年（一五八五年）も半ば六月のこと、十時摂津の従弟に当る若者伝右衛門は仲間の武者四名と斥候の任に就いていた。

幾日も敵の顔を見ることもなく、炎天下甲冑に身を固め、大身の槍をかい込んでの任務は、渾身したたるような汗との戦いである。

伝右衛門は道筋に楠の大樹が涼しげな陰を落とす湧水の池に立寄り、しばしば喉を潤おし顔を洗った。

その日、何事もなく帰陣の途につき池辺に水を飲み汗をぬぐっていると、目の前に銀鱗がきらめき、池に波紋が広がった。

「儂も泳がせてくれい」

池に向かって叫ぶと伝右衛門は、青草の上に甲冑を脱ぎ、帷子をはぎ取り、褌を投げすてざぶざぶと水を蹴立て池に入り、身を沈め気持良さそうに眉をあげさげし目をつむった。

誰もがやりたかったことを仲間の一人が実行したのである。あとの四人も喚声を上げて後につづいた。褌は付けて。

折りしも龍造寺に一味する草野方の兵十余名が近づいていた。

水音と喚声につられ突然姿を現した鎧武者を認めて、水中の一人が水から飛び上がるようにして声を出す。

大あわてに岸辺へ戻るが、魂を飛ばし、帷子をかけたり、兜に手を伸ばしたり、騒いでいる中へ、立花の手の者と知った草野方が刀槍を連ねて切り込む。

悲鳴を上げて身を躱す味方に目もくれず、赤裸のまま伝右衛門はまっしぐらに自分の槍に走る。

魎るように味方を囲んだ草野の武者に、

「相手はここじゃ」

水をしたたらせながら槍を構える。

見事な裸形の中心に静かに揺れる物がある。

主将と覚しき中年の武士が、苦笑いを無理にこらえ槍を向ける。

烈々たる闘志に満ちた伝右衛門が一歩間を詰めるごとに、主と全く無関係な動きを示すものに思わず気を盗られる。

この珍なる助けを得、伝右衛門が草野方二人を突き伏せる間に、残る四人も武器を取り、草野の兵を追い払う。

のちにこの一件を聞いた道雪は、

「さても、伝右衛門め、任務の途中水浴びをするとは怪しからぬ。なれど、敵地において水浴する胆力と、赤裸で二人を突き伏せる気力は誉めて良い」

「それにしても、草野の兵も、目のやり場に困ったであろう」

珍しく声を立てて笑った。

梅雨雲霽れ、夏の陽射し樹々の緑を焦がすこの月。

陣営に立ち昇る陽炎に目を細め、道雪は全身が崩壊してゆくような疲労を感じた。

「老いた」

昨年八月より十ケ月余の陣中での不自由な暮しと、絶え間ない戦いの日々、人並はずれた気力と体力を持つこの老将も、朝ごとの目覚めに、夜着の中の手足に、はなはだしい倦怠を覚える日が増えていた。

名将道雪の死

限りある命の涯に近づきつつあることを悟りながら、なお、道雪の脳中は氷のように冴えわたり、肥前攻略の策が、犇めき渦まいている。

「入道殿、顔色が冴えませぬ。少しお休みになられては」

顔を曇らせる紹運に、

「何の、これしきのこと、薬喰いをいたさばたちどころに回復いたす」

小野・由布の両将をともない、柳河城攻略の軍議に時を費した。

翌朝、四肢のしびれは増し、心悸は亢進し、自ら起きることができなかった。
驚いた紹運は、高良山座主良寛に依頼し、良医を求め、薬湯を煎じせしめ、昼夜を分たず、枕頭にはべった。
うつうつとして眠るがごとく醒めるがごとく、呼べばかすかにうなずくものの、魂魄すでに肉体を離れたかに見える日が続く。
家臣はじめ紹運の心痛ひとかたならず、治療に万策を尽くす一方、良寛に願い、病気平癒の祈祷をとり行なった。
昏睡数日、カッと目を開けた道雪は、脇に息をひそめる紹運や、小野、由布等をゆっくりと見廻し、
「仏になりかけておったか」
しばらく虚空を睨んでいたが、
「まだ死ぬわけにはゆかぬて」
むくり、と半身を起こした。
この日より粥をすすり、少々の味噌をなめ、床の上に起き上ることができるようになった。双眸の輝きが増し、口調がはっきりし、旬日のうちに床を離れられるかに見える。
連日の看護で、げっそりと頬の肉が落ち、目ばかり炯々と光る紹運は、由布等立花の老臣を呼んだ。
「入道殿、日毎にお顔の色も良く、本復の兆、まことに重畳でござる。なれど、この七、八月の炎暑、病者にとっては、身の置き所もあるまいと存ずる」

「涼しゅうなる九月まで、何としても心身の安楽を守りとおしたい」
高良山の北方一里余り、筑後川をはさんで龍造寺方の筑紫広門築くところの北野の城がある。
永禄十二年（一五六九）道雪五十八才のとき、同地赤司城にはじめての子誾千代を得た。
主宗麟の媒酌により、長岩城主問註所鑑豊の娘仁志姫を迎えた翌年である。
風光は移らず、かっての領民も道雪の施政を慕っている。
立花へ替る前までの道雪にとって、忘れ得ぬなつかしい土地に違いない。
七月、兵を動かした紹運達は、筑紫方の、赤司、北野の二城を陥し、当地へ陣替えをした。
皆人の願いが通じてか北野での道雪は、食もすすみ、かつての体力をとりもどすかに見えた。
九月になれば、涼しくなれば、必ずや再び立つことができる。
立花にあっても統虎はじめ臣下の者達も、道雪のいかつい顔の中の良く光る目や、体をゆするような太い声を想い出しては、病床の姿が信じられなかった。
とりわけ誾千代は祖父ほども年の離れた道雪に無限の愛情を抱いており、母の宝樹院と共に祖廟に祈る日が続いた。
北野の陣よりの紹運の便りに、父の体力が少しずつ回復し、固い飯を口にした、と言ってきたとき、気丈な誾千代も思わず頬を濡らした。
大虚に漂よう雲が日毎に高くなり、夕べの風の涼気が額をうつようになった。
誰しもが待ち望んだ秋風、道雪の再起の精を運んでくるはずのその風の中、病勢はかえって進んだ。

わずかずつでも口にしていた薬湯を吐き出したその日、道雪は紹運、小野、由布の三名を部屋へ請じ入れた。

長い夏の暑さを耐えに耐えてきた体も、身中に日毎に積もる老いに屈した。

肉づきの良かった顔も、額のあたりがペタリと紙を貼ったように頭蓋が顕になり、こめかみの静脈が激しく搏っている。

枕頭声もなく顔をのぞき込む三人に、一人一人目をみつめ、うなずき、

「紹運殿お別れ申す」

「小野、由布、統虎を、立花をたのむ」

命の最後の炎をかき起こし、地鳴りのような声が響いた。

「儂は大友家の御為に数知れぬ敵を討った。この北野の陣で目をつぶること無念の極みじゃ。儂の死骸は立花へ送ってはならぬ。甲冑を着し、柳河に向けて此処に埋めよ」

「大殿」

喉が引きつったような声を上げた小野、由布両将の目から潸然として涙ほとばしる。

「妄執と言おうとも儂は冥界にあっても敵を挫かんとするものじゃ」

最后は一人言のようにつぶやくと、再び物言わなかった。

稀代の名将は巨木の枯れるように静かに逝った。

年七十三。十四才のとき豊前馬ケ嶽城（福岡県行橋市）の攻略に初陣して以来五十九年、大戦三十

七度、小戦百余度、その用兵の妙は神技とまで言われ、不敗の大将であった。

悲報は陣営をめぐり、無情に吹き過ぎる秋風の中、将兵は首を垂れ、哭声あたりに満ちた。

紹運は、小野、由布はじめ老臣を招集、まず立花の統虎、岩屋、宝満の二城あてに、道雪長逝の知らせを送る。

翌日開蓮忌の法要が終り、香煙のただようてくる次の間で、主君の遺言をめぐって立花家臣の意見は分れた。

「大殿のご遺言どおり甲冑をお着けして、この地に葬り申そう」

「大殿のご遺言をないがしろにするわけではないが、ここは敵地、我等筑前へ帰国の後、雑兵の馬蹄にかけるようなことになっては一大事」

「立花へお連れして、柳河へ向けて葬るのはどうであろうか」

豊後以来、影の形に従うが如く常に道雪と戦場を共にしてきた由布雪下が口を開いた。

「拙者は、道雪公のお言葉どおり、この地に埋葬してしかるべきと存ずる。ただ大殿お一人ここに葬り申すわけにゆかぬ。某、腹切ってお供致す」

道雪の遺骸に目礼する。

一座は騒然となり、

「至極の考え、我等とて死を厭う者ではない。共に腹切って、大殿をお守りいたそうではないか」

目を見張り、声を高くし、一同殉死に決しようとした。

「各々方、待たれよ」
静かに紹運が声を掛けた。
「お心の程感じ入ってござる。なれど道雪公は皆様のお供を喜ばれるであろうか。立花を守る統虎がこれから頼りとするのは、ここにおられる方々の力ではありませぬか。死することは易く、生きて功を立つることは難うござる。殉死のことは思い止まられ、まずは統虎の命を待たれては如何か」
立花への使者に対し、日を置かず十時摂津が統虎の命をもたらした。
「敵地にひとり先考の遺骸を置くに忍びず、直ちに立花へ護送すべし」
紹運は全軍をまとめ、北野の陣を引き払い、蓬々たる秋風の中、自ら殿軍となり筑後の野を進んだ。
薩人伊賀倉俊貞の手になる「鹿児島外史」に述べる。
「九月、大友の柱礎、老将立花鑑連、高良山の営に卒す。粤に五丈原の喪に等し。高橋鎮種柩を護りて筑前に帰る。秋月の兵邀撃せず。島津の軍亦尾撃せず。名将の喪を愍み、某弊に乗ぜざるなり。鑑連の歿する甫めて七十二。嚮に大友毎々毛利軍を拆く、鑑連の筑前に在るを以てなり。隆信常に鑑連をおそれ遂に爵を送り其欵を厚くす。島津氏亦、鑑連を憚る。実に頼朝の秀衡を憚かるが如し。鑑連活息絶えざるの間、義久大友を遂ひ難く、鑑連の死後豊後を取るの易き、苟に熟柿を拾うが如し」
また「龍造寺記」に隆信の道雪に対する評として
「彼道雪は、其気飽くまで廣大に、文を好み武を嗜み、実に当代の良将なり」
と言わせており、当時の道雪の大友家における位置と、武将としての器量がしのばれる。ことに日

頃、干戈を交えた相手の評であるところが貴い。
統虎はこの日、世戸口十兵衛、米多比丹波等主だった家臣を従え、甲冑の上から喪服を着け、山を下り、下原村まで物言わぬ養父を迎えた。
生前道雪が親しかった医王寺彭亭和尚を招き、供養ののち立花三嶽の一、梅ケ嶽の養孝院に葬った。
家臣一同の愁嘆ひとかたならぬものがあり、中でも誾千代の必死に悲しみに耐える、青ざめた表情はひとしお人々の涙を誘った。
福厳院殿前丹州太守梅嶽道雪大居士。
自ら選んだ道雪の号は、降り積った雪は再びそのありかを変えることなく溶けてゆくことを潔いとし、武の一生も雪のように清浄で、死に至るまで主家に尽すべきであるとの自戒であった。
悲しみの極み、人は涙することを忘れる。
統虎の胸中には折々の道雪の叱声や笑顔がありありと現前し、その肉体が一条の煙と化し天に昇って行ったことが信じられぬ。
立花へ来てまもなく、
「字は違うが読みは同じじゃて」
中国の戦国時代（前四〇三～前二二一）楚国の忠臣屈原の作といわれる『楚辞』「九章」中の「橘頌」を読み上げた。

あめつちの間の嘉き樹
橘はこの地に馴れて
天命のままに遷らず
この南国に生えそだった

根は堅くて移し難く
その志はただひとすじ
緑の葉、ま白い花の
茂り合うさまのめでたさ

（略）

汝の年はまだ若いが
師とも長とも仰がれよう
行いは伯夷に比すべく
これを以て手本としよう

諸国は合従し、あるいは連衡の策を取りつつも強国秦に併呑されてゆく。讒言阿諛が王の聡明を蔽いかくし、重臣は国を売る。

祖国を秦の侵略から守ろうとする屈原はかえって王に遠ざけられ、形容枯槁、江南のほとりにさまよう果てに、石を懐に汨羅の淵に身を沈めた。

屈原の亡魂をなぐさめるため、楝の葉で包み五色の糸でしばった「ちまき」を水中に投ずる習慣が、端午の節句のはじまりという。

統虎は養父の話を聞きながら、自分への教訓だと思っていたが、ふと、自分達夫婦に早く子ができたらという願望もあるのではと、感じた。

統虎の視線に目のふちを染め、

「ひまを見つけては本を読むが良い」

袴を鳴らして去っていった。

剛毅さの中にふと見せた純情、もうこれからは、胸の中でしか語り合えぬ。過ぎた日々、戦塵のまにまに、親子として語ること余りに少ない二人であった。

いまや立花城の全てが統虎の双肩にかかってくる。いつまでも悲しみの中に沈んでいてはいけない。道雪が中有の旅を終えれば、近隣諸豪は立花に触手を伸ばすであろう。

陣中に姿を見せるだけで敵勢を畏怖させた道雪、実父紹運と二人、車の両輪の如く自在の用兵を見せた道雪、最強の味方を欠いて戦わねばならぬ。

統虎の苦衷もさることながら、高橋紹運の嘆きまた無量、筑前にあって大友の敵を挫くこと十有余年、道雪は得がたい師であるとともに、心の友でもあった。道雪の前に座るだけで、爽気胸に満ち、蓋世の気力あふれる。

三十余の年令の差を払拭させる精神の若さにうたれ、この人と共に戦うのであれば、いずこの戦野に屍を晒しても悔ないとまで考えていた。

会者定離（えしゃじょうり）、愛別離苦は世の常のことと観じつつも、立花城頭、はるか碧海に点在する扁舟に目をやり、いつまでも立ち尽くしていた。

一方中央にあっては、羽柴秀吉が前年（天正十二年）十一月十五日、徳川家康、織田信雄との講和に成功、政権の基礎を磐石のものとした。秀吉は近い将来の四国・九州経略の布石として、その臣千石家久をこの年秘かに薩摩へ侵入せしめている。

十三年八月六日、四国の長宗我部元親、羽柴秀長に降るや、薩摩をはじめ日向、大隅の各地で、秀吉の大軍がすでに薩摩を目指して進発したとの噂が飛び交った。佐土原、宮崎の諸城主に命じ、国境を厳戒し、諜者を放ち情報の蒐集に躍起となっている島津義久のもとへ、今度は、秀吉が間諜をして島津方の諸将を誘降する動きがあるとの知らせが入った。

九月に大友に叛き島津の幕下に入った諸豪を始め、全ての城主に命じ、羽柴秀吉と関わりを持たぬ旨の誓書を呈出せしめ、心中おだやかならざる義久の元へ、秀吉より、勅命を奉ずと称し、大友と相争うことを止めよとの書簡が達す。

十月二日、国家老伊集院忠棟のもとへ、かねてより、茶道と歌の道において旧知である千宗易、長岡藤孝の連名で、秀吉の意を呈する文書到着。

大友、島津両家の争いは、時の関白と九州の雄島津との対立に移った。

島津義久としても鎌倉幕府より始祖忠久が薩摩大隅日向の守護に任ぜられて四百年近く、自分の代に至りようやくにして九州の大半を掌握した。

いかに関白といえど、ついこの間まで織田信長の一部将に過ぎなかった秀吉の命に従ういわれはない。

義久は島津に降った諸将を鹿児島に呼び寄せ、大友攻略の策を練り翌十四年春、これを討つことを議した。

天正十四年（一五八六年）正月、鎌田政廣、僧玄昌をつかわし長岡藤孝に答書した。

「往時、大友との葛藤はさきに、近衛龍山公及識田右府の調停により之を解き、爾来、敢て争はず。然るに、近年彼屢（しばしば）、日向、肥後の国境を侵略するが故に、已むを得ず之に応戦するのみ（立花道雪、高橋紹運の両将は、柳河城攻めの折、義久の弟忠平……肥後高瀬在陣……に共に龍造寺を討つべく言い送った。忠平はこれに、島津も兵を徹する故、大友も兵を徹し去るべし、さなくば両国の交はここに絶つと答えた。しかるに天正十三年正月両将はなお筑後高良山に在陣、大友、島津の和は破れた）今後といえども、彼、もしやめざれば防がざるを得ず。請う、此意を諒し、関白の左右に弁疏（べんそ）せられよ」

あわせて島津義久は、九州の守護職に任じられんことも願ったのである。

離合集散が人間の常であり、力が全てである戦国の世では勝者すなわち正義である。

正月二十三日、宗麟幕下として、度々の戦功のあった肥後高森城（熊本県阿蘇郡高森町）を島津義

久家老新納忠元以下数万の軍勢が囲んだ。

天正十二年、忠元の将稲富新助は三千の手勢をもって高森城を攻めたが、城主高森伊予守の武略により手痛い敗戦を喫していた。

伊予守はいまや豊肥の諸将なだれを打って薩摩の軍門に降る中、ひとり大友の孤塁を守り、度々の誘降の使者を鄭重に拒絶し、武将の意地を貫き通した。

高森落城の報は、大友宗麟、義統父子はじめ豊後の諸将に島津の来攻近しの事実を、肌が粟立つ程に感ぜしめた。

過ぐる天正十二年、絶え間ない島津の侵攻に自ら迎え撃つことの不可能を悟った義統は、秀吉に多くの貢物を贈るとともに、その征討を請願していた。

一方秀吉としてはこの後十四年五月十四日、妹の旭姫を徳川家康に嫁し、さらに老母大政所を質とし、臣従を誓わせるまでは、兵を動かすことができないでいた。

大友方としては何とも歯がゆい、文書による調停にことのなりゆきをまかせるしかなかった。

春三月、統虎は立花へ婿入りしてはじめて、小野、由布、薦野等重臣に世戸口十兵衛を伴い、岩屋城を訪れた。

満山の桜花は匂い立ち、木々の若芽は勢い良く天を差している。馬上に過ぎゆく道のうねりも、見下ろす太宰府の町なみも、吹き過ぎる風の音さえなつかしい。

城門にこの四月、かねて対立していた筑紫広門の娘加禰姫を娶る予定の、弟統増の姿がある。

紹運、広門の妻は姉妹であることや、境界が接し互いに縁戚関係にある者が多いなど和平の気運も芽生え易かった。

しかし紹運がこの縁組みを許したのは、秋月と高橋の縁組みを伝え聞いた広門の意を体し、筑紫の家のため、自ら岩屋城を訪ね、死を賭して縁組みを願い出た姫の心を汲んでこそのことであった。

元来広門は表裏定まらぬ所のある武将である。前年九月二十三日、道雪の死に打ち沈み、手薄の宝満城を襲い、統増はかろうじて岩屋へ逃れた。

彼は日本の動静、九州の今後を洞察し、秀吉幕下に入るしか途はないとの考えから、まず宝満を奪い、しかるのち、縁組みの挙に出た。

高橋方とて宝満は絶対回復せねばならぬ城であるし、島津の北上旦夕に迫った今、一人でも味方が欲しい。

一方秋月方よりの縁組みの申入れを断れば両家の対立はいよいよ深くなる。

紹運は血を採った。

統増十五才、加禰姫十七才の春である。

別人のように成長した統虎に涙を流して喜ぶ母、宗雲院への挨拶もそこそこに書院に入る。

婚儀に備え、張り替えられた畳の目がくっきりと浮き、藺草の香りが心地良い。

障子を透してくる光に一同の顔がほのかに色づく。

一服の茶を喫し終ると紹運が口を開いた。

「お集まり頂いたは、すでにご承知と存ずるが、このたびのお屋形様ご上洛についてでござる」

島津の跳梁、相次ぐ諸豪の離反に音を上げた大友方では、重臣合議の上、もはや関白自らの出馬を願い出る外、島津撃退の方策はないとの結論を出した。ただ、凡庸な主義統ではとうていその任に耐え得ない。豊後丹生島城に隠居の身ではあるが、宗麟は茶の湯の縁で天王寺屋道叱と親しく、秀吉の側近く隠然たる影響力を有する千利休とも往き来がある。

「お屋形様このたびのご上洛は、もとより御自ら島津征伐の請願をなさるためでござる。その折、我等高橋、立花両家をも直参としてあつかわれるよう言上なされる由、書状が到来いたした」

「我等もとより殿のお心に従うのみ、申し上ぐべき何物もありませぬ」

由布雪下の声に応じ、

「我等とて同じでござります」

屋山中務以下紹運旗下の諸将はうなずき合う。

「関白殿下におかれては、九州の動き逐一ご承知の由。世の動きは止められぬ。我等直参となるからは、主家大友家と共に、日本国のためにも働くこととなる。このこと家臣のすえずえまでも知らしめねばならぬ」

語りながら統虎は、大友家の武将としての自分があるときから日本という国家の武将となることにいささかの違和感を禁じ得ない。

しかし、島井宗室をはじめ、遠く大坂に至るまで張りめぐらしている情報の網にかかってくる事実

は、関白、藤原秀吉に向かう、滔々たる時代の流れと、次に来る九州平定への動きである。

力をもって力を制し、血でもって血を贖う、戦国の世は秀吉の大手腕の中に束ねられつつある。紹運、統虎はじめ幾多の情報に接し、事実を確かめ、いまは主宗麟の所為にすべてをゆだねることが最善の策であるという認識に達していた。

四王寺を下り、世戸口十兵衛とわずかな供を従え、馬首を足立弥平次の邸へ向ける。

瓦葺きの土塀の内に、見なれた桜の老木が白い雲のように枝を広げている。

門前を掃除していた下人が、統虎を認め、目礼し、あたふたと奥へ走ってゆく。

やわらかい日射しが、障子に映え部屋の中の空気まで暖かくしている。

かすかに墨の香りがする。

白髪となり、少し肉の落ちたかに見える弥平次の凛乎たる風姿は変わらぬが、幾百幾千の語りたいことが渦巻き、最前から

「おなつかしゅうござる」

「逞しゅうなられた」

がくり、がくりとうなずきながら同じ言葉をくり返している。

統虎の色白くつややかな額、漆黒のひとみの輝く目、広い肩、頑丈なおとがい、弥平次はこの数年のうちに戦塵の中で鍛え上げられ自信に裏打ちされた、武将の風格がにじむその姿を目のあたりにし、

「道雪公もご安心、立花の御家も安泰」

心底喜びを感じ、思わず涙のにじむのをこらえている。
床を背にし、にこやかにうなずき返し、
「白髪は増えたが、息災の様子、儂もうれしい」
そう答える統虎にとって、共に過した時の長さは、父母よりも弥平次との方が長く、格別の親しみが湧いてくる。
「弥平次、儂は弓を引くたびに思い出しておるぞ。弓を射る自分も、的も、同じ一つのものであることも、狙わずに射よということも」
「このごろ、弥平次が語ってくれた様々な言葉が、少しずつ解りかけてきた」
「身に余るお言葉」
思わず袴の膝をわしづかみにし、作る笑顔が泣き笑いのように見える。
かたわらに控える十兵衛の方が、この年のかけ離れた主従の暖かい交流に胸を熱くしていた。
すずやかな声とともに襖が繰られ、ゆきが茶を運ぶ。
面長の豊かな頬が、透けるような淡い桃色に輝き、黒々とした髪が肩に垂れている。
伏し目がちに茶碗を捧げ持つ、まつ毛が長い。
「殿もご存知の宗晋和尚に字を習うてより、古今の書物に目をさらしたせいか、書物の方が好きな様子で」
そう話す弥平次の口調は、ゆきが自分の傍にいることに満足しているようであった。

統虎ははじめてゆきに語りかける。
「幼ない頃より、よく茶を馳走になったが、覚えておるか」
「はい、いつも、おいしそうに飲んで頂くのがうれしゅうございました」
まっすぐに統虎を見て答える、目の輝き、声の響きに、落ち着いた華やぎがある。
統虎も成長し、ゆきも大人になった。茶を喫しながら、統虎の脳裏に、幼ない頃からのゆきの姿が浮かんでは消えた。
いまのたおやかな姿が現実のものとは信じがたい気がする統虎は、部屋を下るゆきを無言のまま見送った。

人たらし秀吉

三月下旬、豊後丹生島を発した大友宗麟は、泉州堺の宿所妙国寺に入った。自ら進んで秀吉の幕下となり、あわせて、九州平定を請願するためである。
天王寺屋道叱や甥の宗及達の忠告を入れ、羽柴秀長、千利休など秀吉側近の人々への挨拶もおこたりなく、万事派手好みの関白への手みやげとして、当時、まれに見る珍品、虎の皮百枚を用意した。
船旅の疲れを癒し、宗及の催してくれた茶会に遊びながら、休庵宗滴は秀吉の人となりや、まわりの人々のことにつき知識を増やしていった。

年五十七、ようやく老年に達したとはいえ、善きにつけ、悪しきにつけ、一事に集中すること衆に擢んん出る宗麟の頭の中では、間もなく会う人々の大凡の風貌、性格が組み立てられていた。

四月五日鶏鳴、四、五人の供をつれ出立。

うち続く豊家の造りは、豊後とは比べるべくもなく宏壮で、地味豊かにして四囲治まり返っていることをしのばせる。

歩一歩大坂城に近づき、鉄で鎧われた巨大な城門を前にしたとき、想像をはるかに超える大きさに宗麟は声をのみ、立ち尽した。

大河のような堀の深さと広さ、立ち働く人々で埋めつくされる城の内外、九州において、一度は威風あたりを払った宗麟にして、考えも及ばぬ規模である。

「至当であった」

宗麟は、一切を擲ち、秀吉の懐に飛込むこの度の選択に、早くも満足を覚えていた。

奏者、尼子坊の案内で関白に対面。

弟羽柴美濃守ほかわずかの側近と共に宗麟と対面した秀吉は、即座に島津征伐を表明し、併せて、大友義統、高橋紹運、立花統虎を直参の将となすことを受け入れた。

痩せて顔色の浅黒い、鼻下にまばらな髭を生やした小さな男の、甲高い声を聞きながら、光芒を放つ眼と、体に刺し込んでくるような英気に打たれ、宗麟は思わず平伏してしまった。

座を替え、九間四方の座敷三つを、障子を取り払って一つとし、饗応の膳部が用意される。

上の九間四方の座敷正面、敷居をへだてて秀吉が座を占める。その次に羽柴美濃守秀長、羽柴八郎（宇喜多秀家の初名）、細川兵部大輔藤孝（入道して幽斎）、長谷川秀一等登城前に宗及に引き合わされた顔が居並ぶ。

客居には、大友宗麟をはじめ前田利家、安国寺恵瓊、松井友閑、利休居士が控える。

中でも千利休、関白のお茶頭として鬱然たる権勢を誇る抛筌斉宗易の姿は異彩を放っている。

万余の大軍を叱咤するにふさわしい堂々たる体軀、細く切れ長の目は静かな中に限りない気力を湛え、隆々たる鼻梁は抜群の精力を示す。

揃いの袴を付け、世の安寧を現わす小振の脇差をさした給人が舞うように行き交い、湯を注ぎ、酒を運び、菓子を呈する。

君臣の固めは、さながら能舞台を見るごとく、一分の隙もなく、儀式のもつ重大さを意に介さぬかの如く、水の流れるように進む。

女子の着るような派手な模様の小袖をゾロリと身につけ、袖の広い道服を羽織った秀吉は宗麟と肩を並べ、利休達を従え、自慢の黄金造りの茶室へ向かう。

躙り口の戸を開けた宗麟は、息を呑み、しばし我を忘れた。

天井、壁をはじめ、茶釜、風炉、炭入れ、全て黄金である。梨地蒔絵の棚板についている金物まで黄金、ただ、茶筅のみが紫竹。

身心を洗い浄めるような白檀の香りの中、明かり取りの障子は赤紗が張られ、昼前の若々しい光が、

その玄妙なる赤を透して、室内の黄金に様々な陰翳を与えている。
燦煥として目を射るはずの黄金の輝きが、赤紗を透してくる光に渾然として融け合い、深沈たる貴さは弥陀の来迎の世界もかくやと思われる。
秀吉にうながされ室内に入り、飾り付けを拝見しつつ、宗麟は感に耐えざるような吐息をもらした。
利休が点前畳を進む。
利休の巨軀が、三畳の茶室にするりと溶け込み、白雲が山を包むような、大海のたゆたうような、無音の楽の音に導かれるように、香り高い一碗を練り上げる。
へだてない言葉で語りかける秀吉に、相伴の大名が鞠躬如たる態度をとるのに対し、独り利休は、泰然としている。
突然秀吉が、
「宗滴は茶に数寄か」
なでさするように茶碗を賞翫している宗麟に声を掛けた。
顔を上げ秀吉の方を見る間もなく、
「中々の数寄にござる」
利休が答える。
「さらば一服点て、休庵へ参らせんずる」
身軽に座を立つ。

わずかな手前の所作の折々に、その人物の器量が見え隠れする。
茶筅を通し、茶碗を拭く仕草、濃茶を練り上げる姿、年五十、高邁の気概ほとばしり、年の割に皺の多い顔や、筋ばった手先までが秀吉の内なる精神により輝いて見える。
「見事」
秀吉の点前を見ながら、その膝下に身を投じた己れの選択に誤りのないことを、宗麟は胸の内に深くうなずいていた。
その後、豊後より召し連ねた人々を呼び出し濃茶をふるまい、秀吉みずから天主を案内し、手を取り肩を抱き、眺望の許す限り、在所在所の説明をする。
感激に身を固くする宗麟に、しきりに話しかけ、軽口をたたき、
「もはや、隔なく候故、寝所を見せ候わん」一休みさせ白湯をふるまったあと、皆を同道した。
天守より寝所、次の間での、四十石、松花、佐保姫などの大名物のルソンの壺、かつて十三代将軍、足利義輝を驚嘆させた程の財力を誇った宗麟も、ついぞ目にしたことのない絢爛たる光景が目の前にあった。
秀吉の無二の歓待に、よろこびと共に熱い頭で城を退出し、普請の仮家に美濃守秀長を訪ねた宗麟は、衆目の中、歩み寄り、手を取り、
「何事も何事も、美濃守はこのような気持でおり申す。内々のことは宗易、公儀のことはこの宰相が良く存じておる。お為に悪しきことは、あるはずがない。いよいよゆっくりお話申そう」

人なつこい笑顔の中に誠実さを漂よわせて語りかける秀長に

「万事、お頼み申し上げる」

夕焼けに映える雲に顔を染め、声をふるわせた。

翌六日、軽い興奮は残っているものの、常の冷静さを取り戻した宗麟は、豊後丹生島城に留守を守る、古荘丹後入道ほか二名の重臣に克明な書状を送った。その末尾近く、

「ここでの様子を見て、宗易でなくては関白様へ一言も申し上げる人はないと見及んだ。ひととおりのことと思っては、もっての外である。とにかく今後とも、秀長公と宗易へは、深重に、へだて心なく、お近付きになることが大切である」

秀長、宗易の秀吉への影響力を精確に把握し、強調していた。

人たらしと言われ、人心の動きを知ること神の如き秀吉は、労せずして、九州の古豪大友家をその幕下に加え、全国平定のいよいよ近いことを確信した。

宗麟に九州の領主の名を全て聴きただし、国力を記録する。

一方、永年仇敵の関係にあった隣国毛利と和睦せしめ、輝元に九州西征に備えての糧食の手当、道路の改修、倉庫の建築を命じた。

早くも四月十日、毛利の両川とうたわれる叔父、吉川元春、小早川隆景両名にも、大友宗麟上洛の趣を伝え、輝元と相談の上、上方の軍勢の到来を待つよう指示を与えた。

宗麟は豊後へ帰還するや、関白の意を受け、その大軍の西下の近きこと、幕下に降る者には本領安堵が約される旨、各領主へ言い送った。

高橋、立花、筑紫を除きこの慫慂に一顧だに与える者はなかった。

六月初め、高橋紹運は家臣村山志摩、立花統虎はその臣薦野三河に立花姓を与え、各々の名代として上洛せしめ、臣従を誓うと共に、島津討伐の先鋒を願った。

秀吉は使者を篤くもてなすとともに、献上品の巻絹二十疋を、喜んで受納した。

関白への仲介の労を取ってくれた黒田孝高の言を容れ、当初の木綿二十反を都の習いとして取り替えたものである。

この三月、関白の使者、佐々成政、蜂須賀家政がもたらした、

「私闘を止め臣従を誓えば、本領を安堵するであろう」

との教書を、九州の領主は大友方を除き、全て黙殺した。

素生いやしい成り上り者を、関白と呼ぶだに笑止、そう思う一方、宗麟上洛の一事は、皆人の心に波紋を広げた。

ことに秋月種実は、多年手を組んできた筑紫広門が、自家をだし抜いた形で高橋家と縁組みをしたことに不安感をつのらせた。

筑紫と共に高橋紹運を狭撃する地理関係にあり高橋と領地を接する秋月方にとって、両家が合体し、高橋方と共に反転、攻撃を加えられたら苦戦はまぬがれない。

「先手を打つべし」

種実は重臣板並左京を使者に立て、肥後八代（熊本県八代市）に在陣中の島津義久に、筑紫方討伐の軍を起すことを願い出ることを決した。

左京は同盟者である佐嘉城々主、鍋島直茂のもとを訪れ、事の是非を問うた。

「上策と存ずる。したが、舞や平家物語のごとく演者により、同じ言葉も人をして感ぜしめることも、眠たくすることもござる。ここはひとつ言葉を尽し、理を細かに、直心をもって願われよ」

意を強くした老巧の臣左京は、義久に会い秋月の窮状を訴えるとともに、島津が出兵し、筑前を平定することが、関白西下に先立ち、九州掌握の捷径（しょうけい）であり、その時こそ、関白といえど島津家の意を迎えざるを得ぬであろうことを滔々と弁じ立てた。

宗麟上洛のその四月、

「七代までも一味たるべし」

秋月、島津両家は起請文を取り交し、島津は出兵を約したのである。

さらにこの頃、大友家老臣、志賀道益、入田宗和の両名が八代にある家久のもとを竊（ひそ）かに訪ずれた。主宗麟の処遇に不満を持ちつづけていた両名も又、島津の九州統一の早からんことを願い、「豊後国図」を献上し、大友家征服を請願した。

出兵の機は熟した。

ここに至って、俄然義久は迷いだした。

豊後が先か、筑前が先か、二方向から一気に北上すべきか。

遠国へ大軍を動かしたことはかつてなかったことへの不安。

まだ治まり切らぬ肥後国内の押えをどうするか。

霧島神社、新田八幡、開門正一位、何度も鬮（くじ）を引き、神慮を問うた。

「織田上総介の下郎猿」

と秀吉のことをののしりながらも、その硬軟とりまぜた書状での申し送り方、漠としてとらえられぬ戦力。

幕下の諸将の意気が盛んであればあるほど義久の心は怪しく揺れ動いた。

十万とは言わぬが、七万や八万の兵は揃えられる。京大坂より如何に大軍を発したとしても、先に豊後、筑前の港々を押えておけば水際で敵を叩くことができる。

しかし、これまでの秀吉の戦略を聞くにつけても、意想外の用兵を行なうことも十分考えられる。

ひとたび兵を起こすからには鎌倉以来四百年になんなんとする守護職、島津の名を恥かしめる戦いはできない。

背骨を煎り立てられるような焦燥感の中、勝利への確信を求めて鬮（くじ）を引く。

神敕一方ならず、義久は迷う。

迷い抜いた末、決断を迫る重臣達に、

「義弘に問うてみよ」

苦しまぎれに弟の名を出し、並いる諸将にその優柔さを、嗟嘆させた日さえあった。

五月二十日、隅州正興寺の文之和尚と鎌田刑部が、大友方との角逐の経緯を説くと共に、九州一円の守護職たらんことを、関白に訴える旅から戻った。

回答は峻烈を極めた。

「薩隅日三州の守護および肥後、豊前各半州の領有を許すが、その他の地はことごとく返還すべし」

「肥後豊前各半州および筑後は大友に、肥前は毛利に与え、筑前は関白自ら領すものとす」

「応諾の期限を七月とし、これを過ぎるとき関白自ら兵を用うべし」

義久の迷妄は一瞬にして吹き飛んだ。

「幾多の将士の血を流し、ようやくにして九州に覇を唱えんとする時、一片の書状をもって、自らは手を汚さず一国を領し、あまつさえ、回答の期限を切るとは何事か」

蝟集する諸重臣の憤激またはなはだしく、豊筑討つべし、の議は一気に定まり、北上の作戦確定に心血が注がれた。

胸中の迷いを払拭した義久は、本来の天稟顕れ、星辰の移るような、正確と厳格をもって軍議を定めていった。

六月半ば確定。

一軍は西より筑後川を渡り筑前を攻め、一軍は日向路より南豊後に入る。

筑前攻略を優先し、義久の従弟・島津図書頭忠長、伊集院右衛門大夫忠棟を大将に、新納忠元、野村忠敦等の将を付け、薩摩、大隅の兵、二万三千余騎ただちに発向する。

全軍衝天の意気に満ち、野火の荒野を焼き尽くすごとく、途上の諸豪をことごとく降し、勢力は日を追って増大してゆく。

薩軍来襲

一方、筑前の高橋紹運、立花統虎父子も、秋月はじめ、黒木、草野、門註所、原田、龍造寺、領内の動きただならぬことをつかんでいた。

豊後の大友義統より、薩摩の筑前発向近し、の書状は宗麟上洛の直後到来している。

相当の軍勢を催してくることは予想できたものの、高橋、立花、筑紫の連合軍で迎え撃てるのか、豊後の援軍が必要なのか、関白に出兵を要請するほどの大軍なのか。

六月も末になると、頻々ともたらされる情報は、強大な薩軍の像を浮かび上がらせてきた。

城砦の補強、糧秣の貯蔵、弾薬の搬入を急がせるとともに、立花、岩屋、宝満の三城を汗馬が行き交う。

天正十四年六月三十日、島津忠長率いる薩軍は筑後、高良山を蹂躙、座主良寛を放逐。

本陣を定めると共に、筑前・筑後の諸豪に書状を発し、ただちに高良山の薩軍に合流すべく求める。

日をおかず、馳着けた諸豪の兵力を合わせ、総勢五万。

筑後の山野は、おびただしい旌旗に埋め尽くされ、鎧武者の汗と軍馬の匂いに満ちた。
筑紫方においては、島津軍の動きを察知してはいたものの、予想外の大軍の集結に、驚愕し、高良山と筑後川をはさんで対面する位置にある支城朝日山城をはじめ、諸城の固めに狂奔した。
岩屋、立花、宝満へ密使が飛ぶ。
家々の軒先に笹竹が差し出され、裁縫の上達を願ったり、雨を求めたりする短冊が軽やかに風に揺れる七月七日。
秋月種実を先鋒に、島津の伊集院忠棟をはじめ二万余の軍勢高良山を下る。
夏の日を照り返し、油のように静かに流れる、筑後川の水をたぎらせ、筑紫領になだれ込んだ軍勢は、付近の村々を焼き、筑紫の諸城を席捲した。
筑紫広門の拠る勝尾城の支城、鷹取城の城主晴門はこの時十七才の若武者ながら、勇猛をもって聞こえていた。
落城を覚悟した晴門は手勢三百を率い、川上左京亮忠堅の軍勢に切り込み、大太刀を振い鬼神のごとき働きを見せる。
過ぐる年、島原沖田畷(なわて)の戦いで、龍造寺隆信の首を挙げた川上左京亮は二十九才の働き盛り、取りかこむ諸卒を押し止め晴門に名乗りを上げ一騎打ちを求めた。
死場所を求める晴門喜んでこれを受け、筑薩の諸将卒見守る中、潔く切り結ぶことを数十合。
晴門の高股を深々と切り下げ、組み敷いて首を刎ねようとした左京亮が、年若く秀麗な晴門の相貌

に、ふと気を奪われたその時、鎧通しが、したたかに左脇をえぐった。
晴門の首を掻いた左京亮も、程なく落命したが、二人の闘いぶりは、戦国の末期に珍しい一騎打ちとして、この地の人々に永く語りつがれることとなる。
晴門の死は筑紫方の気勢を殺(そ)ぎ、七月十日、筑紫広門はかつての盟友秋月種実のすすめにより島津に降った。
勝尾城を開け渡すとき、
「忍ぶれば、いつか世に出ん折やある
　奥まで照らせ山のはの月」
と詠んだ広門の心中は察するに余りある。
三潴郡大善寺（福岡県久留米市）に押し込められ、落魄(らくはく)の身をかこつ筑紫広門のことを人々は、
「昔、広門、今は狭門」
と嗤(わら)った。
天正十四年七月初め、陽暦に改めて八月下旬。
朝な夕な、ひそやかな秋の気配が感じられるものの、烈日は万象を灼き尽くし、肌へにはねっとりと汗が流れる。
筑前における大友方最後の防衛線、宝満、岩屋、立花の三城は昼夜を分たず城砦の強化と弾薬、兵粮の補充が行なわれる。

筑後高良山の薩軍の動きは逐一早馬をもって達する。
晴門戦死の報が至った八日、統虎は小野、十時、薦野等重臣を故道雪の書院に呼んだ。
歴戦の彼等の面上には、迫りくる薩軍を迎え撃たんとする闘志とともに、かつてない大軍に対する少なからぬ緊張がみなぎる。
「島津の大将の身であれば、我等をどう攻めるか。その目指すところは何と考えるか」
統虎の問いに十時摂津は大きくうなずくと
「されば、宝満は要害の地なれど、城兵少なく、岩屋より一里以上離れております。拙者島津の大将なれば、まず岩屋を落とし、当立花城を抜き、小倉城を守る稲富羽左衛門に案内せしめ、赤間関より下るであろう上方の軍勢の動けぬよう海峡を押え、港々を封鎖いたすでありましょう」
「宝満は無視いたすか」
「然り、五万とも六万とも言われる大軍、西国街道から宇美街道、あるいは両面から北上するものと考えます。岩屋よりこの街道の様子は手にとるごとく、島津は岩屋を落とさずして進むことはかないませぬ。惜しむべし宝満は無類の堅城といえど位置悪しく、両街道への睨みが利きませぬ。無視するか、多少の押えの兵を残し、岩屋城攻略に全力を傾注するものと思われます」
薦野増時の答に、
「岩屋は元来が宝満の端城、あの細長い防衛線を、七百足らずで守ることは至難の技でござる。籠城は無理、宝満か当立花へ移らるるべきと考えます」

ひと膝進めて小野和泉が、統虎の目に見入る。
ゆっくりと皆の顔を見まわす統虎の耳の端が赤く染まった。
「儂も岩屋籠城は、幾日か持ちこたえたとしても、多大の犠牲を覚悟せねばならぬと思うている。ここは父上に理を説いて、宝満へ移って頂くのが上策じゃ」
部屋の中に、沸き立つような蟬の声が満ち、にわかに暑熱が肌に伝わってくる。
「ご承知なきときは、無理にも当立花へお移り頂き、薩摩の軍勢を迎えよう。関白の軍勢到来までのひと月やふた月、敵幾万といえどこの城であれば守り抜ける」
統虎の額に玉のように浮いていた汗が、顳顬から頬に白く光って糸を引いた。
おなじ頃、岩屋城本丸の大広間に紹運摩下の全将士が犇めいていた。
この数日、祖廟に籠り切りであった主が、重大な決意をもって登城を求めたことを知る将士は、時折、開け放たれた障子から吹き込んで来る熱をはらんだ風のなか、彫像のように息をひそめている。
頭の剃りあとも清々しく、漆黒の顎鬚をたくわえた雄偉な紹運の姿が目に入るや、いっせいに平伏する。
麻や木綿の着衣の衣ずれの音が、渓流のせせらぎのように広がってゆく。
「皆の者、よく聞いてくれい」
語りかける紹運の目は臣下に対する慈愛と、心中の迷いを滅却した、澄んだ光を湛えている。
「昨七日、筑紫晴門殿、おん年十七才にて天晴れ切り死にの知らせ、先程到来いたした」

声にならぬため息がもれる。

「島津の軍は、秋月、龍造寺等加勢の兵も併せて五万とも六万とも言われておる」

「儂はこの城で彼等を迎えることに決した」

「岩屋をすて宝満に退き籠城の策もあるが、儂は採らぬ。一つには多年住みなれたこの城を捨て、風声鶴唳を聞き、甲を棄てて逃れるの汚名を得るより、義のために死すること、武士の本懐である。二つには、宝満堅城といえど、筑紫、高橋二家の寄り合いで、籠城の要諦である人の和を保ちがたい。三つには生死の関頭にあり、右するも左するも、運に任すしかない。運強ければ死地にあって生き、運弱ければ生地にありても死す」

朗々たる紹運の声は、淀みなく、諸城士の心中に、この殿と共に、岩屋城頭に屍を曝しても悔いない、の思いがあふれてくる。拳を握りしめ、身を乗り出して聞き入る一同に、

「次の者達は籠城に加わる必要もないし、また許さぬ」

「一つ、籠城に賛成しかねる者。遠慮なく立ち去るが良い。我等、関白の援軍到着までこの岩屋の城を守り抜く所存。万一援軍遅れし時は、死あるのみ。良く良く、己れの心に問うが良い。二つ、両親に男子一人の者、三つ、兄弟の内一人。いずれも城を出、家名を守るべし。なお、老幼婦女子、それに病人は統増の兵と共に宝満城に籠るべし」

城代屋山中務少輔、福田民部少輔、伊藤惣右衛門、士岐大隅、伊藤八郎、高橋越前など家中歴々の士が進み出て、

「お供仕まつります」

いっせいに叩頭する。一人の離反者もなく静かにかしこまる七百余人の臣下を見て、紹運の目頭が赤く色づいた。

樹々の枝々を騒がせ吹き込んで来る熱風に、皆人の背中に、胸に、汗が流れ、袴の腰板まで染み透ったが、誰一人暑さを感じる者はいなかった。

籠城は決まった。それぞれの家に男子一人を残し、家名を守れとの紹運の言葉は、この籠城が、万死一生を期しがたいものであることを語っている。

ここに至るまで紹運は考え抜いた。

関白の軍勢西下まで持ちこたえること、これが唯一無二の命題である。

宝満城は島津北進の防げとはならぬが、街道を眼下に見る岩屋城を抜かずして立花城を目指すことはあり得ない。

この城に拠り、七百余名心を一つにして戦えば、二千や三千の敵を討ちとることができる。あるいは関白軍到着まで支えることができるやも知れぬ。これはとりもなおさず関白の軍勢の安全な九州上陸を保障することでもある。

よしんばこの岩屋が落ちるとも、数千の兵を失った島津軍の立花攻略は志気を殺がれること大であり、戦略の変更に迫られるであろう。

戦いの前にいつも訪ずれる熱い体と冷めた頭脳があった。島津軍五万余を相手に城兵七百余名、三

十九年の生涯、刀槍の下に生を探り、兵馬の動きに肝を砕いた、戦術の全てを使い切るのだ。

城と人と、全てを知り尽している紹運の脳中には想定される様々な状態への策が奔流のようにあふれている。

日が中天にかかり、白光天地を満たし、樹々は葉を垂れ、ひそとして静まるころ。

初老の武者が馬蹄の音も荒々しく汗と埃にまみれ城門を駆け抜けた。

ただちに紹運に面会を求めた十時摂津は、統虎の書状を渡し、宝満へ移るか、立花へ移るか、いずれかの策を採るよう、熱誠をもって説いた。

いちいちうなずきながら話を聞き終った紹運は、己れの考えを十時摂津に語り、統虎の心に感謝しつつも、岩屋を動くつもりはないことを伝えた。

淡々とした表情とその語り口に、かえって紹運の決意の固さを悟り、一命をもって武名を上げ、二人の息子の運を開こうとする親心に、摂津は言葉もなく、うなだれてしまった。

「殿様に申し上げます」

半白の頭をした城代家老、屋山中務少輔が扇子を脇へ押しのけ、手をついた。

「推参ながら申し上げます。ここは統虎様ご諫言を納れられ、何卒、立花へお移り願います。お二方にて守らるれば薩軍数万といえど上方の勢到着まで城を支えられること疑いありませぬ。某、城代として当岩屋にあること久しうございますれば、手の者と籠城いたし、一刻も長く防ぎ抜き、力尽きんか城を枕に討死いたします」

じっと屋山をみつめる紹運の目に熱い涙があふれた。

「屋山、その方の心根、紹運身魂に徹しておる。そのような忠臣を死なせることができるか。また、お前達が命を投げだしてくれても、島津の軍勢は引き揚げはせぬ。共に籠ろうぞ」

断ちがたい主従の紐帯、十時摂津は、岩屋籠城が至善の策であることを直感し、紹運の大局を見る目の確かさをも得心していた。

神の采配

永訣の盃を交し、岩屋を後にする十時摂津は、あとからあとからこみあげてくる惜別の情に肺肝をえぐられつつも、馬首を立花へ向ける。

紹運も屋山中務も、別れを惜んだ城兵の一人一人まで、なんと晴れやかで澄んだ目をしていたことであろう。

あの君にして、この臣あり、君臣相和して大事に当るとき、心身一如の働きを示すであろう。

紹運が立花の老臣森下備中等にあてて認めた書状を懐に、

「死なすには惜しい武よ」

そう考えながらも、無意識のうちに念佛が口をついて出る。

「左様か」

十時摂津の顔色を見るや統虎は答を悟り、粛然と肩を落とした。
気をとりなおし、急ぎ、紹運の書状に目を走らせる。
「摂州（十時摂津）帰られ候条一書申入候、岩屋籠城手当の事、悉皆相調い候えば、心安く候。其表の儀は、かねては老臣の諫破らずと言えども、拙者運の困窮に達し候上は、此事旦夕にせまり候処、摂州物語を承り及び、大慶、是に過ぎず候。宝満のことはともかくも、統虎は、守城に屍をさらし、殿下の祐を持つべき時に候。しかるに三河守（薦野増時）和泉守（小野和泉）同様の諫言、惣衆の肝入れ、かれこれ君臣三方の和、相調い、祝着のいたり、何事か是にしかず、偏に先考（養父道雪）御弓箭の名誉に候。入道が死出の山路、潔白たるべく候。猶、折々の調略、御油断あるべからず候。薩州勢、はや筑後にかかり候由、立花への通路も今明日の間と存候、細々は、摂州より申すべく候。
実に再会を期せず候。恐々謹言。
七月八日　高橋主膳」
あて先は森下備中守、原尻左馬助、内田壱岐入道の三名ながら、老臣に統虎の今後を託すとともに、統虎自身への諭しともなっている。
紹運、死を覚悟しての訣別の書状、その決意の潔さと、きたるべき結末を想うと一座の者、涙をこらえることができなかった。
「増援」
統虎の脳中にこの言葉がひらめいた。年ようやく二十一になろうとし、単身立花城へ入った身とし

ては、子飼いの臣があるはずもなく、死のみが保障される岩屋への援兵を言い出すにしのびない。沈黙すること数瞬。
「拙者、岩屋には縁者もありますれば、ぜひに助勢に赴くことをお許し下され」
若い吉田左京の一言のもと、我も、我もと名乗りを上げる。
小野・十時等がとりなして、大勢の中から特に岩屋と縁の深い者達二十余名を選び出すのを見ながら、臣下達の勇気と義理に厚い心に魂をゆさぶられ、胸中声を上げて泣く統虎であった。
翌九日、父紹運の言に従い、秀吉の命をうけて豊前小倉で九州の状勢を見ていた黒田孝高を通じ、秀吉へ筑前の急を告げる文書を発す。
孝高はただちに京へ知らせると共に、家臣小林新兵衛に命じ、岩屋にある高橋紹運に立花移城を説得すべく派遣する。
この間、太宰府高尾山にあった島津の本陣は七月十二日、太宰府観世音寺に進み、更に岩屋南方半里（二粁）の高み、片野般若寺に居を定め、軍勢を岩屋の麓に集結。
岩屋からも、般若寺からも、太宰府の街並みを埋めつくす五万余の大軍の動き、あたかも手に取るごとく、甲冑のふれ合う音、馬のいななき、兵の呼び交わす声、さながら遠雷を聞くように響きわたる。
島津軍の侵攻にともない、在所の百姓達は、担げるだけの荷をかつぎ、老若を問わず両手に提げ、近在の身寄りのもとへ走った。島津の軍紀がいかに厳正なりといえど、数万の兵の中にはけしからぬ

狼藉に及ぶ者なしとしない。軍勢の進路に当っては、家屋敷に火をかけられるやも知れぬ。

ゆたかに水を湛え、肌をこがす日射しの中、まぶしいばかりの稔りに輝く稲田を、振り返り、振り返りする父親を、子は無心に見上げている。

また、岩屋城下に広大な神域を有する、太宰府天満宮の別当、大鳥居信寛は、薩軍の将伊集院忠棟にあてて、岩屋攻城の速やかであろうことを寿ぐとともに、銭二百疋を贈り、神域の平穏を願った。

忠棟は厚意を受け入れると共に、鄭重な返書を送り、天満宮の平安を約した。

太宰府の地を埋め尽し、黒雲の渦巻くように犇きあう軍兵、数知れぬ旌旗が色とりどりにはためき、馳駆する騎馬武者、これらを眼下に、岩屋城は最後の補強がなされ、各人の持場が定められてゆく。

雑兵に混り、大勢の百姓、町人が、岩を運び柵をしばり、大釜に飯を炊いている。間道を抜け、城に入り、ひそかに合力を願い出た者達であった。

本丸西南下、虚空蔵谷わきの水の手を調べていた紹運は、旗本に導かれ、少し足をひきずりながら近づいてくる老武者に目を留めた。

下人に数百の矢を背負わせ、四枚張り鉄錆地の桃形兜を光らせ、黒糸で縅した鎧に身を固めた、足立弥平次が平伏する。

数知れぬ戦場を切り抜けた者に特有の気があたりを払う。

「弥平次、家は、妻女は、どういたす所存じゃ」

「されば、立花城下の縁者のもとへつかわしました。弥平次、心に残る何事もありませぬ」

声高に応える。

紹運は膝を折り、弥平次の顔をのぞきこんだ。

「この紹運、忠義に報ゆること叶わぬぞ」

緊張していた弥平次の顔に喜びの色が広がり、象牙色の歯が光った。

「おそばにて、老骨といえど、弓手の折るるまで」

物言わず、がっしりと弥平次の鎧の肩をつかみ、目をみつめ、二、三度ゆさぶると、紹運は城代屋山中務のもとへ案内させた。

士分の者をはじめ、夫丸、百姓、町人に至るまで、城内の士気たぎり、島津軍何するものぞと、粛々として労役に励む。

さしも長い夏の日も傾きかけたころ、物見の案内をうけ、黒田孝高の臣、小林新兵衛が入城する。

衣の汗をしぼり、繁茂する草木に身を削り、崖をよじ、谷をつたい、地に伏して、薩軍の目をかすめつつ、やっとの思いでたどりついたのであった。

身を浄め、城方より与えられた衣服を着し、広間において、甲冑に身を固め旗本を従える紹運に対面したとき、新兵衛はその風貌の颯爽たることに気を奪われた。

眼光気力に満ち口跡さわやかにして、非凡の将器であることをうかがえる。

主人、黒田孝高の口上を述べ、速やかに立花への移城を説いた新兵衛は、紹運の物静かで理を尽した話し方と、金鉄のごとき覚悟に接し、武人としての共感に身をふるわせた。

紹運の志に感じ、籠城に加わり、共に闘うことを願う新兵衛を諭し、主君への義務を果させるべく、人を付け、夜の闇にまぎれ、間道伝いに落とす。

主孝高への書状を懐中し、夜の中に満ち満ちる虫の声に守られ、歩一歩城を離れてゆく。

新兵衛の復命を受けた黒田孝高は、

「良き武人に会うた」

「一旦の生に安んじず、名を惜しむこと誠に天晴れ。彼の大局を見る目、一点の曇りもない」

しばし、無言のまま瞑目する。

日頃物事に動じることのない主の声が震えを帯び、瞼がかすかに痙攣するのを見た新兵衛は、紹運麾下の運命を思い、くだけよとばかり歯を噛みしめ、五体のゆらぐような、内なる激情に耐えていた。

この朝十三日、持ち場は定まった。

高橋紹運はじめ岩屋籠城の者、総勢七百六十三名、島津の大軍に必死の戦いを挑む。

本丸南手、虚空蔵台の大手門を、福田民部少輔を大将として六十余人。

虚空蔵台南手の大手門、伊藤惣右衛門を大将として八十余人。

本丸と高田櫓の間の城戸、城代屋山中務少輔を大将として百二十余人。

立花より籠城を願い出た川上左京以下二十余名は、本城甲の丸の搦手。

小荷駄と共に城に入った彼等に紹運は、兵粮は遠慮なく頂くが、あえて死中死を求めることはない、立花へ戻るよう、説いた。

左京以下立花の者達は、自ら願い入城したものを、生きて立花へ帰るあたわず、許されぬとあらばと、その場で腹切ろうとする。

紹運はその決意を喜び、一方をまかす。

城将高橋紹運と旗本百五十人は、甲の丸を固め、紹運、全山の指揮を執る。

かくて、本城・邑城の要所要所十数ケ所に手勢を配し、守城の態勢は整った。

薩軍においては、島津忠長、伊集院忠棟等諸将、最後の軍議を凝らす。

「このような小城、押えの兵を残し、一刻も早く立花城を抜き、関白の軍の動かぬ内に小倉へ進み、関門の港を封鎖することが先決じゃ」

「いや、いかに小城といえど、我が軍の進路に立ち塞がるこの城をそのままにしては、全軍の志気にかかわる。真っ向微塵に踏み潰してまかり通るべきじゃ」

幾度となくくり返された議論のあと、彼我の損耗を避け得るやも知れぬ、という一縷の望みを託し、二日市荘厳寺の快心和尚を使者に立て、開城の説得に当らせることとした。

学識とともに弁才をもって鳴る快心は、老齢に似ぬ艶やかな顔に自信をみなぎらせ、単身城に向かい、高らかに案内を乞う。

紹運と対座するや、緊迫した城中の様子に臆する色もなく、

「こたびかような大軍を催したは、高橋殿に向かわんがためではありませぬ。誓紙、神文に背く筑紫広門殿の一国の主とも思えぬ所業、これを誅せんがためであります。広門殿の勝尾城すでに落ち、

その身は我が手にある今、素意すでに達したも同然。しかしながら筑紫勢の籠る宝満城にご子息統増殿、御大将としておわします。宝満は筑紫が城にございますれば、即刻我等に明渡されませ。さすれば和を講じ、この地を退き当岩屋には指一本触れませぬ」

一気に語り終えると、紹運の顔色をたしかめるように息を継ぎ、ゆるやかに扇子を使っていたが、無表情に端座する姿にいらだったか、

「ここはよくよく考慮あるべきですぞ。もし、宝満をお渡しなくば、不本意ながら当岩屋を落とし、しかる後宝満を頂き申す。

失礼ながら我軍と比較にならぬ小勢、要害堅固なりといえど一支えもなりますまい」

傲然胸を張る。

「島津図書殿におかれては、暑蒸の中、遠路をいとわずこの地まで大軍を動かされしこと、ご苦労に存ずる。されど一言の断りもなく我が領地を馬蹄に汚されしは武家の礼に外れし所業。まこと無礼でござる。

まず宝満は、我が子統増守るところにして、筑紫の臣は、いまや高橋家の臣でありますれば、同意できかね申す。去る四月、主君大友宗麟上坂、関白秀吉公に謁し、その幕下に入りしより、我等高橋、立花両家も関白の家人に加えられてござる。関白の命なくして、立花、岩屋、宝満、どれ一つとしてお渡しすることは叶いませぬ」

快心の表情に意外の感が走り、頬が紅潮した。万に一つの勝算もない、大海の小島にも似たこの岩

屋城、将兵の命に換えるとあらば喜んで開城に応じると確信していた。

「秋月、龍造寺などは、近隣に武威を振いきたる者共なれど、島津の勢、強かつ大なるを知るや、武の義も意地も捨て、その膝下に伏す。筑紫殿が勝尾城も易々と開城の由。

なれどこの紹運は、いささか違いもうす。城中一丸となり、たとえ最後の一人まで討ち果されようと城を明け渡しはせぬ。当岩屋を攻めらるるならば、相当の損害を覚悟の上でかかられるよう、島津殿に申されよ」

紹運の話を聞くうち、快心の全身にじっとりと汗がにじんでくる。蒼杉を震わせる蟬の声が脳中をかき乱す。

緊張から甲高くなった声で快心は、戦況の非なるを説き、利を誘い、懸命に紹運を説得しようと努める。

藁で作った円座に趺座し、黙然快心の話に耳を傾けていた紹運は、すい、と掌を挙げ、

「お送りせよ」

旗本に命じ、有無を言わさず、城外に追い立てた。

快心の報を受け、

「この様子では、無事、城下の街道を通すとも思えぬ。一気に城を抜く外ない」

全軍に明十四日攻城の命令を発した。

使番が疾駆し、物見の動きが急となる。太宰府着陣以来、あわただしさの中にもどこかゆとりの感

じられた薩摩の軍兵達は、俄然、目の色が変る。陣小屋に出入りする諸将また、甲冑を鳴らして急ぐ。

長い夏の一日が終り、山々の峰と空がひとつに溶け合うころ、山上、山下ともに明日の決戦を前に、束の間の休息に入ろうとする。

寝所の燭台にろうそくが、ジ、ジ、と小さく虫の鳴くような音を立て、部屋の四隅の闇がゆれる。

不寝番の小姓が、長くなった芯を鋏み取り、壺に投じる火と水のはじける音がする。

眠られぬままに統虎は、床の中で、天井に垂れ込める闇を見つめている。自らが敵の大軍に囲まれているのであれば、いっそ、ぐっすりと眠れるであろうに。

物見の知らせを幾度も幾度も反芻している。

考えられる限りの備えもなされた。兵粮、水の手の確保も怠りない。人の和も。物見には尋ねなかったが、弥平次は必らずや父の元へ駆け付けたであろう。岩屋の人数は、敵に比し、九牛の一毛に等しい。だが、父紹運の采配と、長年共に戦場を馳駆した者共故、島津は多くの損害を覚悟しなくてはならぬ。

岩屋の者達の顔が次々に、浮かんでは消えてゆく。統虎が岩屋にあったとき、親しく言葉を交した者ばかりだ。一人一人の声音や、くせまでが思い出される。

籠城。この手段しか、ないのだ。

もし、自分が父紹運の立場であれば……同じ方策を採るであろう。そして、立花を動いては、籠城の意味が、無に帰する。

統虎は床に起き上り、小姓を制し、廊下へ出、岩屋の方角を望み佇立する。虫の声を運んでくる風に、秋の匂いがする。耿耿たる月明のもと、万方治まり返り、ただ、星辰が移るのみ。

南の方、左手にひときわ高く、黒々と三千尺（約九三六米）の三郡山が、右方、宝満山へ連なり、さらに南、四王寺山脈から大城山（四一〇米）へ至る。立花から見る大城山の背後、半里（約二粁）と隔てぬところに、岩屋城がある。

あの山の向こうに、いま、七六三名の勇士が、五万の大軍に立ち向かうべく、かりそめの眠りを眠っている。

山が、星が、庭前の樹々が、光の渦に溶け込むように、どろどろになった。

十四日、島津忠長は、城攻めの大将を伊集院忠棟とし、本営を城下の観世音寺へ移す。

全将兵に腰兵粮二食分を持たせ、水筒の確認を二度にわたって行なう。

遅い朝飼のあと、進路に当る、国分、坂本、横岳など城下の町屋を焼き払い、全軍ようやく動き出す。

宝満押えの一隊は、山麓の竈門神社にほど近い有智山へ進む。

城からは潮の満ちるようにひたひたと押し寄せる、島津の軍兵と、その背後に黒龍の昇るように煙を吹き上げ、音立てて崩れ落ちる家々を望み、それぞれの得物を握り直す。

烈日は彼我の将兵を容赦なく煎り立てる。

あごをこするような急坂を、草を薙ぎ、樹々の枝を打ち落とし、仕寄具足の重みに、あえぎながら

城を目指す。汗をしたたらせ、差物を大きく揺すりながら登る寄せ手は、時をり城が視界から失せ、夏の日に輝く空をあおぎ、目に流れ込む汗をぬぐう。

先鋒が、二の丸、三の丸の出先砦に近づいたところで、忠棟は全軍の態勢を整え、三度にわたって鯨波を上げさせた。

数万の将兵の雄叫びは、太鼓や鉦の音を呑み込み、耳を聾し、雷神の咆哮するようにひびきわたる。底抜けに空が青い。

紹運の采配に、岩屋の城兵全身を絞って、鯨波に応える。忠棟の長刀一閃。

太鼓を打ち、竹束を押し立て、入れ替え入れ替え鉄炮を放ち、口々におめき立て真っ向城を目指す。

城方は地の利を得、大木巨石で組み上げた砦は堅固に、弓・鉄炮で狙い澄まし、一撃よく一人を倒す。

剽悍決死の島津軍は、倒れる味方には目もくれず、声を掛け合い、無二無三に砦を抜こうとする。白煙と土ぼこりの中、押し上げられるように崖を越えた一団は、一面に切り倒された竹林の切株が槍のように切っ先を天に向けているのに肝を凍らせる。陸続と押し寄せる味方、前方からは間断ない弓、鉄炮の嵐、兜の鉢を傾け、柄を握りしめながら進退極まり次々と竹を血に染めてゆく。

討たれても、討たれても、島津軍は隊を入れ替え、隙間なく攻め立てる。

紹運は天主の櫓に床机を据え、全ての備えに目を凝らす。城兵の志気たぎるがごとく、一糸乱れず、主将の命のまま働く。

攻防小康に至るや、備え備えの大釜のもとへ走る。夫丸、合力の農民等が粥を焚き、大碗によそい戸板に並べて冷ましている。味噌のかたまりを投げ込み、せわしなくかきまぜ、緊張に強ばった喉に流し込む。

日がかげり、夕闇があたりを包んでも、月明をたよりに攻防は続く。

この一撃でなんとしても城を抜こうとする忠棟と、城兵の心を一つに鉄壁の守りを見せる紹運。

亥の刻（午后十時）に至り、砦の一つも抜きがたく味方の損害ばかり増えるのに歯ぎしりしつつも、伊集院忠棟は兵を収める。

静寂のもどった山の遠近に虫の音が起り、城兵もほっと息をつく。

城方の損害の軽微なのに較べ、力攻めに攻めかけた島津軍は予想外の死傷者を生んだ。

夜半から朝にかけて、負傷して動けぬ者、息絶えた者等を収容する、島津の兵の動きが魑魅が彷徨するもののように、黒々とうごめいた。

翌十五日、充分の休息をとった島津軍は、巳の刻（午前十時）から城へ攻め登った。

昨日と打って変り、甲冑を着する者が少なく、大方は、裸同然の軽装に兵粮、水筒をぶら下げている。髪を束ね、鉢巻きを締め、きのう一日の戦いで、赤黒く日焼けした顔を汗でギラつかせ、火のような息を吐き、歯を剝いて砦に迫る。

この夜、子の刻（午後十二時）までの攻撃にもかかわらず、守将紹運の采配は精妙を極め、島津軍は大将株数騎を討たれ、おびただしい兵を死なせた。

夜半、さすがに城方にも手負が増え、籠城の者立ちの内儀や娘達が、傷の手当、兵粮の世話にいそがしく立ち働く。

立花の統虎のもとより、夜毎、小荷駄に兵粮、弾薬、金瘡の手当のための薬、晒木綿などが秘かに運ばれる。城兵の志気はいささかも衰えず、互いに励まし合い、暫時の休息をとる。

時おり差物をひるがえしてゆく風が、鼻腔に粘り付くような異臭を運んでくる。

この二日にわたって、砦の内外に流れた、彼我の将士の血や肉片が、折からの暑熱に、ようやく腐りだしたようだ。

澄み渡る空のもと、苛烈な攻防は来る日も来る日も続き、日一日、空高く秋の色に染まってゆく。

観世音寺から城攻めの様子を見ていた島津忠長は二十日に至り、前線の砦一つ落とせぬ上、後方へ移送される死傷者の多さにたまりかね、大将伊集院忠棟を呼び寄せた。

炎天下の攻城七日、日に焼かれぼろぼろになった面上に、針のような髭のあわいから、仁王のような目を光らせ、忠棟がかしこまる。

床机をすすめ、茶をふるまい、労をねぎらう。両将の間を吹き抜ける風に、はっきりと秋の色が見えた。

「堅固に守るのう」

「如何にも、ただ一息にと思うておりましたが、思いもかけず日時を費し、あまつさえ大切な将士を……」

首を垂れる忠棟を制し、

「真っ向からひた押しに押すのも良いが、ことここに至っては、便法も止むを得ぬ」

島津方としては何としても関白の軍が動き出す前に豊前へ進出したい。時が惜しい。

秋月の手の者を先導に、岩屋城の水の手の水源を探索せしめると共に、近在の百姓をとらえ、城の搦め手への間道と水の手の水源を一人一人、問い糺す。

この間も攻城の手は緩められず、城方にも手負い戦死者が増えてくる。紹運は砦をめぐり、将士を督戦しつつ、傷者には手づから薬を与え、死者は念佛し、線香を手向ける。

矢玉が唸り、獣にも似た雄叫びと硝煙の中、南無の声とともに、清浄なる香煙が、血の臭いを、死者の腐臭を、瞬間、消し去って流れてゆく。

この日、恫喝と目の前に積まれた黄金に、ついに一人の百姓が口を開いた。

おびただしい枝葉と土砂が投じられ、城中屯水への給水は、絶えた。

その夜、紹運は城中の全ての水瓶に水を満し、屯水から汲めるだけの水を汲み上げた。

「まず、もって四、五日」

そう判断した紹運は、合力の百姓、町人、籠城者の妻女など、大半の者に金銀を惜しみなく分け与え、夜にまぎれて落とした。

兵粮は切れても戦えるが、水なくしては一日も戦えぬ。

一方立花においては、昼も夜も、岩屋の方を望み心中、念佛を唱える。

大城山の向こう、天を焦がす黒煙を見たのは開戦初日であった。城下の大半と、城内の家々の多くも島津方の火矢によって灰燼に帰したと言う。けれども、夜毎の小荷駄による兵粮は確実に受け取られ、将士の意気はいささかも衰えぬと言う。

城を囲繞する数万の敵に、一歩も退かず、攻防七日、千に満たぬ将士の心事、万死の上に安居する。悲愴という外ない。

島津忠長の元へ、小倉城にある稲富羽左衛門よりの密使来着。

関門の港々は、この春以来、乗船場が整備され、壘砦が各所に築かれつつあること、豊後の大友義統と毛利輝元の間に、使者が頻々と往来し、関白軍の南下近きを知らせ、一日も早く軍を進めるように求める。

水の手を断ち、数日をおかず開城の止むなきに至るであろうと踏んでいた、島津忠長、伊集院忠棟等攻城の諸将は、ここに至り、多少の兵を損じても、一刻も早く城を抜くことを決意した。

二十三日、忠長自ら指揮を採り、城の八方から矢玉を尽くし攻めかけたが、紹運の采配の下、城方は堅固に支え、持場、持場を死守する。

痩せた月と星明りをたよりに戦っていた両軍は、たちまち雲に視界を奪われ、山が砕けたかと思う雷鳴と、目をおおう白光のはためきと共に、地を揺るがすような雨に見舞われた。

肌を裂くような勢いの雨は、山腹を川となって走り、ただちに瀧となって迸る。

島津忠長は、止むなく攻城を中止する。

漆黒の闇の中、火縄を濡らし、あごの先から雫を流し、泥濘に足をとられ、山下の本陣の篝を目指し、消えがちな松明をたよりに、はだへの芯から冷え切った体で、言葉もなく山を下る。

明けて二十四日、日輪の移ろいもわからぬ暗さの中、殷々として四界を震わせて雨は降り続ける。

城方におとずれる、束の間の平安。

仮屋のもと、盛んに火を焚き、十日ぶりに固い飯を喰い、酒で心を暖める。長い戦いの間、汗と血にまみれ、異臭を放っていた体を浄め、髪を梳る。

気力は体に満ちていても、この十日の間、休みない攻防に、肉体はみるかげもなく肉が落ち、あばらが浮き出している。

この雨が上ったら。

少しずつ細くなり、やがて、静かに糸のように落ちてくる雨と、ほの白く、明るくなってゆく空を見上げる城兵の胸中に、同じ思いが去来する。

二十五日、攻防十日の間、彼我の将兵の血汐で汚れた山腹は洗われ、樹々の緑は匂い立つように、みずみずしい。心の浮き立つような風が吹き抜け、空は、無窮の青に輝いている。

この日、山腹の水を含み、足元の定まらぬ故、忠長は兵を休ませた。

二十六日となった。

満天の星明かりに呼びかけるように鳴きしきっていた虫の声が、ピタリと、止んだ。

びっしりと、苔のように、島津軍が城のまわりにはりつく。城の外郭を固める砦、砦に向けて、数

百の鉄炮が、まわりの樹木を赤く染めて火を吹く。続いて火矢が、生き物のように唸りを立てる。

全軍の殺気を、この一瞬にたたきつけ、銃弾と火矢の下、目を光らせ、五体を破るような鯨波を上げ、蟻のように群がり、砦に取り付く。逐一、敵の動きを見ていた城方は、激しく応射しつつ、砦を越えようとする敵兵を、槍で撲りつけ、おめきかかる口中めがけて矢を放つ。

東の空に金星が、全ての星を見送り、最后の輝きを放つころ、紹運は、貝を吹かせ、砦を捨て、勢を城中へ退かせる。

秋月押、風呂屋谷、百貫島、すべての砦の守将は、火の出るように戦いながら、兵をまとめ、徐々に城中へ退いてゆく。

十余日にわたる城攻めで、始めて城方の後退を目のあたりにした、島津軍の戦意は十倍し、犇めき合いながら、砦に群がる。

三の丸の西、観世口の守将は、五十才をこえた老練の、城代屋山中務少輔であった。

貝を聞くや、屋山はことさら強く、二押し、三押し、敵兵を押し戻し、ゆるゆると兵を引く。狭隘な谷の向こうに、三の丸の城壁がそびえ、巨大な城門が、口を開けている。

百の手勢に、弓、鉄炮を斉射させるや、急峻な坂道を駆け登り、風のように門内に吸い込まれる。

ついに、城門を目のあたりにした。この攻め口は取ったも同然。

喚声を上げ、竹束、楯を押し立て、梯子を従え、軍勢が、谷を埋める。

城壁、城門に取り付いた途端、銃弾と弓矢が、頭上から襲いかかる。草を刈るように、なぎ倒され

る先手ものかわ、勢いのついた攻め手は、密集して、城壁に押し寄せる。

ころは良しと見た屋山の采配一下。

眼下にひしめく島津軍目がけて、巨石、大木が投下される。狭い谷に満ちた、千余の兵は、身を躱すこともできず、ほとんど無防備な体を微塵に砕かれてゆく。撤退を命じる薩将の声も、絶叫と骨肉の裂ける響きにかき消されてしまう。

ようやく明けかけた空が、谷に淡々しい光を投げるころ、観世口の島津軍は兵を引き、言葉もなく、立ち尽くしていた。

剽悍をもってなる彼等も、肌を粟立て、膝を震わせる。

三百を超える味方が、一瞬にして打ち砕かれ、血は川となって、流れている。

赫然として昇る朝日に、蒼白の頬を照らされ、「地獄じゃ」

幾度もくり返しながら、手を合わせる。

遠くに戦いの気配がある。

島津忠長は兵を引き、再び、開城を説得すべく、城中に矢止めを乞う。

説客、新納武蔵守蔵人、単身城へ向かう。

両軍、寂として静まる中、甲冑の塵を払い、威儀を正し、内野口より、たったいま抜いた、秋月押えの砦を越え、本丸下へ進む。

紹運は櫓の狭間から半身を現し、あいさつを受ける。

「拙者、高橋の臣、麻生外記と申す。主に替って用向きをうけたまわる」

去る天正十一年、肥前、肥後、筑後、豊前に、島津の勢力猖獗を極めたとき、島津との折衝につかわし、島津方に良く名を知られた立花の臣の名を借りる。

新納これに応じ、両足を踏んばり、朗々と語りかける。

「紹運公におかれては、この十年、城を守り諸人に情をかけられ、数々の戦いに功あること、我等、とく存じており申す。しかるに、近年衰微の一途をたどる、大友方へお味方故、何一つおためになることなし。一張一弛は武士の習い、張りて弛まぬは文武と為さずと申す。時代は島津に動いており、もはや止めることかなわず、ここは、弓矢を収め、城を開けらるべき時と存ずる。この蔵人、島津殿によしなに、お取次申そう。大友殿は、六ケ国の大守であられたが、吉利支丹に帰依せられ、佛神をないがしろにし、寺社を没倒さる。天道に背かれし故、自ら天命の加護なく、いまでは、豊州一国さえ治めがたい有様。三略にも、義者は、不仁者のために死せず、と申す。いまこそ、政道正しき島津に、ご同心あるべきときと存ずる」

いちいちうなずいて耳を傾けていた紹運は、

「さてさて、新納殿とも思えぬお言葉、主紹運に申し聞かせるまでもござらぬ。この外記、即今お返答致す。よく聞かれよ。

盛なる者は必ず衰え、生ける者は必ず滅す、これ世の習いでござる。先ず、源平の昔より今日まで、盛なる家は一つもこれなく、公方をはじめ、斯波、細川、山名、一色、数々の名家、大豪、ことごと

く破滅致した。

大友家は、源頼朝将軍の御代より、名字の絶えることなく、ことに、この数代は、御門葉を賜り九州の探題職として、六ケ国を掌握して参った。かかるが故、島津殿日向の伊東侵略の折、九州を治めんがため兵を出し、諸軍を討たれ、それ以後、幕下の大名ことごとく逆意を企てることとなり申した。とにかくも、大友家なればこそ、いま一ケ国余も治めてござる。

島津殿と申せば、十年前には、根后、肝付、本郷、北原の者共、鹿児島に乱入し、一郡さえも治め得ず。いま、大友の武威衰え、たちまち世に出られたが、広言を吐き給うな。まこと鳥なき里の蝙蝠、貂なき山の鼬でござる。不日に関白秀吉公、九州に軍勢を送られ、島津殿の滅亡、いよいよ近し。また、主人の盛なるとき、功名を顕し、用に立つ侍は、いくらもござる。主人の衰えた時にも変らず、腹を切り、忠に徹してこそ名ある者の仕様。

貴殿も、島津殿滅亡のとき、主を捨て、命を惜しまるるか。松樹千年の齢を保つとも終に朽ちる。槿花一日の栄、これに劣るものではない。城攻めの衆幾万人、だれか百年の齢を保ち得よう。かようなことを思われ、義理の二字をお忘れあるな」

筋道正しく、自分が反対の立場にあれば、武人として、かく答えるであろうところを説かれるうち、蔵人は説得の無駄を悟った。

麻生外記と名乗るこの武者、その風采、物腰、堂々たる語り口からして、城将紹運、その人であろうと感じた。蔵人は櫓にある外記と名乗る入道姿の武者を見つめる。

再び生きて相目見えることはあるまい。一切の迷妄を払拭した武人の清々しい覚悟が伝わってくる。

「あいわかり申した」

口の中でつぶやくと、一礼した。

紹運無双

新納蔵人の報告を受けた島津忠長は、城攻めを強行しようとする諸将を押え、最後の望みを、荘厳寺の快心和尚に託し、再び、紹運説得に向かわせた。

関白軍の西下の近い今、いたずらに城攻めに費す時間はないし、兵力は、極力温存しておきたい。快心は、前回説得がならず、いままた蔵人が無為にして帰陣したことから、何としてもこのたびは紹運を説き伏せようと、必死の思いを面上に漂わせ、

「このたび、八ケ国の軍五万余をもって御城を囲み、互いに死力を尽して、はや十日の余。紹運公におかれては、寡勢にての籠城にもかかわらず、至妙の采配。誠に、古今に比類なき働き、真に武の名誉と存ずる。

いまこそ、和を講ずるの時でござる。籠城の方々のお命を安んじ、高橋の家名のためにも、何とぞ、お考えあってしかるべしと存ずる。岩屋、立花、宝満の三城はもとより、所領も安堵いたしまする。また、寄せ手の諸将合議の上、ご子息の内お一人、人質としてお受け致したく、立花、宝満とも早々

にお話あれ。我等、ただちに軍勢を引き申す。さらに、紹運公お力添えにより、豊州、薩州の和のなるとき、質人をお返しいたし、共に中国より京へと攻め登り……」

情に訴え、利に誘い、語り続ける快心を、端然、膝に手を置いて紹運は正視する。

「快心殿には、二度にわたり当岩屋へお運びの上、御懇篤なる仰せ、紹運心よりお礼申し上げる。まず、三城ならびに封領のことは、主大友より許されし、我等が食地。島津殿に御恩を受ける筋は、ござらぬ。質人のことは、関白殿下か大友公の御用以外は思いもよらぬこと。また、某、島津殿の和を容れ、統虎、統増と談ずることありといえど、彼等同心せざることは明白、この紹運、面目を失なうのみならず、永年にわたる、主家への忠義も失せ申す。人の運窮まるとき、いたずらに心を動かし、見苦しき振舞いに及ぶは、武の恥とするところ。関白殿下の軍動くといえど、当城の後詰めは難し。されば、この紹運、心ゆくまで防ぎ戦い、城を枕に討死いたす。島津殿に、紹運の決意かくの如しと、伝えられよ」

青々と剃り上げた頭、炯炯たる眼光、面やつれしたとはいえ、紹運の全身より発する気はあたりを払う。

快心また頭を垂れて城を去る。

ここにおいて、総大将忠長は、諸将に明日未明よりの城攻めを言い渡す。この時に至るまで、物見、間諜を放っても、数万の軍で囲み連日の激しい攻防の中、一人も城から逃れる者のないことが、無気味であった。籠城側の結束は固い。忠長は相当の犠牲を覚悟した。

この夜、立花表からの荷駄は、ついに届かなかった。紹運はじめ城に籠る者達にとって、兵粮、玉薬はもちろん、欠かせぬものではあるが、この使者は、ただ一つ、外部との絆であり、心の支えでもあった。城の搦手、屯水、全ての間道は、敵の知るところとなったに違いない。

二十七日寅の一天（午前四時）。

無数の兵が、じりじりと城に寄せる。城中七百余名、それぞれの持場に息をひそめ、星明りの下、大地が息吹くように迫る島津軍を、睨んでいる。

天地の境がかすかに白み、東の空が青く光るころ、黒々と彼我の姿が認められる。

鳥獣の眠りを破り、城を揺り動かすような鯨波を上げ、地を蹴って進む。寄せ手の大半は草鞋に足を固め小袴姿、中には下帯一つの者あり、甲冑を着す者はごくわずか。

紹運の采配のもと、決死の城方は、城壁の内から、あるいは櫓から、弓、鉄炮を放ち、石を投下し、熱湯を注ぎかける。

攻め手は、味方の屍骸を、乗り越え、踏み越え、竹束、楯をふりかざし、無二無三に城壁を目指す。寄せ手の諸将、この一撃で城を陥とすべく、最前線に出て叱咤する。

砂塵と硝煙に目もかすむ中、砂を噛み、喚声をあげ、矢玉の中を突貫する。

虚空蔵台下、本丸と二の丸の間の持口を固める福田民部少輔以下五十人の者、谷を埋めて攻め登る敵に、鉄炮を連ね支えること数刻、寄せ手は累々と虚空蔵谷に横たわる味方に目もくれず、石垣を乗り越え切り込む。乱戦の中、一人討たれ、一人傷つき、手勢の大半を失い、二の丸、伊藤惣右ェ門、

成富新五郎の持口へ退く。

日が中天に輝くころ、城の一角は破れた。守将伊藤は強弓の使い手として名高い。辻治右衛門、石橋弥助等配下の者共、

「引くな、」「引くな」

互いに声を掛け合い、殺到する敵に立ち向かい脇を固める。

伊藤の矢に徒矢なく、ことごとく胸板から背に抜ける。七十名の者、矢玉を尽し、刀を折り、持場の中に斬死。

崇福寺口から大手門への攻め口は、島津忠長指揮。城代、屋山中務以下百人、良く支えること数刻。ついに矢玉尽き城門が打ち砕かれる。忠長が槍をかいこみ、先頭に立って門内に躍り込む。兜の造り、太刀の拵え、名のある大将と見た城方が、どっと切りかける。

大兵の若者の胸板を深々と突いた槍の胴金を、万力のような力で押えられ、引こうとする刹那、血留めの上から、鈍い音を立てて折れる。とっさに刀を抜こうとする忠長に、刀槍が襲いかかる。甲冑は良く数撃を弾いたものの、数ケ所の浅手に思わずよろめく。

一足遅れの旗本に、危うい命を助けられはしたものの、己れの身代りに、宮原伯耆守、山本助六、森勘七、宮原土佐助など、股肱の臣を失う。

屋山以下鬼神の働きを示すといえど、そこここに倒れてゆく。

本丸北、百貫島の持口に、伊集院肥前守の軍勢を引き受けるのは、三原大和入道紹心以下百名。

武名もさることながら、歌道にも通じたこの入道は、女子と見紛うばかりの華やかな衣裳を身に着け、四尺余の大太刀を手に指揮をとる。配下の大方を討たれ砦に敵が満ちたとき、大石の上に躍り上り、太刀を額に当て、

「打太刀の　金の響きも久方の、雲の上にぞ、聞え上ぐべき」

涼やかに三度くり返すと、雲集する敵勢の中を切り廻る。刀法の全ての型を試すように、真っ向、袈裟、胴、片手斬、身に受ける傷を物ともせず、返り血に総身を染め、二十七人を切り伏せる。

したたかに切り付けた敵の首を掻き抱き、砦のはずれまで引き摺り、共に谷に身をおどらせ、三十九年の生を終える。

本丸櫓下の石垣の上から、足立弥平次は矢を射放つ。家人は呼吸をはかり、背後から新しい矢を弓手に添える。次なる的はすでに定まっており、一射ごとに一人が倒れる。

「やあ、あ奴を撃て」

寄せ手は、弥平次の弓の威力に辟易（へきえき）し、物陰から盛んに鉄炮を放つ。兜の鉢に澄んだ音を立て弾がはじけ、弥平次の首がゆらぐ。

「疾く落ちよ」「疾く落ちよ」

射ながら弥平次が家人に命じる。家人は、黙然、矢を差し出す。

幾十人を倒したか、ゆっくりと引き絞った弓絃が、音を立てて、切れた。ここぞと狙い撃つ鉄炮。弥平次の弓手がはじかれるように後方へ引っぱられ、投げ出された弓が、乾いた音を立てる。「落ち

よ」右手で刀を抜きながら家人に叫ぶ。物狂おしいうなりを上げ、屈強の敵兵が、弥兵次をかばおうとする家人を、刀ごと真っ向から切り下げる。一間ほども吹っ飛び、血を吹く家人に目もくれず、弥兵次に体当りし、鎧を深々と差し貫く。

いつ持ちかえたか、無言のまま弥平次の九寸五分が、敵の背後から、鎧の繰締をくぐり水月に抜け、巌のように抱きすくめる。

二、三度目をしばたたいた弥平次は、よろめく足を踏みしめ、櫓の上の紹運を探す。

櫓から悲痛の面差しで身を乗り出す主を見上げ「……」何事かをつぶやき、引き組んだ敵と共に、ゆらり、崖下へ落ちてゆく。

「弥平次……」

片手拝みに念佛し、紹運は瞑目する。

長い夏の日も少しく西に傾くころ、人間の限界を超えた戦いがつづく。城中は、死者と傷つき動けぬ者共でいっぱいになった。空腹を忘れ、突如、灼けるような喉の乾きに襲われ死者の水筒を奪う。既に死の恐怖はなく、闘う本能だけが、疲れ果て、強ばった五体を支えている。切り払っても、突き伏せても、時には離れ、あるいは囲み、地から湧くような寄せ手の人数に、金鉄ならぬ城兵は、ここに討たれ、かしこに首を挙げられてゆく。

乱入する敵兵のようやく多くなるのを見た紹運は、江渕右衛門、三浦式部、黒岩隼人、の三名に、城中の婦女子を、思い思いに落とさせると共に、自らの妻と娘を自害させ、介錯をするよう命じた。

城代屋山中務の一子太郎はこのとき十三才、手を引く母を、振り切り、振り切り、顔中を目にして、父の奮戦を見つめていた。

総髪もすさまじく、返り血に染り、疲れ果てた中務は、受けつ躱しつしながら、わずかな配下と防ぎ戦っている。

二の丸のはずれまで退き、踏みしめる足を滑らせたとたん、折り重なるように押し寄せた敵兵に、あっという間に、首の無い、赤い肉の塊と化した。

悲鳴を上げ、涙をほとばしらせ、太郎は太刀を打ち振い、父の仇を討たんと駆け出す。白麻地に藍色文様の着衣もさわやかな、前髪姿の少年が、気違いのように切り込んでくるのに、寄せ手は、一瞬ひるんで、囲みを開ける。つやつやしい頬を朱に染めて、斬りかかる太郎を、皆々顔を見合わせ、斬るに忍びず、太刀先を下げて、体を交す。

いかに少年といえ、縦横に切り掛られ、二、三人手負いが生じるにおよび、若い島津兵が前に進み、一太刀に切り倒し、せめても太郎の苦しみを短かくすべく、間髪を入れず、止めを刺す。

半ば放心状態で、左右を支えられ落ちてゆく母の手に、太郎を引き止めようとして果さなかった手に、引き千切れた片袖が、しっかりと握られている。

秋月の木所民部を将とし、島津の兵を加えた一千余の勢力は、百姓の案内をもって間道を抜け、水の手砦の村山刑部以下二十七名の防衛線を突き崩し、本丸の腰曲輪を乗越え、立花より加勢の吉田左京以下、二十五名の精兵と対峙した。ここから敵を入れては、本丸は八方塞がりとなってしまう。左

京以下、持場を一歩も退かず、二創、三創を負うても屈せず、全員斬死。戦なれした、加勢の島津方の将野村兵部、秋月の木所民部も、一人残らず頭を敵に向けて、ぼろのようになって斬死した城兵を見て、急に寒い風に吹かれたような心持になり、口をすぼめ顔を見合わせる。

半日に近い激戦の末、紹運以下、百に満たぬ人数が本丸に集合した。四囲は寄せ手の叫びに満ち、二の丸、三の丸が黒煙を上げている。城門が激しくゆさぶられる。

純白の麻の夏衣を着し、大長刀をかいこんだ紹運は、

「皆の者、儂と共に、最後の一働きしてくれい」

内側から城門の閂（かんぬき）を打ち砕かせ、敵勢の中に割って入る。中島左馬之助、中島大炊助など剛強の兵これに従い、捨て身の剣を振う。

陸続と入城する数千の島津軍は、口々に声を掛け合い、味方を励ます。

第一の寄せ手、たちまち全滅。第二の寄せ手二百名余り、またも半数以下に討ち果される。この間紹運、十七人まで切り払いながら身に数創を負う。

ひるんで退く島津軍を後に、紹運は天守の櫓に登る。従う旗本吉野左京介は荒い息の中、

「屋形に火を放ちまするか」

遺体を敵に渡さぬよう問いかける。

「その儀は無用じゃ。首を取らせることでこの紹運、義を守りて死せしことが判る。屍体を火にかけては、逃げ落ちたとの不審も生じよう。武は屍を晒さぬものというが、それは死に場所による」

本丸になだれこんだ島津軍の諸将は、櫓上の紹運主従を見、下を固める城兵を見て、事を悟り、兵を止める。

轟々と渦まいていた城の内外が、しわぶき一つないまでに静まり、申の半ば（午后五時）の太陽が輝きわたる。

身を乗り出すようにして、櫓下の城兵の顔々を見ること数瞬、床几に腰をおろした紹運は、顔の返り血をぬぐい、西の方を向く。

「南無阿弥陀仏、……」

朗々と念仏をとなえること十度。

掛け声もろとも腹を切り、脇差の血のりをぬぐい、首を差し出す。

吉野左京介が首を打ち、傍の台に安置し、同じ刀で自刃する。

崩れ落ちる紹運の首のない体から、息吹きが、無窮の空に、澄んだ笛のように糸を引いた。主の死を見極めた城兵五十余名、あるいは腹を切り、あるいは差し違え、ことごとく後を追う。

紹運の首を手中にせんと殺到する天主の扉に、

「かばねをば、岩屋の苔に埋てぞ、

雲井の空に名をとどむべき」

墨の香も高く、雄勁な筆づかいの辞世が認めてあった。

数十倍の敵を引き受け、城を支えること十余日、城主高橋紹運以下七六三名、ことごとく討死。

岩屋落城と引き換えに、寄せ手は、大将株二十七騎をはじめ、討死三千余人、手負い千五百余人、思いもせぬ損害を受け、取り返しのつかぬ「時」を失った。

長い修羅の一日も終りに近く、西の方、壮麗な雲の峰々が鮮やかな夕陽に染まるころ、本陣観世音寺の内外は、甲冑に身を固めた、おびただしい軍勢が、整然と静まり返っている。

広大な観世音寺の山内、方三町と称し、法隆寺をしのぎ、遠くは菅原道真が流謫の身を

都府楼はわずかに瓦の色をみる

観世音寺はただ鐘の音をきく

と詠じ、都に思いを馳せた。

正殿の前に主だった武将千余が堵列、左右塀ぎわをそれぞれ二千余の兵が固める。山内中央に、攻城の将、島津図書頭忠長はじめ、伊集院忠棟、新納忠元、野村忠敦等が床几に腰を掛け、山門の入口を千余の兵が守る。山門の外、万余の軍兵が蕭然隊伍を組む。

忠長の背後に控えていた弓持ちの役人が立ち上り、片膝ついて弓を差し出す。

忠長はおもむろに、右手の軍扇を腰に差し、左手で弓を受け、弦を内側に、地に立てる。

敵将、高橋紹運に対する礼儀と、攻守双方の将が対面する、儀式としての「首対面」が催される。

木の香りも高い首台（縦横一尺六寸―五十糎弱―に三本の足を付けたもの）を二人の武者が運び出す。櫓に乗り込み、紹運の首を手にした者が右側を持ち、左手で首を支え、少し先を進み、両手で左側を支える者は少し遅れ、斜になって進む。

床几の諸将、首対面の礼式どおり、面をそむけ、近づく紹運の首から目を逸らしている。
白砂を踏みしめる足音が近づいてくる。
足音が、止まる。
首台を下ろし、右手親指を耳に、残りの指で顎をかかえ、左手を左頬から顎へかけ、首を少しあお向け、やや左へひねり、諸将へ首の右側を見せるよう、差し出す。
「首の奏者」が高らかに「高橋主膳兵衛鎮種入道紹運殿」の首、と呼ばわる。
本来ならば、忠長は床几を立ち、首を左手に弓杖を突き、斜に構え、右手を太刀の柄にかけ、少しく刀を抜き、左の目尻で、首を見なければならない。
長い攻城の間、痛撃を受けること数知れず、多くの味方を失い、憎かるべき紹運であるはずが、忠長の心中には、いつの間にか、紹運の采配と籠城の者達の働きに、敬愛の念が生じていた。
忠長は思わず床几を離れ、紹運の前に膝をついた。瞑目し、薄く化粧をほどこされた紹運の唇が、いまにも物言うかのように、色づいている。
「見事な采配でござった、……惜しむべし」
忠長の涙が、砂の上にいくつもの、小さな穴を穿った。伊集院忠棟はじめ、紹運の首の前に集まり、頭を垂れる。
三方に、酒と肴が持ち出され、大将忠長が盃を受ける。新たな三方を首の前に据え、紹運のために二度の酌をした盃を差し出し、静かに地面へこぼす。さらに一献、都合四度の酌をして、「首対面」

が終る。
城代屋山中務少輔はじめ、全ての城兵の首実験が終るころ、日はとっぷりと暮れ、篝火が、人気の引いた山内に、時おり、火の粉をはじいている。
おびただしい血と引換えに、太宰府の街並みに束の間の平安が訪れた。
寺々の時を告げる鐘の声が、攻城の終焉を喜びあう、陣所、陣所の軍兵の耳に、ことさら新鮮にひびいた。一方、新手の一軍は、明日二十八日、払暁よりの宝満城攻撃のため、早い眠りについている。
同じころ、立花城の統虎のもとへ、岩屋落城、城将紹運以下全員討死の確報がもたらされた。重臣あい集う広間に、闇が押し寄せたように、重苦しい空気がみなぎった。
「大儀であった」
荒い息の中、汗とほこりと涙にまみれた顔を光らせる物見をねぎらう統虎のこめかみのあたり、墨を掃くように血の気が失せてゆくのを、小野和泉は、己れの総身に鳥肌を立てて見つめていた。
このような結果を将来することは、覚悟の上であった。しかし、いま一日、いま一日、持ち堪えてくれよと、思いつつ日を数えた。
冷厳な事実の前に言葉はない。由布雪下、薦野増時等の重臣も、いかつい肩に、首がめり込んだように、頭を垂れている。
「我等がしおたれていてどうする」
落着いた統虎の声がひびく。燭台の灯火がどこからか吹き込んでくる風にあおられ、一座の影をゆ

する。

「父上も見事、腹を召された由、城中の者、屋山をはじめ天晴れな武者振り、死して名を千載に残す。冥福を祈るほかない」

「島津は、宝満を押え、当立花を目指すは必定。備え、備えの者共の心を励まし、兵粮、玉薬を少しでも多く積むことじゃ」

いたずらに悲しみに沈んでいる時ではない。戦場往来の小野にしろ由布にしろ、死はもっとも身近なものである。

けれども、主君統虎の父親である紹運以下七六三名全滅の報を受けて、心ふるわずにはいられない。月がかわれば、二十一才になる、若い統虎が悲しみを振り切って、明日への闘志を燃やしているのを見、一座の者の心に熱い力が湧いてくる。しかし、多大の損害を蒙ったとはいえ、島津勢は、五万近い兵力を保っている。立花の総勢二千余名、岩屋と違い、立花は山高く堅城といえど、この大軍を迎え、戦うべき術（すべ）があるのか。

夜半。祖廟に紹運麾下の霊を祭ったあと、統虎は、道雪ゆかりの書院に端座する。道雪遺愛の机上に、幾冊かの書物が、影を落としている。「書を読めよ」なつかしい体にひびくような太い声が聞こえてくる。

いままた、実の父を失った。

いかに苛酷な十余日であったろうという思いと共に、幼時よりのさまざまな父の俤（おもかげ）が脳裏をかけ

ぬける。ただ、母と妹の生死が判然としないのが、救いといえば、救いであった。

父や屋山たちは、命を捨てて、後事を立花宝満二城の者達に托した。関白の軍西下の日まで、いかなる困難が襲おうと、城を守らねばならぬ。

統虎はいま、自分が生涯の大きな岐路に立っているのを見た。困難にも恐怖にも背を向けては負ける、面をそむけず、真っ向進んでゆくしかない。

入道生還

二十八日、大坂の関白秀吉に、急使を発す。島津軍と戦い、岩屋城将高橋紹運以下七六三名全員の討死を告げ、今明日中にも宝満城を攻め、大軍は立花へ向かうであろうこと。

籠城の態勢は整うているが、長期にわたるとき、弾薬、兵粮の欠乏は明白、その補充も併せ願う。

九日に発した書状は、関白の目に入ったであろうか、よしんば届いていてもその返報は、八月の半ば以降になるであろう。神速に援軍の手立てありといえど、立花到着は、おそらく八月の末となる。

統虎は、いまさらながら、父紹運が、頑として岩屋に踏み止まり、死をもって時をかせいだ意味を、噛みしめている。あと一と月、島津の軍勢をこの立花に釘づけにしておけば、援軍はさしたる抵抗もなく関門海峡を渡海し、筑前へ進出できる。

鹿児島より長駆筑前まで、炎天下の攻城の数々、甚大な死傷者、長い陣中の暮しに疲れ、望郷の念

日毎にまさる島津軍は、兵の志気をふるい立たせる術をもたない。統虎は、時の重みを知り、情勢を俯瞰できる自分に、一筋の光明が走るのを、覚えた。

同じ日、島津忠長は、片野の丘の上、縹渺たる般若寺跡で敵味方の戦死者の霊を祭るため、盛大な供養を催した。

秋月より、仏心寺の茂林和尚を迎え、数十名の僧による読経の声は、黙祷する将兵の魂を清め、秋色濃い野辺に、名も知れぬ花々の末にまで広がっていった。

わき出ずる雲のように、香煙立ち昇る中、身心を洗う気高い香りに身をひたし、きのうまで、血を求め、修羅の巷に狂うた者共が、蕭然、声もなく立ちつくしている。

年老いた和尚の手に、純白の毛を束ねた払子が動き、頬が若者のように紅潮し、凛々として一偈を頌する。

一将功成冠九州　戦場血入染川流
殺入刀是活入剣　月白風高岩屋秋

腸を破るような茂林和尚の引導の大喝を聞いたとき、忠長は、紹運はじめ、彼我の将兵の霊魂が、穢土を離れ、浄土への旅に飛翔するのを見た。

この日、島津忠長の命を受けた三万余の軍勢は、宝満城を目指して、攻め登った。

一方、立花城下では、老臣たちの縁者を求め、あるいは檀那寺の僧を遣わし、立花籠城の不利を説かせている、一隊があった。

岩屋攻城十余日、鹿児島より長駆、戦いの日々を暮らしてきた島津軍本隊はもとより、合力諸豪の軍兵どもは、戦に倦み、望郷の念日毎につのりつつある。

一日も早く、立花、宝満を開城せしめ、関門を押え、兵を休めたい。

向こう見ずの気鋭の若者よりも、人生の晩景に差しかかった老人の方が、生命の重みを、知っている。さらに老人の一言、良く軍議の方向転回の力を秘める。

彼の誇りを傷つけず、家名の存続を説き、城兵の命の貴さを、語りかける。

岩屋の全滅を聞き、弱った心と、指呼の間に迫る数万の軍勢、己亡きあとの、主家の存続を願う心は、つよい。

立花城内の広場では、誾千代が二十名余りの若い侍女達に、甲冑を着せしめ、連日、激しい調練を行なっている。

城の一方を受け持ち、敵を挫こうとの気概が、色白く端整な面ざしの、目を吊り上がらせている。道雪以来の老臣の多くは、先主の遺児を崇めること信仰に近く、ひたすら、誾千代の行為を喜んでいる。

居室にあっても、城内を見まわっていても、時折聞こえてくる、甲高い掛け声を耳にすると統虎は、知らず思考を止め、腕を組み、宙をあおぐ。

古来、女武者の勇気や、働きあることを、知らぬではないが、統虎にとってこのたびの島津との戦いは、亡き道雪、紹運に贈るべき、男の戦いである。純一無雑、ただ家を思う誾千代の一念に発する

ことを知れば、これを止めることもならず、深い息をつき、静かに瞑目する。
宝満山の頂上近く、生い茂る樹木の間に、無数の島津軍の旌旗が見えかくれし、往く夏を惜しむ、法師蟬の声が、とぎれとぎれに、こだまする。
城方の見張りも目に入らぬかのように、悠々進み出た軍使が、城門をはげしく敲き、案内を乞う。
紹運二男統増を頭に、筑紫、高橋両家の者共わずかに二百余名、さらに、岩屋より受け入れた多くの老幼婦女子が籠る宝満城は、戦う条件を欠いていた。
ことに、表裏定まらぬ筑紫方の者達に対する、高橋方の疑念おおいがたく、
「統増公を弑したてまつり、島津に寝返るのではないか」
棘のように神経を立てている。
筑紫の者達にしてみれば、主広門降り、高橋紹運以下七六三名の、無残な最後を知ったいま、「互いに主を失のうたいま、数万の敵を相手に籠城することは、愚挙じゃ」
和を整えるにしくはないと、考える。
山高く、早くも秋の気配濃い風が、吹き抜ける大広間、年ようやく十五、性温順な城将統増は、黙然、端座している。
「我等、岩屋へ入れおいたる質人の生死も判然とせず、島津軍が、岩屋より逃れた高橋家中の婦女子を矢表に立て、城を攻めんとする今、あえて戦を求めず、和を講じては、いかがか」
筑紫方の言に憤然として、

「城外のことは、思案無用と存ずる。紹運公はじめ七百余名の方々、義のために命をなげうたれたいま、どの面下げて、生を貪ることができよう。拙者、敵幾万といえど、力の限り働いて、切り死いたしたく存ずる」
若い北原進士兵衛が、面上朱を注ぎ、唾を飛ばし、叫ぶ。
「我等とて、命を惜しむ者ではない」
脇差しの柄頭をたたき、
「両家の主を失のうたいま、かかる小勢と老人、婦女子で敵に向かい、如何程の戦いができよう」
互いに我意を通そうとする。
長時間にわたる協議に疲れ、首を垂れ、肩を落し、一座が言葉少なになったとき、高橋方の伊藤源右衛門が語りかけた。
「越王勾践は胆を嘗め、長い艱難の末、会稽の恥を雪いだ。源頼朝公は、蛭ケ島に配所の月を見る身から起ち、ついに平家を滅ぼされた。統増殿にも、ここは一旦の恥を忍び、城を開け、高橋の家のためにも、時節を待たれた方が、良いと存ずる」
一座の者達の心中に、開城止むなし、の考えがきざし、主将統増に、誰が、明確に表明するかを探っていた折、重臣、源右衛門の一言は決定的であった。
「主統増を、無事、立花城へ入れること」この条件に島津側は誓紙を出し、宝満開城は決まった。
時に七月二十八日。

この直後、八月三日、秀吉は、高橋紹運、立花統虎あての書状を発した。

内容は、七月九日の急報を受けたこと、大友、毛利の和のなったこと、毛利及び両川に出兵を命ずべく、黒田、宮木両名を発向せしめたこと、後続の援軍の用意のあることなどを、述べている。

伊藤源右衛門、北原進士兵衛などに守られ統増が、木の間から洩れ、面上に花のように注ぐ光に目を細め、城門を出る。

約定どおり、弓、鉄炮、槍を城内に残し、立花への統増護送の途についた二十名余りの者を、火縄に火を点じ、用心金に指を添えた、二百余の軍兵が、ひしと固める。

峰を分け、潺々たる谷川の響きを足下に進むうち、源右衛門の顔色が変った。

「またれよ、立花への道は、そちらではない」

一文字の眉に、眼窩のくぼんだ、鉄炮隊長が歯を剝いて、

「愚図愚図言わず、進まれよ」

居丈高に言い放つ。

「誓紙をもって言われたことを、無視さるるおつもりか」

「弓矢の前では空誓紙もある」

低く嘯いて歩を早める。

火縄の匂いにつつまれ、鉄炮の筒先きで小突かれるように山を下る高橋家中の者達は、渦巻く憤怒に耐え、目を血走らせる。

突然、林の中から、人の気配に驚いた一羽の雉が、高く鳴いて、羽音も荒々しく、一行の頭上をよぎる。

雉の行方を追う彼我の将兵は、怪しい音とともに、両断されて、立木に激突する鳥の姿を見て、息を呑み、足を止める。

高橋の臣、今村五郎兵衛のやり場のない怒りを長刀に籠めた一撃であった。

統増は、太宰府の南方、天拝山麓、武蔵村、筑紫の臣帆足弾正の屋敷に幽閉の身となった。八月六日、宝満城は、完全に島津方のものとなる。

この間、島津忠長は、星野吉実、吉兼兄弟を立花城に送り、開城を迫った。

兄弟は、立花山と宝満山を結ぶ線上のほぼ中間に位置する、若杉山の西に連なり、高さ千二百尺余（三百八十米）岳の山とも呼ばれる山頂に二つの砦を構え、「高鳥居城」と称した。

「岩屋は落城し、主将紹運殿自殺、いままた宝満開城し、御母君、宋雪尼と令弟統増夫妻は、我が手にある。島津の武威、九州にあまねきいま、その意に従うの外ござるまい」

「立花殿に対し、島津は、何の遺恨もこれなきにより、ただちに、城を開けらるれば、和を講じ、兵を引きもうす」

統虎の母と弟の命を楯に迫る。

城内の広間には、由布雪荷、小野和泉、十時摂津、薦野三河守、内田壱岐入道以下、重臣はじめ若者達も雲集し、侃々諤々の議論が果てしなく続く。

立花家の存続、人質のこと、比較にならぬ大軍、開城派の意見は一々もっともで、説得力に富んでいる。

自ら刀槍を握ることのない老臣も、皺だらけの口元に泡を噛み、畳を叩いて、開城を主張する。決戦派は、老人の言を聞かぬ振りをして、自説を述べ立てる。

「意見も出尽くしたようじゃ、儂が決意を聞いてくれ」

統虎の声に、一座は姿勢を正し、全身を耳にする。

「勇士は、義を重んじる。如何に敵大軍といえど、岩屋、宝満落城の弔合戦もなさず開城すること、思いもよらぬ。儂は、恥を忍んで生きるよりも死を選ぶ。命惜しき者は、一座果ててのち、城下へ去るがよい。今日までの忠義、有難く思いこそすれ、いささかも恨むところはない」

若い城将の、断固たる意思の表明は、一座の者共の心を鷲掴みにした。

一人として城を去る者なく、籠城の議は決した。星野兄弟に託した、島津への答書に言う。

「我が父紹運は、関白秀吉公幕下として、岩屋に義死を遂げ、母と弟達は、幽囚の辱しめを受く。薩州探題の前に、膝を屈するのいわれはない。彼等がためにも、立花山を血に染めて、討死する覚悟。島津征伐のための、関白軍の西下近きいま、手遅れとならぬうちに、疾く、軍勢を差し向けられよ」

「小癪な言い様かな」

忠長は眉をしかめたが、急には兵を進めず、寺僧や、縁者による、城中への扱いを続けしめるとともに、数度にわたり、城中へ使者を送り、開城を求める。

岩屋において多大の死傷者を出し、いままた立花城を力攻めにすることは、前に数倍する犠牲を、覚悟しなくてはならない。

兵は疲れ、望郷の念日毎にまさる。彼等の目の中に燃えていた殺気がうすらぎ、遠く南の空を、茫然とながめていることが多くなった。

忠長は、軍を立花城下、香稚、下原一帯に押し出し、あたりを焼き払う。

突兀としてそびえる立花三嶽、夏雲のように茂り合う樹木の間に、様々な差物が見え隠れし、甲冑が光る。忠長のあせりをよそに、下原あたりで、鉄炮の小競り合いがあるうち、日が過ぎてゆく。

十六日、城中に秀吉の同月三日付の書状到着。城方の気勢は揚り、城を出、各地に小戦を挑む。同じころ、関門における、毛利、及び両川の兵の動き、急なることが忠長の元へ注進される。

「もはや猶予はならぬ、総攻めじゃ」

忠長は、伊集院忠棟に、十八日を期しての城攻めを命じる。

山上の曲輪から、島津方の陣営の動きを見ていた立花の臣、内田壱岐入道玄紘は、砦を見廻る統虎の姿を求めて走った。

「島津軍の模様、如何ご覧なされます」

「うむ、馬上の者共の常にない動き、陣営のざわめき、炊煙のおびただしさ、明日あたり、力攻めに、攻め寄せると見た」

小野、由布等の重臣は等しくうなずき合い、面上に殺気が漲る。岩屋に比べ、城堅固にして、手勢

も多い。しかし明日以後、関白の援軍到るの日まで、毎日、幾十、幾百の命が失われる。その貴い命と引きかえに、一刻、一刻を、たぐり寄せてゆくのだ。

「されば」

大兵赭顔、剃り上げた頭を軽く下げると、玄敍は、統虎の耳に口を寄せた。

大友家の軍師、蒲池宗蹟に学び、兵法衣川、八十余条の相伝を受けた玄敍は、道雪以来の旧臣で、軍功はもとより、白い眉毛と、瞑想するが如き細長の目、重厚な語り口は、その体軀と相俟って、鬼をも説き伏せると言われていた。

明日の城攻めに備え、雑踏する島津軍の中、玄敍は、馬取りと、長刀を持たせた小者を従え、忠長への対面を求めた。

島津の兵も、単身敵陣に乗り込んできた玄敍の、悠揚迫らぬ態度に気圧されて、直ちに忠長、忠棟の本陣に取り次ぐ。

秋の陽は傾き、陣場を固める軍兵達の顔を、茜色に染めている。

数多くの島津の宿将達の、肌を灼くような視線の中、淡々として口上を述べる。

「某は、立花家城代、内田壱岐入道玄敍と申す者。本日は、島津殿との和を議せんがため推参いたした」

陣営の中に、一瞬、安堵の空気とともに、疑念が走る。

「主君統虎は、若年にして恐れを知らぬ者。このまま我等闘わば、早晩城は落ち、立花の名は絶え

申す。そこで道雪公以来の老臣相議し、ようやくにして、開城し、島津殿の幕下に入ることを説得いたした」

玄敍は、懐中より、「島津図書守忠長殿」とあて名のある、統虎の書状を呈し、

「城を開け渡すからには、いささか城中整理の必要もあり、見苦しくなき態にてお渡しいたしたい。ついては用意相整うまで、数日の猶予を頂きたい」

統虎の、開城を受け入れるとともに、島津忠長の誓紙を求める書状を披見する諸将に向かい、「主君統虎の命でもござれば、この玄敍、そのときまで、人質として、貴陣に置いて頂き申す」

道雪以来の将、内田玄敍の名は、島津方においても、良く知るところである。統虎の書状は、万斛の涙を呑んで、開城止むなしを決意する、苦渋に満ちている。この申し出が虚偽であれば、玄敍は、島津の陣中に斬られる。

「養父以来の功臣を死なすはずもない」

忠長は全軍に命じ、明日の総攻撃を、中止せしめた。

日、一日、時が過ぎてゆく。

玄敍はこの間、大切な客として遇され、対面する島津の諸将と、古今の漢籍、兵法、文物について、縦横に論じ来たり、論じ去る。

閑々として、酒食のもてなしを受け、毫も屈託するところがない。

しかし、玄敍が島津の陣中に入る直前、毛利方の神田元忠、三刀屋久祐、桂元親等の将は、兵三千

を発し、関門海峡を制していた。

神田元忠の一隊は、更に進み、門司城に入る。二十二日夜、立花の間諜がひそかにこれを玄紀に告げる。

明けて二十三日、陣営に湯を乞い、頭を剃り、身を浄めた玄紀は、忠長以下、重臣に、面会を求めた。

「昨夜、城よりの知らせによれば、吉川、小早川の援軍入城し、豊後府内にも、仙石、長曽我部の手勢、押し渡ってござる」

声にならぬ声を発し、動揺する島津の諸将。「関白軍の西下近きいま、お家の滅亡も間近。虚言を用い、日をかせいだ罪、一死もっておわび致す。臣下としての忠、既に尽し畢んぬ。いざ、首刎ねられよ」

端然として瞑目する。

赫怒して玄紀に迫り、罵声を浴びせ、いままさに斬ろうとする諸将を、忠長が制した。

「上兵は謀を伐つと言う。入道が勝ちじゃ。死をもって城を救わんとする心天晴れ。立花へ送るが良い」

特に馬を与え、兵を添え、立花城へ送らせるよう命じる。

「立花へ戻るにあたり、今日まで貴陣にあった証拠となる物を頂ければ、幸いこれに過ぎるものはありませぬ」

言葉の終るまでもなく、新納蔵人が、定紋を鞘に研ぎ出した、脇差を抜いて、手渡す。

玄紀は、これを拝し、自らの長刀を蔵人に進呈し、馬上の人となる。

島津の諸将は、感謝の涙を浮かべ、振り返り、振り返りして、去ってゆく玄紀を、見送る。「鴻恩、死すとも忘れ申さぬ。忠節さらに励み、島津殿と戦場にまみえんか、粉骨し先陣を進み、見事討死して、この御恩に報ゆる所存でござる」

戦場を馳駆した者共にのみ理解できる、熱い思いがあった。

関門を扼された上、毛利、吉川の新手を迎えるだけの気力は、今の島津軍には、ない。

合力諸豪の裏切りも、予想される。

忠長は、囲みを解いて、兵を引くことを決意した。立花方の間諜が、ひそかにもたらした、「上方軍の先鋒現わる」の噂は、憶測を吸い込み、龍巻きのように、島津の陣営を走り抜ける。

「入道殿生還」

城は、二重の喜びに沸く。

一命もって、家のために抛ち、死地より還る。玄紀の報告を聞きながら、統虎は座を滑り、この老臣の肩を抱き、背をさすってやりたい思いにかられた。

身を乗り出すようにして、うなずく主君の顔を見ているうち、玄紀の幅広い肩がふるえだし、滂沱たる涙が、畳を濡らした。

その夜、星明りのもと、点々とした火の帯が、整然と博多の街に向かいだした。八代の本営にある

島津義久へ、状況を告げる急使を走らせるとともに、合力諸豪とも袂を分かち、それぞれの故国へ向かう。

将兵の帰心、一足ごとに勝り、古里の肉身、山河を想うの念が、胸にあふれる。

「兵を下原に集めよ、夜明けとともに、島津に戦いを挑む」

櫓から島津軍の撤退を見ていた統虎は、傍の由布雪下に命じた。

籠城すること、五十日近く、いま眼下に大地がうねるように退いてゆく軍兵を見て、安堵の胸をなでおろしていた、小野、薦野等の重臣は声を呑んだ。

いかに撤退にかかったと言え、わずかな手勢で追い討ちをかけることは、無謀と言える。

「城の備えも必要でござれば、手勢は千五百がやっと。余りに少のうござる」

「たとえ一時の勝を得られたとしても、かえって負の因となるやも知れず、今は城を支えることが第一と存ずる」

「島津が兵を返して戦わんか、野戦でござれば、全滅を覚悟しなくてはなりませぬ」

口々に、思い止まらせようとする。

統虎の、紹運をしのばせる切れ長の目が、星明りを受けて、涙に満ちている。

「その方共が言い様、まことにもっともである。しかし、我が父紹運の仇敵、島津忠長がいま眼下を去ってゆく。これを黙視せんか、その怯懦の心は、死すとも消えぬ」

「父の仇を報ぜず、母と弟の恥を雪ぐこともできず、どこに、生に安んじるの意味があろう。お前達に無理強いはせぬ。儂は島津軍のあとを追い、心ゆくまで戦おう。もし、斬死せんか、泉下の父への良き挨拶となろう」

満天の星明りを集めた、玉のような涙が一筋、統虎の頬を走り、鎧の胸板に燦然と砕け散った。

「即刻、手配仕ります」

小野、由布、薦野等の重臣は等しく頭を下げ、甲冑を鳴らして櫓を下りる。

花の武者

明けて二十四日、撤退する島津軍に火を放たれ、街並みのいたるところで、青黒く炎を吹き上げる博多を抜け、蒼惶として退いてゆく島津の後陣を、かつは追い、かつは退き、着々と戦果を上げてゆく。

この間、統虎の旗本、綿貫佐兵衛は、兜首を挙げ、一番槍の名誉を受け、内田玄敍の長刀のもと、首級十余が落ちた。

島津軍は、戦いに敗れたわけではない。しかし、ひとたび大軍を返すとなると、戦意は著しく低下した。

殿軍の将の叱声も空しく、軍勢の意気は萎えてゆき、執拗な攻撃が、恐怖を生み出す。

島津軍の跡を慕うこと八里（三十二粁）余、筑後川、大木の渡し（福岡県三井郡北野町）は、午後

の陽に、ゆるやかに、豊かな水をはらんでいる。

島津忠長は、後陣を入れ替え、邀撃の態勢を作ろうとする味方を押え、

「あの小勢で、我等にここまで追い討ちをかけること、討ち取るには惜しい武者振り、疾く、川を渡れ」

「疾く、川を渡れ」

自ら馬を駆け廻し、軍を向こう岸に、備えさせる。

島津軍の渡河を見届けた統虎は、ただちに兵を返し、忠長もまた、肥後八代（熊本県八代市）の本陣を目指す。

翌日、余燼のくすぶる博多の街を横目に、立花勢五百は、三里（十二粁）余の道を一気に走り、若杉山頂から西、「岳の山」の星野兄弟の東西二つの砦（高鳥居城）を睨んだ。

星野兄弟は、島津との義を守り、全員斬り死にをする苛烈な戦いとなり、寄せ手の小野和泉は、投石に脚を砕かれ、統虎は最前線で指揮を採るうち、兜の吹き返しに、銃弾を受けた。

中でも、守将吉実は、巨軀大力、天馬空を往く働きを見せながらも、長刀の刃こぼれ、太刀を折り、すでに城中に退こうとするところ、立花次郎兵衛が礼拝し、刃音もすさまじく一太刀を浴びせる。続く十時伝右衛門、よろめく吉実を突き伏せ、首を挙げた。

この両名は、功を具申するおり、互いに譲り合い、その心映えを統虎は賞賛し、共に感状を与え、これに報いた。

岩屋籠城に劣らぬ、星野兄弟の義心に感じ、統虎は、戦後、厳粛に首対面をとり行ない、二人の首を、那珂郡堅粕村に葬った。

星野兄弟の名、吉実、吉兼を称え、人々はその塚のある土地を、以後、吉塚と呼び、その地名は、今日に至っている。

高鳥居の落城は午の刻（午前十二時）、統虎の軍勢は息つく間もなく、腰兵粮を使いながら、更に二里（八粁）の山道を、統虎の父紹運切腹の地、岩屋城へ殺到する。

岩屋の守将は、秋月方の臣桑野新右衛門、手勢三百をもって、これを守る。

岩屋の地形、砦の役割、すべて掌を指すごとく、統虎は、剽軽で猿のように身軽い、小野理右衛門を呼び、策を与える。

冑をとり、鎧の袖を外した理右衛門が、地を這い、崖に張り付き、影の移ろうように、城中に吸い込まれる。

秋空に、一点の雲なく、彼我の甲冑が、兵の動きにつれて、五色の光彩を放ち、吹き抜ける風は、さわやかに将兵の眉毛をなで、旌旗にたわむれてゆく。

父紹運死してひと月、なつかしい城の姿は、見る影もない。砦はいたる所、黒こげの木材が積まれ、応急の補修のみなされている。

島津の大軍に囲まれている立花勢が、まさか岩屋奪回のため攻め寄せるとは、思いもしなかったのであろう。城中の様子はあわただしく、兵の無用の動きが、目に付く。

統虎は、二の丸、三の丸を無視し、主力を本丸に集中した。ただ、四王寺へ連なる、水の手砦、山城戸砦、百貫島砦の寄せ手は、意識して、薄くする。

少しく傾きかけた太陽のもと、静かに下知を待つ立花勢の目に、二の丸・中の丸・三の丸、点々と白煙が上り、見る間にはげしく、炎を吹き上げる。小野理右衛門の、高鳥居城に続く働きが、実った。うろたえる城兵の声に応えるように、統虎は鯨波を作り、鉄炮を連射させる。

押し寄せる立花勢の顔を見るまでもなく、城兵は、なだれを打って、手薄の四王寺方面へ逃散する。

「追い討ち無用」

鯨波を上げ、旗を振る立花勢に背を向け、鉄炮を捨て、弓を抛ち、身一つで秋月へ走る。

一兵も損ずることなく、岩屋は統虎の手に帰した。

わずかに落城前の面影を止める本丸の跡に入り、実父紹運が屠腹した櫓を見上げ、統虎は立ち尽す。

本丸内の扉になお残る。

「かばねをば、岩屋の苔に埋てぞ
　雲井の空に、名をとどむべき」

亡き父の声が聞こえてくる。

「父上、父上」

語りかけるべき言葉を探る。

不意に、城攻めに加わっていた世戸口十兵衛が、声を放って泣き、そこここに茂り合い、折りから

の風に、笑まうように震える、彼岸花の群れに、身を投げた。只一人、統虎に従い、立花城へ入った十兵衛はいまこの岩屋に、生きて戻ってきた。

赤い上にも赤い、細長い花茎の頂に、冠のように鮮やかな、彼岸花の群生が風にゆれるたび、十兵衛は、亡き主君高橋紹運の、屋山中務の、全ての同輩の血汐が、この花に集まり、自分を喜び迎えているのを、知った。

共に死ぬことのできなかった無念、紹運の遺命の重さ、十兵衛の心中を思いやり、統虎はじめ攻城の将兵は膝を折り、手を合せる。

日没前に、宝満開城。

翌日から統虎は、太宰府の街筋、寺内に高札を立て、近在の百姓、町人に、安心して生業にいそしむようすすめる。

二ケ月振りに、太宰府の街に平安が訪れる。しかし、焼き払われた民家、踏み荒された田畑、民の愁いは尽きない。統虎は、立花より由布、薦野等の重臣を呼び寄せ、戦没者の霊を祀り、荒廃した街並みを整理し、商業を扶助せしめる。

九月十日、秀吉は、統虎の島津追討、高鳥居攻略、岩屋・宝満両城の回復に対し感状を与え、これ以上の働きは無用であることを言うとともに、褒賞を約した。

更に、安国寺、黒田、宮木への書状の中で統虎の働きを評し「九州の一物に候」と最大の讃辞を与えた。

筑前の拠点を失った島津方は、この後、局地的には勝を得ることがあったものの、大局において、領国薩摩に、じりじりと追い込まれる契機となった。

この間、謀将筑紫広門は、筑後大善寺（福岡県久留米市）の幽閉地より、秘かに使を送り、退却する島津の陣中に、島津忠長を訪れしめ、怨敵秋月との経緯を語り、居城、勝尾城の回復を願った。忠長快くこれを許し、広門は忽卒の間に手勢千余を集め、一刻（二時間）を経ずして、秋月勢を駆逐し、宿怨を晴らした。

統虎は、肥後南関（玉名郡南関町）に留められていた、生母宋雲院と妹の救出を、筑後にあった、龍造寺政家に依頼した。その一門鍋島信生（直茂）は早くより秀吉に誼を通じており、政家としても、上方軍西下の前に、関白への馳走をするの意あるを、見越してのことである。すでに島津との手切れを表明していた政家はこれを快諾し、堀江、大木の両将を派遣し、南関より宋雲院母娘を救出、立花城の統虎のもとへ送り届けた。

警戒を強めた島津方は、残る統増夫妻を遠く領国内の祁答院（鹿児島県薩摩郡）へ移送した。

この年十一月、島津の伊集院美作守、野村備中守、白浜周防守等の率いる二千余人が、臼杵丹生島城（大分県臼杵市）を囲んだ。

大友宗麟は病軀を鞭打ち、老残の身の血汐を絞り、指揮を採る。

かつて耳川の戦いでは、文字通り、国を崩すと言われた大砲を引き出し、島津軍へ向けた。その威力もさることながら、怒り狂う桜島を思わせる大砲の咆哮に、胆を潰した島津軍は、早々に兵を引く。

十二日、戸次川に、長曽我部、千石、十河などの四国勢を破り、大友義統をその本拠府内より排除し、形勢やや不利に傾くとは言いながら、島津は依然として九州の雄であり、昂然、秀吉軍の西下を待っていた。

博多湾からの風が、立花山の樹林をゆるがし、肌にひとしお寒気のしみるころ。

ようやく、立花・岩屋両城下の治まりをつけた統虎は、世戸口十兵衛ほかわずかな供を連れて、遠矢原（香椎）の北半里ほど、足立弥平次の縁者を訪ねた。

武士を捨て帰農している縁者の、広大な屋敷の離れ、母娘は、ひそと生きていた。

香華の香りが立ちこめる部屋に、位牌となり、物言わぬ弥平次に対面し、形見の甲冑を目の辺りにし統虎は、幼時からの思いと、伝え聞いた弥平次の最後の姿が胸にあふれ、時の移ろいを忘れた。

急に老いた母を扶け、悲しみに耐えて生きるゆきは、物の言い様にも、表情にも、和やかさと品性が増していた。昔のように茶をふるまわれ、いまは、静かに物語りをできるまでに、二人は成長していた。

時には野に出もするのか、色白の肌が艶を増し、皓い歯がまぶしい。

この日以後、統虎は、折にふれては馬を飛ばし、ゆきを訪のうた。茶を喫し、お互いの読み得た書物について語り、くつろいで、歌のまねごとを、したりもする。

明らかに閨千代とは違う、女人のやさしさとうるおいがあった。

立花の家を思うのあまり、常住気を張りつめ、時として自分が女であることを忘れているかのよう

な闇千代にとって、夫婦の交情は子を生すための義務であった。闇千代のそばに仕える女達も、主人同様、いつもはりねずみのように心気をとがらせ、男のように闊歩する。統虎にとって家の内外において、気の安まる場所はない。

いま、ゆきの声を聞き、笑顔に接するとき、統虎は、何のはからいもなく、少年のような純な心になっている自分に気付く。

玄海灘からの強い風が、小雪を吹きつけ、道のあちこちに、白い模様を織りなしていた日。

名残りは尽きぬが、十兵衛の催促に、重い腰を上げようとした統虎は、

「下原に屋敷を与える故、母者ともども、参らぬか」

思いもかけぬ言葉が、自分の口から出たように感じ、全身の血が音を立てて流れ、腋下に汗がにじむのを、覚えた。

薄茶の一碗を手に対座していたゆきは、息を呑み、統虎の目をみつめ、石のように身を固くしていたが、茶碗を静かに統虎にすすめ、深く息をつくと、

「過分なる仰せ」

深々と頭を下げる耳の端が紅に染み、良く梳られた髪が、肩に流れた。

帰路、統虎は馬を立花へ向けず、あてどなく走らせる。真っ白い息を吐き、蹄に風をはらみ、たてがみが摩く。はるか後方を、十兵衛達の馬が追ってくる。

体が火照り、風をまともに受けている頬が熱い。生まれてはじめて、自分の体内に、生命が躍っている。物心ついてから、血と屍体を目のあたりにし、死は統虎にとって、身にまとう衣のように身近であり、生を楽しむの思いはかつてなかった。

幾度もの戦場において、全身の毛がうごめくような、五臓のたぎるような思いに、足踏みしたくなることはあったが、生死、いずれの感動でもなかった。

いま、雪まじりの朔風の中、額に汗をにじませ、疾駆する統虎は、生きてある喜びを噛み締めていた。

九州征伐

天正十四年十二月朔日、関白秀吉は、畿内東海、東山、北陸、山陰、南海諸道二十四州に、明年二月二十日迄に、九州出師の準備の命令を発す。

一方、小西隆佐他三名に命じ、三十万の兵、二万の馬に対する一年分の糧秣を、兵庫、尼ケ崎地方に集積せしめるとともに、石田三成、大谷吉継、長束政家にその管掌を命じた。

天正十五年正月朔日、この二十五日より五日毎に、前記二十四州に対し、赤間関に進発を命じるとともに、軍紀そのほかに関する訓令を示した。

秀吉は、三月一日、大阪を発し、十二日、備後赤坂において、信長に遂われ、備後鞆に閉居していた、前将軍足利義昭を引見し、往時をなつかしんだ。

十八日、巌島神社に参詣、社殿の老朽を愁え、材木五千石を寄進し、普請を命じた。

三月二十五日、赤間関（下関市）に到着、壇の浦の戦いにおいて、悲運の生を終えた幼ない安徳天王を祀る、阿弥陀寺に詣ず。

「波の花散りにし跡のこととへば
　昔ながらにぬるる袖かな」

歌合せを催し、二十八日関門海峡を渡り、小倉城に入る。

大坂より、毛利氏の領国十三ケ国内の進軍の道筋は、整然と修理され、騎馬、歩卒に到るまで、華やかに装い、沿道の民衆の目を奪った。華麗な鎧に身を包んだ馬は、中でも人々の耳目を引き、龍か、天馬かと、うわさしあった。

また、高山右近等、キリシタン大名の一隊は、旌旗に十字架を染め抜き、羽織に縫い付け、あるいは兜の立物にし、異教徒を討つ十字軍のごとく勇み立っていた。

この間二十六日、秀吉は、二十五日赤間関に着いたこと、日向表へ羽柴・毛利両将に十五万を付けて押し出すこと、二十七日、秋月を攻める予定であり、手勢を連れて秋月へ来るよう求めること、などを、急使をもって統虎に言い送った。

二十九日馬ケ嶽城に移り、秋月攻めを前に、属城巌石城を羽柴秀勝、蒲生氏郷・前田利長の三隊に監視せしめ、別働隊二万五千余を筑前に進めようとした。

ところが、巌石城付近の偵察に派遣した、物見、間諜が異口同音に、筑前への途上にあるこの城を

抜かずして、安全な、大軍の移動は、困難なることを言上した。

この巌石城は、秋月二十四城と称する中でも、千五百尺（四百五十米）余の山頂に構える無類の堅城であり、選り抜きの精兵三千余を籠らせ、いかなる大軍をもって攻めても、悠々ひと月は持ち堪えると、自負していた。

城攻めが決するや、監視の三隊の将は、口々に先陣を願い出、秀吉これを容れ、第一隊蒲生氏郷以下二千余、第二隊前田利長以下三千余、予備軍、羽柴秀勝以下五千を決した。

秀吉麾下の将兵にとって、九州入りをして最初の城攻めであり、その戦意と、高名を求めるの心は、並々ならぬものがあった。

秀吉は、同じ赤村内の柞原山（田川郡赤村油須原）に陣した。相へだてること数町、城へ攻め登る将兵の姿が、得物の動き、手足の運びまで、はっきりと遠望できる。

四月朔日、穹窿に星をちりばめた七ツ時（午前四時）第一隊蒲生隊は追手から、第二隊前田隊は搦手から、時を同じくして城攻めを開始した。兜の鉢を傾け、曳曳と声を掛けながら、鼻をこすり上げるような山道を、攻め登る。応戦する城方の鉄炮の音、寄せ手の鯨波の声が、あけやらぬ朝の静寂をふるわせる。

春も終りの華やいだ日射しの中、攻防の絶え間ない喚声を聞きながら、機嫌よく朝飼を終え、薄茶を二、三服所望したのち、秀吉は、

「三河を、これへ」

統虎の命により、九州入りの祝詞を述べるためつかわされていた、薦野三河守増時を呼び寄せた。
床几から、崩れるような笑顔で振り返り、手招きし、膝行する三河を傍に立たせ、
「その方、西国においては武勇の者と聞いておる。なれど東国武者の城攻めの働きを目のあたりにしたことはあるまい。ここにいて、ゆっくり見物せよ」
いつしか日も中天に近くなろうとするのに、城方の抵抗は強く、追手の蒲生隊は、仲々城壁に取り付けない。
「手ぬるいぞ、即刻城門を蹴り破り、撫で切りに致すよう、申し聞かせい」
秀吉麾下の旗本が、土煙を巻いて、伝令に走る。
しきりに増時に語りかけ、様々な戦いの折りの思い出を語る。古い友人に対するような秀吉の心映えに、増時は、つくずく、天下人という言葉が、身に染みていた。
突兀(とつこつ)たる山頂付近、累々とめぐらせた石垣の内外、まばらな樹木の間に、彼我の将兵の動きが、手にとるように見える。
と、背にした差物の模様は解らぬが、蒲生隊の中から武者が一人、無人の野を往くように駆け抜け、城壁の内からの攻撃を躱し、縦横に働いていたが、軽やかに、城内に乗り込んだ。
秀吉は床几をけって立ち上り、
「あれ見たか三河、蒲生の手の者に違わぬ。東国武者はかくのごとしじゃ」
ただちに旗本を走らせ、城一番乗りの勇者の名をたださしめる。

この間、一ケ所を抜いた蒲生隊は、陸続として入城し、搦手の前田隊これに続く。火を放たれた城は、火山のように煙を吹き上げ、城兵は四散する。
「蒲生が家人、関小判、本日の一番槍にございまする」
満足気にうなずいた秀吉は、三河をふり返り、「ただちにとって返し、統虎にも、疾く、参陣するよう伝えよ」
ねぎらいの言葉を与えると、山に目を凝らす。
巌石の守将、熊井久重、芥田六兵衛他四百余人討死。追手、搦手よりの敵を避け、火から逃れようとした秋月勢は、退路に待ち受ける羽柴隊五千に囲まれ、その傷を深くした。
申(さる)の刻（午后四時）落城。
巌石の西三里（十二粁）、益富城より使いを発し、攻防を見守っていた秋月種実は、ただの一日で城が陥たことに驚愕し、城を捨て、その夜のうちに本城である古処山城に入る。
古処山を中心に、二十余の砦に籠っている秋月勢二万余は、二日の夜、種実が破却して退去した益富城のあたりをはじめ、目のとどく限りの村々に、おびただしい篝火が燃えているのを、見た。
闇をとおして、様々な形にゆれる無数の火のもと、関白の軍勢が山頂をにらんでいると思うと、全身の血が凍える。
戦意を失なった将兵は、互いの目で語り、素振りで示し、夜の暗さにとけてゆく。
種実は、ようやくにして秀吉軍に敵すべからざるを覚り、四日、一族の福武美濃守を益富城へ送り、

敵対を詫び入るとともに、降伏を願い出た。

島津と秋月を、九州の二大賊徒とみなしている秀吉は、請いを容れず、古処山攻めを言明し、美濃守を、突き放す。

駕籠に乗り、吹きすぎる風に目を細め、扈従の者に語りかけていた秀吉は、先陣を行く浅野弾正よりの使者に、駕籠から顔を出して対面する。薄くなった頭髪をかき寄せた、小さな髷の先が、四月の風に揺れている。

駕籠を進める前方、僧形の男が二人、華やかな衣に身を包んだ女が一人、路傍に平伏している。

全てを抛って、秀吉の懐に飛び込もうとする、秋月父子であった。

床几に腰かける秀吉の前に膝行し、顔も上げ得ず、首筋に汗の玉を光らせ、降伏と助命を嘆願する種実の首に、由ありげな茶入れの仕服が掛けられている。

「古処山に攻め登り、籠城の者共、一人残らず首を刎ねんと思うたが、頭を丸め、ここまで参り前非を悔ゆるとあらば、そうもなるまい」

乞いを入れ、島津討伐の先陣を命じる秀吉の目は、掌中の名器「楢柴の茶入れ」と、年ようやく十六という種実の娘の陽光をはね返すような、白い手を交互にながめている。

仇敵、大友宗麟が博多の商人島井宗室に懇請しても譲らず、当の秀吉でさえ拒まれたことのある、初花、新田とともに、天下の三名器といわれた、肩衝の茶入れ楢柴。

度重なる種実の強請と恫喝に、身の危険を感じた妻女のすすめにより、我が子を手放す思いで進呈した宗室。価数千貫の茶入れに対する返礼として、種実は大豆百俵を送りつけた。

いま、最愛の娘とともに、茶入れ、黄金を献上し助命を願い、秀吉のしわぶきひとつにも胆の縮む思いで、ひれ伏している種実であった。

秋月降る、の報はその日のうちに、北部九州一円に伝わった。筑前の原田、麻生はじめ豊前、肥前など島津方の諸豪は我先きに秋月の秀吉の陣営を目指し、人質を入れ降を求め、島津征伐の、先陣を願い出た。

古処の懐に包まれるような秋月城下、山塊の水を集めた清流が岩を噛んで奔り、あちこちに小さな虹を作っている。

山深い僻村は、おびただしい軍勢の色あざやかな旌旗にあふれ、軍馬の匂い、将兵の汗と革の匂いが充満した。

五日、秋月城に、手勢二千三百余騎を従え、立花統虎到着。

浅野長政の取次ぎを受けるや、唐織の夜具をゾロリと着、鉄漿をつけさせていた手を払いのけるようにして、秀吉はただちに、控えの間の統虎を呼び寄せる。

「おう立花か、良う参った、良う参った、思うた通りの武者振りじゃ」

そばに寄り、肩をたたき、顔をのぞき込み、亡父紹運ともどもの働きを称揚する。

しわの多い、日焼けした小さな顔に、目だけが異様に輝き、快活に笑う鉄漿をつけた洞穴のような口から、甲高い声がひびく。

「これへ参れ」

関白への拝謁を求めて蝟集する諸大小名の待つ大広間へ同道する。統虎を上座へ据え、

「この者は、筑前立花の若き城主、立花左近将監統虎である。去年の春以来、九州の諸将に諭言を与うるに、下知に従う者は稀であった。しかるに大友はじめ、立花・高橋、最初より味方いたせしこと、天晴れな心と悦んでおった。さらに同じ夏秋の間、島津が大軍をもって九国のうちに働き、味方の城々手もろく攻め果され、あるいは降参せしところに、左近居城を堅固に守り、その父高橋紹運岩屋において義死を遂ぐ。薩州勢帰陣の折節、高鳥居を攻め破り、星野兄弟を討取ること、比類なき武勇、忠義鎮西一の士である。あまつさえその翌日、岩屋、宝満二城を回復、言い様もなき働き、上方にもこれほどの若者があるとは思えぬ」

満座の諸将のあいだに、夕立ちの走るように、嘆声と吐息が広がる。いまや日本の大半を押え、旬日のうちにも九州を制圧しようとする時の関白に、これほどの激賞を受けた者があったろうか。

「余が恙無く関門を越え、この地へ進むことができたのも、紹運、統虎父子の働きあってのことである」

統虎は、秀吉の言葉を聞きながら、はうり落ちる涙をとどめ得なかった。実父紹運の岩屋守城がなかったら、この晴れがましい場所に、自分は座っていなかったであろう。

岩屋城七六三名の死が、無駄ではなかったことが、いま歴然とした。

「左近に手勢五千を与える。立花勢ともども、島津征伐の先陣をせよ」

側近に命じ、葦毛の名馬に自分の乗料の鞍をつけて与え、さらに、備前遠近の太刀、鉄炮、□服を添えた。

武門に生を享け二十一年、これ以上の名誉があろうか、統虎は、信に報いるに信をもってする関白の心を胸底にたたき込み、全身が破裂するのではないかと思うほど、たぎり立つ闘志を押えかねていた。

秀吉の命を受けた統虎と秋月種実は、十日、筑後高良山に陣した。兵を率い、関白への拝謁を願い出た筑紫広門、龍造寺政家を先鋒に加え、翌十一日高良を発し、十二日高瀬、十三日安楽寺と、軍勢の前方をさえぎる者もなく、易々と兵を進めてゆく。

島津方としては、上方軍防禦の拠点と考えていた隈本城（熊本県熊本市）の城久基までが質を出し、銀子、米、茶器を献じ城を開く。

一方、羽柴秀長の率いる一隊は日向県城（宮崎市）を抜き、四月六日、八万余の勢力で、薩摩の山田有信、手勢千三百をもって守るところの高城を囲んだ。

日向、都於郡にあった島津義久は、上方軍の南下を喰い止めるためには、高城の確保が絶対条件であるとの認識から四月十七日夜、弟義弘、家久とともに兵一万を当て、高城の南方、四、五町を割く、小丸川の更に西南三十町（三粁余）たらずの根白坂の砦に攻めかけた。上方軍の将、宮部継潤は柵、空濠をめぐらせ良く防いだが、義弘は自ら先頭に立ち、柵を破り、濠を越え、深更（午前二時）に至りついに本丸に迫った。瞬時のゆるみもない猛攻に、城方も必死の抵抗を続け、数百丁の鉄炮をそろ

え、銃身の灼ける程間断なく撃ち放ち、ために、深さ二間、幅三間の空濠は薩兵の死骸で埋まった。

夜のしらじらと明ける頃、小丸川対岸に秀長勢三万が姿を現わし、搦手から藤堂高虎の一隊が砦に入り、黒田、小早川の軍勢が後詰めをした。

ここに至り、腹背に敵を受けることを恐れた義久は撤退に移り、さらに多くの兵を失い、領国薩摩へと退いた。

統虎等関白軍の先鋒の南下にともない、敵すべからざるを悟った諸豪は、島津軍との誓約を弊履のごとく破り棄て、金銀、茶器を献じ、合力を願う。

義久も、形勢のもはや挽回の余地なきを思うているとき、足利義昭の使者一色昭秀、僧興山が訪れ、和を勧めた。

この正月十九日、僧南光坊を使とし秀長、石田三成に書を送り、戸次川での戦いは自らを守るためであり、あえて関白の兵を敵とするものではない旨言い送り、前年十二月四日付義昭の講和を勧める書を、この三月五日に披見した義久は、太刀、馬を献じ、その命に従うことを、四月三日、眞木島昭光に言い送っている。

根白坂の一戦で、大勢の行きつくところを洞察した義久は、重臣の一部に決戦を望む声もあったものの、四月二十一日、僧善哉坊を立て、伊集院忠棟を質とし、羽柴秀長に降を求めた。

五月一日、都於郡の陣を徹し、義久、鹿児島へ還る。

秀吉は、佐敷、水俣、出水、阿久根、高城と、物見遊山のように悠々休息をとりながら進み、五月

三日、鹿児島まで十里（四十粁）の太平寺に入った。

この日、秀長の使者は日向より島津の降伏を許容すべく請い、秀吉はこれを許し、即日、書をもって、日隅二州の措置を諭示した。

義久は、臣河野道真を太平寺に派遣し、和議成立の報に接すると、五月六日、重臣とともに鹿児島を発ち、途中、雪窓院において髪を落とし、名を龍伯と改め、墨染の衣を着し、秀吉のもとへ伺候、愛娘亀寿、年十七を質とし、罪を詫びた。

秀吉は、丸腰で境内の白洲に平伏する義久に親しく声を掛け、「腰のあたりが寂しかろう」と自らの佩刀、宗近、包平を与えた。さらに和解の席上、近侍が酒を注いだ酒盃を手にする龍伯の、一瞬の疑念を察し、

「酒はいらぬぞ、真似ごとだけでよい」

にこやかに、自分の空の盃を干す、仕種をした。これらの心遣いは龍伯をして、今までの敵対を後悔させるほど、秀吉に傾倒せしめることとなった。

領内に多少の抵抗はあったものの、血を見ることもなく、二十六日、薩摩大口の城主、新納忠元が、島津龍伯、島津義珍等の説諭により、入道拙斎と称し秀吉に降り、ここに九州平定は全きを得た。

永年の仇敵、島津義久降るの報は、臼杵にある大友宗麟のもとへ、急使をもって達した。

病篤く、命の終焉の時近きを知る宗麟は、さしたる感動も見せず、軽くうなずくと、傍の夫人ユリアへ、かつて余生の地と定め、キリシタンの理想郷を夢みた地、津久見への移送を命じた。

六年近く離れていたこの地は、山の樹々も海の碧も、昔のままに天国のようにおだやかであった。ふるえる足を踏みしめて、一度は津久見の大地に立ち、空をあおぎ、爽気を胸に吸い込んだ宗麟であったが、三日目の夕刻、病床から、何物かをつかもうと両手を虚空に差しのべ、「霊魂を頼み奉る」胸上に手を組み瞑目した。天正十五年（一五八七年）五月二十三日、陰翳ただならぬ武将の霊魂は、五十八才を一期として、天へ召された。

五月二十七日、秀吉は薩摩の兵を徹し、肥後水俣、筑後高良山を経て、六月六日筑前太宰府に入った。安楽寺の菅原道真の廟所（びょうしょ）へ参詣、兵火にかかり、仮社となっているのを傷み、神社造営を命じる。その足で都府楼跡、観世音寺などを巡り、岩屋城まで足を伸ばした秀吉は、島津入道龍伯の拵えた茶所に渇きをいやし、観世音寺の後、山王の社に仮舎を設営し、一夜を過した。

この夜秀吉は、立花統虎、統増兄弟をはじめ、島津龍伯、伊集院忠棟など岩屋城攻防に関わった諸将を招き、高橋紹運を偲び、その将兵の義死を、夜の更けるまで語り合った。

秀吉に降ったとはいえ、龍伯はじめ島津の諸将の泰然たる物腰に、統虎は好感をもった。

互いの正義の前に多くの将兵の血を流しあった、いわば仇敵とも言える間柄であるが、いまこの一間において対座し、関白秀吉と茶を喫し、酒を汲むことで、すべての怨讐（おんしゅう）は夜の闇に吸い取られてゆくのであった。

咄々と統虎に語りかける龍伯の言葉は、千宗易などとも交流があり、上方の文物にも通じる伊集院忠棟の仲介なくしては理解できない。だがその片言隻語に、心底父紹運を惜しみ、その戦いぶりを賞

讃している様が見てとれた。

養父道雪や実父紹運と同じく、戦場に生き抜いてきた者にしかない、堂々たる気合と目の輝きがある。統虎は龍伯に語りかけながら、何故、このような潔いすぐれた武人と干戈を交えなくてはならなかったのか、時節の恐ろしさというものが心の片隅を過（よぎ）った。

六月七日より箱崎八幡宮（福岡市）の社内にあること二十日余り、この間秀吉は九州の国割りを行った。

柳河の城

統虎は、主家大友を離れ諸侯に列せられ、筑後柳河を居城とし、十三万二千石余の封を受けた。祁答院（とういん）（薩摩郡祁答院町）に幽閉の身を、立花三河入道賢賀によって救われ、立花へ戻っていた弟統増は、筑後国三池郡のうち二十三ケ村一万石、を与えられ、これも諸侯に列した。

度重なる戦火に荒涼たる焦土と化した博多の街並みを見た秀吉は、九州平定にさいし糧秣、弾薬の手当てに尽力した博多の富商、島井宗室、神屋宗湛に案内させ、その商都としての重要性を考え再興を決した。

石田三成、小西行長等を奉行とし、博多の街を十町四方に区切り、町人の自由な商行為のため座を廃し、地子（租税）諸役（労働奉仕）など公役を免じ、商都としての発展を促した。

筥崎在陣中秀吉は、博多港外に停泊していたポルトガルのフスタ船に乗り込み、日本イエズス会副管区長、ガスパル・コエリヨの案内で船内を見廻り、甲板に床几を据え、パードレと親しく語り、供される糖菓やポルトガル産の葡萄酒を賞味した。長時間にわたり、終始、笑みを絶やさず、帰るにあたっては、色づいた頬をさすりながら、葡萄酒と糖菓を少しずつ送るよう所望し、極めて快活であった。ところが、天正十五年六月十九日夜、ガスパル・コエリヨにバテレンおよびポルトガル商人の行為についての詰問状を突きつけ、翌二十日、諸大名を集め、バテレン追放令五ケ条を示し、宣教師達には二十日以内に日本を去るよう命じた。

様々な風説、憶測が流れた。統虎は、追放令にうたう「日本は神国たる処、きりしたん国より邪法を授候儀、太以不可然候事」あるいは十八条の「覚」の中の「伴天連門徒之儀、其者之心次第たるべき事」を素直に受け止めていた。自分たち大名に所領を与えたのは当座のことであるのに、領内の百姓に信仰を押し付けるのはけしからぬ、という言い分ももっともと考えた。かつて大友方が日向耳川に大敗したとき、神社仏閣に矢玉を放ち、仏像を破却し足下にして軍を進めたことが、苦い記憶となってよみがえる。

秀吉はかつて、信長麾下の将として、一向一揆の鎮圧に骨肉を絞る惨苦を味わったことから、キリシタン宗徒の団結が、自分の天下統一の桎梏となるであろうことを、早くも嗅ぎとっていた。

さらに天下掌握をほぼ完成した秀吉の心中には、次なる野望が次第に明確な形をとりはじめていた。この五月三日、秀吉が薩摩川内の太平寺に入ったとき、対馬の宗義調より降を乞う使者が来着した。

降を入れた秀吉は、宗義調への書状に、

「高麗国に御人数差し渡さるべく候条、其の意を成し、忠義を抽んずべき事肝要候」

と、朝鮮出兵の意あることを示した。

立花城を離れ、筑後国山門郡柳川城（福岡県柳川市）に移る。このことに対して誾千代は激しく反対し、所領を削られても立花に残りたいと主張した。国家の経営に一個人の希望が容れられるはずもないことを知っていながら、なお、生まれて以来十八年を暮し、父道雪の睡る、この立花三嶽を離れがたいのであった。

あまつさえ柳河城は、亡父道雪がついに攻略することができず、死後も、甲冑を着せ、柳川に向けて埋めよ、とまで言わせた怨念の城である。そのような城へ移ることは、亡父の霊に背くことであり、決して良いことではないと、誾千代は考える。

統虎にとっては、養父道雪が落せなかったほどの城を抱えることは、武人として名誉であると共に、かえって亡き道雪の縁を感じさえする。二人の意見は噛み合うはずもなかった。「私は最後に立花を離れましょう」

新しい領主、小早川隆景に城をゆずるべく、城内の整理を求める統虎に、誾千代は視線を外らして答え、小野や由布等旧臣達も、容喙を許さぬその場の空気に、石のように身を固くしている。

重い甲冑を取り去り、馬上の統虎が別れに泣く領民の間を巡り、親しく声を掛け、生業に励むよう諭す姿が、村童にいたるまで、ひとしお寂しい気持ちにさせる。心やすまるいとまもない戦陣のあい

間あい間に、幾度となく村を訪れ、老爺に声を掛け、窮する者に愛憐を垂れてくれた。若く逞しい領主に去られることは、新しい不安をも予感させる。ようやくにして戦国修羅の時代が終ったことを肌に感じる彼等は、旧主統虎のもとでの平穏な日々を夢みていた。

長かった夏の日射しも衰えをみせ、肌にさわやかな風が快い八月の半ば（太陽暦九月末）肥後（熊本県）に一揆が勃発した。

肥後国を領した佐々陸奥守成政は、秀吉より朱印状を受け、本領を安堵されている肥後国人領主たちに対し、検地を行ない余分を返納させようと画策し、圧政を行なった。

ために菊地、山鹿、山本三郡の領主隈部但馬守親永はこれに対抗し隈府城（熊本県菊地市）に籠城したが、内通者のため降った。ところが嫡子親安、一族の有動大隈守兼元はじめ諸豪が立ち上り、この十五日、隈本城を包囲する事態を迎えた。

筥崎松原の関白の陣所に雲集した武将たちが、もはや九州で族旗のひるがえることはあるまいと、喜びの盃を上げて二ケ月である。

肥後国中の国侍の勢い猖獗をきわめ、佐々は各地に手痛い敗軍を喫し、肥前の鍋島に援けを求めた。

佐々方の平山（熊本県山鹿市）の城中は、一揆勢に兵粮を略取され、飢えていた。

鍋島勢は小荷駄を連ね、幾重にも警固の人数を当てていたが、平山城への途次、延々と続く大竹林の両側から、大津山出羽守指揮するところの一揆勢に、伸び切った隊列を鉄砲で狙い撃ちに撃たれ、壊滅すると共に兵粮を悉く奪われた。

次いで佐々は統虎にも助力を求める。領国の移封に備え多忙を極める日々であったが、「肥後と筑後は境目のこと故」秀吉より一揆討伐を命じる書状も到来した。統虎は手勢八百をもって肥後南関（熊本県玉名郡南関町）を目指す。筑後江浦城（福岡県三池郡高田町）の高橋統増が手勢三百を率いてこれに従う。

南関に着到するやただちに鍋島勢の生き残りの者共を招き、当時の状況を遂一語らせる。物見を放ち、有動大隅守の山鹿城の様子をはじめ平山城への行程、一揆方の布陣を詳細に調べ、図面を描かせる。一刻を過ぎれば、城方の飢えは一刻まさる。失敗を重ねることはできない。逸る心を押え、次々に戻ってくる物見、間諜の報告をまとめ、図面に修正を加えてゆく。

「平山へは竹林の間を抜けるが最も近道、大津山が砦はわずか数町の距離だが、このたびの戦果におごり、見張りも少なく、怠惰の気が見える。儂は、今夜より竹林の要所に人を入れ地の利を取り、夜明けと共に平山を目指す。敵が現れた時は後陣をもって押し返し、大津山が砦を攻め、その間に兵粮を入れようと思う」小野、由布等の重臣に異論なく、その夜のうちに立花、高橋両家から若い健脚の者二百余人が、統虎の意をうけて竹林に消えた。

払暁、荷駄隊の動きに気づいた大津山は例のごとく弓、鉄砲の一隊を送り込む。大津山勢は、立花、高橋の荷駄の動きを視界にとらえたとき、いづこからともなく飛来する伏兵の矢玉に次々と倒れてゆく。

一方、後方より追いすがった大津山勢は一気に砦まで押し返される。統虎は駆けながら千二百近い

勢力を三隊に分け、先陣に立って砦を攻める。攻防の叫喚の中、二陣の兵は静かに退き、荷駄隊を守り悠々平山城に入る。

時を見た統虎兵をまとめ、追いすがる大津山、有動の勢を、打ち払い、追い払い、最後に城に入る。

数日を水のみで戦ってきた平山城中の将士の喜びは限りなく、ただちに大釜に粥が煮られる。一方、統虎に謀られた有動大隅守は、三千の兵を三段に分け、立花勢の帰路を待ち受ける。物見の知らせにうなずいた統虎は、小野、由布等を呼び、全軍に休息を命じ酒食を与え、雇い入れていた人夫達には過分の金銀を渡し、城外へ去らせる。

「有動勢が待ち伏せしているとのこと故、肥後の援兵到着まで城に籠るとのことで、往復の駄賃を払うて頂き、おいとまを下さりました」

城中では冑を外し、鎧をゆるめ、酒食を喫しているとの人夫頭の言に、

「二倍以上の敵の真中を攻め破ってゆくはずもない」何となく得心し、見張りを立て、兵を休める。

たっぷりと兵に休息をとらせ、腰兵粮二食を身につけさせた統虎は、兵力を三分し、中備え五百を自分の指揮下におく。

「備えを崩すな、真っすぐに切って抜けよ」

黄瓦毛のたくましい馬に研ぎ出しの黒鞍の鐙(あぶみ)を踏んばる。黒糸縅しの当世具足に五枚鉄矧合せの冑を着し、道雪遺愛の「笈切り」の太刀を帯き、右手に采配が光る。色白く大兵の統虎が四尺近い大長刀を捧持させる姿はひときわ目を引く。

采配一閃。城門を開き一丸となって有動勢に斬り込んだ立花勢はたちまち二陣まで抜いたが、備えを固めた後陣は、鉄炮を乱射しながら反撃に転じる。無二無三に切り抜けようとする立花勢。

老功の有動はいったん立花勢を通しておき、兵をまとめると、二陣の統虎勢に集中攻撃を試みる。

馬上の統虎目がけて有動側の戸上・芦原・福島・鹿小木など歴戦の者共が、雑兵をなぎ倒し、踏み殺し、殺到する。

立花方も森下備中、原尻宮内、後藤隼人等が統虎のまわりに馳せ集まる。渦巻くような乱戦の中、大長刀で馬上の武者五・六騎を斬り落した統虎の左方から、三間に余る長槍がするすると伸び、左肘の近くをしたたかに貫いた。してやったりと、槍を手操ろうとした有動下総守は、大長刀を抛った統虎の右手に、盤石のように槍の逆輪を押えられた。

「おのれが」

槍先を抜きとるや、ほとばしる血汐を物ともせず槍を手操る。有動は統虎を引き落さんと鐙(あぶみ)に足を踏んばり、渾身の力で引き絞る。

歯をかみ鳴らし、蹄を滑らせる馬の上から、じりじりと槍が手操られる。

「手をお放しなされ」

有動の馬取りが叫ぶ。統虎の灼くような眼光に、負けじとばかり引き合ううち有動は、いつ知らず、馬腹のふれ合うところまで引き寄せられていた。物も言わず血のしたたる腕で鎧の背の合当理(がったり)に手をかけ、馬の前輪に押し付けると、手足を藻掻き首を振る有動を、委細構わず、首を掻き落とす。

おびただしい血を吹き上げる首のない胴体は、走り出した馬から俵のように投げ出される。反転してきた立花の先陣、後陣の猛攻の前に、有動大隅守は、兵を引かざるを得なかった。

この日、立花勢は南関のはずれ太田黒城（熊本県玉名郡三加和町）を抜き、城将大知越前守の首級を挙げ、暮れなずむころ筑後北の関（福岡県山門郡山川町）に凱旋した。

この日戦うこと七度、首級六百五十を挙げたが、立花勢も百四十三人を討たれ、統虎はじめ五十余人が手疵を負った。

一揆は小康を得、秀吉は感状を送り、統虎の戦功をたたえた。しかし、十月再び、和仁城（熊本県玉名郡三加和町）に一揆が起り、小早川、立花、鍋島の勢が肥後に入った。

一揆鎮圧後、佐々成政の処遇を苦慮する秀吉のもとへ、佐々成政の悪政数十ケ条を記し一揆の者共が、訴え出た。

安国寺瓊恵に事実を確かめさせた秀吉は、佐々成政はとうてい一国の守護に耐え得ぬ者として、天正十六年五月十四日腹切らせ、一揆の首謀者達をも全員、誅戮し去った。

肥後東半国を加藤主計頭清正に西半国を小西摂津守行長に与え、やがて領国の経営は落ちついてゆく。

天正十六年柳河移城の前後、統虎にとって心満ち足りた日がつづいた。ひとり誾千代とのことを除いては。

ゆきは統虎が諸侯に列せられることを聞いて涙を流し、なおかつ、自分を柳河へともものうてゆこう

という言葉に、素直に喜びを表した。縁に従い、与えられた日々を精一杯生きてゆこうとする姿勢に統虎は好感を持ち、屈託のないその笑顔を愛した。誾千代と向かい合うときの、何か一言切り込んでくるのではないか、何を言いたいのかと構えるような心は無用であった。多くの老臣や老女に崇められ、立花の血を伝うべき誾千代は、女の幸せよりも自らの誇りと家名の存続に生の全てを注いでいた。非の打ちどころのない美貌と教養は、その全きが故に冷たさをともなう。

草花を育て、近在の悪童に慕われ、統虎の腕の中ではどこまでも燃えさかる、自分にも世の中からも自由な女がいた。

肌を焦がすように熱い、ゆきの唇を胸に感じながら、統虎は、幸せであった。

この年六月十一日、家老小野和泉を正使とし、城戸豊前、八尋民部、扇掃部など五百騎を筑後国山門郡柳河城（福岡県柳河市）へ発たしめた。一隊は筑後大善寺（福岡県久留米市）に一夜を過し、翌十二日、前城主龍造寺家晴の臣、山岡六郎右衛門の迎えを城北井手の橋に受ける。

清しく掃き清められ、壁の白さもまぶしい城内を廻り、とどこおりなく引受けを終え、十三日城に入る。

城は有明海に流れこむ筑後川、沖端川・塩塚川に近接し、一帯は柔弱な土地で、縦横に堀割が走っている。城の西方は二重の濠を廻らし、閘門の開閉によって、水量の調節は自在である。高さ十六丈（四十八米）五層の天守を築き、東西百八十間弱（三百二十米）南北百間余（百八十米）、攻めるに難く、守るに易い。

「これでは城に取り付くこともかなわぬ」小野和泉は錯綜した堀割をめぐり、城をながめ、先主道雪をもってしても、この城を抜けなかったわけが腑に落ちた。

十二日、由布雪下はじめ千八百余の将卒を従え統虎が立花城を出る。道雪が睡る立花三嶽を振り返り、夏の風に古今かわらぬ松籟をひびかせる箱崎を抜け、早くも活々とした町人の行き交う博多の街並を抜けるとき、さすがに永年の生を送った故郷を去るような感傷が心をよぎった。闇千代は十五日、家臣の妻女をともない、去りがたき思いにともすれば弱りがちな心を励まし、統虎に遅れること二日、十七日柳河城に入った。

ここに筑後柳河城主、立花統虎十三万二千百八十四石の若き城持ち大名が生まれた。

領内六ケ所の支城に、由布雪下、小野和泉立花三河などの重臣を配し、家老、中老、惣奉行、武者奉行、船奉行をはじめ医師、茶道坊主までの職制が定められた。

この天正十六年という年は統虎にとって生涯忘れられぬ年となった。多忙を極める日々であったが、老臣たちのすすめもあり、領国の現状をのべ、秀吉への礼を取るため、六月の末初めて上洛の途についた。

九州役の戦功に報いるため何なりと望むものを与えようとの秀吉の言に、統虎は「城持ちの大名に列し兵三千の将となったいま一方を拒ぐには十分でございます。ただ仙籍に列したいことが今生の願いでございます。」昇殿を許されたら望外の幸せであることを表明した。秀吉は羽柴の姓を与え、羽柴柳河侍従従四位下に任じようとした。主大友義統が五位であることから、五位に任ぜられんことを

願う、統虎の欲のなさに感じた秀吉は、七月五日従五位下に叙し、二十三日目の同月二十八日に位三階を進め従四位下に叙任して、これに答えた。

統虎は領国の経営に邁進した。不要となった砦や、地侍の館をとりこわし田畑に転じさせ、藩内いたるところにある葭野の干拓を進め、原野の開墾を命じた。いったんの平和は到来したものの事あるときに物を言うのは米であった。若い統虎はよく老臣の話を聞いた。いくたびもの戦場で、将として決断することは最も重要であるが、臣下の意見を聞き、上下得心のゆくまで詰めた行動でなければ、多くの人命を失うもととなる。十三万石の領内を知り尽くすことは限界がある。

「小野の足を借り、由布の記憶を使い、三河の知恵を絞ろうぞ」

統虎はことあるごとに彼等に語りかける。

主君が闇千代のもとへ通うことが少なくなり、足立弥平次の遺児の元へ足繁く通うていることを、主だった家臣は知っていた。道雪以来の旧臣には統虎の行動を慨嘆する者も少なくなかったが、多くの者は好意的な目で見ていた。何よりも主君が、最も精励している日常を知っている者にとって、深く考えることでもないのであった。

統虎は日の出前に床を出、水を浴び、口を漱ぎ、射を試みる。このごろでは、日によっては、弓も矢も携えず、射場で形だけを行なうことが多くなった。瞑目すると埒に的が見える。見えない弓に矢を番え、天地の気に合わせて引き絞る。的の中心にある星が少しずつ近づくように見えてくる。放たれた矢が星の中心に吸い込まれてゆくのを見て、統虎は目を開ける。狙わずに射る、弥平次の教えは

統虎の手の内に、落ちていた。

朝鮮の陣

天正十七年正月十三日、神屋宗湛の招きにより統虎、統増兄弟はところどころ薄氷の張った道を踏んだ。博多の再興に尽力したことにより、秀吉は諸役永代免除を許し、町人としては破格の表口十三間半、奥行き三十間の屋敷（一、三三六平方米）を建てることを認めていた。当時名島に城を築こうとしていた、小早川隆景に接近する一方、九州の諸大名ともぬかりなく交流を深めている。

早くから炭を入れ、小気味良く暖められた茶室で、宗湛は心を込めて二人をもてなした。親しく言葉を交すこともまれであったが、道雪、紹運のこと、統虎達の働きぶりなど実に良く諳（そら）んじている。ようやく四十になろうか、身内に溢れる才気と、野心をやっと押え込んでいる様が見てとれる。

天正十五年正月、初めて秀吉の茶に招かれたとき、

「筑紫の坊主どれぞ」と声を掛けられ、

「筑紫の坊主に飯食わせよ」と大名衆共々食事にあずかったことなど、さりげなく語る言葉の裏に宗湛の得意が、見え隠れする。

秀吉は九州西下にともなう膨大な兵粮、弾薬の調達に、博多津に勢力を張る宗湛、宗室を利用することを考えていた。さらに胸中に日毎に明確な意思として固まってくる、朝鮮を抜き、明国を斬り従

えようとの計画に、彼等商人の力は是非、必要である。商人と言えど大名と同じように遇する、秀吉の態度の裏には逃れがたい網がかけられている。

宗湛はその意図を充分知りながら、あえて秀吉に近づこうとする。

「殿下は大明国に兵をお出しなされまするぞ」宗湛が浮き立つような声で言う。

統虎の脳裏に旧い記憶が映し出される。

筥崎の陣屋で秀吉の帰京を送るべく集まった諸将を前に、

「余は武威を唐土から南蛮に示そうと思うておる。九州の如き、余の目から見れば都の内のようなものじゃ」

言い放ったとき、その意図の壮大を称えたものの、真意だと考えた者はいなかったであろう。あれから二年、戦国乱世の時代は終り、荒れ果てた田園に平和な春が芽ぶこうとするとき、統虎は聞きたくもない言葉を押し付けられたような気分となり、憮然（ぶぜん）とする。

秀吉の、朝鮮を衝き、明に兵を進めようとの考えは、天正五年（一五七七年）織田信長が中国を討つべく、兵を起したときにさかのぼる。先鋒を秀吉に命じ、中国平定のおりにはこれを羽柴秀吉に与えるとの言に、

「拙者、殿の武威を借り、たちまちの内に中国を平らげるでありましょう。織田家の宿将、老臣の方々、未だ領地を得ざる人も多うござれば、中国は、この方々に分与されたく。臣秀吉、更に九州征伐の命を拝し、すみやかに彼の地を押え、その兵をもって朝鮮へ押し渡り、明国四百餘州を席巻し、

ことごとく日本国の内といたすでありましょう」

淀みなく言い放ち、

「こやつ、言いおるわ」

信長の大笑を誘うたことがある。

猜疑心の強い主君に対し、秀吉の働きは全て、信長のものとなることを、さり気なく匂わせたのであった。

天正十三年（一五八五年）七月十一日、関白藤原秀吉となり、九州を制圧し、北条氏滅亡のとき近づくにつれて、この考えは、確信となってゆく。

朝鮮との交渉役、対馬の宗氏は、両国の中間に位置し、彼の地に居留地を置き、年間貿易船五十隻、米豆二万石を定額とし、その外臨時の交易を特送船として、その文引（紹介状）なくしては朝鮮との取引はなされず、右くは畠山、大内、小弐から島津、大友、小早川など、二十二家にわたる交易の仲介をしてきたという、歴史的背景がある。

宗氏は、日本よりもむしろ、朝鮮との交流に、その文物、粮米をたよっていた。

天正十五年、その宗氏に、朝鮮に対し、通信使を派遣し、国主をして入朝せしめよとの交渉をさせたのは、第一歩からの食い違いを生じた。

翌十六年、要領を得ぬ宗氏の交渉ぶりに業を煮やした秀吉は、小西行長、加藤清正の両将をして、九州の兵を率いて朝鮮に赴かせる旨、宗氏に告げる。

驚いた宗義智は、「自ら朝鮮に渡り鮮王を諭し入覲せしめる故、しばらくは出兵を延期されたい」と秀吉に請い、

十七年三月二十八日、秀吉はこれを許し、

「京都への道遼遠なるにより」

行長、清正に報告せよと命じた。

朝鮮は、明国を父母の国となし、毎年数回の使節を送り、方物を貢し、其襲封ごとに封冊を受けていた。その制度風俗みなこれにならい、礼儀の国をもって任じ、小華と称し、日本を東夷と呼んでいた。

「秀吉はもと匹夫の出、国中にまだ服せざる者多しと聞く、今しきりに修好を求めるのは、我が国の威を借り、彼の国の人々を圧せんとするものである。使いを派するの必要はない」とする意見。

「このように熱心に修好を求めておるのに、これを許さねば、必らず事が起るであろう」と述べる者、様々に議した結果。

「使をつかわして応答し、且つかの国の動静を窺うてみるのもあえて失計ではない」

とする意見が採られたのは天正十七年も末のことであった。

朝鮮に案内せしめ、明国に攻め入らんとする秀吉の心事は忖度しがたい。

曰く、当時世界最大の国家と目され、文化経済において他に抽ん出ていながら、政衰え、盗賊の横行するこの国を、我が精兵をもって討つことはさして難しいことではない。明国二百年の愁いの元

であった海寇を天正十五年六月、十六年七月の二度にわたり厳禁し、すでにその効あるにかかわらず、返礼の使者のないことへの不満。

曰く、日本国平定後、戦国百年の間、「ご恩と奉公」という考えのしみついた、諸侯への知行地を国外へ求めること。

曰く、朝鮮国への答書に言うように、

「予が願に他なし、只佳名を三国に顕はすを願う」

であったのか。

天正十八年（一五九〇年）小田原の陣に東北の雄、伊達政宗を引見し、翌七月十六日、北条氏政、氏照の首級を、京都一条戻橋に晒し、五代百年にわたり関東に覇を唱えた後北条氏は亡んだ。

天下はほぼ、秀吉の掌中に帰した。

十二月二十日、秀吉は統虎に書状を発し、両年の内に朝鮮出兵の意のあることを示し、肥前国名護屋に築城、大船団をもって押し渡る故出陣の用意を命じた。

戦塵の収まってより三年足らず、領国の経営は緒についたばかりである。充分な蓄えのあろうはずもない。小野、由布等重臣の苦労がはじまる。

将士三百、兵卒一千百、馬卒、挟箱持、小者、手明夫（予備輸卒）まで一千六百名、合わせて三千名が、統虎、統増兄弟に課せられるはずの軍役である。

兵卒に貸し与える具足の補充も必要である。

いつの戦いのときにも、奇妙に蓄財の才のある小野和泉の助力があった。和泉はこのたびも、すべてを金銀に替え、差し出した。

かつて、宗室、宗湛等商人の言によると、朝鮮国、明国の騎兵の軍装極めて華やかにして、金銀を散らし、三尺に余る両刃の剣を手に白銀色の冑の集団が整々と押し出してくる様は、あたかも山の動くがごとく、当るべからざる勢いであると言う。

礼の国であると称し、形式を重んじ、一見目をおどろかす陣備えで寄せてくる軍勢であれば、攻める方も又、負けじと装うて出陣しようではないか。

統虎は命じて、四枚から八枚鉄矧合わせの兜を打たせ、その表面を磨き立て、たっぷりと漆をかけ、金泥を塗布させた。

立花勢三千の陣容粛々と朝鮮、明国の軍勢に向かうとき、金色目を射るごとき兜の群れの間に、沈々たる光芒を放つ、槍、長刀は、敵の気勢を殺ぐに充分であろう。

天正十九年一月二十二日、秀吉の良き理解者であり、調整役であった異父弟秀長が没した。

翌二月二十八日、「公儀のことは自分が、内々のことは宗易がとりはからう」と宗麟に語ったように、秀長の庇護厚かった、お茶頭利休に自殺を命じる。

人生七十　力囲希咄

わがこの宝剣　祖仏共に殺す

激しい霰と雷鳴の中、従容、屠腹した。

八月五日、ようやく数え年三才の鶴松夭折。

秀吉の嘆きは限りなく髻を切って亡き愛児に供えた。

朝鮮通信使の来朝後、「明国征討に嚮導せよ」の命を和らげ「途を假りて明に入らんとす」とし、朝鮮国の承認を取り付けようとする、宗氏等の奔走は無に帰した。

「明は君父の国にして、討つべからず」

朝鮮国が日本国の意を受け入れるはずもなかったのである。

八月二十三日、諸将に唐入りを発表。

ことに黒田長政、小西行長、加藤清正に命じ、肥前名護屋の地を選び、征明軍の拠点とすべく築城を命じた。壱岐、対馬を経由して最も朝鮮に近く、湾内の波静かにして水深く艦船の碇泊に適し、陸上また大軍の駐屯を可とする。統虎は自国の武器、糧秣を調達するとともに、命により名護屋築城に合力した。

日本での文禄の役、朝鮮国での壬辰倭乱の長い戦いの日々がはじまった。

天正が改まり文禄となった正月五日、在京の諸将を帰国せしめ、出兵の準備を命じると共に、先鋒隊の名護屋出航の期日を定めた。

一番隊、小西摂津守行長以下一万三千七百人、二番隊、加藤主計頭清正以下二万二千八百人、隊を二十に分かち総勢二十八万一千八百四十人の大軍である。統虎は、七番隊、小早川侍従隆景以下一万五千七百人の中に、弟統増とともに兵三千三百人を率いて参ずる。

同じ日、諸州に令を下し、諸軍集合地の人民に安心して働くよう諭すとともに、兵員に対しては、銭一文を奪う者は斬刑に処する、いわゆる一銭切りを布告した。

一番隊小西行長は対馬に渡り女婿である宗義智と話し合い、三月十二日使者を釜山に送り、国王来朝を要請した。

入朝の回答の得られぬことを悟った行長等は四月十二日釜山に上陸、十三日釜山城、十四日東萊城、十六日梁山城と人なき野を往くように進撃する。十八日、三番隊加藤清正、彦陽城占領、三番隊黒田長政、金海城攻略。名島（福岡県福岡市）にある秀吉のもとへ、行長、義智よりの釜山、東萊の捷報は早くも二十二日にもたらされた。

統虎はこの前後七年にわたる戦役のうち前役碧蹄館の戦い、後役蔚山城の戦い、共に重要な意味のあった戦闘にかかわり、功名があった。

統虎が名を宗茂と改めたのは、元和元年（一六一五年）以後であるが、諸書、宗茂と記録し、一般的であるので以後、宗茂と称す。

文禄二年正月朔日、明将李如松は、左協、中協、右協の兵三万四千七百を率い平壌の行長を攻めるべく安州に進んだ。

平壌城は大同、普通二本の川の中間に位置し、古来、険要の地と称せられ、小西行長はじめ、宗、有馬、松浦などの兵一万五千で備えていた。

七日、如松は総攻撃の命令を下し、前線を馳駆し兵を励ました。大将軍砲、佛郎機砲、霹靂砲、子

母砲、火箭、すべての火器をくり出し城門城壁を射撃した。城の内外ともに体をゆるがす爆発音と、目も開けられぬほどの硝煙がうず巻き、石で組み上げた城壁が崩れ落ちる。目のとどくかぎり、びっしりと地を覆い城内からの狙撃になぎ倒される味方を踏み越え、喊声を上げ、剣を光らせ、城壁に取り付く。圧倒的勢力の明軍は城内になだれ込み、白兵戦の末、小西軍は内城に籠った。

冬の日が傾き、呼気までが凍るかと思われる寒気が肌を刺すころ、

「獣窮すれば則ち搏つべからず、生路を興えて追撃するが得策」

外郭の大部分を占領し、力攻めをしても兵を損ずるのみであることを覚った李如松は、兵を収めて、城外に退いた。

戦死一千六百人、兵の一割以上を失い、糧秣、兵営また灰に帰したいま、土までが凍るこの城に拠っても、死を待つだけである。

寒気凜冽として、肉を削ぐ寒風の中、面を伏せ、刀槍を横たえ、その夜のうちに大同江の氷を踏みしめ、大友吉統守る鳳山城を目指す。敵の追撃の恐怖を忘れ、熱い粥で体を温めようとした小西隊は、無人の鳳山城にたどりつき、茫然、言葉もなく立ちつくした。

「明軍、平壌を囲む」

この報を耳にするや、生来暗愚の性で、ひどいどもりでもあった吉統は、たちまち軍をまとめ京城を目指したのである。

八日、平壌に入り、小西隊の撤退を知った明軍は、参将李寧、査大受等に精騎三千を付け追撃、落

伍者、傷病兵三百六十人を殺した。

十一日、平壌の敗報京城に到る。

宇喜多秀家はじめ三奉行は、安国寺恵瓊を本拠京城の前衛とも言うべき、開城の小早川隆景のもとへ送り進退を諮った。

「この地は険要にして敵と雌雄を決するに足る。拙者、海を渡って以来屍を馬革に苞むをもって本懐と存ずる。老人の生死国の存亡に損益はなし。九死一生の一快戦を試みん」年六十余、衝天の意気を示す。

しかしこの勇将も開城をおとのうた大谷吉継の、京城に集結し決戦に及ぶとの説得に応じ、正月二十一日、宗茂等日本軍五万人が城の内外を固めた。

二十三日、夜の明けやらぬころ、京城の市街点々として火を発した。明軍が平壌において日本軍を破ったことを知った鮮人は、やがて明軍が京城に入るであろうと、民家に火を放ったのである。日本軍は凶徒の捜索、捕縛、開城方面の警戒に多数の兵を割いた。

二十四日朝、副総兵査大受の率いる先鋒の一隊は、朝鮮の防禦使高彦伯の先導により京城を目指す途次、加藤光泰、前野長康の捜索隊と遭遇、六十余人を討ち取った。

これより先、鮮人の謀報員から、日本軍の精鋭は平壌の一戦で大半を失ない、京城に在るはほとんど弱兵にして恐るるに足らずの報を受けていた李如松は、浙江、河南の兵をして開城を守らしめ、二十五日払暁李寧、孫守廉、祖承訓等を先鋒とし、半ば氷の融けだした臨津江を葛を編んで橋を架け、

二万余の軍勢を渡河せしめた。

同じ日、京城において諸将一堂に会し先鋒を選ぶ軍議が開かれたが、平壌の敗戦、加藤、前野隊の退却など、明軍強しの意識のある諸将はいずれも言を左右にし、容易に決しない。

小早川隆景が断を下した。

「小勢ではござるが、立花左近将監宗茂殿こそこのたびの先陣にふさわしき仁と存ずる。その故は、父元就のころ大友と合戦すること度々に及び、勝負互いにあり申した。あるとき、元就が四万余騎を率いて九州へ打出で、大友修理大夫義鎮は三万余騎をもって、筑前多々良浜に戦い、軍を八重に分けたうち七重まで打ち破り申した。大友すでに敗軍に及ぶべきところ左近殿の父伯耆守道雪、二、三千騎にて、六、七千の我軍を破り、大友の勝となった事、九国中国にかくれもないことでござる。されば宗茂殿はその子息であり、その戦功抜群、家中また勇士多ければ、立花殿が三千は他家の一万にも劣らぬ。左近将監殿こそこのたびの先鋒にふさわしく、太閤への聞こえもよろしかろうと存ずる」

年二十五、宗茂の面目ここに極まる。

「若年の某、かようの大事の先手をつかまつること心もとなく存ずるが、ご評議の上仰付らるることなれば辞退はいたしませぬ。先鋒をうけたまわるからには、時宜により一戦つかまつる。もし無用とお思いであれば、家来を指出そうと考えます」

「御辺御出馬をせられずしては叶いがたい、さりながら一戦をはじめられることは堅く無用でござる」

「あいわかり申した。されど敵攻めかけるとき、たやすく退くわけにはゆきませぬ故、一戦つかまつる」

戦いが避けられぬときは、京城へ急使を送ることに一決した。

第一隊、立花宗茂、高橋統増の兵三千人。

第二隊、小早川隆景の兵八千人。

総勢二万人を先鋒となし、隆景これを統率する。

変幻　立花勢

臨津江を渡った明軍は京城より十里（四十粁）足らずまで迫っている。道は一筋、披州を過ぎ、碧蹄里、高陽を抜け礪石嶺を越えれば、京城は目と鼻の先である。

陣営に戻った宗茂を島津義弘の臣有馬次右衛門が手勢百騎を率いて待っている。

明軍京城に迫るの報を受けた義弘は合力の兵を選び、彼等は義弘の陣する金化より二十余里の道を駆けに駆けてきたのであった。

「ご厚意身に染みてござる、されど惟新殿も手薄になられる。お心のみ受けとうござる」

帰陣をうながす宗茂に「君命でござわす」

頑として動こうとしない。

夕刻、本隊の第一陣を率いる黒田長政が、水牛の角の兜をつけ、宗茂をおとずれた。共に、年二十五、長政の激励は立花勢の血を熱くした。

正月二十六日午前二時、宗茂は、十時但馬、森下備中に銃卒六十を添えて物見に出した。山とは呼べぬ程の礪石嶺を越えたころ、明軍の斥候、伏兵を発見。兵を散らし、各方向より散々に射撃したため、明兵は大兵の迫ると思い、本隊に退く。

十時等の報せを受けた宗茂は、大釜に湯をたぎらせ、手ずから米を投げ込み粥を作り、別の釜に酒を温めさせる。

「当地の寒さは柳河の比ではない。今夜はことさらに風が冷たい。皆この粥を食い、酒を呑んで体を温め、夜明けには存分にはたらいてくれ。」

闇を打ち払うような篝火の中、白い歯を見せ、目を細めて語り合う兵達。朝鮮に入って以来、幾度の困難な戦いを戦うてきたことか。

宗茂は、今はなき顔々を思い出している。

主を信じ切って、刀槍の下に身を挺する。

彼等のためにも下手な戦いはできぬ。

小野和泉は言った。

「明日の軍は味方の勝利と定まってござる。その故は、昨日被官をさしつかわし味方の様子を見せもうしたが、但馬守殿、遠江守殿の人数は働くまでもなく、ただ敵の大勢なるを見て敵対する者もな

く崩立て引いたるをたしかに見届けてござる。敵は昨日の一戦忘れられぬは必定。某の一手に誰にても一頭添えられたく、某一手にたやすく敵を追崩すでありましょう。敵の機をくじけば大軍といえど打勝べく、もし仕損じたときは、敵、備を乱して追いくるを中備え、旗本にて押返し一戦とげらるれば、追い来る敵もたやすく追い払わるるは必定。とも角某先手仕りとうござる」

池辺龍右衛門が進み出て、

「我等少なき人数を日本の軍のごとく備を多くに分けるとき、明国軍の備え備え一団となって進退すれば、ここかしこ隔られ悪しく存ずる。ただ、前中後三備にして然るべく」

宗茂「そのとおりじゃ」と備えを定めた。

先鋒　小野和泉・立花三左衛門

中備　十時伝右衛門・内田忠兵衛

旗本　立花宗茂・高橋統増

星も定かには見えぬ霧の中、立花勢三千は京城を出ること三里（十二粁）余、礪石嶺に至る。京城より五里（二十粁）に位置する、明使節接遇のための館、碧蹄館が地名と化したこの一帯、両側に丘陵が迫り、南北に長い谷をなし、その底部四・五町から八町の狭い谷底は、一面の水田か湿地で、大軍の行動には極めて具合がわるい。稲の切株の間々に凍った水が朝日を受けて白く光り、霧が明ける。霽れてゆく霧の底、数千の騎兵が白銀色の兜を光らせ、林のように静かに待ちうけている。敵との距離五町あまり。

戦機たちまちに熟するかと思われたとき、中備えの十時伝右衛門がただ一騎、先陣の小野和泉に馬を駆け寄せた。

「各々は中備にくりかえられ、先を某にさせて頂きたい」

一瞬、伝右衛門の兜の内をのぞき込むように、怪訝な表情をした和泉は、

「だまらっしゃい、お主御軍法を破るのみならず、何の覚があってこの和泉を越えて先をせんと申さるるのか、思いもよらぬ」

鞍の前輪を叩いてどなりつける。

驚く馬を静めながら、

「各々を覚束なく存じてでのことでは断じてござらぬ。敵は目に余る程の大軍。いかに各々勇機を励まれようとも、人の根機も左様につづかぬものでござる。ご両人の内一人でも欠けらるれば、立花の備大いに弱り申す。某先手を仕り、善悪につき敵の備の乱れる時、各々一戦とげらるれば必ずや味方に利ありと存ずる。きょうは大方、日本高麗分け目の軍となるべく、日本のため、立花家の御ためでござる。八幡大菩薩、私の軍功を立てんがためにあらず」

懸命に説く伝右衛門の目に光るものがある。

「お主、死ぬ気じゃな」

目で語りかけた和泉は、ただちに備を入れ替えさせる。会釈して手勢を率いて過ぎてゆく十時、内田の両将を見送る小野和泉、立花三右衛門、同じ十死一生の場に臨みながら、なぜか涙があふれてくる。

京城へ明軍との合戦におよぶとの伝令が走る。

十時の五百の兵じりじりと間を詰める。俄然、明軍は大砲を撃ちかけ、太鼓を打ち鳴らし、第一陣二千余の騎兵、わき上る黒煙の中、静かに押し出してくる。十時の手の中に、本能寺の変の折、織田信長に槍を付けた安田作兵衛、改名後の天野源右衛門という勇士がいた。

円備え合がかりに間を詰めつつ、天野はじめ三十騎ばかり明軍に向かう。素晴しく大きな馬に、屈強の兵が長い道服のような布鎧に身を固め、両刃の剣を光らせて迫る様に、馬を乗り込む隙もなく、引き返そうと馬首をめぐらせたとき、

「十時伝右衛門、内田忠兵衛」

叫びざま先頭の騎兵に槍を投げ突き出した。両名そのまま馬を乗込み、たちまち五、六騎を斬落す。天野等動揺する明軍に馬首を向け、七、八十騎を斬ると、二千の勢は一斉に崩れ立ち、谷を下り望客岨へ退く。

むくむくと雲のように左方二、三千の敵が現れる。馬の鼻をその敵に向ける間もなく、右方より二、三千、崩れた敵の後より新手の六、七千騎隊伍を整え静かに押し寄せる。

伝右衛門は手勢を集めて命じた。

「敵近づかば間近まで引受け、一ツ所に向けて戦えば、三方の敵、味方小勢と見て取包むであろう。その時粉骨を尽し切抜け中備えまで引取るべし。敵の三備一つに乱れて追うところを味方中備え入替る。

りて戦えば、この敵安く追い払えるに相違ない」

押し包むように寄せてくる三方の敵を一ツ所に備え対峙する。

大砲の黒煙が吹き上り喊声がこだまする。

左右の敵には目もくれず一丸となって正面六、七千の敵にまっしぐらに突入する。跡を遮ろうと備を乱して攻寄せる明軍。混戦の中、金甲を輝かせた一団がなぎ倒し、斬り伏せ一文字に中備まで引取る。

中備の小野和泉、兵を入れ替えて戦うも手勢八百余り、敵寡勢と知る上、追撃の勢いをもってひしひしと押してくる。中備も退くべき時を探りつつある小野の耳に、聞きなれた立花勢の鯨波の声が天来の妙音のように響いた。宗茂の旗本二千騎明軍の右手より疾風のように横槍を入れる。

大砲を捨て、傷者を残し崩れ立つ明軍。宗茂は兵八百余騎を新たな敵に向け備えさせ、残余の勢を追撃に移らせる。

崩れたった大軍は、我と我が叫び声に驚き味方の姿も目に入らず、ひたすら本隊を目指す。敵を討取ること二千余人。

けれども先陣を願い出た十時伝右衛門、あるいは池部竜右衛門など武功の臣十余人が討死、手負、死人二百を越えた。

碧蹄館の北方、谷の入口に当る恵陰嶺を越え、碧蹄里を走り、高陽を駆け抜け、明軍の新鋭陸続として到る。

折しも、隆景の先手、粟屋景雄、井上景貞が各々三千の手勢を率いて到り、立花勢は望客峴左方の高地、小丸山に兵を休める。

隆景本陣を望客峴の上に置き、戦況をみつめる。

負傷者を退かせ、小丸山に床几を据え、小早川隊の備えを見る宗茂に、天野源右衛門が笹に包んだ飯を差し出し、

「いまひと働きの前にいかがでござる」

差し出すと、

「某、試をいたす」

小野和泉が手づかみにし、ようやく一つ喰い終る。宗茂は軽くうなずくと天野の差し出す握り飯を三つまで常のごとく食し、

「馳走であった」

戦況を見守る。旗本の者共に天野がすすめる飯をいずれも手を振り遠慮する。激戦の中全身の気力を絞り、敵の血を浴び、いまやっと息をつき、己が生命のあることを確信した。

とてものことに飯を喰う状態にない。されば、源右衛門も握り飯一つをつかみ、一口、二口、喰おうとするが、喉にこみ上げてとうていのみ下せず、枯草の上に投げすてる。

床机に座り、小野、由布等老臣の意見を求める宗茂の若々しい横顔を見ながら、源右衛門は「この殿の器量、世の常の物差しでは測れぬわい」胸のうちでつぶやいた。

緒戦の騒擾も終り、追撃の立花勢が帰陣し、再び日明両軍対峙した。望客峴の小早川陣より望めばその数幾万と知れず、谷を埋め、丘を覆い、声もなくうごめく様は、天地自然までもが明軍であるかのように見える。

日本軍の先陣立花宗茂、二陣小早川隆景、三陣宇喜田秀家をはじめ総勢を六組に備える。

宇喜多勢三千ばかりが宗茂の陣場の前に進み、立花勢に先んじて一戦に及ぶ気配を見せたが、まっ黒に密集して寄せてくる明軍を前に、引くともなく進むともなく、ためらう様子であったが、するすると兵を引き、本来の備えに戻った。時を同じくして毛利の先手より軍使をもって、

「秀家の勢押出したるは、さだめて先をせんとのためなるべし、立花殿には今朝もいさぎよく一戦遂げられ戦功かくれもござらぬ。秀家と毛利は雌雄を争う事なれば是非とも先を仕度、お許し願いたい」

国境を接し、昔は毛利家の属国であった宇喜多家も、秀家が秀吉の猶子となってからは、勢いとみに勝り、毛利の家中にとっては、はなはだ面白くなかった。

軍使の口上を聞いた立花の旗本は口々に

「今日の合戦には幾度なりとも立花が先陣、他家に先陣をゆずるなど思いもよらぬこと」毛利の強請をことわるべしと言い合った。

宗茂は笑いながら、

「愚かなことを言うでない。私の功を思えばこそ前後の争いもある。勝利にさえなれば誰に先をさせようと日本国のためじゃ。その上彼の者共先をして利を得ることはむつかしかろう」

快く先陣をゆずる。

毛利の手勢八千余、小丸山に集結する立花勢の前を、堂々と隊列を組み、我等が戦いぶりを見られよ、とばかり昂然、顔を上げて進む。

碧蹄の谷を埋め、左右の丘を覆い、明軍二万余騎整々と押してくる。堂々たる体軀の騎兵、たくましい馬、一分のすきもなく間を詰めたかと思うと、勃然と湧く太鼓、耳を聾する大砲の響き、狭い谷あいの戦場は、雷鳴が縦横に馳駆する様を呈した。

谷の向こう高陽のあたり、さらにその奥の碧蹄里、明軍の処点開城への一筋道恵陰嶺、万方これ明軍。

毛利勢は一支えもせずに踵を返し、望客峴の本陣を目指し退却する。

明軍はいささかも備えを乱さず、山谷をふるわせて攻め太鼓を打ち鳴らし大砲を撃ちかけ、撃ちかけ、山の動くように寄せてくる。

小丸山に備を固めて、息をひそめ戦況を見つめる立花勢。小野和泉が宗茂に言う。

「時分よく候」

はや攻めかける時ではとの老臣の問いに、無言のまま宗茂は床几に座り、碧蹄里から望客峴まで、彼我の動きをながめている。

こけまろび、敵を振りかえり、味方に救いを求めるように顔中を目にし、口々にさけびながら、毛

利の軍勢が退いてくる。

「もはやその時でござる」

思わず天野源右衛門は、槍を握り直す。

「何を知ると申すか」

宗茂首をひねり源右衛門に一言、再び戦場に目を移す。

小鳥のように八方に散り、口々に何事かわめきながら毛利の将士が逃げてくる。差物を傾け、弓を捨て、兵は将を忘れ、将は兵を忘れ、己が心の恐怖心に追われ、目を血走らせ涙を浮かべ必死に、本陣を目指す。

押し寄せる明軍は、大波のようにふくれあがり、毛利の兵共を呑み込むかのように見える。

「潮合いをはずれましょう」源右衛門たまりかねて再び言う。宗茂振り向きもせず、

「毛利の者共、足手まといじゃ。皆引きとらせて、功名も不覚も紛れぬようにして働こうぞ」

旗本一同声を呑み、うなずき合う。

騎兵の顔が弁別できる程近づく。

「下知なくて放つな。一騎がけすな。一つに備えて進退せよ」馬にまたがるや、二百挺の鉄炮を入れかえ三度まで放つ。

岩のように沈黙していた金甲の一群、先程の勢と同じく踏み潰して進もうとした明軍は気合を殺がれ、先陣がたじろぐ。大身の槍をしごく宗茂を先頭に、立花勢二千五百が斬り込んでゆく。軟弱な土

地は騎馬の進退思うにまかせぬ上、密集した大軍は自らの動きを縛る。槍先にかけられ、馬を斬られ、前衛の叫喚は、次陣の恐怖を呼び起す。

望客峴（けん）の本陣にある小早川隆景機を外さず全軍に進撃命令を下す。

明軍も新手の楊元の一隊を加え李如松、李如柏、李如梅、李寧など自ら剣を執って戦い一歩も引かぬ気概を示す。正面、左右側面からの日本軍の攻撃に、馬の足なみが乱れ騎兵の威力が半減する。日本軍の鉄炮は正確に馬上の明兵を倒してゆく。乱軍の中明将李如松は落馬、井上五郎兵衛の槍先にかかる直前、明将李有昇馬を駆け寄せ、弾丸の下身を挺してこれを救う。谷をおおう鈍色の空から落ち出した雨は、小やみなく将兵の甲冑を濡らし、刃を滑る。

足元はねばりつくような泥濘と化し、騎馬の進退ますます思うにまかせない。分厚い雲の向こう、日は中天にかかると思われるころ、ついに均衡は崩れた。

碧蹄里を抜け、恵陰嶺を越え、おびただしい死者、主なき奔馬を残し、明軍が退く。

追撃すること六十町（六粁）立花の小野和泉が馬を横たえて諸軍の深追いを制し、総師小早川隆景もまた停戦を命じる。残首六千余。

日明分け目の戦いと死を必して臨んだ宗茂。鞍の塩手に首級二つを下げ、鎧には幾本もの矢を受け、太刀は反り鞘に入らず、乗馬は返り血を浴びた体からもうもうと湯気を立てている。馬の首をたたきながら勢を集め、手負いの者の手当、死者の収容を命じ、生き残った一人一人の顔をたしかめてゆく。

開城に退いた李如松は明朝へ上奏して曰く、

「賊兵の都に在る者二十余万、衆寡敵せず、且、臣病甚し、他人をもってその任に代えんことを請う」

朝鮮の忠臣柳成竜の二十万とは虚言だとの指摘に、

「汝が国人の告ぐるところにして、余これを知らず」

加藤清正、平壌を睨むの流言を幸い、開城から去ること四十里（百六十粁）平壌に退き再び動かなかった。

清正は平壌の東四十里安辺府において日本軍大捷（たいしょう）の知らせを受けた。

「先陣は必ずや立花ならん」

清正の言はほどなく証明された。

世に言う碧蹄館の合戦で、日本軍恐るべしを否応なく知らされ、明国にも講和の気運が生じてくる。日本としても、朝鮮の闘将李舜臣の亀甲船団に水軍を痛めつけられ、弾薬、食糧の補給路を断たれ、困苦に直面していた。長い戦いの日々に倦み明軍に投ずる降倭の続出、朝鮮民間人による義兵の跳梁、講和の機は熟しつつあった。

五月十五日、明の講和使、謝用梓、徐一貫、名護屋到着。二十三日、秀吉と会見。秀吉は同月二十八日、和議の条件七ケ条を提示、講和の使節は六月二十八日、明へ向かった。

「明家の公主を迎え我朝の后妃に備ふべし」「朝鮮の王子及大臣一、二員を我に質と為す」「勘合船を復興し、官船商船互に往来せしめん」など明国占領の計画より後退したものではあったが、これすら現実には受容される見込はなかった。

小西行長はこれらの条々を無視する形で、日明貿易再開を柱に交渉に入った。

行長等の講和交渉の行方を見守りながら、自然休戦となり、文禄二年は暮れていった。

文禄四年九月、秀吉の命により帰国、柳河の風光にひたる間もなく、秀吉に謁す。秀吉は、諸将にぬきん出る宗茂の戦功を賞し、幾日にもわたって、戦陣の様子を語らせた。宗茂に従う小野和泉に親しく語りかけ、宗茂を扶け、西国の守禦（しゅぎょ）に尽くすよう命じ、日本七鎗の一人であると称揚した。

七鎗つまり、本多平八郎・島津家久・直江山城守・後藤又兵衛・吉川蔵人・飯田覚兵衛・加うるに小野和泉の七勇士のことを言う。

朝鮮の地と異なる、身を染めるような木々の緑を喜び、凛然たる山塊に目を細める平安は、すぐに破られる。

金兜の勢来る

文禄五年（一五九六年）政元して慶長元年の六月十五日。明の冊封正使楊方亨（ほうこう）は釜山を発った。先に来日していた副使、沈惟敬とともに九月一日、大坂城で秀吉に謁見。

冊封正使の来朝に上機嫌であった秀吉は明国王の詔勅（しょうちょく）の中に「特に爾（なんじ）を封じて日本国王と為す」の文言あるを知るや、冊書をたたきつけて「余、王たらんと欲すればすなわち王なり、何故に明王の

封を喜ぶや」講和の全権者たる小西行長をまさに斬ろうとした。行長懐中より書を取り出し、石田等三奉行の命によることを訴え、ようやく刃をまぬがれる。

その夜楊方亨、沈惟敬は日本を追われ、慶長の役、朝鮮で言う丁酉倭乱は起った。

この役、巨済島の海戦で藤堂高虎、脇坂安治、加藤嘉明、島津忠豊等の水軍は敵将元均の率いる水軍を撃破、海上権を掌中にした。

元均の属する慶尚道出身の両班階級は、宮廷内の派閥争いから、全羅道出身の朝鮮国最高の将李舜臣を故なく水軍総帥の座から放逐した。元均は舜臣の将士をことごとく排し、軍事を省みず、日夜酒色に溺れ、ために将兵の心たちまちに離れていった。

慶長二年七月初め、都元帥権慄のはげしい叱責に怒りを含みながら十五日、水軍を漆川島に進めた。この夜日本軍の夜襲に朝鮮水軍は潰乱、元均は巨済島に待ちかまえる島津軍に討たれた。

戦場を知らず、国の利益よりも己れの利益を優先する一部宮廷人の専断が日本水軍に大きな利をもたらした。

慶長三年二月、明将楊鎬の軍は命により帰国、新たに劉廷、陳張榜、鄭子竜、藍包威、梅伯等の将に兵十五万を添えて朝鮮へ送った。

昨年末よりの日本軍の最右翼蔚山城の攻略に失敗した明軍は五月、梅伯は蔚山に向けて兵五万余騎、鄭子竜、劉綎、同じく五万余騎をもって、松島、順天に時を同じくして攻めかけた。

圧倒的勢力に城方は、守りを固め、小競り合いに終始、身動きのとれない状態に陥った。

蔚山城の清正もこのたびは城も完成し七千余の手勢を率い、兵粮、弾薬の用意も怠りなく、意気天をつくも、容易に城を出て敵を掃討できる状態になかった。

蔚山より十里余、釜山浦の本陣においては、彼我の状況を逐一知りつつも、一向に後詰めの議が持ち出されない。一度口を開くや、自らの兵を動かさざるを得ない。誰かが言い出すのを待つが得策、評議は核心を巧みに避けつつ、いたずらに日時が過ぎてゆく。

度々の戦功に、最初は真にねぎらいの言葉や書状を届けてくれていた諸将も、柳河勢の武勲を耳にすると、「またか」妬心を押し包みながら口上を述べるのが、若い宗茂にも見て取れた。出過ぎぬように、饒舌にならぬように、後方に控えている宗茂の胸中に、大兵をもって城を囲繞され、目路のとどくかぎりの敵兵の向う、切ない目で味方の旗印を探る城兵の様子が浮かぶ。

「推参ながら、一言申し上げます。かように評定のみに日を送っている間も、籠城の方々日一日弱ってゆくでありましょう。私見を申せば、先ず日本軍最右翼の蔚山城の敵敗軍に及べば、松島の敵退けるの手立も浮かび、この二ケ所を我が軍が押える時、自然、順天の敵勢も京城へ退くでありましょう。蔚山の後詰、某の手勢にてつかまつる」

思い余って申し出る宗茂の言葉を受け取り、

「蔚山の後詰めに立花の一手を差し向けらるること良策と存ずる。僅々三千の将兵、無に帰したところで、味方にとって何の痛痒も感じませぬ」

年十八、頬赤く焦点の定まらぬ目をした、小早川秀秋が甲高い声で言い放った。顔色を変じた諸将

の目が宗茂に注ぐ。

昨年六月十二日、宗茂が敬慕して止まなかった老将隆景が六十五才の生を終えて以来、筑前名島城主三十五万石を襲うた。

北政所の猶子として育ち、任ぜられ金吾中納言と称し、凡そ人の世の風に当ることがなかったとは言え、人間の口より出た言葉とは思えない。

五体を奔流となって走る怒りを胆に収め、

「お許しを得れば出兵の用意をいたしたく」

宗茂の全てを呑み込んだ言葉に、一座は、ほっと肩で息をつき、賛意を表し、ようやくあらたな後詰の選抜に入る。

五月五日、東の空に太陽の昇る気配はあるものの、暗い空に時折星の流れるころ、宗茂勢一千は物見を出しつつ蔚山の南八里（三十二粁）程の所に進んだ。

明将梅伯の一支隊五千余が三里（十二粁）程先の街道添いに陣しているとの知らせが入る。深い霧の中、馬の口を縛り、更に兵を進める。乳のような濃い霧が霄れてゆき、明兵が朝食の準備に忙しく立ち働く最中、地から湧いたように二方向から鯨波を作って押し寄せた立花勢に、鉄炮で撃たれ、槍でなぎ倒され、口々に悲鳴を上げ、得物を投げ逃げてゆく。健気に踏み止まろうとする明兵も白刃の刃音におびえ、将卒一団となって走る味方の跡を追う。

馬上、槍を小脇に追撃する宗茂に、小野和泉が馳せ寄せる。

「小勢をもっての長追いはあやうし。兵を進めまするか」

「いま止まれば、味方小勢なることを覚られよう。敵乱れ切ったる逃足、取って返すはずもない。かの森陰まで追わせよ」

一気三十余町を進む。一支えもせずに崩れ立った明兵は、日本軍の影におびえひたすら梅伯の本営に走る。後も見ずに退いてゆく明軍を見送り、しばし馬を歩ませ、陣形を整える。ほとんど兵を損ずることなく斬首七百余。

「縛を解いて放ってやれ」

五十人余りの明兵の縄を切らせる宗茂に、

「小勢を知られぬためにここまで追いきたり、いま彼等を放てば、敵に味方小勢なるを教えるようなもの」

止めようとする旗本の侍達に、

「儂がはからいにまかせよ。いまは味方小勢なるを知らず一支えもせずに走ったが、彼等の知らせを受けるや、心ず軍を返すに違いない。俟を以て労を待つじゃ」

五里（二十粁）余の途を報復の念に体を熱くして駆けてくるであろう明軍を待つ。

日暮れ、本陣にさかんに篝火を焚き、はるか前方明軍が寄せてくるであろう街道筋に兵を五つに分けて潜ませる。

天空高く激しく風が動いているのか、星空を流れるように雲が横切ってゆく。

子の刻（午前零時）物見が次々に着到。夜の暗さにまぎれ正確な数は判明せぬが、万余の明軍が近づきつつある。

諸将を集め、宗茂が最後の確認をとる。

「敵は先陣と後陣はるかに離れ、長蛇の様をなしておる。敵の先陣と戦うてはならぬ。静かに先陣を通し、味方の後陣に至ったとき挑むべし。勝敗を決せず時をかせぎ敵後陣、味方の先陣を過ぎるとき、一気に勝負に出よ」

「先陣の鉦を聞くまでは余陣は、決して兵を動かしてはならぬ」

宗茂の命令を聞くうちに、小野はじめ諸将の表情は一変し、静かに殺気が満ちてくる。

日本勢の本陣の篝火を目標に進む明軍は、そのはるか前方に、立花の先陣が、息をひそめ、星明りに目を光らせているのを知らない。

明軍の先鋒七百余人、立花吉衛門率いる後陣の金兜百五十人の出現に列を乱して斬り結ぶ。夜の暗さの中、金色の兜が浮かび上がり、純白の合印を肩に付け、合言葉を交しながら、明兵を釘付けにし、騒擾（そうじょう）をあおり立てる。

先陣の叫びや、刃の響きに、多勢をたのむ明軍はひたすら前に進む。明軍の後尾をとらえた立花の先陣、鉦の音を合図に、全軍が十倍する敵に挑みかかる。

夕刻より充分地勢を観察し、合印・合言葉を便りに、夜の暗さを味方にし散々に斬り立てる。備えを崩した明軍は、街道を外れ、方角を失ない、危うく立花勢の刃を逃れ、八方に散ってゆく。斬首五

百余。味方も死者三十人、手負い八十余人、一割余の犠牲を出した。

蔚山（うるさん）の清正は、前日より明軍の動きただならぬ様子に、さては味方の軍勢後詰めをしたかと、追討の用意を命じ、物見を増やしていた。夜半、傷の手当をし、兵粮を使った立花勢は、物見の案内で静かに勢を進め、六日払暁、蔚山まで二里（八粁）全澄に達した。

「金兜の勢至る」

二度までも手痛い敗北を喫した明将梅伯は、前後に敵を受けることを恐れ、たちまち囲みを解いて、軍勢を引く。

満を持していた清正手勢五千をもって追撃し、首を斬ること二千余、万丈の気を吐いて城へ戻る。

城兵と共に、にこやかに迎える宗茂が、手勢一千をもって蔚山（うるさん）に入ったことを知った清正は驚愕した。

「この数年、立花殿の軍功第一とは聞き及んでおったが、このたびの軍略、無双と言って良い。貴公こそ日本一の勇将の名に恥じぬお方。立花殿は某にとって命の恩人でござる。到着の四、五日遅からんか、この城の命運尽きたやも知れぬ」

固く宗茂の手を握り、この廉直の将は終生この日の恩を忘れぬことを誓った。

兵を休め、盃を上げ、語り合うごとに、胸中明鏡のごとき二人は、その心のきずなのますます強くなることを感じていた。

太閤秀吉、八月十八日薨去（こうきょ）、年六十三。

遺命を受け徳川家康、前田利家、宇喜多秀家、毛利輝元の四大老は毛利秀元、浅野長吉、石田三成を博多に送り、在鮮軍撤退の措置をとらせた。秀吉の死を知った統制使李舜臣は明将劉綎と小西行長との間で結ばれた日本軍を無事渡海させるとの和議を受入れなかった。全ての日本軍を海に追い落さんとの意気に燃える舜臣の率いる水軍を破り、順天城に囲まれていた小西行長と共に、立花宗茂、島津義弘が釜山を立ったのは十一月二十六日、朝鮮を出た最後の日本軍であった。

朝鮮に於ける、壬辰倭乱、丁酉倭乱の両役を通じ、赤心もって祖国に尽し、日本の水軍を完膚なきまでに敲きつづけた李舜臣をこの月十八日、露梁の海戦で失なった朝鮮水軍には、もはや、日本軍の撤退をはばむ力はなかった。

前後七年にわたり、人馬三十万を動員した侵略戦争は、一般民衆を巻き込み、耳塚、鼻塚など酸鼻な記録を残し、多くの降倭を生み、日本には、陶工、織物工、鍛冶工など彼の国の優れた技術者が連れてこられた。

異国の風雪に身を削り、多くの家臣を失った諸将も、秀吉中道に倒れ、ご恩を受ける者少なく、苛酷な日々さえ、茫々たる記憶の彼方に凍りついている。

秀吉の喪に服し、莫大な戦費に疲弊した領内の経営に奔走しながら、諸侯の目は油断なく中央に注がれている。

秀吉は生前、一子秀頼の後見役とも言うべき五大老、五奉行の組織を作っている。徳川家康と、秀吉が若年の日からの莫逆（ばくぎゃく）の友とも言うべき前田利家の両名に全てを託していた。

死に臨み「秀頼さまに対し奉り御奉公の儀太閤様御同然粗略に存ずべからざる事」以下数ケ条の起請文を幾度となく出させた。

遺言状中にも「秀頼事、なりたち候やうに、此かきつけ候しゆを、しんにたのみ申、なに事も此外にわ、おもひのこす事なく候。かしく」

十才に満たぬ我が子の将来のみを案じていた。

重しの取れた大名間の勢力は激しくゆれ動いた。朝鮮出兵の間、身を挺して弾丸と白刃の中を生き抜いてきた加藤清正、福島正則、黒田長政、藤堂高虎等武将派の、石田三成や小西行長等、秀吉側近で威を振うてきた奉行達への不満が顕（あらわ）になってきた。この背後には、北政所につながる武将派と淀殿につながる奉行派という深い流れがあり、秀吉をめぐる女の言外の対立があった。

家康にとって五大老、五奉行など、もはやどうでも良いことであった。「強いものが天下を握る」これが古来の法則である。

豊家を潰すつもりはなかったが、自身すでに天下の主である家康には、互いに取り交した誓書の内容よりも、諸大名の動きを見、自己の腹案を確かめ、修正することのみが肝要である。慶長四年、前田利家が大坂に没するや家康に直言する者は皆無となった。

慶長五年正月一日、諸大名は大坂城の豊臣秀頼に謁し新年の賀詞を述べた。西の丸に住む家康は彼等が一層の礼をもって自分の所へ参集するであろうこと、むしろ西の丸の方に先に伺候したい者の方が多いことを知っていた。

石田三成、長束正家など秀吉の遺臣は、日に日に家康へ靡いてゆく諸大名に、種々手を配り、家康の排斥を画策し、ついには暗殺の手立てまでしたが、全て烏有に帰した。

故太閤の意志は踏みにじられ、いまや家康自身が法度であった。大名同志の勝手な婚姻は禁じられているにもかかわらず、伊達政宗の女を六男忠輝にむかえ、外孫の小笠原秀政の女を養い、蜂須賀家政の子に配した。細川忠興や森忠政等は家康の加増を喜々として受入れ、毫も疑うところがない。

すでにして家康は「天下殿」であった。

しかし、名実共に「天下殿」となるためには、豊臣恩顧の大名で、家康の存在を否定する者を焙り出す必要がある。

秀吉が家康の背後を牽制するため越後春日山から会津に移封した上杉景勝はその遺訓を守り、宿老直江山城守兼続は石田三成の盟友であった。家康が大坂から諸大名の帰国を許して間なく、焙り出しはくっきりと浮んだ。

諸城を修理し、道を補修し糧秣を買い求め、牢人を召抱え、越後になお残る謙信の遺臣に「上杉立つ日には加勢せよ」の檄を飛ばした。家康はこれを風聞と婉曲に表現し、上洛しての弁明を求めた。

家康に挑戦するかのような直江兼続の答書は会津出兵を決意させた。「家康の行動を非難して上洛せず、秀頼様への出仕を怠っている」豊臣家のための義戦の形をとり、秀頼に面会、刀、茶器、黄金二万両と米二万石を贈られた。秀頼側近はやがてくるであろう政権の授受を信じている。

冷徹な家康の計算の中には、諸軍を率いて大坂を空にすれば、もし自分が三成ならば、何等かの行

動に移るであろうことが折り込まれていた。

三成もまた一切を抛って家康の掌に乗る決意を固めた。

七月十一日、東下途中の越前敦賀城主大谷吉継を垂井から佐和山に迎え、挙兵を打ち合けるとともに、前田玄以、増田長盛、長束正家の三奉行に、毛利輝元を西軍の総帥に立てたい旨連署させ、安国寺恵瓊を安芸に送る。

その他挙兵にともなう事柄を定めた。

七月十七日、毛利輝元を西軍の総大将に頂き大坂城西の丸に入れるとともに「内府ちか（違）ひの条々」十三ケ条を諸大名に公布した。

また檄文を添え、内府公（家康）は別紙のごとく誓約に背いている故、武力をもってこれに制裁を加える。太閤様からいただいた御恩を忘れぬと思うなら、秀頼様へ御忠節あるべきであろう。五大老、五奉行が、病床の秀吉にその子秀頼への忠誠を誓い、お互いに取りかわした誓書を無視した家康の悪行を糾弾した。

五奉行の一人増田長盛は家康に通じ、密かに挙兵の報を送り、早くも二十日には家康の知るところとなる。

この日から決戦の直前まで外様大名をはじめ小豪族、浪人に到るまで、手づから書状を認め、増封を約し、甲冑、駿馬を贈り、家康の戦いはすでに始まっている。

宗茂は筑後柳河城において廻文を受けた。

評定は区々定まらぬ。

「家康公いかに智謀ありといえど箱根山までの関東を堅められるが限界。秀頼公の名のもとに諸大名動かんか敗れるは必定。大坂方へ味方あってしかるべし」

「家康公は、事前に芽を摘むの智将、この度の上方挙兵の儀、その戦略、掌を指すが如しと存ずる。毛利輝元殿総大将とのこと、秀頼様を頂かずして人心は一つになり申さぬ」

「このたびのこと、石田三成殿に出づることは明白。黒田殿、加藤殿の石田殿と確執あること久しく、徳川殿に味方されるは必定。ご両家と相談あってしかるべし」

宗茂は故太閤が小田原征伐のおり諸大名の伺候を受けたとき、家康に向かい本多平八郎を呼ばせ、当時の統虎と対面させ、

「彼こそ東国にかくれなき本多平八郎で、この者は西国において無双の誉れある立花統虎である。ともに心を合わせ、統虎は西国の守禦となり、本多は関東の扶翼として内府に仕えよ」

並いる諸大名の前で賞揚された日を想い出す。小柄で肉づきのよい、温厚な長者のような権大納言家康の笑顔があった。

一方、石田三成に良い思い出はない。

自らの才覚を信じ、秀吉の信頼ことに厚いこの男は、権力というものにすり寄ってくる人間の卑しさを見すぎたせいか、まわりの人々が馬鹿に見えた。

朝鮮に、骨のやせるような日を送り、勲の裏に多くの将士を死なせた宗茂に、

「貴公はたびたび軍功を立てておられるが、身共によろしく取次ぎを頼まるれば、太閤殿下に申し上げよう」

言外に宗茂の挨拶を求めるように語りかけた。釜山の本営にあり、武器、糧秣の調達に知恵をしぼることはあっても、寒気と飢えに耐え、あるいは甲冑の上から夏の日射しに炙られ、病に倒れる。多くの同朋の死はこの男には単なる数字であり、一掬の涙すらない。

およそ語り合える相手ではない。

「これは意外のことをうけたまわる。貴公軍目付として釜山へおいでのはず。ありのまま取次がれるのが本来と存ずるが」

宗茂の言に、顔をそむけ、返答もせずに立去った。肉付きの薄い顔の、奇妙に赤かった唇が印象に残った。

肥後の加藤清正は急使をもって言う。

「石田等は秀頼公の御名を借りて家康公を討たんとするもの。内府は関東二百五十万石の大名にして智謀並ぶものなく、戦いの結果は明らか。烏合の衆にくみさるるも益なし。我等と共に、世の成り行きを見守られてしかるべし。重ねて出陣は無用に存ずる」

柳河を動かぬよう熱誠をもって語りかける。

宗茂は考えた。

人々はすでに家康を「天下殿」と呼んでいる。ひとたび位人臣を極めた人間が、しかも老人が、そ

の地位を手放すであろうか。

たとえ石田の謀計といえど、家康を追うかその勢力を殺げば、豊臣家は存続する。石田がとって替ることは絶対にない。

何よりも秀頼の名をもってする戦いである。故太閤秀吉の引き立てにより柳河十三万石の大名に列した。ことあるごとに立花、立花と諸大名がうらやむほどの恩顧をこうむってきた。清正の友情に従うべきだとする閨千代の言葉にかかわらず、宗茂は出兵を決した。

義の道

家康よりの書状到来。

「お味方頂ければ、恩賞は望みに任せたく」

自分の心を裏切ることはできない。出勢の要請二千に対し、御馳走と称し、二千五百を率い七月二十七日柳河を出立。

年三十二、武将として円熟していた。

東上の途次鎌苅の瀬戸において再び家康の書状が届く。「柳河に留まり兵を出さざれば、事平ぐ後、肥前若くは筑後一国を以てせん」宗茂は書を裂いて海に投じる。

七月下旬、大坂に参集した諸将軍議を開き作戦を決する。

まず、美濃、尾張方面を押え、西軍の戦闘態勢を優位に導き、その後東軍の動きに応じて対処する。

八月一日、西軍京都伏見城攻略、城将鳥居元忠ほか全滅。

八月二十四日、西軍伊勢松坂城を囲み、古田重勝を降す。

八月二十五日、西軍伊勢安濃津城攻略。

九月一日、徳川家康、兵三万を率いて江戸より西上の途につく。

このころ宗茂は琵琶湖のそば松本山に陣しひそかに大津城の動きを見ていた。この地は湖上水運による北国、近江各地からの諸物資の荷揚場であり、東海道、東山道、北国街道に通じる枢要の地であり、城主京極高次の東軍への離反が危惧されていた。

九月三日、岐阜城を降して赤坂付近に集結しはじめた東軍に備えるため、西軍の大谷吉継の要請により、美濃方面へ向かうはずの京極高次は、西軍との手切れを宣する密書を家康の臣伊井直政と弟高知に送ると共に、籠城の態勢を固めた。

六日には兵を出し城外の民家を焼き払い、要所に柵を組み上げ、物見を放った。高次はすでに七月はじめ城下の米を買い集め城中に積み、早くから東軍に属する決意を固めていた。宗茂の急報に応じ、大坂から、淀君の使者として、尼の孝蔵主、老女阿茶の局を高次の内室のもとへ送った。

高次の妻はつ（常高院）は、秀頼の生母淀殿（茶々）を姉とし、徳川秀忠の北の方お江与（小督）を妹とし、豊徳両家ともに深いつながりがある。

淀殿の手紙を手渡し、言葉を尽して関東との手切れをすすめる。しかし常高院とて、籠城の手配に

狂奔する高次といまだ言葉を交わすいとまもなく、

「宰相殿越前より帰られて後は、ひたすら軍の用意とて、松ノ丸殿、我等にもいまだに対面なく、その心中が知れませぬ。さいわいにご両人が参られたる上は、宰相殿に会うて、ことの仔細をねんごろに尋ね給え」

高次に会うことをすすめたが、

「両人は我等への御使いではない。いまは籠城の用意に忙しく、暫くの暇も惜しければ、対面叶い難し」

とりつくしまもなく、使者は空しく大坂へ帰る。

入れかわりに、毛利輝元、増田長盛よりの翻意をうながす使者が来訪したが、高次の決意は変らず、九月八日城攻めを敢行する。

毛利元康（輝元叔父）を大将とする大坂七手組、立花宗茂、筑紫広門、宗義智等の兵一万五千、籠城の兵は高次以下三千、夜昼となく雄叫びを上げ、鉄炮を撃ちかける。

この間、西軍の前線基地ともいうべき大垣城には石田三成はじめ西軍の主力が入り、この地を去ることわずか一里（四粁）赤坂には陸続として東軍が集結し、にらみ合いがつづいていた。八月二十三日頃より相対することすでに半月余り、粮秣の補充に不安のある西軍は、しきりに近辺の稲田を刈り取っている。

一方家康は悠々と東海道を西進、三日、小田原、五日、駿河清見関、七日、遠江中泉、九日、三河岡崎へと進んだ。

宗茂は城攻めにあたり、玉薬を量り、小さい竹筒に幾十となく詰めさせ、それを縄で連ね首に掛けさせた。

城近くに仕寄を作るにあたっては、立花の攻口から幅一間、深さ一間の濠を角度の狭い千鳥掛けに掘らせ、城側に土を揚げ一間ほどの土手を築いた。

他の寄せ手が一発放つあいだに、立花の鉄炮は三発を放ち、兵は濠の底を自由に往来し鉄炮の援護のもと、思うところへ竹束を付けてくる。城方が躍起となって弓、鉄炮を放っても、かえって濠中より揶揄の言葉を投げられ、嵐のような銃弾に見舞われる。

城方は矢狭間を閉じてしまった。

園城寺の本営にある元康は、軍議の上、城方は兵粮、弾薬充分にして、長期戦は不利、との判断から、急攻策をとった。

十二日外濠を埋める。

十三日、前大津城主、新庄直頼の弟本玉斉が、高野山の木食上人応其を案内し、開城をうながすが、高次はこれを拒否。西軍、この日夕刻二の丸を落とす。この日西軍は、大砲を長等山上に引き上げ、城内に撃ち込んだ。その一弾が、天守閣の二層目に命中、柱が折れ、高次の姉、芳寿院（京極龍子、秀吉の愛妾松ノ丸殿）の侍女二人が圧死し、芳寿院も一時気を失なった。芳寿院、内室の常高院の高次への開城の懇願は、悲鳴に近くなってゆく。

「三井寺観音堂あたりに多数の人影あり」

宗茂はただちに物見を走らせる。

東西両軍は大垣城と赤坂に膠着(こうちゃく)しており、兵の動きはないと聞いている。

気抜けのした表情をして物見が報告する。

「京の町人共その数を知らず、手ん手に、重箱を提げ、水筒を持たせ、大津の城攻めを見物しておる由にござります」

宗茂は意表をつかれて言葉を呑んだ。

攻守とも命を的に全霊を傾けつくして戦うてきたこの幾日、近在の百姓、町人、難を避け犬猫のたぐいすら見えぬこの戦場に、物見遊山のような一群がいたとは。豊臣・徳川両家につながる美しい女人の命運、眼下にのぞむ戦闘の地獄絵、彼等にとっては、一場の景物に過ぎないのか。

十四日午刻（正午）早朝からの本丸攻撃にも頑強に城を守り抜く高次に対し、寄せ手の将毛利元康は誘降の使者を城へ送り込む。

木食上人応其、本玉斉、淀殿の使者孝蔵主が高次を説得する。

「貴殿御下知に背いて籠城されたことは、その罪謀叛に等しい。急ぎ寄手と御和談になり、御老母、その他御女達、また人質として出されている態磨の御命を救いたまえ。上方の諸将を敵になして、今かく御籠城あるは、秀頼公に弓をお引き給うも同然。……」

西軍は一万五千の寄せ手の軍勢を一刻も早く大津城から解放し、来たるべき決戦に充てねばならない。

「我等は今度内府へ属し、寄手の諸将は輝元に味方して勝負を争う戦いなれば、さらに秀頼公の御身につながることではござらぬ。しからば天下の元臣たりし内府の味方なり」

断じて城を開くの意なきことを示し、三名を追い返した。

ちょうど同じころ、赤坂付近の東軍の将士が、いちじるしく増大していることに気づいた西軍は、「さては内府着陣か」陣中大いにざわめいていた。

三成の家老島左近は、「内府の勢は会津の上杉景勝と対陣のはず」容易に信じなかったが、赤坂の南、岡山と呼びならわす小丘に、金扇の大馬印、小馬印、葵紋の幟七旒、総白幟二十本、目もあざやかにひるがえり、家康の本陣を示していた。

この日、島左近の率いる勢五百は、敵の作戦計画を探るべく、杭瀬川(くいせ)を渡り、敵陣間近に放火した。これに挑発された野一色頼母、藪内匠(やぶたくみ)等の一隊は退く島隊を追い杭瀬川(くいせ)を越えたところで、宇喜多秀家の部将明石全登(ぜんとう)の銃隊に狙撃され、野一色頼母をはじめ三十余の首級をあげられた。

杭瀬川(くいせ)前哨戦の後、軍議を開いた家康は、諸将の意見を退け、

「一隊を留めて大垣に備え、本陣はまず佐和山を屠り、さらに大坂に向かう」

とし、諸軍へ触れをまわした。家康はあえて情報を野放しの状態においた。

年五十九、考え抜いた計算があった。

西軍の主力が籠る大垣城を攻めれば長期戦をまぬがれぬ。大坂の毛利輝元後詰をせんか形勢は逆転

する。幼君秀頼を奉じて兵を出された日には、秀吉恩顧の諸将は兵を引くであろう。

「敵主力を大垣城から引きずり出す」

きたるべき決戦に備え、越えなければならぬ、高い山であった。

一方西軍は、老将島津惟新の、

「軍旅に疲労している敵兵の多くは、甲冑を枕に眠っている模様。今こそ家康の本陣に先制攻撃をかけるべし」

貴重な意見を退け、東軍の狙いは、佐和山城を落とし、大坂に向こうにあると断じ、密かに兵を関ケ原に移し、東軍を迎撃することに決した。

十四日も暮れようとするころ、大津城内は寄せ手の放つ銃弾が狭間を砕き、大砲の砲弾が矢倉を打ち折る中、軍議の行方を見守っている。

黒田伊予、赤尾伊豆等重臣にもとより戦意なく、日夜にわたる砲撃に、夫人や姉の芳寿院は泣き叫び、高次に開城を迫る。

高次は、赤坂に家康が着陣したことを知らない。この日正午、先鋒隊と合流した家康は高次の弟高知を大津城救援に赴かせるべく、琵琶湖畔近江長浜から高次の安否をたしかめるべく合図の狼煙を上げさせた。天候の故か、攻防の激しさ故か、大津城は反応しなかった。

最後まで守り抜き、城を枕に討死の覚悟であった高次も、本丸をゆさぶる寄手、戦意なき味方に、心弱ってゆく。

この日、家老十時摂津に向かい、

「この度の一戦は京極殿に対しての遺恨ではない。ひとえに太閤殿下の御恩に報いんがためである。城を開けられれば、京極殿の一命お救い申そうと考える」

心中を語り、摂津のすすめにより矢文を認めた。世戸口十兵衛は、城中に矢文を射込めとの宗茂の命に

「諸軍の方々ご注視の中、もし射損じんか某のみならず、立花勢の恥となりますれば」

一度ならず辞退したが、

「かしこに一段高くなびく四つ目の旗は、京極殿の馬印じゃ。十兵衛、旗だけを見よ」

一町余も先の旗を指し示されたとき十兵衛の不安は消え失せ、旗がいかにも近々と目に映じた。

十兵衛の鏑矢は、何事かと見守る両軍兵士の耳に、凛々たる音をひびかせて、発止と旗竿を射切った。両軍ともに称賛の声を上げ、手を打ち、足を踏み、「屋島の那須与一の扇の的もかくあらん」しばしどよめいた。

意を尽し、誠意あふれる宗茂の文面は、その人柄を知る高次の心を動かした。

「仰せに従い開城いたす。ついては互いに人質を取り替したく」

宗茂は、故道雪の養母につながる弱冠十六才、立花政辰にこの大役を申し付けた。

明けて十五日丑の刻（午前二時）福島正則・西尾光教の使者が時を同じくして、赤坂に接する岡山の頂、家康の本営に駆け込んだ。

「敵主力は、大垣を発し関ケ原方面へ移動中」
はね起きた家康、寝所の扉を開け、大垣の方を望んでいたが、「乗ってきおったわ」
丁々と太股を掌で打つと、満面に笑みを浮かべ、出陣を命じる。湯漬けをとり、具足を帯びる間も、ことのほか機嫌よく、長久手の話などを小姓に聞かせた。
いつもの小袖の上に胴をつけ、黒広袖の羽織と塗笠という軽装で馬をひかせる。
昨夜来の雨は小止みなく降りつづき、じっとりと重たい空気が闇に満ちている。
あまりに早い家康の行動に、
「いずれに出御なさるや」
あわてて後に従い家臣が問いかける。
「敵の方へ」
鞭を上げ彼方を示すや、馬腹を蹴って走り出す。旗持、槍持、鉄炮衆が必死にあとを追い、垂井に至るころ、ようやく隊列が整うた。
家康の闘志は全軍の将士の胸を打った。
同じ十五日早朝、京極高次は、湖岸より吹き寄せる冷たい霧の中、三井寺に入り髪を落し、墨染の衣をまとい、城を開放した。宗茂は城を受け取り、立花政辰に兵を添え、紀州高野山（和歌山県伊都郡高野町）へ送るべく別れを惜んだ。
西軍にとってこの一万五千の勢力を大津に引きつけられたことは、優勢に推移した関ケ原戦前の戦

局を消し去って余りあるものとなった。
兵の疲れを休め、毛利輝元の指示を受け、関ケ原に集結すべく進軍していた宗茂等諸将は、江州草津において「西軍総敗軍」の報に接した。
我を失ない、果てしない討議に時を費す諸将に「大坂に籠城し、秀頼公の軍勢と共に闘えば必ずや勝利を得ん。一たんの敗軍に胆を冷やすことは無用」
ただちに兵を返し京に向かい、木下肥後守家定に使者を送る。
「関ケ原において西軍が敗軍に及んだ上は、諸将大坂城に入り再戦の手立てあるは必定。某、太閤の御台所を守護し共に城に入り、秀頼公を助け、防戦の用意つかまつらん」
御台夫人の弟で京都所司代家定は、宗茂の言を信ぜず、「先へ大坂へ行かれたし」家中狼狽し、門を固め、火縄に火を点ずる。
「内府に味方したとでも思うたか」
あきれた宗茂は兵を進め大坂に入り、天満橋に軍勢を控える。
「秀頼公ともども籠城のお覚悟ならば、立花も一方の守りを承わる」

烏合の愚将

宗茂の使者に対し関ケ原大敗の報矢のように続き、驚愕、喪心した、輝元、長盛等は、

「評議中なるもいまだ決せず」
この回答に宗茂は嚇怒した。
敗れたとは言え、西軍の将兵は死力を尽くし、再起を期して大坂城を目指すであろう。金城鉄壁、この城に拠れば、いかに家康軍巧者といえど抜くことはできない。秀頼公を主将に戦えば、太閤恩顧の東軍諸将は、兵を引くか、籠城に加担する者も出てくるであろう。
諸将に檄を飛ばし、大坂城西の丸に入り、総大将として号令した者の言葉とも思えぬ。
彼等に戦意はない。
宗茂は重臣を呼びことの経緯を語り、
「道を塞さがれぬうち出発し、国元にて成りゆきを見ん」
即時撤退を命じる。十時摂津が言う。
「故太閤への御恩報じ、輝元殿とのご交誼もこれまで、秀頼公の御名において軍勢をだしはしても、家康公に敵心はござらぬ。いまは家康公のお許しを願い、お家の安泰を計るべし」
「某、家康公御陣への使者となり、当家の立場を弁疏いたさん」
立花三河の弟、薦野半左衛門が出立する。
毛利輝元は、関ケ原において毛利・吉川両家は一兵たりとも動かさず、家康も輝元の罪を許し、本領を安堵するとの密書に接し、とうに籠城の気持はなかった。またこの一戦を輝元と進めてきた増田長盛は家康に挙兵の儀を密告している。どこまでも西軍は、不統一であった。

宗茂は御座船の船頭でありながら、忍びに長けた鶴田、村田両名を大坂城に入れ、人質として差し出していた母、宗雲院を奪い返し帆を上げさせた。
柳河を出たときの手勢二千五百は、若干の戦死、負傷者を出しはしたものの、無傷に近い。関ケ原の本戦に参加することができず、敗残の将兵として故国へ向かう、将士黙然として、島影に見入っている。
「船が来るぞ」
はるか満帆に風をはらんだ一隻が近づいてくる。
「追手か」
ただちに戦闘体勢を執り迫りくる船をにらむ。白地に十字を染め抜いた島津の旗印が紺青の水に映える。
関ケ原戦において終始戦いを傍観、西軍敗れるや、家康の本陣の前を突っ切り、四面敵の中を切り抜け、一千の兵を八十余人になるまで討たれながら、大坂まで五十里（二百粁）をわずか三日足らずで駆け抜けた。
宗茂の旗本数名がするすると身を寄せ、
「島津殿は父君紹運公の仇、一戦に及び怨を晴らされては」
「父紹運岩屋に義死を遂げしことは、故太閤殿下のとりなしによって水に流し、我等朝鮮に於いては共に闘うた間柄。いま、戦に敗れ、多くの兵を死なせて国へ向かう。相闘ういわれはない」

さとすように語りかけると、小舟を出し、義弘に面会を求めた。

義弘、年六十六、激闘に耐え、日夜の逃避行に耐えた老将は無残にやつれてはいたが、眼光は澄み渡り、気迫に満ちている。

船底を打つ波の音が聞こえるのみの静かな瀬戸内の海は、いくつもの島影を抱いて、どこまでも青い。

赤坂に集結した東軍夜襲の献策がとられなかったこと、南宮山の毛利、吉川はついに一発の鉄炮も放たず、決死の突破行を試みる島津軍を見ていたこと、小早川秀秋の裏切り、宗茂はあまりにも軟弱な西軍の結束にあきれ、怒った。

関ケ原本戦に参陣できなかった口惜しさが、ふつふつと湧いてくる。たとえ二千五百の小勢といえど、一方を攻め破り、家康の旗本を突き崩したであろう。

袖の合印を引き千切り、一本杉の馬印を折り、島津特有の「繰抜きの陣法」をもって、大軍の只中、一文字に隊伍を固めて突き進む。削り取るように討たれてゆく味方には目もくれず、銛を打つように、ひたすら敵勢の中を切り抜ける。

福島正則は、家康の陣の前を喚声を上げ、一団となって斬り進む島津軍を見て、

「手を出すでない。死に狂いの兵じゃ」

部隊を動かさなかった。

殿を引き受けた甥豊久、我が子同様に育てた若き武将は、義弘に替り、三十一才の生を血しぶきの

中に終えた。

追手を逃れ、落人狩りを斬り、にわかづくりの駕籠に義弘を乗せ伊賀の山中を走る。飢えをふさぐため乗馬を殺し、その肉を喰いながら走る。

駕籠の先肩をかつぐ一人が、馬肉を切りとって、そっと義弘に差し出す。

「殿は我々に荷われてござるによって気遣いなし。我々とも草臥（くたびれ）てはならぬ事じゃ」中馬大蔵兵衛尉が叫ぶ。

聞こえぬふりをして馬肉を差し出す、

「中馬の申すとおりじゃ、儂は欲しゅうない」担ぎ手が倒れては、老齢の義弘は生還を期しがたい。空腹で死にはしない。

走る中馬の目からほとばしる涙が、血汐のこびりついた鎧の胸板をしとどに濡らした。

義弘も従う者もともに哭いた。

咄々と遠い昔話のように語るうち、義弘のまわりにも、宗茂のまわりにも、すすり上げすすり上げする涕泣の声が起った。

ある者は苛酷な道程を思い出し、ある者は生還した我が身をいとおしみ、ある者は心からの共感に身をふるわせる。彼等の声は、磨き上げたような瀬戸内の海面に、小波を立てるかのように聞こえた。

夜、舳先に砕ける波が、月の光を浴びて生き物のように光る。九州が近い。

朝鮮出兵以来、語ること余りに少なかったゆきの、ほの白い顔が浮かぶ。夜光虫のきらめく波のあ

わい、奇妙に誾千代の姿が想い出されてならない。男女の想いではない。

関ケ原の出陣まで、

「立花の家のため」

清正の言を容れ柳河へ止まるよう掻き口説いた、じっとしていさえすれば五十万石の大名の地位が約束されていた。

いま敗残の将として国元へ戻っても、追っつけ追討の兵を起こすか、腹切らせ、封を奪うやも知れぬ。誾千代の胸中はいかがであろうか。しかし、宗茂は思う。清正の言に従い、家康の望みを受入れ、故太閤の恩顧を滅却し、柳河に息をひそめ、よしんば大封を受けたとして、己が心はその後の生に安んじられるであろうか。

人々の心を他所に船足は軽く、故国に近づく。上陸を目前にひかえ、長門壇の浦（山口県下関市）で強風に襲われた立花の船団は、弓組三十余人が乗り組んだ船を失なった。

名も知れぬ小島の磯から救い出された組頭世戸口十兵衛の家人は、

「殿の手足ともなるべき、屈強の者共三十人、ことごとく溺れさせてしもうた。どの面下げて殿に目見えられよう。某、腹切ってお詫び致す故、殿によしなに申し上げよ」

慟哭しながら、十兵衛の従容たる最後を伝えた。

高橋の家から立花城へ入るとき、ただ一人伴いこの二十年近く常に身近に仕えてきた。いま敗軍の将として故国を目前にして忠臣の死に逢う。

「早まったぞ十兵衛」

宗茂は船端をたたいて、天をあおいだ。

思いもかけぬ、夫人誾千代以下武装した留守居の兵に迎えられ、柳河城へ入った宗茂は、ただちに籠城の用意をさせた。

鍋島、加藤、黒田、東軍の将が何らかの動きを見せるのは明白である。

ことに鍋島勝茂は、竜造寺政家と共に西軍に属し、伏見城攻略にかかわったが、関ケ原の敗報を聞くや大坂に止まり、九月二十五日黒田長政と伊井直政に仲介をたのみ、伏見の家康に謁し、罪を詫びた。

これより先父直茂は肥前佐賀にあって、家康の会津出兵の報に接するや、銀子五百貫をもって家臣三人に命じ、米を買い付けさせた。石田三成の挙兵に応じつつも、宇都宮に在陣した徳川秀忠に、尾張から関東までの買い占め米の目録を送った。

さすがの家康も、

「さては鍋島心中は別条なし」の心証をいだいていた。

鍋島直茂の狡猾な計算を知る家康は、

「柳河へ出陣し、罪をつぐなうべし」

大津城攻略の主力となった立花宗茂の追討を命じた。

直茂はこの一戦に家の存亡を賭け、領内十六才から六十才までの健康な男全てを駆り出し兵に充て、

総数三万を超えた。

十月十七日、加藤清正の書状到来。

「この度上方御出勢、御恙無く御帰陣、目出度候。貴様御事、高麗以来御芳志に預り候儀少も失念仕らず候。今度の御出勢、本より逆従一味にては之無く、只若君様御意と申、秀元の催促に付而之儀に候間、黙止難く思召しご上洛、尤に候」

「拙者事は其元え向ひ候共、弓矢八幡も照覧あれ、合戦仕覚悟に御座無候」

「加賀守（鍋島直茂）儀、身の科の遁れ道なき故、其表え出陣の望、近頃以て比興（卑怯）に存候」

自分の身命を抛って宗茂のために働くことを語る。

堂々たる敗軍の将

十月十四日、黒田如水、伊井直政を監軍に鍋島の勢三万三千余騎が領内に迫った。

「彼等を領内に入れては、道雪、紹運の武功を穢し、儂の朝鮮、明国まで響いた武功をも空しうする」

城を出て戦おうとする宗茂を

「大坂から家康公に許しを願い出たことであり、殿直き直きの出陣は罪を増すことになりますれば、

少しの人数を出され、領内に敵侵入するにより取り鎮めのため兵を出したことにした方が良策」

由布、小野等老臣の言を聞き入れたものの、共に西軍に属し、伏見城を落とした鍋島が掌を返すように柳河を囲むことに、底知れぬ怒りを感じていた。

八の院で鍋島勢十二段の陣を三千の立花勢が九段まで突き崩し、多数の死者を残し城中へ退いたのを見極め、監軍伊井直政は清正の言を容れた。

すなわち柳河城を清正に明け渡し、立花家中を肥後加藤家の預りとすることである。

十一月、宗茂は黒田、加藤、鍋島、筑紫、高橋等、島津討伐軍五万余騎の中にいた。開城を前に、東軍への忠誠心の試しとして先鋒に加えられたのであった。

折から寒気厳しく、家康の書状を受けた如水は年内の島津攻撃中止を伝える。

「薩摩表へ出陣するに当り、貴公にも御慰みがてら同道願い申した。貴公の武勇は惜しみても余りある。開城後といえど従う家臣への秩禄のこともござる。肥後に留まらるるなら玉名郡一帯、十万石を差し上げようと存ずるが」

清正の言に、

「貴殿同様、島津殿は肝胆相照らす仲、元より戦うの心はこれなく、ただ家康公への義心を示さんがため同道いたした。また、玉名郡拝領のことは、御上なら兎も角、貴公からならたとえ、肥後一国五十万石を頂いても、御遠慮つかまつる」

いささかのかげりもない宗茂の言葉に、我が意を得たりとばかり、清正は会心の笑みを浮べた。十

万石を与えようと考えたのは本心であったが、城を失うに至ったいま、凛然として屈せぬ宗茂の心を知り、清正は清々しい風に吹かれたようであった。

十一月十五日、城の内外を取り片付け、由布雪下等二十一人を伴に瀬高門を出た宗茂は路上に平伏する数十人の庄屋、百姓に路をさえぎられた。路を開けよ、と命ずる雪下等の袴の裾にすがり、

「何とぞ下城の儀、思い止まられたく。筑後四郡の百姓供、お城のために一命差し上げまする。兵粮のことも如何様にもお申し付け下さいませ」

必死に宗茂の下城を止める。声を荒げて追い払おうとする雪下等の叱声にも臆せず、馬上の宗茂に嘆願する。領民の心を思えば胸詰る思いであっても、武の道は変えられぬ。

「有難く思うぞ、なれど儂がこうして城を出ることは、お前達のためでもある。やがて新しい領主が入城される。儂が在城の時と同様、安心して耕作に励むが良い」

道を開けさせ清正の陣へ向かう宗茂一行を、百姓達の泣声が追うてくる。

清正は、加藤美作(みまさか)を城番とし、立花家臣は望みにまかせ、自ら召し抱え、他家に仕官させ、心を尽した。宗茂に預った家臣百人は熊本に住まわせ、小路、屋敷を与え、柳河時代の禄を与えた。柳河小路、柳河町として今にその姿をとどめている。

すべては散り散りとなった。道雪夫人宝樹院と、宗茂夫人誾千代(ぎん)母娘は、肥後国玉名郡腹赤村（熊本県玉名郡長洲町）の庄屋伊蔵の屋敷に仮寓し、立花三河は黒田如水に召し抱えられ、天野源右衛門は肥前唐津城主、寺沢広高に従った。

宗茂は肥後高瀬（熊本県玉名市）の千間寺に住し、清正から千人扶持の助成を得た。

戦いも、領国の経営に腐心することもない無為の日々が訪ずれた。

開城を決して間なく、足立ゆきから一通の書状が届き、岩屋、朝鮮、幾度と知れぬ戦いに命を捧げた将士の霊を、母娘で守するつもりだと言ってきた。かつての住居は空となり、知り合いに行先も告げず飄然と旅立ったと聞く。いずこの空の下を旅していることか、城を失なったいま、宗茂は遠い記憶の中に生きるゆきと語るしかない。

慶長六年（一六〇一年）十月、関ケ原戦で前哨戦、本戦の石田攻め、さらには石田三成の捕縛、抜群の戦功を立てた田中吉政が三河岡崎城（愛知県岡崎市）から、筑後一国三十二万四千七百石の領主として柳河城へ入った。

築城の大家であった吉政は、柳河城の規模を拡大し、堀を深くし、矢倉を増やし、城はいよいよ不抜の様を呈した。

はじめは珍しかった土地の風光も、ただ平穏裏に移ろう日々の中、宗茂は死ぬほど退屈になってくる。

入部の翌年、百姓の間に旧主を慕う気風あるを知った吉政は、まず立花家の菩提寺、梅嶽寺を毀(こわ)した。次いで宗茂、誾千代(ぎん)のもとへ秘かに米を運んでいた松延村（瀬高町）の庄屋の息子、七郎兵衛、彦左衛門の二人を野町の面(めん)の坂（山門郡山川町）で磔刑(たっけい)に処した。

さらに彦左衛門の父を自宅で切腹させ、領民が旧主を慕うことを罰した。

吉政は、久留米、福島の二城の改修にも手を付け、領内の道路、河川の整備に金銀を惜しみなく注ぎ込んだ。ために祿高の実収は増加しても、たちまち諸費用に充てられてゆく。

柳河の出来事はいやでも耳に入る。清正の好意は有難いが、春夏秋冬、まさしく無事の日々も耐えがたい。家康は宗茂の罪を許すとの回答を使者薦野半左衛門に与えはしたが、その胸中は忖度しがたい。

慶長七年（一六〇二年）三月。

宗茂は清正の厚恩を謝すとともに、上方に出向き世の移ろいを見るため、桜の開花を供に東上の旅に出た。大阪を経、大津城をめぐり、京都妙心寺の富士谷紹務のもとに身を寄せる。

家康は考えていた。清正の度重なる宗茂再封の願いも知っている。大津落城後西軍の命により瀬田（滋賀県大津市）の橋を焼こうとした日下与右衛門に、

「昔より関東勢の入京に対し、橋を落として利を得たためしはない。某、伏見に留まる間は防ぎ申す故」

橋を焼くのを止めたという、良く古を知る心もめでたい。秀吉に対面を許された股肱の臣、本田平八郎は、しきりに宗茂に肩入れする。だが、筑前、筑後、又は肥後一国五十万石の大封を与えようという自分の要請を、弊履のごとく投げ打った、憎い男でもある。

京極高次の大津城を攻め落した。報せを受けたのは関ケ原へ急ぐ、冷たい雨の中であった。もはや大勢に影響を与えぬとは言え、乾坤一擲の勝負の場に臨み、いささかの心のしみとなったことも確かである。

それにしても立花の城攻めの仕方、良く考え抜いたものではある。

家康は自分の心の底深く、立花宗茂の存在に好意を寄せている水脈があるのに気付き、

「いやいや、仲々その気にはなれんて」

頭を振り、思考を外らす。

悠々として京都の日々を楽しむかに見える宗茂主従の手元、日毎に不如意の度を増し、ついに従う者達は思い思いの手仕事を求め、日々の食をまかなった。

竹や紙で細工物をし、袋貼りをし、あるいは虚無僧となり、家々の戸口に布施を求めた。

戦場においては、いかなる強敵にあっても屈せぬ者共にとって、辛い日々であった。着衣が粗末になってゆき、朝夕の膳も寂しさを増してきた。宗茂は書を読み、寺社をめぐり、座禅に明け暮れた。いささかも卑屈になるところのない、閑々とした主の態度こそが、皆の救いであった。

宗茂とて臣下の窮乏の度、日毎に深まるのに気付かぬわけがない。しかし、自分がいたずらに動けば家臣を悲しませることになる。

世の中には自分の力では如何ともしがたいことがあるものだ。時の流れに身をまかせることも、強い生き方の一つとなることがある。

夏の一日、托鉢に街をめぐっていた家臣は騶然たる雨に閉じこめられた。

「しもうた、縁先に干飯を出したままじゃ」

今の身にとっては貴重な品である。
「この雨じゃ、もう使えぬ」
中の一人が口ごもりながら言う。
「殿様がとり込んでおられはせぬか」
「馬鹿な、そうなっては立花家の運も末じゃ」晴れやらぬ雨の中、大急ぎで戻り、宗茂の居室を伺うた彼等は、端然、書見をする主君の肩ごしに、無残に濡れそぼった飯粒を見た。
「必らずや殿の御運の開けるであろう」
ひそかに涙を押し拭うた。
慶長八年秋、宗茂主従は京を発ち江戸を目指した。もとより路銀の豊かであろうはずもなく、駿府（静岡市）に至り、亥子の節句に会うた。やっとの思いで赤飯を手に入れたものの食すべき皿も箸もない。木の枝を切り箸となし、手の甲を皿として、心祝いをした。
この窮状を忘れぬため、枡に赤飯を盛り、柳の枝を折って箸とし、
「愛嬌、挨拶、仲の良かごと（良いように）」と祝う風習が宗茂再封後に伝えられ今につづいている。
同じ月、相模小田原（神奈川県小田原市）の宿に着いた一行は、肥後在住の旧臣達からの飛脚を以てする御機嫌伺いに接した。
小野和泉からは各地の戦場で使用した残りの銀を蓄えたもの二十貫が贈られた。故郷を想い旧友の

恩を感じ、さすがに歴戦の者共も胸ふさがる思いに頭を下げた。
江戸（東京都）に入るころ、本多佐渡守忠勝から使者が送られ、
「高田宝祥寺に入らるべし」
指示により、旅の垢を洗い流し、久方ぶりにくつろいだ。
「江戸へ入ったことを咎められるのではあるまいか」
との心配は、寺を訪れた忠勝の、
「罪を許して、御家安泰を考えておられる」の一言で杞憂に帰した。
翌慶長九年二月二十五日、五千石、御書院番頭を命じられる。家康は宗茂に対面し、
「先年関ケ原では西軍に味方されたが、心からのものではなく、大津の城攻めもあの場合致し方ない。開城後、苦労も多かったであろう」全てを忘れ、将軍の傍近く仕えるよう命じた。年三十六、柳河を出て三年の月日が経っていた。
家康は宗茂の務めぶりを見ながら、自分の目を確かめていた。話に聞いてきた立花と身近に仕える立花、まことに至誠の人と見えた。
一日、家康は宗茂を呼んだ。
「当家に仕えるに当り何か心に思い定める所があろうか」
「天下治まり返った今日、本来の御用もこれなく。御酒を存分に頂いて、千秋楽を謡うより外致しようもなく。御奉公と申しても御門の一つでも番することでありましょうか」

宗茂の答えは、ことの外家康の気に入り、この日天守閣に登ることを許した。

奇蹟の復帰

これより二年前、慶長七年（一六〇二年）十月十七日、誾千代は三十四年の生涯を腹赤村に終えた。放浪の主人を思い、立花の家名を思い、草深い田舎にわずかな侍女を置き、自分の短い生の終りを悟ったとき、誾千代の心中を占めたものは何であったろうか。

宗茂は家康の要請により二代将軍秀忠の補佐として、大坂冬・夏の両役に出陣した。

太閤への御恩報じとし、関ケ原に出陣、一度は立花の家を潰した宗茂にとって、その嫡子秀頼を討つの心は毛頭ないが、家康への恩義には報いなければならぬ。

元和元年（一六一五年）豊臣家は亡んだ。

翌年、徳川家の永続を確信して家康薨ず。

元和六年（一六二〇年）十一月二十七日、柳河藩主田中忠政は嗣子なきにより除封、立花宗茂、陸奥国棚倉より旧領に移封さる。

終始一貫潔い宗茂の行動は家康に好感を持たれた。適切な戦略眼、小禄といえど誠実な奉公の日々。晩年の家康は宗茂に全幅の信を置いていた。

禄十一万九千六百石、三池郡の一部一万石を弟立花直次の嫡子、種次に与え、従五位下主膳正に叙任した。

柳河開城より二十年、領地没収後旧領に復するという異例の扱いである。

宗茂は、秀忠、家光と徳川三代の将軍に仕え、その廉直の性と戦術の冴えから、側近く重用を受けた。

数々の味わいある言葉を残している。

「太閤記」の作者、小瀬甫庵が、

「貴公も当代の重要な人ですから、記録を出されて下さい」

と記録の提出を求めるのに、

「某の為したことは天下の公論に基づくもの。名を知られんがためその功を記録することは無用」

笑って与えなかった。

また、重臣に語って、

「戦は兵の多少によらず。一和なくしては如何に大勢であっても勝利は得がたい。道雪公以来、我等が小人数で度々勝を得たのは、兵の和ゆえである。その一和の元は、平日、懇にすることじゃ。一言の義にでも家来は身を捨てるものであるから、大将たる者は、そのように心得るべきである」

寛永十六年（一六三九年）四月三日、入道して立斎と号す。同じ日家督を忠茂相続。

同十九年十一月二十五日、七十六才を一期とした。胃癌と言われる。

解説

志村有弘

私が、原田種眞と、初めて仕事をしたのは、確か、昭和五十九年一月に刊行された『日本仁医物語』（全十巻・国書刊行会）であったと思う。原田は、その「九州・沖縄篇」に、熊本の医師高森薫と佐賀の医師藤崎伸太を執筆した。その折、彼は熊本・佐賀に何度も何度も納得の行くまで取材に出かけ、その上で書き上げたのを記憶する。その後、『日本伝奇伝説大事典』（角川書店、昭和六十一年）もいっしょに仕事をした。そうした一連の協同作業は、私と原田を親しい間柄にして行ったのだが、原田の一字一句もおろそかにしない、誠実な仕事ぶりは、私の脳裡に強く焼きついている。

原田種眞は、昭和十七年十月十五日、原田種夫・カ子の二男として、福岡市春吉に生誕した。父種夫（「九州文学」同人）は、「風塵」「つくし野抄」「竹槍騒動異聞」など、数々の名篇佳作を書いてきた作家である。種眞は、春吉小学校・春吉中学校・福岡高等学校・西南学院大学と勉学の道を歩んだ。そして、今まで、常にコツコツと文学作品を書き続けてきた。無論、彼が文学の世界に入って行った背景には、父の影響が全くなかったとは言えまい。彼は、幼い時から机に向かってペンを走らせている父の背を見続けてきたはずだ。しかし、彼に文学の師はいない。結局は、文学とは、自分一人の孤独な営みであることをよく知っているからである。

種眞は、「春吉花園町」と題する随筆の中で、

小学校裏の、細い、道一つへだてた借家で、父は、せっせと、原稿用紙のます目を埋めていた。私達が、物心ついてから今日まで、変わることのない姿である。痩身の父は、正座が苦にならぬのか、机に向かうときはいつも、きちんと座っていた。

青年期の詩作の時代から、今日に至るまでの作品を、私は、余り目にしていない。折にふれ、短い文章を目にする程度である。けれども、父は、出来不出来はともかく、常に誠実な作品を、世に送ってきたであろうと思う。

と言うのは、父の日頃の、語句、文章に対する推敲が、妥協のないものであったから。

と記している。種眞の文学に対する姿勢もまた妥協のないものである。

本書『火の槍　立花宗茂』は、柳川城主立花宗茂の波乱に満ちた生涯を鋭く追及した作品である。宗茂は、『名将言行録』に、「武を好」み、「才勇絶倫」「良将の風あり」と記され、豊臣秀吉をして「九州第一の者」と絶賛せしめた武人である。本書は、その宗茂の誕生から書き始められ、長じて立花家への養子となり、養父立花道雪の死、実父高橋紹運の凄絶な戦死、朝鮮出兵、関ケ原の戦い、流浪、柳川城主に復帰、というふうにストーリィが展開して行く。そしてまた、立花宗茂の生涯を追及しながら、大友・秋月・龍造寺・鍋島・島津といった九州戦国時代の国々の激しい闘争の歴史を詳細に綴っており、言わば、熾烈な西国合戦絵巻がくり広げられている。これも大きな特色となっている。

本作品は、立花宗茂を中心に据えながら、前半が「天下無双の剛将」立花道雪、中間が「義」の人

高橋紹運と、この二人がそれぞれ見事な活躍をしていることに気づく。言うならば、道雪・紹運・宗茂という展開は、舞でいう序・破・急の体をなしているのである。そして、彼等三人だけではなく、足立弥平次、弥平次の娘ゆき、世戸口十兵衛といった脇役もまた実に印象深い行動をする。それが、重厚で、読みごたえのある作品に仕立てている理由の一つであろう。

作者は、作品の末尾に近いところで、

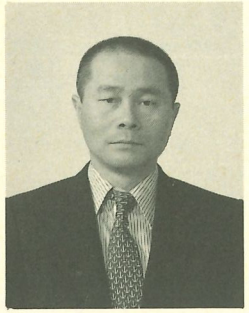
家康は宗茂の務めぶりを見ながら、自分の目を確かめていた。話に聞いてきた立花と身近に仕える立花、まことに至誠の人と見えた。

と記している。この家康の宗茂観は、作者自身のものでもある。

ところで、読者は、作中に高祖城の原田信種という人物の登場することに気がつくであろう。古く時代を遡ると、『平家物語』には、原田種直という人物が六ケ所に登場する。作者の祖先なのである。作者は、本書を書きながら、明らかに遠い時代の祖先に思いを馳せていたに違いない。

『火の槍　立花宗茂』は、構想五年、『筑後将士軍談』『鹿児島外史』『龍造寺記』等々、多くの史料を駆使して書き上げられた。つまり、九州に生まれ育った作者が、「九州第一」の武将立花宗茂と四つに組み、その勇壮で誠実な生きざまをものの見事に描き出した歴史小説である。しかも、推敲に推敲をこらした、詩情に富む格調のある文体は、立花宗茂という戦国時代の英傑を鮮やかに描き出したのである。

（文芸評論家・相模女子大学教授）



著者／原田種眞（はらだ・たねまさ）

昭和17年福岡市に生まる。春吉小学校・春吉中学校福岡高校・西南学院大学経営学部卒。ホテル・ステーションプラザ電算室に勤務しながら歴史文学に精進。「日本仁医物語」（国書刊行会），「日本伝奇伝説大事典」（角川書店）等の共著多数。
現住所　福岡県中央区春吉１－８－11

火の槍　立花宗茂

発行　一九八九年六月三〇日

著　者　原田種眞©

発行人　伊藤太文

発行元　叢文社

東京都新宿区高田馬場四―四―二〇（クラウンビル）
〒160　振替東京9―42714
電話03（360）6606（代）

定価一五四五円（本体一五〇〇円）

※乱丁・落丁の本はお取り替えいたします。

印刷製本　文昇堂

ISBN4-7947-0168-3 C0093 P1545E

＝現代を拓く歴史名作シリーズ＝

瀬戸の鷹 小早川隆景

泉 淳 第五回歴史文学賞受賞作家

●大転換期…不敗の鬼謀
群雄割拠から統一の時代へ——毛利元就の三男隆景は強敵、尼子、大友、大内との合戦の明け暮れの中で歴史の底流を見抜く先見の哲人武将に！。本能寺の変、中国大返しの秀吉軍追撃を制止した隆景は五大老に選ばれ、毛利一門は全盛期に！。50倍の明の大軍を撃破したヘキテイカンの勇武。毛利乗っ取りを謀る秀吉との外交戦。占領地の民に「神の軍」と慕われた治政の神髄は？

●天下人秀吉に尊敬された男…家康は秀吉に恐れられた。利家は頼りに。三成は便利がられ、如水は警戒された。そして隆景は「天下にフタをする唯一の男」と天下人秀吉から尊敬される。

定価 ¥1,545（税込）

叢文社
〒169東京都新宿区高田馬場4-4-20
☎03(360)6606 振替・東京9-42714

大奥の宰相春日局

藤居正規 ¥1500

●衝撃の新説 春日局は家光の実母…「松のさかへ」「臼杵稲葉系図御家系典」「新編武蔵風土記稿」「徳川四天王をしのぐ一族の禄と権」…新発掘の確証をもって正史をくつがえす一石。マスコミで騒然。
●新編武蔵風土記稿、川越喜多院客殿の条に実母説の裏づけ史実を新発見。

黒衣の宰相 天海

中村 晃 ¥1500

●百八歳まで働き抜いた徳川政権「謎の大参謀」の神髄。天台高僧の子か？。足利将軍の子か？。家康・秀忠・家光をリード。春日局を指南。クコ飯と酒落と深淵な哲理を愛して徳川幕府の礎を築いた大智識に肉迫する哲人歴史作家の第三弾。

電話 03 360-6606 叢文社 振替東京 9—42714
東京高田馬場4-4-20クラウンビル

志村有弘(相模女子大学教授) 高橋貢(専修大学教授) 奥山芳広(歴史家)

八幡神社研究

定価16480円(本体16000円)
限定版・呈案内書

●神武から雄略まで——姿を現わした霧の古代
応神(八幡)視座に新発掘の柱で日本古代史に新骨格図

神武東征して即位一三七年前後。スサノオ系との妥協連合政権。倭国大乱の原因は大和政権分裂■一七三年、北九州各国のヤマタイ国連合は戦乱終結のため卑弥呼を女王に。百済系王族と新羅系王族の間の女子か。ヤマタイ国王と連合の王は別人■二三二年、スサノオ系支援を怒った大和王朝軍は新羅王都金城包囲。二三三年将軍于老、大和王朝軍撃破■二五三年、暴言の于老を大和王朝軍焼殺。二七〇年于老の妻が大和王朝使節焼殺。大和王朝軍新羅出兵。新羅熊襲連合軍、大和王朝母国のヤマタイ国を攻め滅ぼす■三一〇年前後に崇神、出雲を奪って半統一国家。王子垂仁の妃を新羅王族から迎える。新羅王子ヒボコ帰化■三四四年、景行、王子成務の妃を新羅王に求めて謝絶され金城猛攻。熊襲反攻。景行西征。三五〇年日本武尊熊襲を奇襲■三六四年新羅に出兵して大敗全滅。三八五年頃九州征討軍(仲哀)を発す。三九〇年成務崩御■三九一年仲哀九州で急死。神功皇后妊娠八ヵ月の身で百済とはかって新羅を挟襲。新羅王戦わず降伏。応神出誕。熊襲帰順。三九二年西国の大軍を率いて神功東上、統一国家ほぼ成立。高句麗新羅と倭国百済の泥沼の戦い始まる。四〇八年(東晋の義熙四年)に百済直支王、神功(旨)に七支刀を献ずる■四〇八年神功崩御?四二〇年応神(賛)崩御。四二一年仁徳(讃)一四、五歳で即位。宋書倭の五王は允恭・安康を一人の「興」と誤記■孝元帝・大彦命の実在を証明する稲荷山鉄剣のオワケの臣の没年は八〇余歳。

●「八幡神社一覧表」「八幡史料」初集成…古代は天孫系(親百済派)とスサノオ系(親新羅派)の争闘史…高天原は甘木から吉野ケ里移動か?

発売中
神功皇后発掘 高橋政清・志村有弘他 ¥2060 〒250円
●三韓出兵三九一年・古代史探索にかけがえなき起点

叢文社 〒169 東京都新宿区高田馬場4—4—20 クラウンビル
TEL 03 (360) 6606 振替東京 9—42714

現代を拓く歴史名作シリーズ

日下藤吾(青山学院大学名誉教授・修猷館・福高・東大・経博)

獅子の道 中野正剛

四六判 八〇〇頁
定価3605円(本体3500円) 〒300円

●軍閥の前に一人で立ちはだかった火炎のリーダーの神髄

自由民権の旗のもと雄弁をもって田中義一内閣を倒し、孫文に共鳴して国技館の演説でアジア解放をうたって数万の聴衆を熱狂させた正剛は、右往左往の政党政治が軍閥に権力を奪われ、その行く手に国家の破滅を予見すると猛然と軍閥に切ってかかる。時を待てと、ヤジ将軍三木武吉。日比谷の歴史的論陣。朝日元旦の東条不信論。「敗戦確実の戦争を何時まで——」と東条攻撃の早大遺言演説。昭和18年10月、憲兵隊から仮釈放の夜「迫り来る大崩壊から国を救う言論を弾圧するか」と狂気の官僚的天皇制国家に抗議して割腹。正剛門下の碩学の力作。「**裏面から見た日本帝国主義の平家物語**」。正剛を抜いて昭和政治史は語れない。

★書店売切れの節は書店注文か、送料と共に現金または郵送振替にて直接小社まで

日下藤吾

討幕軍師 平野国臣

定価2575円（本体2500円）
〒300円

●回天の鷹……人を変えた歴史を変えた

「わが胸の燃ゆる思いにくらぶれば煙はうすし桜島山」

福岡黒田藩六石取りの足軽の子に生まれ、妻子を捨てて志士の道に投じた歌人国臣は西郷隆盛に「藩と幕府は無用有害。時代の要求は民衆を柱にした新しい国づくり。実現の道は公武合体でも佐幕でもなく、ただ討幕のみ」と火の眼光で開眼を迫る。天皇に「回天三策」を献じると、討幕の潮流に火を点じるために生野に挙兵―。京の六角、新選組の狂槍を前に―。知られざる維新史の深部に迫る。

●初めて確認された「西郷隆盛」の写真

★書店売切れの節は書店注文か、送料と共に現金または郵便振替にて直接小社まで

現代を拓く歴史名作シリーズ

加来耕三

天の子 天草四郎

定価1648円（本体1600円）
〒300円

●愛の四郎か 智の伊豆か……究極のリーダーに迫る

鎖国政策によって「交易収入」を絶たれた唐津島原両藩は凶作に苦しむ民百姓から「妊婦を水牢に投げ込むほどの地獄の取立て」を断行する。幕閣の要人はこれを知って糾明するが、高額のワイロがばらまかれると口をつぐむ。長崎から帰った15才の天草四郎は「百姓と牢人は殺してもかまわない」とする非道の政治に命を捧げて抵抗する決意を固めた。島原の孤城に押し寄せる10倍の大軍。迫り来る智謀松平伊豆の牙――。

●史上最強の抵抗戦の秘密を現代の視点で追求

★書店売切れの節は書店注文か、送料と共に現金または郵便振替にて直接小社まで

現代を拓く歴史名作シリーズ

榊山 潤 毛利元就
送料各三〇〇円
正篇一九〇〇円　続篇一六〇〇円★

●突破できないピンチはなかった——大内・尼子の谷間にはさまれた小豪族に宿命的に押し寄せる絶体絶命のピンチを神算鬼謀をつくして切り抜け、人生の末期、一躍にして十カ国の大守に跳躍した英雄の素顔を、巨匠の筆が鋭く。**ベストセラー**

榊山 潤 明智光秀
定価一六〇〇円　送料三〇〇円★

●そのとき部下は反逆者に変わる——叡山虐殺を機に魔道を歩き始めた信長…わが主君は天下を斬り取る器だが、天下を治める器ではなかった、と知った時—凄絶の戦国人間宣言。民百姓の幸福を第一とした唯一の戦国武将。**忽ち五版**

林 青梧 足利尊氏
定価一六〇〇円　送料三〇〇円

●魔術のように人をつかんだ——現代に最も似た南北朝を舞台に、図太くもたくましく生きた英雄の智謀。芥川賞候補三回、直木賞候補三回、注目の社会派歴史作家の渾身の代表作 ◆**現代のバイブル**——**狂乱の南北朝、不透明時代の勝者の生き方。**

井上八蔵（ジンギスカン） 大成吉思汗
定価一九〇〇円　送料三〇〇円

●百戦不敗の帝王学——二百万の蒙古の民をひっさげ中国・中東・欧州に君臨した草原の野生児の不屈のロマン。高村光太郎門下、大陸ものでは比肩するものの少ない著者畢生のライフワーク——**いま甦るシルクロードの風雲児。**

松村茂平 蓮如の炎（ほむら）
定価一五〇〇円　送料二五〇円

●不滅永遠の組織の謎——武士の野望の犠牲になって追いつめられた北陸の民・百姓は、村々を行脚する蓮如から「人間の尊厳と平等」を教えられ、一向一揆のムシロ旗を押し立てる。仏敵信長を討て——と信徒は蟻のように石山本願寺めざして。

◉定価に消費税三パーセント加算となります。

★書店売切れの節は書店注文か、送料と共に現金または郵便振替にて直接小社まで

現代を拓く歴史名作シリーズ

原田種夫 乱世梟商記
定価一五四五円（本体一五〇〇円）
〒二五〇円

●暴風秀吉に水をかけた豪商宗湛の生きざま「天下の秀吉を操り人間にできる男にならせ給え」と神に祈る神屋宗湛…骨の髄からの商人だった。天下を握った秀吉は急に暴君に変質する。利休を殺し、民を忘れ、栄華に走り、朝鮮征伐の愚行に…誰かが死を覚悟して水をかけねば一切は破滅と思われた。九州に下った秀吉は、宗湛の屋敷を訪れ「名宝文琳の茶入れ」を盗ませたが、すでに宗湛の手で偽物とすりかえてあったと知ったとき—。九州文壇最長老の珠玉の名作。

西野辰吉 独眼竜伊達政宗
定価一六四八円（本体一六〇〇円）
〒二五〇円

●死の牙を破る—戦国一の三枚腰反伊達連合三万の猛攻を退けた政宗が、会津黒川城を攻略して百万石の大守に跳躍したのは二十四才。商人を重臣に取り立て、金山を拓き、忍者を駆使する風雲児も生まれ落ちる時と場所を間違った。小田原征伐の秀吉の前に「死装束」で現われ、危うく虎口を脱した政宗に、関白秀次荷担の疑惑、葛西大崎一揆の黒幕の疑惑…奥州随一の謀将の評が禍となって次々に迫る死の牙。「はりつけ柱」を先頭に聚楽第の秀吉を訪ね、己れの正義を説き、不敵にも注文をつける政宗—名匠渾身の力作。

★書店売切れの節は書店注文か、送料と共に現金または郵送振替にて直接小社まで

現代を拓く歴史名作シリーズ

蒙古襲来 念仏水軍記

田中富雄

定価1648円（本体1600円）
〒250円

●男はそのとき火炎に変わる

神出鬼没、念仏を口に唱え、四千五百隻十四万の元の大軍に、九隻二百人で突入する命知らずの水軍――。大剣をふるって先頭に立つ若き武将は、承久の変で没落した伊予河野一族の復活をかける河野通有――。「生も死も超然の境地」に導いた遊行の僧一遍上人――。悲運の名将少弐景資の恩情。死地にもむく通有の武運を祈る女たち――。地上最強の元軍と激突した弘安の役を舞台に、鎌倉末期の世情人心を背景に、人間の究極に肉迫する名匠こん身の労作。

★書店売切れの節は書店注文か、送料と共に現金または郵送振替にて直接小社まで

日本合戦事典

編著　志村有弘　高橋貢　松本寧至
　　今川徳三　高橋政清　矢代和夫

◎初めて集大成された日本の合戦

定価2575円
（本体2500円）
〒300円

四〇名の研究者の協力のもとに、古代から西南の役に至る大小の合戦の「真実の経過」と「歴史的位置づけ」を厳密な眼で探究して集録した待望の事典。

■読売新聞評……その時々の戦いを現代の視点からみて、どのような意義があったのかを調査、どんな戦法を考え、いかなる戦いを展開したかなど厳密な眼で検証―。歴史探究のキーポイント。

日本図書館協会選定図書

★書店売切れの節は書店注文か、送料と共に現金または郵便振替にて直接小社まで